

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

**上東原遺跡
大下遺跡**

2014. 3
香川県教育委員会

序文

本書には、県道太田上町志度線の改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市鹿角町(かのつ
のちょう)の上東原遺跡(かみひがしらいせき)、および同市三名町(さんみょううちょう)の大下遺跡(お
おしたいせき)の報告を収録しています。

上東原遺跡では弥生時代前期から平安時代にかけての水路群や、弥生時代の建物などが見つかりまし
た。水田を営むために必要な水路群とそれを取り巻く建物の移り変わりは、当時の農業生産へのかかわ
りを考える手がかりになります。

大下遺跡で見つかった7世紀の建物群は、高松平野での集落の動向を知るうえで重要な資料です。また、堅穴建物に備えられていた竈は、県内で最も構造がよくわかる事例となりました。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用され、埋蔵文化財への関心が深められる一助と
なれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関
係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げるとともに、今後とも
ご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月
香川県埋蔵文化財センター
所長 真鍋昌宏

例 言

1 本報告書は、県道太田上町志度線道路改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市鹿角町に所在する上東原遺跡(かみひがしららいせき)、同市三名町に所在する大下(おおした)遺跡の報告を収録した。

2 発掘調査は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

上東原遺跡

期間 平成 23 年 4 月 1 日～9 月 30 日

担当 文化財専門員 乗松真也

大下遺跡

期間 平成 24 年 4 月 1 日～6 月 30 日

担当 文化財専門員 山元素子・藏本晋司・長井博志・乗松真也

4 調査にあたって、次の方々、関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

池田晃子、石丸恵利子、金憲夷、中村俊夫、西本豊弘

香川県高松土木事務所、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は乗松真也が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系(世界測地系)で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SH 竪穴建物 SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SD 溝

SX その他の遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高線(単位 m)である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。

10 土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 遺物の時期は、主に次の文献を参照した。

弥生時代前期：信里芳紀 2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相—集落の検討を中心にして—」『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』

弥生時代中期：信里芳紀 2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年—凹線文期を中心にして—」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』Ⅰ 香川県埋蔵文化財センター

弥生時代後期：乗松真也 2006「高松平野における弥生時代後期の土器編年」『調査研究報告』2 香川県歴史博物館

古墳時代：田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店

7世紀：信里芳紀 2002「小谷窯跡出土須恵器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『高松ファクトリーパーク造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 小谷窯跡・塚谷古墳』

古代：佐藤竜馬 1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』

古代末～中世：佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」香川県埋蔵文化財調査センター編『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡IV』

近世：佐藤竜馬 2003「近世在地土器の検討」香川県埋蔵文化財調査センター編『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 高松城跡（西の丸町地区）II』

* 地図は国土地理院地形図を使用しました。

本文目次

第1章 調査にいたる経緯と経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査体制・整理体制	2
第2章 立地と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 上東原遺跡の発掘調査記録	8
第1節 調査の方法	8
第2節 基本層序	8
第3節 弥生時代の遺構と遺物	19
第4節 古墳時代後期の遺構	49
第5節 古代の遺構と遺物	51
第6節 中世以降の遺構と遺物	53
第4章 大下遺跡の発掘調査記録	58
第1節 調査の方法	58
第2節 基本層序	58
第3節 弥生時代後期の遺構と遺物	65
第4節 7世紀の遺構と遺物	70
第5節 古代末以降の遺構と遺物	112
第6節 遺構外の遺物	115
第5章 自然科学分析	118
第1節 上東原遺跡の花粉分析(川崎地質株式会社)	118
第2節 上東原遺跡 SD45 出土のウマについて(石丸恵利子)	123
第3節 上東原遺跡 SD45 出土ウマの年代測定(西本豊弘・金憲実)	127
第4節 上東原遺跡 SD45 出土ウマの臼歯の ¹⁴ C 年代(中村俊夫・池田晃子)	128
第5節 自然科学分析の目的と結果に関するコメント	133
第6章 まとめ	135
第1節 上東原遺跡の水路と弥生時代集落	135
第2節 地域差からみた大下遺跡の造り付け職	138
第3節 高松平野における6～7世紀の集落動向と大下遺跡	144

挿図目次

第1図	道路位置図	1
第2図	高松平野部位置図	6
第3図	道路位置図	7
第4図	上東原遺跡調査区割図	8
第5図	土層柱状図	9
第6図	2区南壁断面図	10
第7図	1・2区東・西壁・3区西壁断面図	11
第8図	6区南・西壁断面図	12
第9図	8・9区南壁・8区西壁断面図	13
第10図	9区南・西壁断面図	14
第11図	11区南壁断面図	15
第12図	10・11区東壁断面図	16
第13図	遺構配置図	18
第14図	SH01 平・断面図・出土遺物	20
第15図	SB01 平・断面図	21
第16図	SB01 出土遺物	22
第17図	SB02 平・断面図・出土遺物	23
第18図	SB03 平・断面図・出土遺物	24
第19図	SB04 平・断面図・出土遺物	25
第20図	SB05 平・断面図	26
第21図	SB05 出土遺物	27
第22図	SB06 平・断面図・出土遺物	28
第23図	SB07 平・断面図	28
第24図	SD01・02 平・断面図・出土遺物	29
第25図	SD03 断面図・出土遺物	30
第26図	SD42・43・45 断面図・出土遺物	32
第27図	SD45・47・48・SX41 断面図	33
第28図	SD45・集合 断面図	34
第29図	SD45 出土遺物	35
第30図	SD45・47・SX41 出土遺物	36
第31図	SK42 平・断面図	37
第32図	SK43 平・断面図	37
第33図	SD58 断面図・出土遺物	38
第34図	SD58 出土遺物	39
第35図	SK04 平・断面図・出土遺物	40
第36図	SK06 平・断面図	40
第37図	SK09 平・断面図・出土遺物	42
第38図	SK10 平・断面図	43
第39図	SP165・258・290・291 平・断面図 出土遺物	44
第40図	包含層 出土遺物①	45
第41図	包含層 出土遺物②	46
第42図	包含層 出土遺物③	47
第43図	包含層 出土遺物④	48
第44図	包含層 出土遺物⑤	49
第45図	SB08 平・断面図・出土遺物	50
第46図	SD49 断面図・出土遺物	51
第47図	SD52 断面図・出土遺物	51
第48図	SB09 平・断面図	52
第49図	SD51 断面図・出土遺物	53
第50図	SK07 平・断面図	54
第51図	SK51・32 平・断面図	54
第52図	SK51 平・断面図・出土遺物	55
第53図	SP・遺構外出土遺物	56
第54図	大下道路調査区割図	58
第55図	I区北壁断面図	59
第56図	I区南壁断面図	60
第57図	II区東・北・西壁断面図	61
第58図	III区東・南壁断面図	62
第59図	IV区南・西壁断面図	63
第60図	時期別遺構配置略図	64
第61図	SH03 出土遺物	65
第62図	SH03 平・断面図	66
第63図	SH19 平・断面図	68
第64図	SH19 出土遺物	69
第65図	SD16 平・断面図	70
第66図	SH02・17 平・断面図・出土遺物	71
第67図	SH04 平・断面図	73
第68図	SH04 蓼断面図	74
第69図	SH04 出土遺物	74
第70図	SH06 平・断面図	75
第71図	SH06 蓼断面図	76
第72図	SH06 出土遺物	76
第73図	SH05 平・断面図	77
第74図	SH05 出土遺物	78
第75図	SH13・14・15・16 平・断面図	79
第76図	SH13・14・15・16 断面図	80
第77図	SH13・14・15 出土遺物	80
第78図	SH14・15 平面図	81
第79図	SH07 平・断面図	82
第80図	SH07 蓼平・断面図	83
第81図	SH07 蓼断面図	84
第82図	SH07 出土遺物	85
第83図	SH09・SK16・SD10 平・断面図・出土遺物	87
第84図	SH10 平・断面図・出土遺物	89
第85図	SH18 平・断面図	90
第86図	SH20 平・断面図	91
第87図	SH20 出土遺物	92
第88図	SH24 平・断面図・出土遺物	93
第89図	SB01 平・断面図・出土遺物	94
第90図	SB03 平・断面図	95
第91図	SB05 平・断面図	96
第92図	SB08 平・断面図	97
第93図	SB06 平・断面図	98
第94図	SB09 平・断面図・出土遺物	98
第95図	SB13 平・断面図	99
第96図	SB11 平・断面図	100
第97図	SD01・03・SX04 平・断面図・出土遺物	102
第98図	SD02 平・断面図・出土遺物	103
第99図	SD05・06・22・23 平・断面図 出土遺物	104
第100図	SD07 平・断面図	105
第101図	SD11・13 平・断面図	106
第102図	SD12・24 平・断面図	107
第103図	SD17 平・断面図	108
第104図	SD20・21 平・断面図・出土遺物	108
第105図	SD25 平・断面図	109
第106図	SK08・09・10・11・12・13・15 平 断面図	110
第107図	SK17 平・断面図・出土遺物	111
第108図	SX05 平・断面図	111
第109図	SP205・206 平・断面図	113

挿図目次

第 110 図 SP245・254 平・断面図.....	113
第 111 図 SP22・50・87・104・133・143・ 169・239 平・断面図・出土遺物	114
第 112 図 SP88・171・178・219・231・238・240・ 241・256・270 平・断面図・出土遺物	115
第 113 図 SD14・15 平・断面図	116
第 114 図 SP24・38・79・146・SD08 平・断面図・ 出土遺物・道構外出土遺物 1	116
第 115 図 道構外出土遺物 2	117
第 116 図 花粉分析プローチャート	119
第 117 図 ウマ歯列	125
第 118 図 測定試料の較正年代	128
第 119 図 ウマの臼歯のアルカリ可溶性二分 (KGWHB-1HA) の ^{14}C 年代 ($2575 \pm 90\text{BP}$) の 曆年較正結果	132
第 120 図 ウマの臼歯のハイドロキシアバタイト中の 炭素 (KGWHB-3AP) の ^{14}C 年代 ($1446 \pm 30\text{BP}$) の曆年較正結果	132
第 121 図 水路変遷図	136
第 122 図 周辺発生時代道構位置図	137
第 123 図 痛分類図	139
第 124 図 痛分布図	142
第 125 図 6-7c 集落変遷図	145

表目次

第 1 表 微化石概査結果	118
第 2 表 花粉ダイアグラム	120
第 3 表 花粉組成表	122
第 4 表 四国地方ウマ出土遺跡一覧	124
第 5 表 ウマの歯列および計測値	125
第 6 表 炭素 14 年代測定結果第	128
第 7 表 分析に用いたウマの臼歯の重量と回収された SC, GC 及び HA の重量	129
第 8 表 炭素回収に用いたフミン酸 (HA) の重量と 炭素回収量	130
第 9 表 白歯の無機成分 (ハイドロキシアバタイト) 中の炭素回収に用いた臼歯試料の重量と 炭素回収量	130
第 10 表 香川県高松市上東原遺跡から出土したウマの 臼歯試料の ^{14}C 年代及び較正曆年	131
第 11 表 香川県内堅穴建物造り付け窓一覧 (1)	140
第 12 表 香川県内堅穴建物造り付け窓一覧 (2)	141
第 13 表 上東原遺跡・道構一覧表 (1)	148
第 14 表 上東原遺跡・道構一覧表 (2)	149
第 15 表 上東原遺跡・道構一覧表 (3)	150
第 16 表 上東原遺跡・道構一覧表 (4)	151
第 17 表 上東原遺跡・道構一覧表 (5)	152
第 18 表 大下遺跡・道構一覧表 (1)	153
第 19 表 大下遺跡・道構一覧表 (2)	154
第 20 表 大下遺跡・道構一覧表 (3)	155
第 21 表 大下遺跡・道構一覧表 (4)	156
第 22 表 大下遺跡・道構一覧表 (5)	157
第 23 表 上東原遺跡出土土器観察表 (1)	158
第 24 表 上東原遺跡出土土器観察表 (2)	159
第 25 表 上東原遺跡出土土器観察表 (3)	160
第 26 表 上東原遺跡出土土器観察表 (4)	161
第 27 表 上東原遺跡出土土器観察表 (5)	162
第 28 表 上東原遺跡出土土器観察表 (6)	163
第 29 表 上東原遺跡出土土器観察表 (7)	164
第 30 表 上東原遺跡出土石器観察表 (1)	164
第 31 表 上東原遺跡出土石器観察表 (2)	165
第 32 表 大下遺跡出土土器観察表 (1)	166
第 33 表 大下遺跡出土土器観察表 (2)	167
第 34 表 大下遺跡出土土器観察表 (3)	168
第 35 表 大下遺跡出土土器観察表 (4)	169
第 36 表 大下遺跡出土土器観察表 (5)	170
第 37 表 大下遺跡出土石器観察表	170
第 38 表 大下遺跡出土金属器観察表	171
第 39 表 大下遺跡出土玉観察表	171
第 40 表 大下遺跡出土種子観察表	171

第1章 調査にいたる経緯と経過

第1節 調査にいたる経緯

県道太田上町志度線道路改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成19年度に高松市鹿角町で試掘調査を実施した。その結果、調査対象地のうち2,707m²で弥生時代の遺構を確認したため、上東原遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。また、平成21・23年度に実施した高松市三名町での試掘調査では、1,157m²で古墳時代の竪穴建物などを確認した。よって、当該範囲を大下遺跡（当初は太田原高州西遺跡）として文化財保護法による保護措置が必要と判断した。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

1 上東原遺跡

平成23年4月1日から9月30日まで発掘調査を実施した。平成20年1月に香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課が境界構造物部分を対象として1次調査を行っており、平成23年度の調査は2次調査となる。整理作業は平成24年11月1日から1月31日まで実施し、遺物実測の一部は株式会社アコードに委託した。

2 大下遺跡

発掘調査は平成24年4月1日から6月30日まで、整理作業は平成25年4月1日から7月31日まで実施した。

第3節 調査体制・整理体制

発掘調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

平成23年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター		
総括 課長	炭井 宏秋	総括	所長	藤好 史郎
課長補佐	亀山 隆		次長	真鍋 正彦
総務・生涯学習推進グループ		総務課	課長	真鍋 正彦
副主幹	香西 としみ		副主幹	林 文夫
主任主事	丸山 千晶		主任	古市 和子
文化財グループ			主任	中川 美江
課長補佐	西岡 達哉		主任	高木 秀哉
主任文化財専門員	森下 英治		主任	広瀬 健一
文化財専門員	松本 和彦	調査課	課長	森 格也
			文化財専門員	乗松 真也
			嘱託（土木）	砂川 哲夫
			嘱託（調査技術員）	東潤 愛
			嘱託（調査補助員）	東原 輝明
			嘱託（整理）	木下美千代

平成 24 年度発掘調査・整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	炭井 宏秋	総括 所長	藤好 史郎
副課長	木虎 淳	次長	真鍋 正彦
総務・生涯学習推進グループ		総務課 課長（兼務）	真鍋 正彦
副主幹	松下由美子	副主幹	林 文夫
主任主事	丸山 千晶	主任	官武ふみ代
文化財グループ		主任	中川 美江
課長補佐	西岡 達哉	主任	高木 秀哉
主任文化財専門員	森下 英治	調査課 課長	森 格也
文化財専門員	松本 和彦	文化財専門員	山元 素子
		文化財専門員	藏本 晋司
		文化財専門員	長井 博志
		文化財専門員	乗松 真也
		嘱託（土木）	山田 隆
		嘱託（調査技術員）	白木 亨
		嘱託（調査技術員）	東潤 爰
		嘱託（調査補助員）	東原 輝明
		嘱託（調査補助員）	藤井 菜徳子
		嘱託（整理）	加藤 恵子
		嘱託（整理）	中野 優美
		嘱託（整理）	脇 恵
		資料普及課 課長（兼務）	森 格也
		嘱託	葛西 薫
		嘱託	下村 幸子
		嘱託	高橋 千恵
		嘱託	牧野 香織

平成 25 年度整理作業体制一覧表

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課		香川県埋蔵文化財センター	
総括 課長	増田 宏	総括 所長	真鍋 昌宏
副課長	木虎 淳	次長	前田 和也
総務・生涯学習推進グループ		総務課 課長（兼務）	前田 和也
副主幹	松下由美子	主任	官武ふみ代
主任主事	丸山 千晶	主任	依野 英二
文化財グループ		主任	中川 美江
課長補佐	片桐 孝浩	主任	高木 秀哉
主任文化財専門員	山下 平重	資料普及課 課長	森 格也
文化財専門員	松本 和彦	文化財専門員	乗松 真也
		嘱託	伊井 恵子
		嘱託	伊藤 真紀
		嘱託	葛西 薫
		嘱託	牧野 香織

第2章 立地と環境

第1節 地理的環境

上東原遺跡は香川県高松市鹿角町、大下遺跡は同市三名町に所在する。

香川県は四国の北東部の一画を占め、四国島の一部と瀬戸内海上の島嶼部で構成されている。県南端部では東西に讃岐山脈が伸び、徳島県境となる。高松市は高松平野を中心とした地域を市域とし、東西に長い香川県のはば中央に位置する。香川県の県庁所在地であり、2013年10月時点の人口はおよそ428,000人である。

高松平野は、北は瀬戸内海に面し、南は讃岐山脈によって画され、東西にある標高200m前後の丘陵と400m前後の連峰に挟まれる。また、平野内には石清尾山（いわせおやま）や由良山（ゆらやま）などの独立丘陵が点在する。讃岐山脈から派生する山々からは複数の河川が瀬戸内海に向かって流下し、緩やかな傾斜をもつ扇状地形の平野を形づくる。古代以前には諸河川からの支流や低地が錯綜し、これらに囲まれた微高地が平野内に点在していたとみられる。もっとも規模の大きな香東川（こうとうがわ）は、現在でこそ石清尾山西麓の流路しかみられないが、中世以前には海岸線から8km程度さかのぼった地点で分岐し、石清尾山の東にも流れている。特に旧流路の右岸の広い範囲では、香東川から派生する支流がいくつも流下していたと考えられ、南西から北東にかけての緩やかな傾斜を形成する。また、香東川右岸を錯綜するこれらの支流や低地に囲まれるような微高地が平野内に点在していたとみられる。

第2節 歴史的環境

上東原遺跡と大下遺跡が所在する高松市鹿角町・三名町は、1956年（昭和31）に高松市に合併されるまでは香川郡一宮村の一部を構成し、近世～1890年（明治23）にはそれぞれ、鹿角村、三名村と称していた。いずれも、古代には讃岐国香川郡の12郷のひとつ、大野郷に属していた。大野郷は、現在の高松市一宮町・寺井町・香川町大野・香川町浅野を含めた地域に比定され、香東川中流域の右岸に沿った南北に細長い範囲を占める。大野郷の範囲には香東川とその支流や旧河道を介した関係性が示されている可能性も考えられようか。大野郷は東南北でそれぞれ大田郷、百相（もまい）郷、笑原（のはら）郷に接する。

香東川からやや離れた地域には条里型地割（木下1991）が広がり、大田郷域の太田原高州（おおたはらかす）遺跡の調査成果からは一帯の条里型地割が8世紀の早い時期に施工されたとみられる（註1）。7世紀には大田郷の東に隣接する多配（たへ）郷域の多肥北原（たひきたはら）遺跡で11棟の堅穴建物が重複して確認されており、いずれの主軸方位も条里型地割とは合致しない。また、近年発掘調査が進められている百相郷域の萩前・一本木（はぎのまえ・いっぽんぎ）遺跡では6～7世紀の堅穴建物が多数確認され、建物群を方形に開む溝も存在する。これまで、高松平野では6～7世紀の居住遺構がま

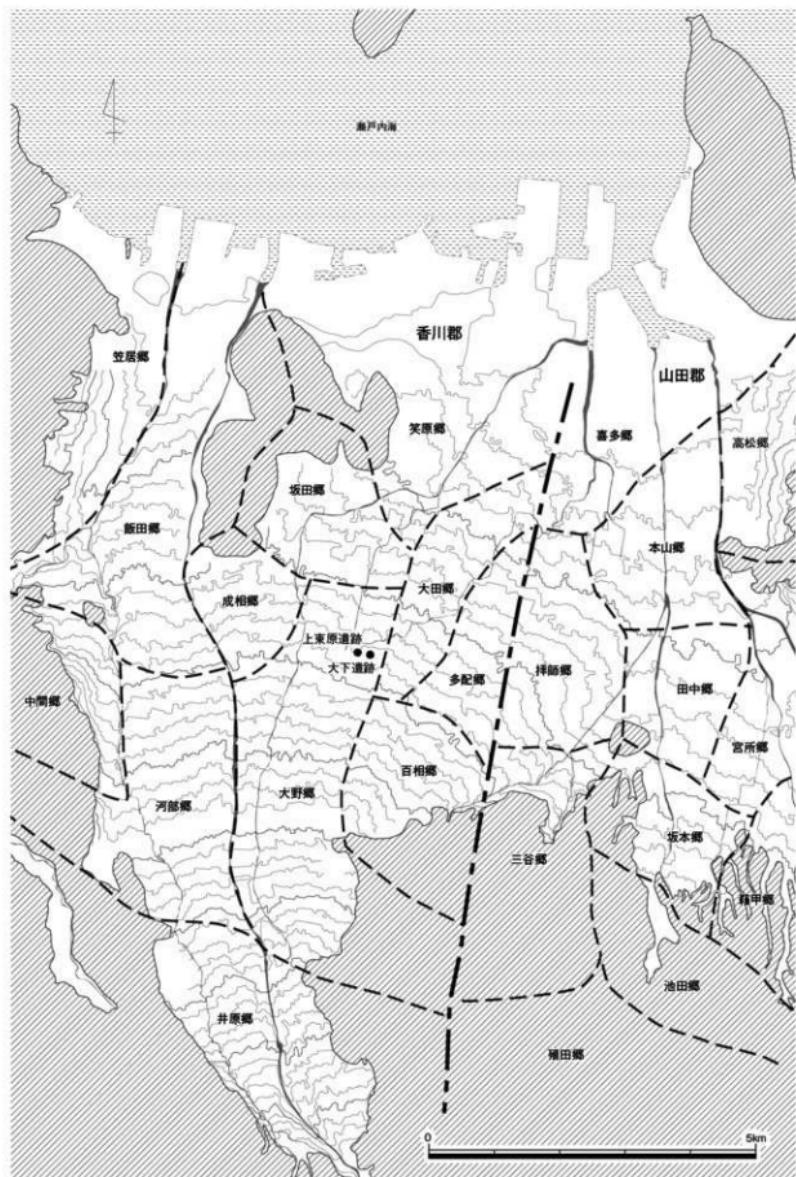
とまって検出された例は皆無だったが、この数年の調査によってデータが増加し、その分布に偏りがあることもわかつてきた。同時期、特に6世紀を中心として高松平野沿岸部に近い石清尾山周辺の山塊や、平野を囲む丘陵地には横穴式石室を主体部とする古墳が多数築造される。また、7世紀半ばには瀬戸内海に突出する屋島山上に屋嶋城が築かれる。明らかになりつつある集落遺跡の実態は、これら後期古墳や屋嶋城と合わせて同時代の高松平野の動向をうかがううえで重要な資料といえる。

旧香東川の支流や低地に開まれて点在する微高地の多くには弥生時代の遺跡が認められる。太田原高州遺跡では中期末～後期初頭に区画墓が築かれるが、その区画墓に堆積する後期後半の土器量の多さから直近に同時期の集落の存在が予測される。多肥松林遺跡や日暮・松林（ひぐらし・まつばやし）遺跡などでは、中期後半の未成品を含む大量の木製品が出土した旧河道やその支流を結ぶかたちで水路が掘削され、周囲には同時期の掘立柱建物や堅穴建物が展開する。弥生時代の水路については、後期に再整備を含めて増加する点が指摘されている（信里 2008）。高松平野の旧香東川右岸に限れば、水路と居住遺構が近接する中期のあり方が、後期にどう変化するのかさらなる検討が必要であろう。水路の主要目的が水田経営にあるとすれば、中期から後期への変化には生産域と居住域との関係性の推移が表れている可能性もある。

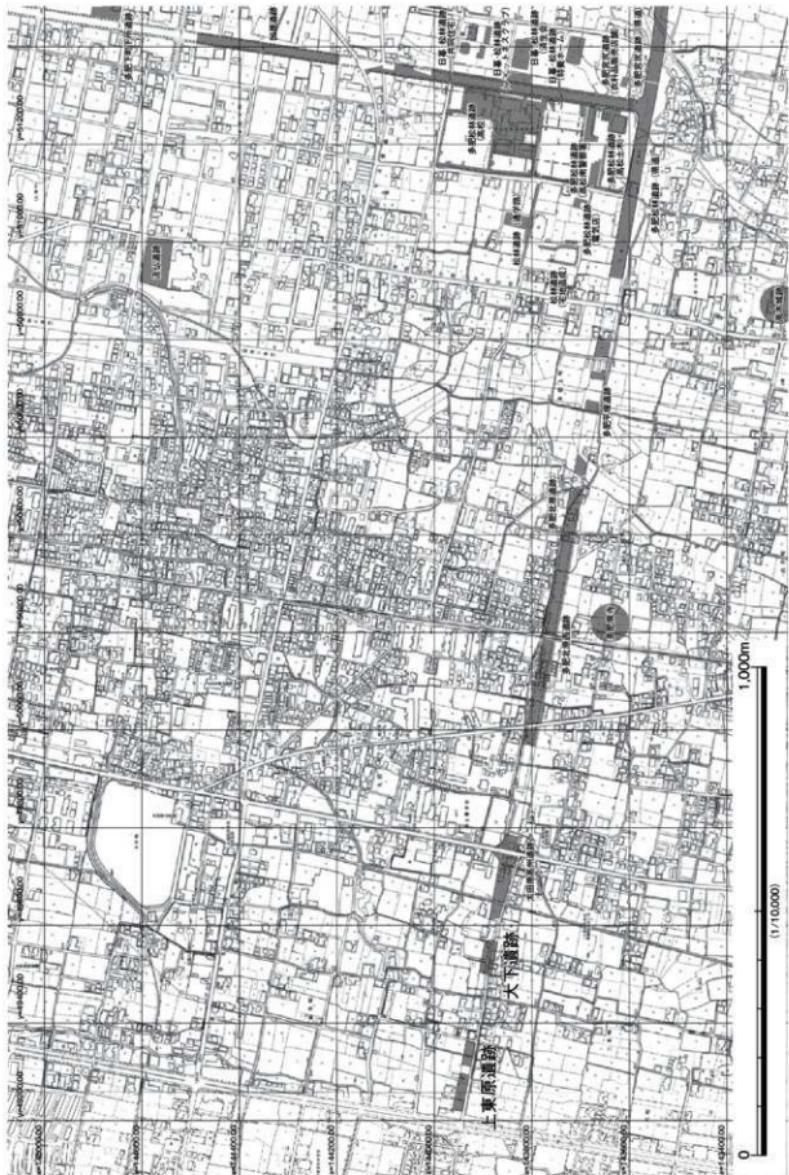
林・坊城（はやし・ぼうじろ）遺跡と東中筋（ひがしなかすじ）遺跡で実施された花粉分析では縄文時代晩期から弥生時代にかけての植生が復元されている。両分析ともに、縄文時代晩期にはアカガシ亜属が卓越する照葉樹林の成立を導き出している。林・坊城遺跡では古墳時代にかけても大きな変化が認められないものの、東中筋遺跡では弥生時代前期～中期以降、アカガシ亜属の減少とともにヒノキ科やスギの構成比が増加するなど、両分析に差異が認められ、弥生時代以降の平野全体の植生を復元することは現状では難しい。また、両遺跡の分析結果には、弥生時代以降の人為的な環境関与の遺跡差が反映されている可能性もあるが、分析例の少なさもあり、この点に言及することも困難である。分析例の増加や、試料採取方法の問題、多肥松林遺跡の花粉分析で指摘されたような残存量の多寡も含めて、植生復元へ向けての今後の課題は大きい。

註

- 1 弥生時代に築かれた区画墓の最終埋没時期が8世紀初頭で、同時期とみられる掘立柱建物の主軸方位が条里型地割に合致する。



第2図 高松平野郷位置図



第3図 遺跡位置図

第3章 上東原遺跡の発掘調査記録

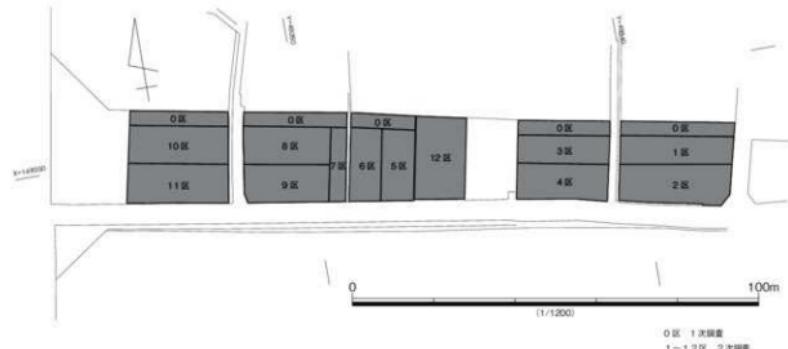
第1節 調査の方法

調査対象地は県道用地内であり、南北約20m、東西約150mと東西に長い。この対象地内を土地区分や調査工程に応じて、便宜上0～12区の13の調査区に分けて発掘調査を行った。このうち、0区としたのが1次調査地、1～12区が2次調査地である。表土から遺構検出面までは重機で掘削し、遺構検出面以下は人力で掘り下げ、調査を行った。なお、1区では中世遺構面の下位にあった弥生時代の包含層の一部についても重機で掘り下げてから弥生時代の遺構の調査に着手した。

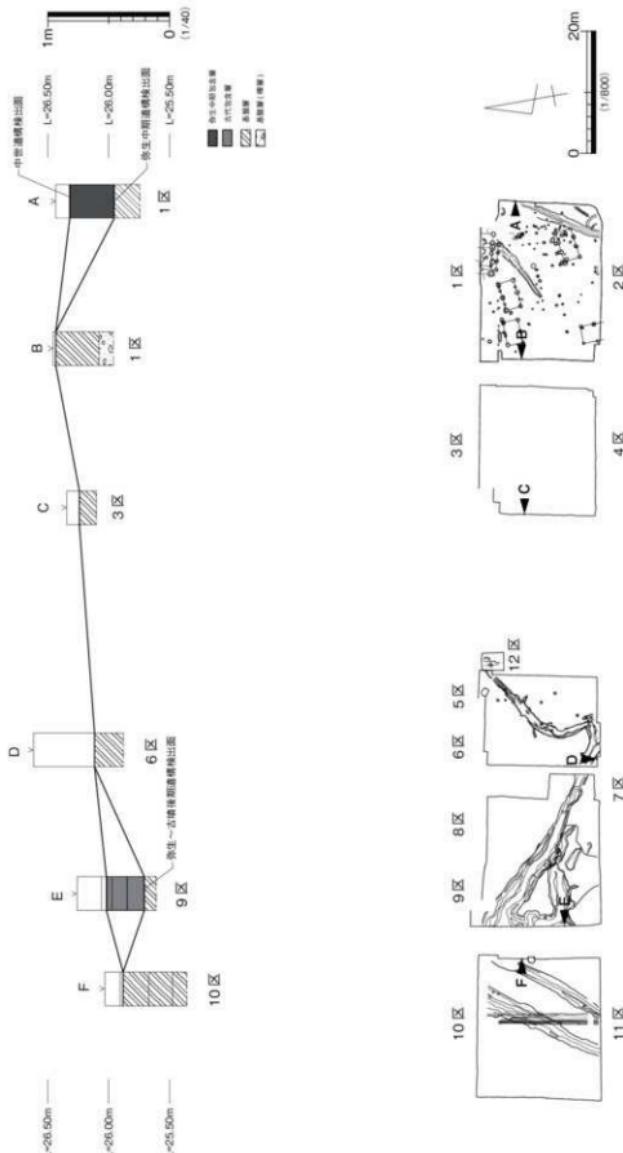
第2節 基本層序

基本的には近年までの耕作土直下で中世以前の遺構面に達する。東西に長い調査対象地の層序を比較するため、柱状図を並べたのが第5図である。基盤層（黄灰色系シルト層を中心とする）のレベルは1区西壁の柱状図Bが最も高く、そこから東西に向かって低くなっている。特に西側には香東川の旧流路が控えており、傾向としては西へ向かうに従って標高は下がるだろう。また、高松平野全体が大局的には南西から北東へと緩やかに傾斜しており、調査対象地内でも南が高く、北が低くなっている。柱状図Bで基盤層の下位に示した礫層は、調査区全体として凹凸があり、1・2・7区では耕作土直下で礫層を検出できる箇所もある。

1区では耕作土直下に中世の遺構が広がり、調査区東部ではその下位に弥生時代中期の包含層がある（柱状図A）。この包含層下面を弥生時代中期の遺構検出面としているが、厳密には包含層途中で確認した遺構もあり、包含層と認識した層を遺構の累積とみるのが妥当であろう。9区西部では古代の包含層

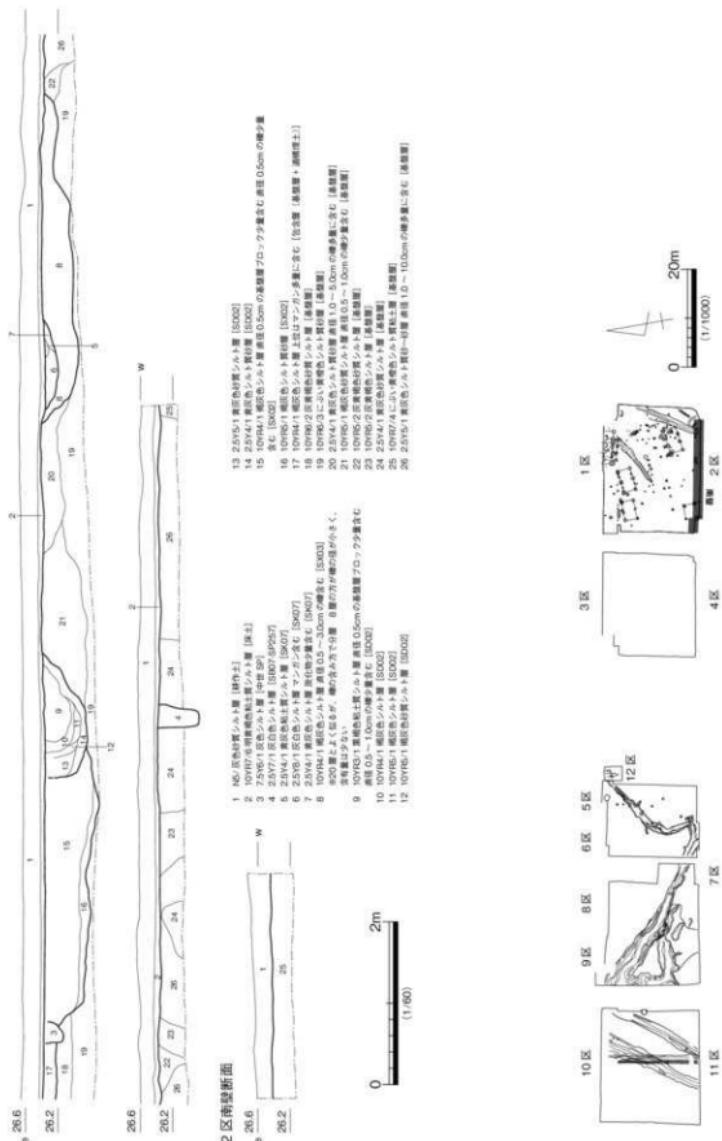


第4図 上東原遺跡調査区割図

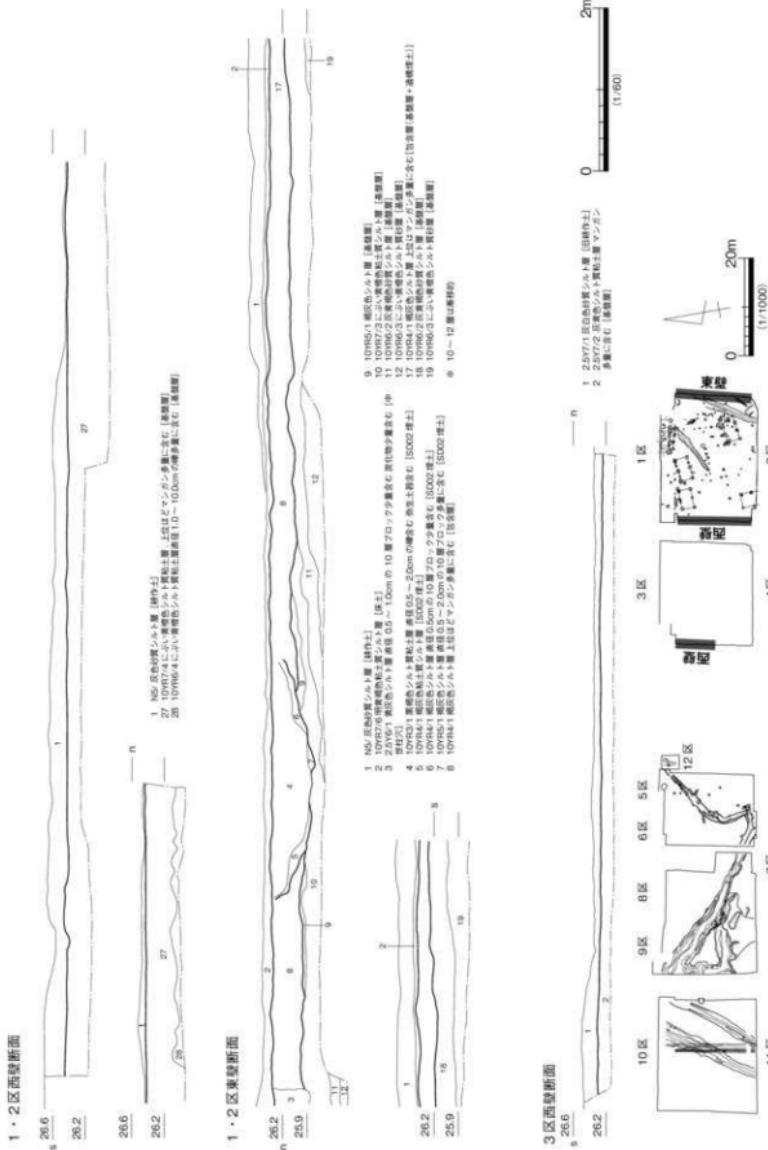


第5図 土層柱状図

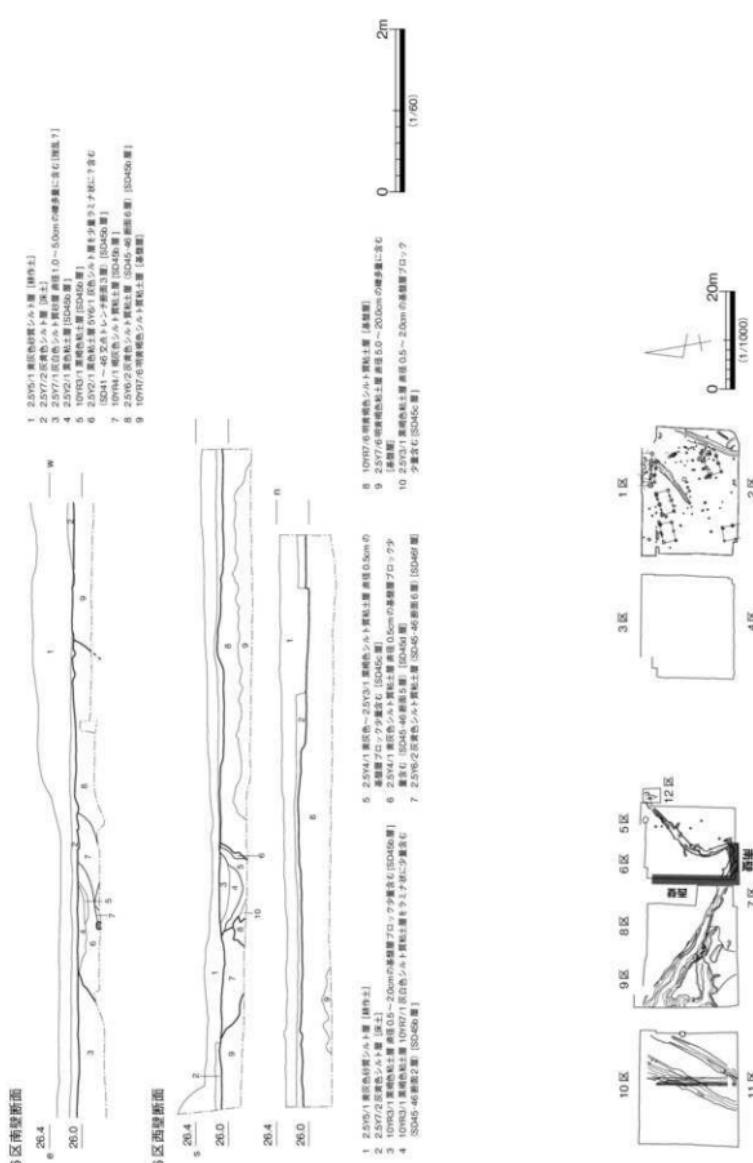
2区南壁断面

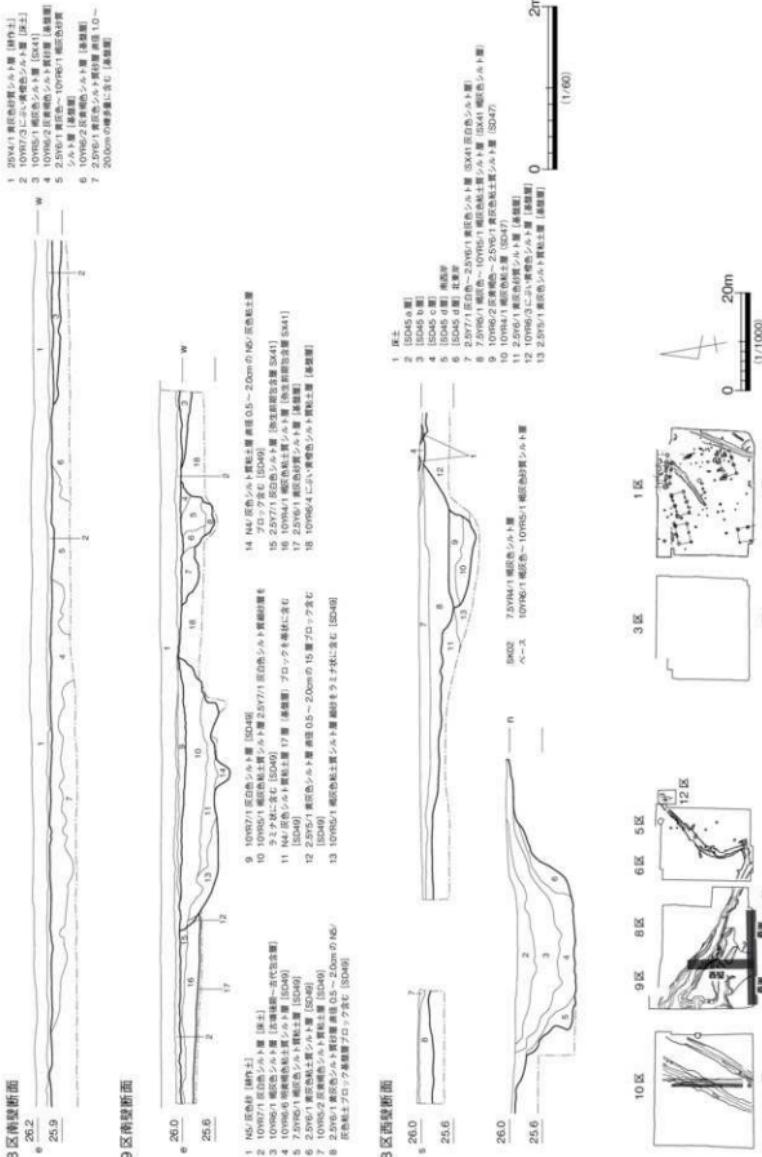


第6図 2区南壁断面図



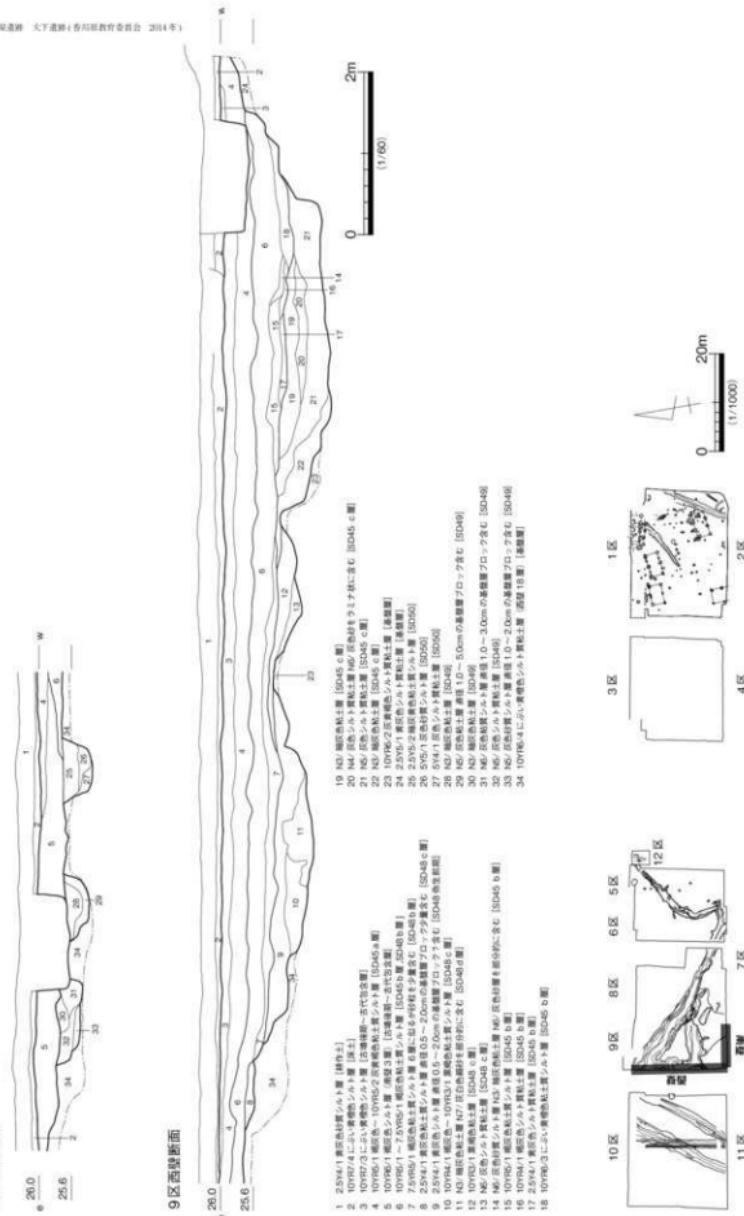
第7図 1・2区東・西壁・3区西壁断面図





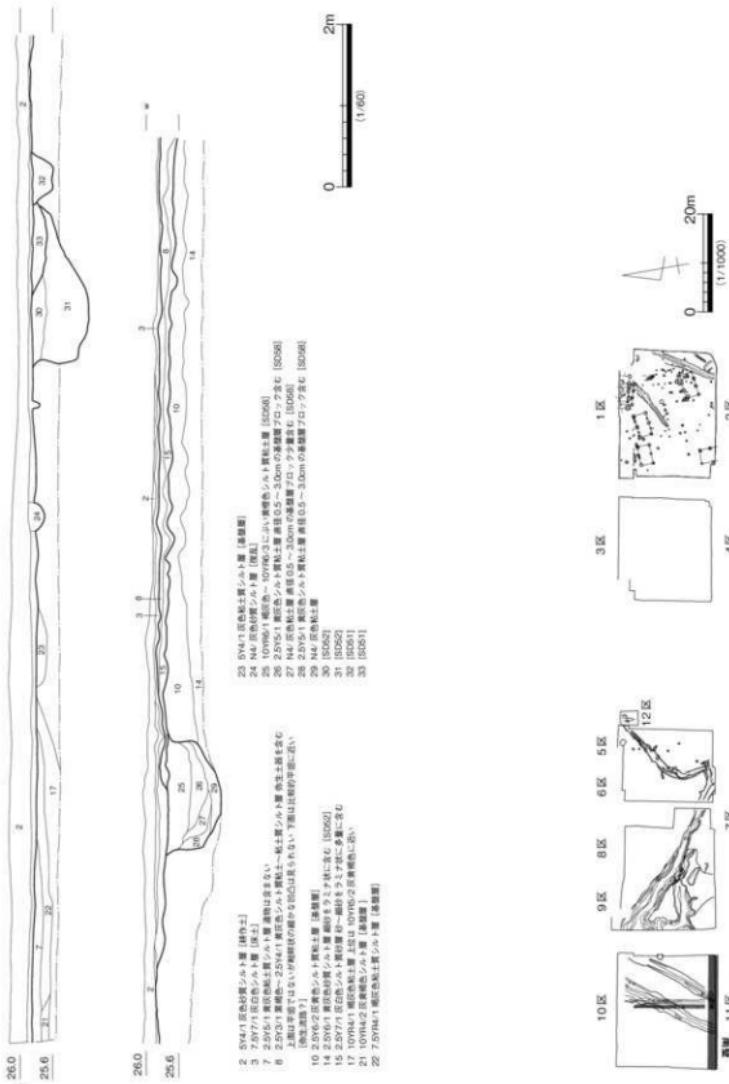
第9図 8・9区南壁・8区西壁断面図

9区南断面

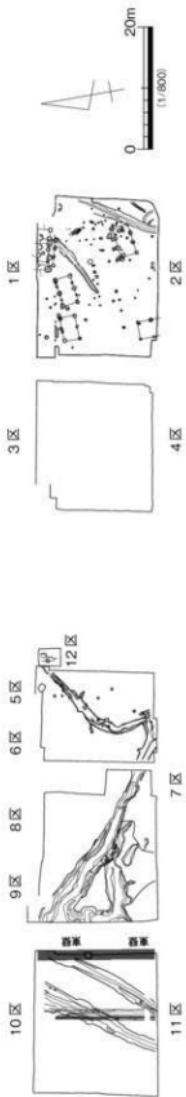
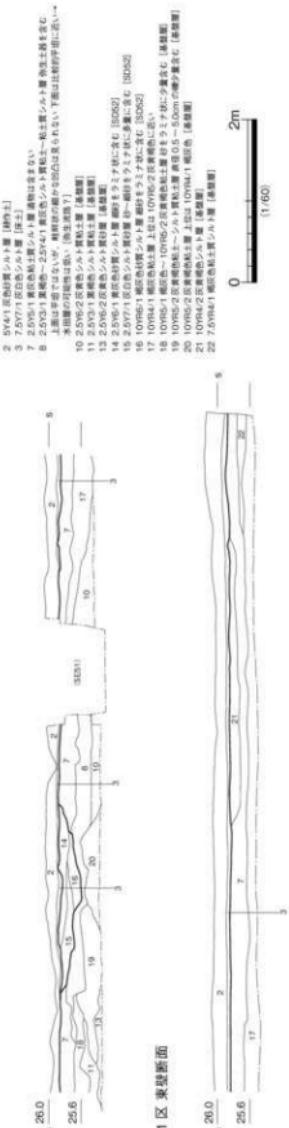


第10図 9区南・西縦断面図

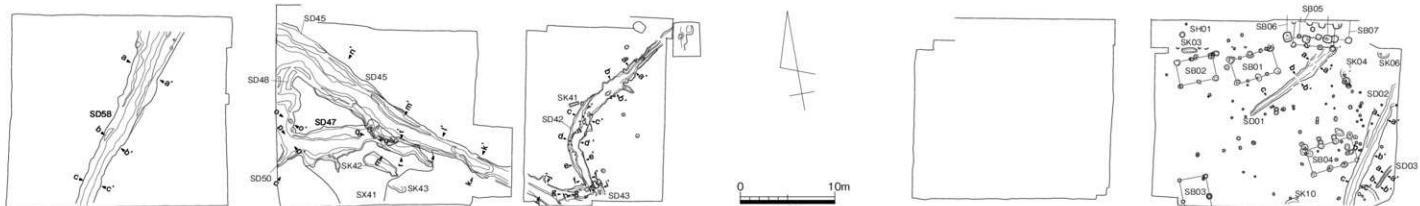
11区南壁断面



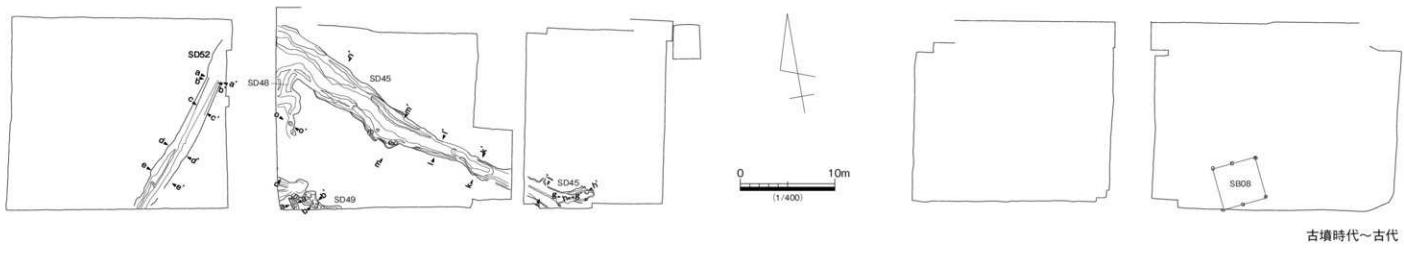
10区東壁断面



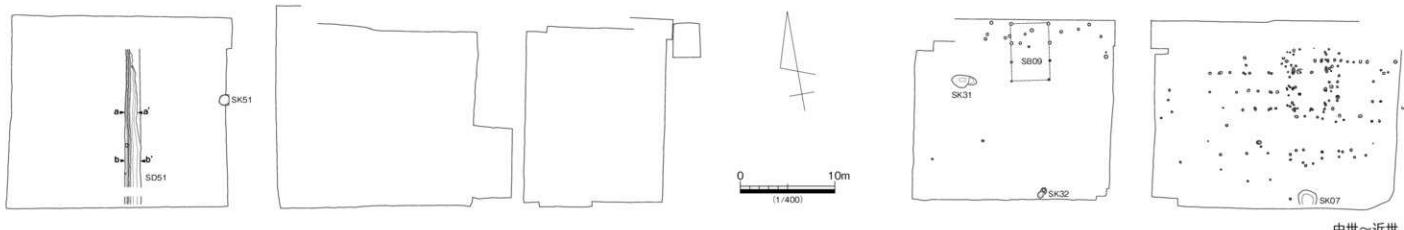
第12図 10・11区東壁断面図



弥生時代



古墳時代～古代



中世～近世

第13図 遺構配置図

が広がり、その下面で古墳時代後期の遺構を検出した(柱状図E)。その東西に位置する柱状図D・Fと比較すると古代包含層下面のレベルが低くなっている。周辺には弥生時代後期の水路群があり、本来は水路の一部として掘削され、後に落ち込み状となった箇所に古代の包含層が堆積していると理解したい。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

竪穴建物

SH01 (調査時遺構名:1区 SK03、SP179・206)

1区北西部で検出した竪穴建物である。平面形が揃円形の土坑SK03は、埋土に焼土と多量の炭化物を含むことから竪穴建物の炉の可能性を考えた。周辺で関連施設の検出を試み、柱穴2基(SP179・206)を確認した。床面の掘り込みや壁溝などは未確認のため、主柱穴2基の竪穴建物を復元した。

遺物 1は弥生土器甕である。2・3はサヌカイト製石錐、4・5はサヌカイト製剥片である。5は検出面より上位の包含層掘り下げ時点で出土したが、弥生時代の遺構は包含層途中からの掘り込みであることが確実なため、平面位置からみてSK03に伴う遺物とした。

時期 1から弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-2~3)と判断できる。

掘立柱建物

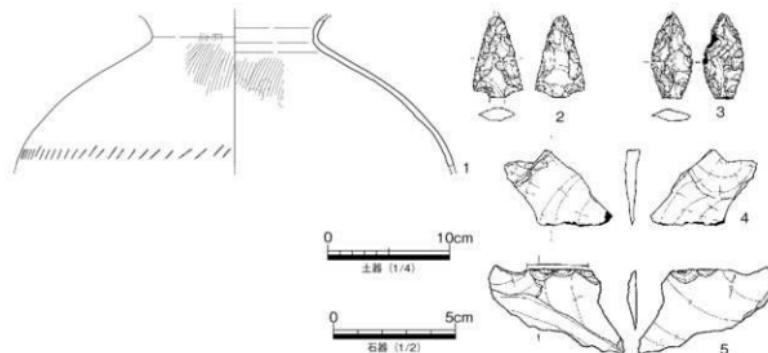
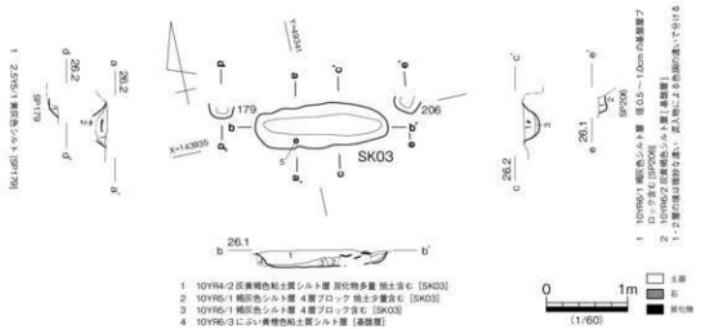
掘立柱建物の多くは弥生時代中期包含層の下面で検出した。第2節で述べたように、包含層の途中で検出した柱穴もあり、本来は包含層上面もしくは包含層の中位からの掘り込みであると思われる。また、包含層途中で大振りの礫をいくつか検出したが、包含層下面に達すると礫の周間に柱穴の輪郭が見える、という場合もあった(SB01・SP161など、写真11参照)。礫は柱穴の埋め戻しに伴うものの蓋然性が高く、そうであれば柱穴は包含層上面または中位に形成されていたことになる。

SB01 (調査時遺構名:1区 SB04)

1区北西部で検出した1間×4間の掘立柱建物である。四隅(SP139・167・176・178)と桁行の中間に位置する柱穴(SP143・161)に対して、それらの柱穴間にある柱穴(SP162・164・166・177)のサイズは小さい。他の掘立柱建物とは柱とそれに支えられる上部構造がやや異なるのだろうか。北東隅の柱は少なくとも2回掘り直されている。SP177の柱痕の下には根石が置かれていた。SP143・161・162・167・177・178・183で検出した石は、いずれも柱抜き取り後の埋め戻し土に伴うものである。本来は根石や根固めに使われたものかもしれない。

遺物 固化したのはいずれも弥生土器で、6~8は壺、9は甕、10は高杯である。6はSP177と178から出土した破片が接合したものである。9はSP139とSP195から出土した破片からなるが、本来はSP195の埋め戻しに伴うものが、SP139の柱抜き取り、埋め戻しの際に巻き上げられたものであろう。

時期 6・9から弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-2)と判断できる。



第14図 SH01 平・断面図・出土遺物

SB02 (調査時遺構名: 1区 SB05)

1区北西部で検出した1間×2間の掘立柱建物である。北辺の中間に位置する柱穴は2基あるが、サイズや埋土からみていずれも当建物を構成する柱穴の蓋然性は高い。柱の建て替えによるものだろうか。3基が重複する北東隅の柱穴は2回の建て替えによるものだろう。SP170・181・184・185の石は埋め戻しに伴う。

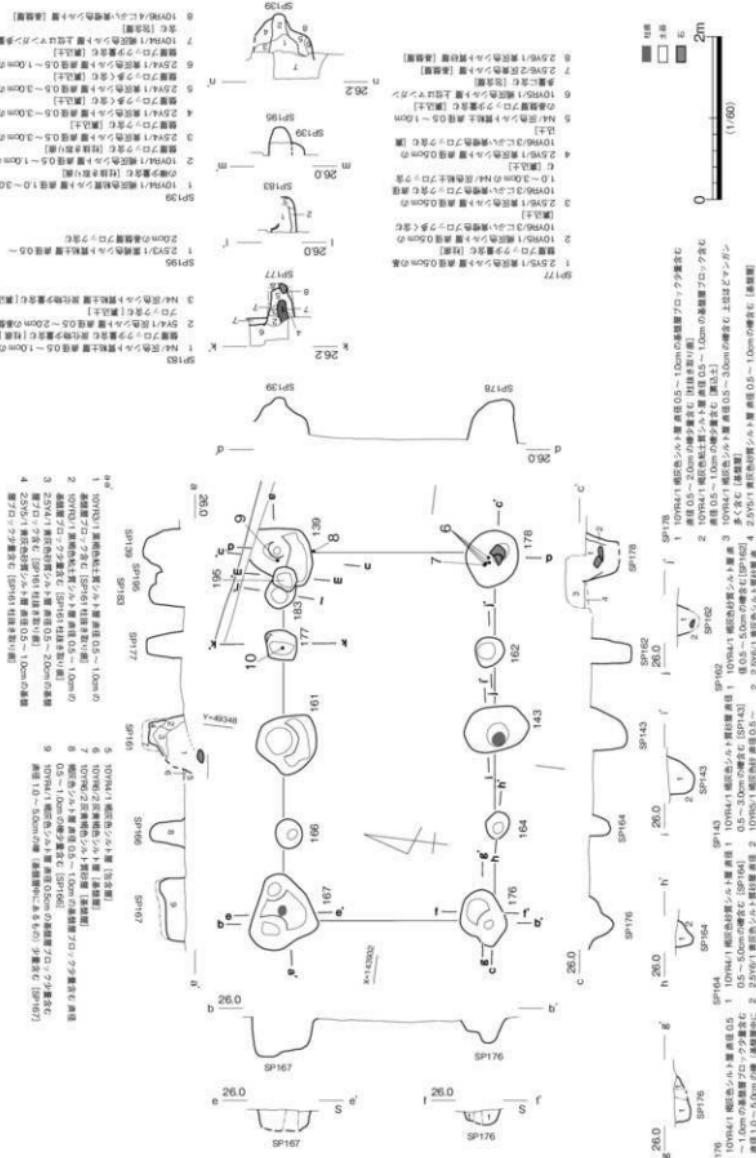
遺物 いざれも弥生土器で、11は壺、12・13は甕の口縁部、14は高杯である。

時期 13から弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-2)の構築と判断できる。

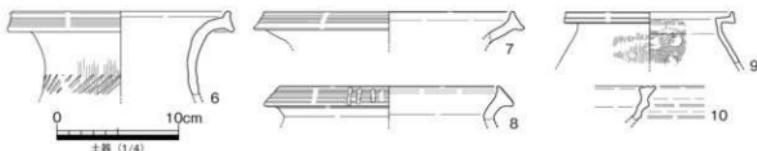
SB03 (調査時遺構名: 2区 SB06)

2区南西部で検出した掘立柱建物である。1間×1間しか確認できていないが、同時期の他の掘立柱建物は桁行2~4間であるため、梁間1間、桁行2間以上の建物であろう。北東隅の重複する2基の柱穴は建て替えに伴う可能性もある。

遺物 15はSP249から出土した弥生土器甕である。



第15図 SB01 平・断面図



第16図 SB01 出土遺物

時期 15から弥生時代中期後葉(中期III-3)と考えられる。

SB04 (調査時遺構名: 2区 SB08)

2区東部で検出した1間×3間の掘立柱建物である。南東隅の柱穴SP283の一部はSD02上位部分に破壊されている。SP248は包含層の掘り下げ途中でかろうじて平面の輪郭を確認した。その他の柱穴は基盤層上面での検出だが、本来の掘り込み面は基盤層より上位であることが確実である。北辺の4基の柱穴はサイズが大きいものや重複するものがある。柱抜き取りのための掘削を示すと思われるが、北西隅のように柱の建て替えを推測せるものもある。

遺物 16は弥生土器壺である。

時期 16から弥生時代中期後葉(中期III-3)と判断できる。

SB05

0区から1区にかけて検出した掘立柱建物である。SP136・151・608・610は平面形が方形を呈する。SP151は廃絶時に柱が抜き取られておらず、SP136は抜き取り時には柱穴の範囲のなかで掘削されている。SP608・610の廃絶時の処理もいずれかだろう。SP137・138・151は断面観察により、包含層途中からの掘削であることが判明した。基盤層上面で確認した他の柱穴も、本来はより上位からの掘り込みであることが確実である。

遺物 17～19は弥生土器壺である。

時期 17・19からみて構築時期は弥生時代中期後葉(中期III-2)である。

SB06

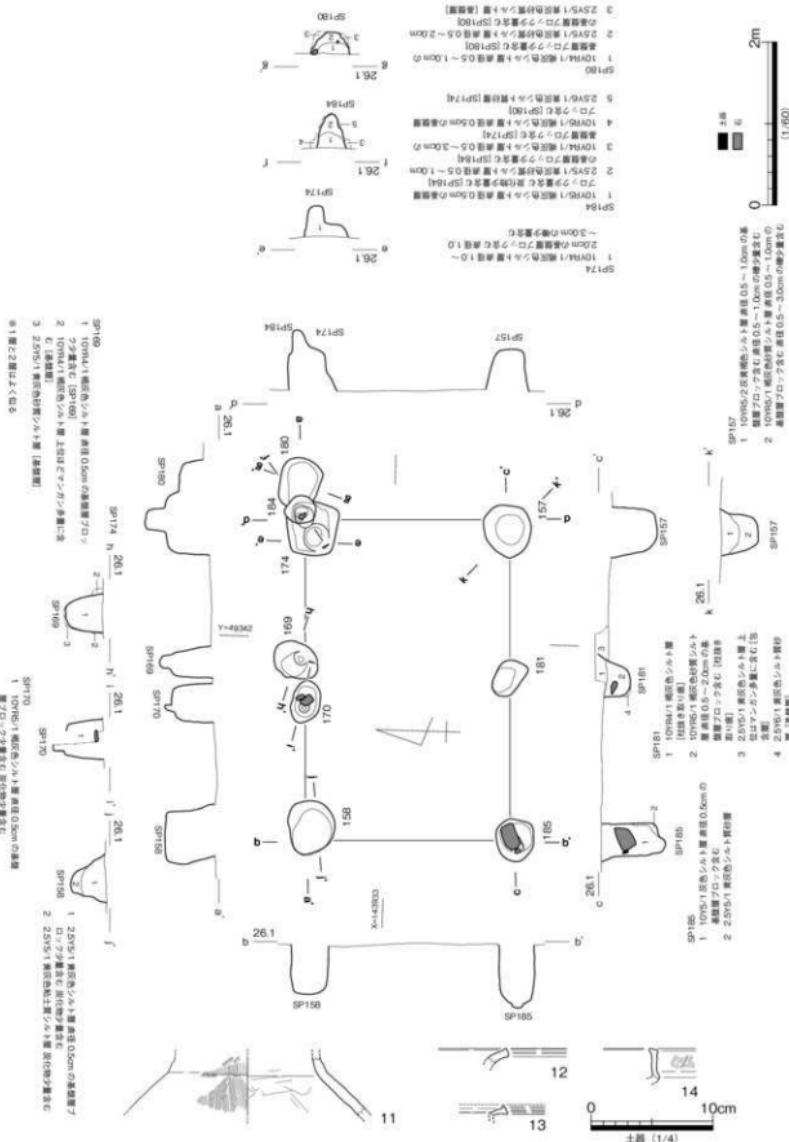
0区で検出した平面形方形の3基の柱穴列である。周辺に梁間1間の掘立柱建物が広がることから、1間×2間の掘立柱建物の南辺と判断した。いずれも検出面で柱痕を確認している。SP602が、SB05を構成するSP137埋め戻し後に掘り込まれることから、SB01廃絶後の建物と判断できる。

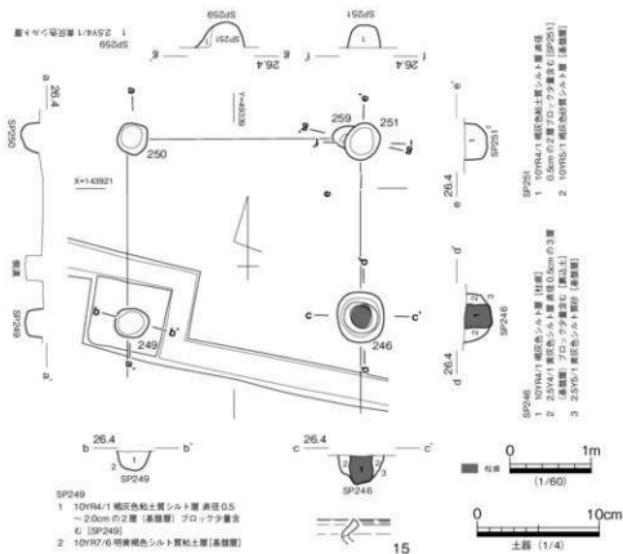
遺物 20～25は弥生土器壺である。

時期 弥生時代中期後葉のなかでも、25は中期III-2を示すが、やや厚手の口縁をもつ22や23は中期III-3まで降る可能性がある。SB05(中期III-2)に後出することも考慮して、弥生時代中期後葉でも末まで降る中期III-3構築の建物としておきたい。

SB07

0区で検出した4基の柱穴列を、SB06同様に掘立柱建物の南辺と判断した。掘立柱建物であれば1間×3間と推測できる。SP612は、SB06のSP602埋め戻し後に掘りこまれている。





第18図 SB03 平・断面図・出土遺物

遺物 図化はしていないが、中期後葉の弥生土器甕小片が出土している。

時期 出土遺物と周辺の掘立柱建物から、弥生時代中期後葉（中期III-2～3）と考えられる。

溝状遺構

SD01（調査時遺構名：1区 SD01）

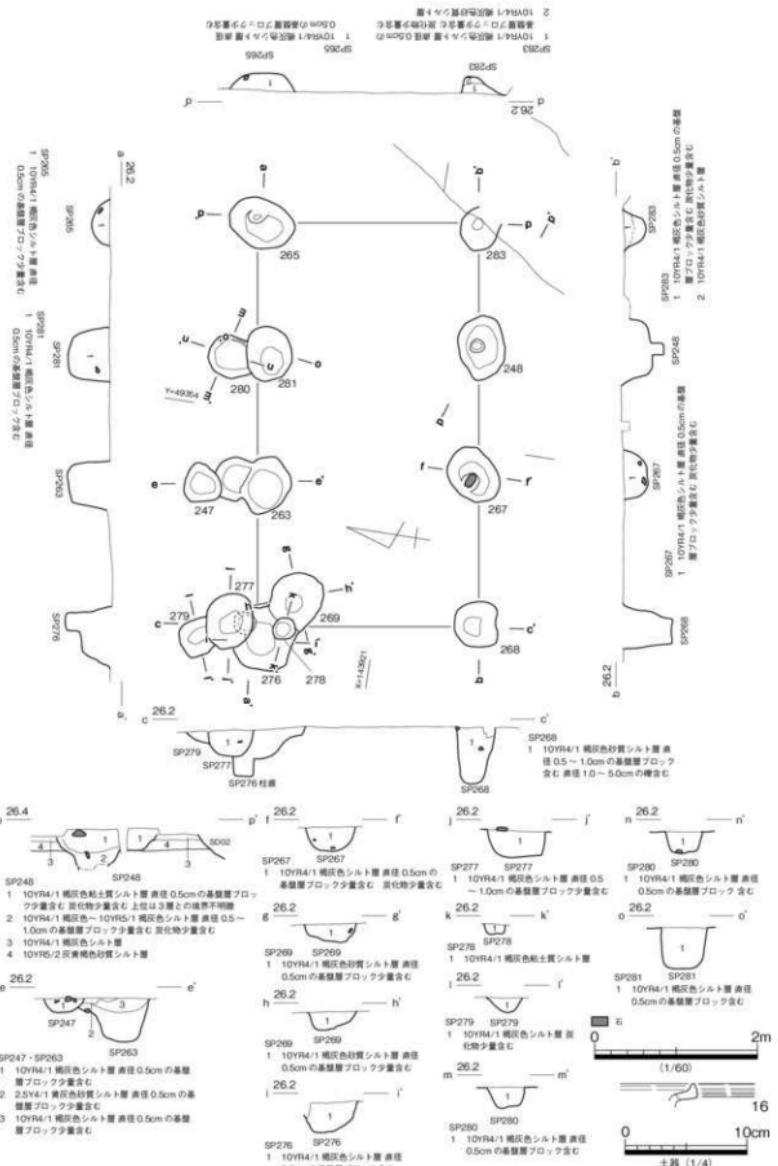
1区北部、包含層の掘り下げ途中で確認した溝状遺構である。浅く、底部が包含層下面にまで及ぶのはわずかにすぎない。SD01 掘り下げ後にSB05を構成する柱穴を確認した。0区では包含層下位の基盤層上面での遺構検出となつたため、本遺構は確認できなかった。

遺物 26～30はいずれも弥生土器で、26～28が甕、29が高杯、30が台付鉢である。31はサスカイト製石縫、33はサスカイト製片である。抉りをもつ32はサスカイト製打製石庖丁の破片だろう。

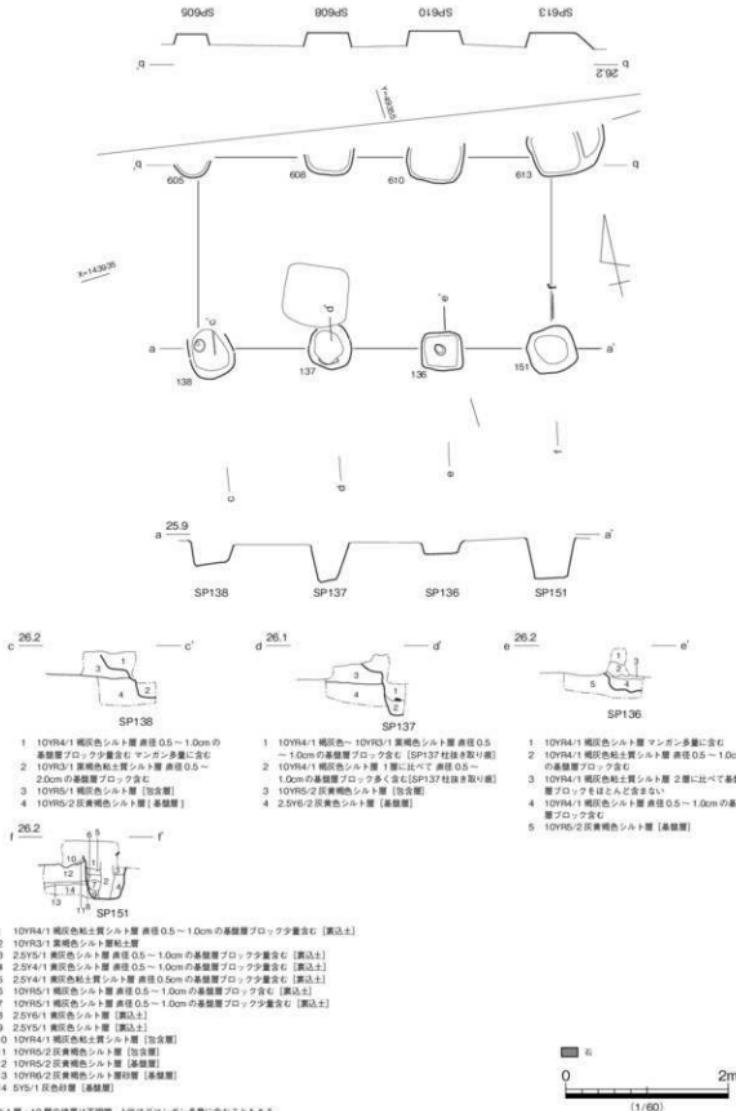
時期 26～28およびSB05(中期III-2)に後出する遺構であることから、弥生時代中期後葉（中期III-2～3）と考えておきたい。

SD02（調査時遺構名：1・2区 SD02）

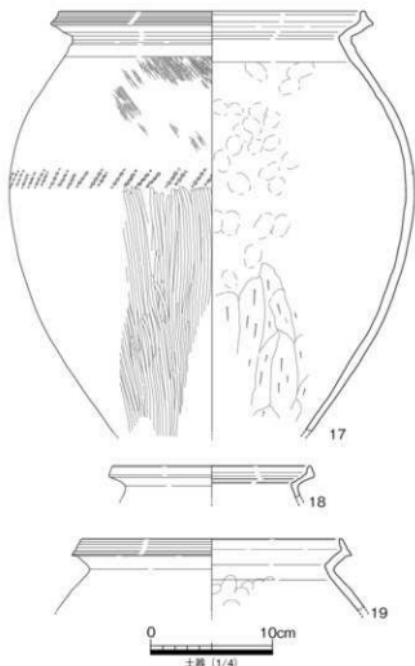
1区から2区にかけて検出した溝状遺構で、直線的な平面形をもつ水路とみられる。北部(1区)では包含層下面で検出したが、調査区東壁の断面で包含層途中からの掘り込みを確認した。それを受けて南



第19図 SB04 平・断面図・出土遺物



第20図 SB05 平・断面図



第21図 SB05 出土遺物

水路群

SD42・43・45・47・48・50、SX41

0・5・9・12区では弥生時代前期～古代にかけての水路群を検出した。以下は時期別の概要である。弥生時代前期 SD47・50が開削され、それぞれの流路はSD48へ合流する。SD48は北流すると思われるが、その先は弥生時代後期のSD45で堵されているため判然としない。SD47の上位から南側にかけては包含層として掘り下げたSX41が広がる。SX41の埋土中に含まれる遺物は、少量だが弥生時代前期の土器とサヌカイト片のみである。さらにSX41の下面では浅い落ち込み状の遺構SK42・43を検出した。SX41、SX42・43は削平され残ったSD47の一部の蓋然性が高い。

弥生時代後期後半 SD42・43が開削される。SD45も当初の時期が前期であるとしても、この時期に大きく再掘削されているようだ。SD42の流路方向は、高松平野の大局的な地形(南西から北東に向かって標高が緩やかに下がる)に反して北から南である。南端でSD43・45と合流し、SD45は北西方へと流下する。SD43は合流部分の広がりとも捉えられ、厳密には水路とは言えない。SD42・43・45の合流部分は流路部分に比べて底部が深くなってしまい、ここに堆積する層はSD42方向にもSD45方向にも広がる。この層が堆積した後、SD42が埋没、さらにSD45が埋没という層位関係にあり、SD42・

部(2区)の調査では包含層上面で検出したため、南北部間で上面の輪郭が不連続となつた。

遺物 34～36は弥生土器壺、37～41は弥生土器甕、42～47は高杯、48はサヌカイト製石鎌、49～53はサヌカイト製剝片である。

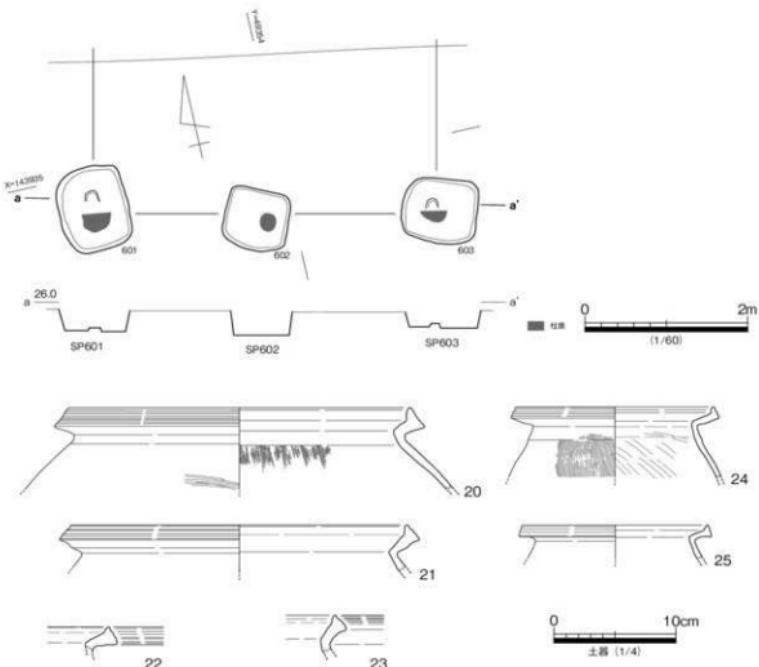
時期 中期III-1～2の資料も含むが、屈曲して口縁部が立ち上がる高杯42・43から最終埋没は弥生時代中期後葉(中期III-3)と判断できる。

SD03 (調査時遺構名: 2区 SD03)

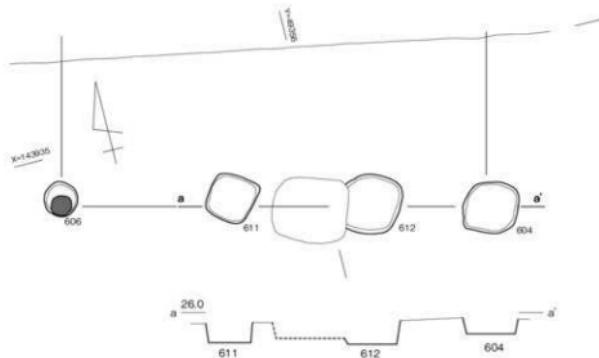
2区南東部で検出した南西-北東方向の深い溝状遺構である。SD02との位置関係からみて、SD02から北東方向へ分岐する水路の上位が削平された遺構の可能性もある。

遺物 54は弥生土器甕の口縁部である。

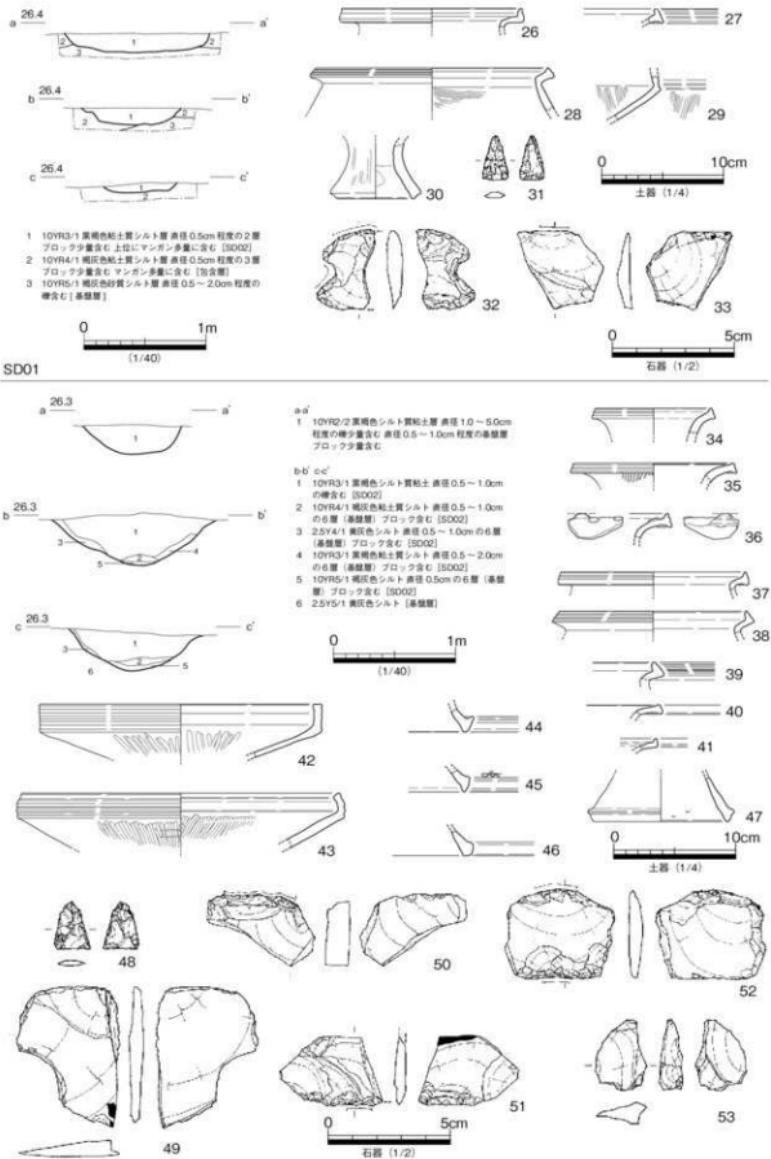
時期 54から弥生時代中期後葉(中期III-2～3)と判断できる。



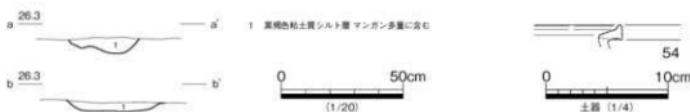
第22図 SB06 平・断面図・出土遺物



第23図 SB07 平・断面図



第24図 SD01・02 平・断面図・出土遺物



第25図 SD03 断面図・出土遺物

45(・43) 同時並存→ SD45 のみ機能、の変遷が推定できる。SD45 は南西に向かうに従って深くなり、9 区西端部で南西から流入するであろう SD48 と合流する。SD45 は直線的で幅も広いため、周辺の水路は SD45 から派生するものとみられる。SD45 は、個別遺構の部分で詳述するように複数の層位に分かれ、部分的な埋め戻しなどを経ながら長期に利用されている。直線的な平面形や広い幅、台形の断面形などの要素を含めて、SD45 が周辺一帯の基幹水路であったとみて間違いないだろう。

SD45 は弥生時代後期後半のうちに大半は埋没し、その後水路として機能しているかは不明だが、窪地のような状態が続いて、最終的には古代に埋没(おそらく埋め戻し)する。

SD42 (調査時遺構名: 0 区 溝 1、5・6・12 区 SD01・02)

0・5・6・12 区で検出した水路である。当初、重複する 2 条の水路として調査したが、埋没過程に時間差のある同一水路とし、古い段階の層位を b 層、新しい埋没層を a 層として報告する。北東から南西に向かって直線的に伸び、湾曲して南へ向かって SD43・45 と合流する。底のレベルは北東が高く南が低いため、北東から南へと流下していたことがわかる。湾曲部分西側では、小穴列が新しい時期の流路(a 層に対応)に沿って並ぶ。穴の直径が小さいため、柱穴ではなく杭列の痕跡の蓋然性が高い。その場合、杭間に板などを置いた護岸施設の可能性が考えられる。

遺物 55 は b 層から出土した香東川下流域産土器の弥生土器鉢である。

時期 55 から弥生時代後期後半の埋没と判断できる。

SD42・43・45 合流部分

6 区南端では SD42・43・45 が合流する。前述のとおり、この地点の堆積状況から SD42・45 の同時機能と埋没順序が推測できる。

遺物 56・57 は弥生土器甕、58 は弥生土器高杯である。

時期 56・57 から弥生時代後期後半と判断できる。

SD43 (調査時遺構名: 5 区 SD03・04)

5 区南端、SD42・45 との合流地点付近で検出した。調査対象地外に伸びる水路の可能性はあるが、現状では合流地点の広がりの一部と考えたい。

遺物 59 は弥生時代前期の壺である。

時期 SD42・45 との関係から弥生時代後期後半とみられる。前期の 59 は古い遺構に伴うものであろう。

SD45 (調査時遺構名: 6～9 区 SD05・06)

6区から9区にかけて検出した、南東から北西へとほぼ直線的に伸びる基幹水路である。a～fの6層に大別して遺物を取り上げた。

a層 黄灰色～褐灰色シルト～シルト質粘土層で細かな基盤層ブロックを含む。溝が深くなる8区以西で確認できるため、6・7区では削平されているのだろう。

b層 a層直下の黒褐色粘土層と、その下位の基盤層ブロックを多量に含む褐灰色～灰褐色粘土質シルト～シルト質粘土層、粘土層や砂層をラミナ状に含む黒褐色～褐灰色粘土層をb層とした。多量のブロックを包含する層は、溝を横断するように存在するのではなく、両岸のどちらかから流れ込むようなかたちである。また、同層は8区～9区に広がるが、SD48との合流地点付近には認められなかった。ブロック包含層は埋め戻しに伴う層と思われるが、この埋め戻しはSD05全体ではなく、一部にのみ行われた可能性がある。

c層 主に水路底に堆積した黒褐色粘土層を主体とし、一部、砂層をラミナ状に含む層もある。SD45全体に認められる。

d層 水路の両岸際にある黄灰色～にぶい黄灰色シルト～シルト質粘土層で、基盤層に近い。溝掘削時の土が堆積した加工時形成層と思われ、水路機能時には埋没していたのだろう。

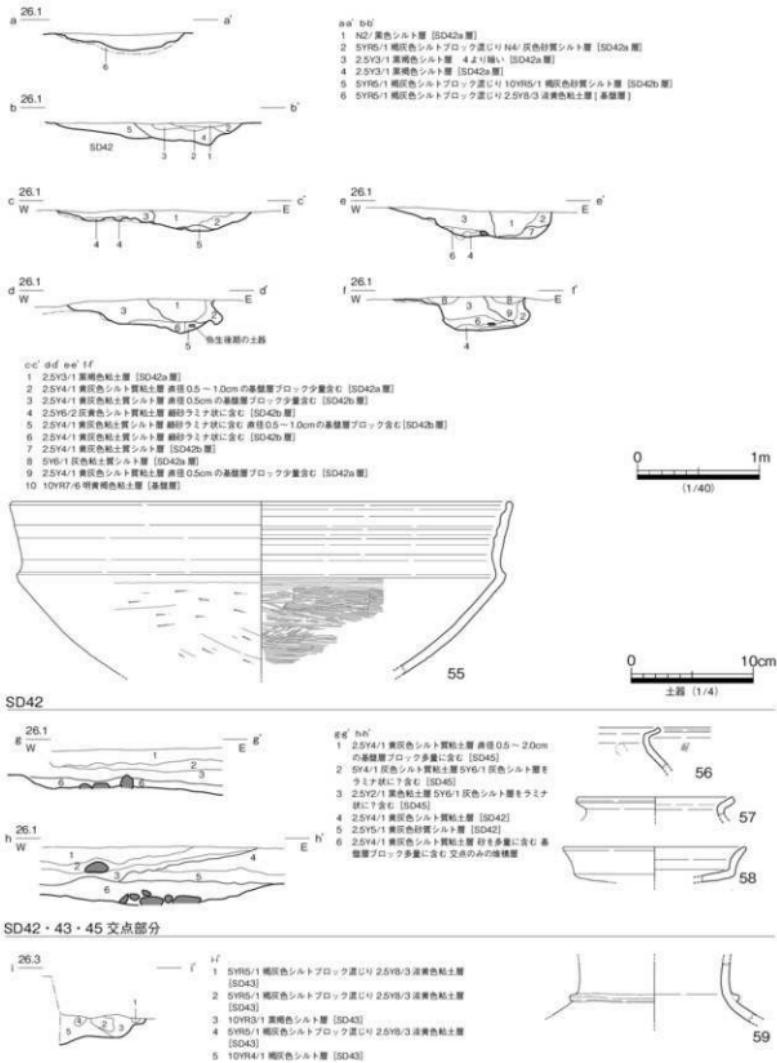
e層 c層の下位、7・8区の底部の窪みに堆積した層で、周辺の基盤層を構成する疊を含む。

f層 6区でb・c層の下位、左岸に堆積した灰黄色シルト層をf層とした。7層以西では確認できないため、SD42・45の合流地点付近にのみ存在する。

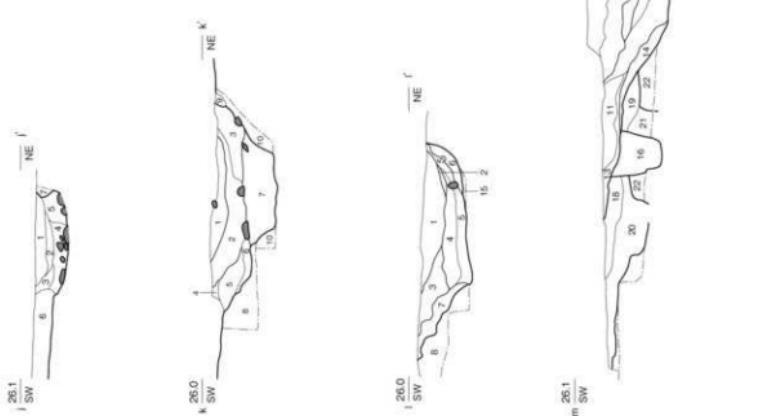
層位を順に示すとd層→(e層→f層→)c層→b層→a層となる。

遺物 60～63はd層(加工時形成層)から出土した弥生土器である。香東川下流域産の長頸壺60の頸部には、横方向の沈線が螺旋状に施された後、縦・横方向の細い沈線で区画のような記号が描かれる。61は壺の口縁部である。62は破片で全体形は不明だが、浅い杯状の部分から脚状の部位が伸びるようだ。63は口縁部が反転して伸びる鉢である。64～67の弥生土器はe層から出土した。64は長頸壺、65は甕、66は鉢、67は高杯である。このほか、8区のc層中底面直上からはウマの上下顎が出土している(写真45～48参照)。68の弥生土器甕はe・c層のいずれかから出土した。弥生土器69～78、サヌカイト製剥片79とサヌカイト製石鏡80はc層からの出土である。69・70の壺は中期後葉に位置づけられる。71は後期後半の壺、72は前期の壺底部である。73・74は後期後半の甕口縁部、75～77は中期の高杯脚部、78は鉢である。弥生土器甕81と高杯82はb・c層のいずれかから出土した。83・84はb層から出土した弥生土器である。口縁部に四線文をもつ甕83は中期後葉に位置づけられ、84の甕は後期後半のものである。最上層のa層からは須恵器蓋85・86とサヌカイト製石鏡87が出土している。88～102は出土層位不明の遺物である。弥生土器甕88は中期後葉を示す。89～92は後期後半の弥生土器甕、93・94も後期後半に帰属する鉢である。95～101はいずれもサヌカイト製の石製品で、95～98は石鏡、欠損がみられる99は石錐、100は剥片である。縁辺に加工が施された101は抉りのような箇所もあり、石庖丁に復元できるかもしれない。102は砥石か磨石とみられ、平坦面に研磨痕が認められる。

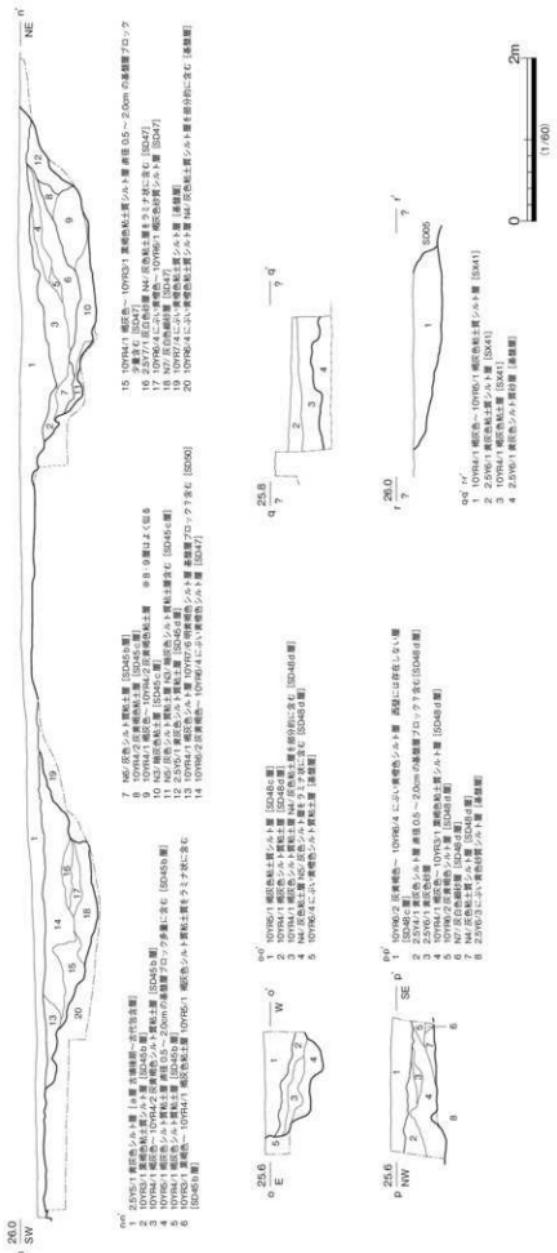
時期 d・e・c・b層は弥生時代前期の壺(72)や中期後葉の遺物(82・83)も含むが、大半は後期後半である。特に、底部が浅く丸いボウル状の鉢の出現は空港跡地遺跡SKa77・SKb01・SKb16に認められ、e層はさかのぼっても後期後半(後期II-2)の堆積となる。同様の鉢はc層にも認められるため、c層の埋没上限も同時期とみられる。層位不明で取り上げた遺物で最新の時期を示す甕90も同時期の所産で

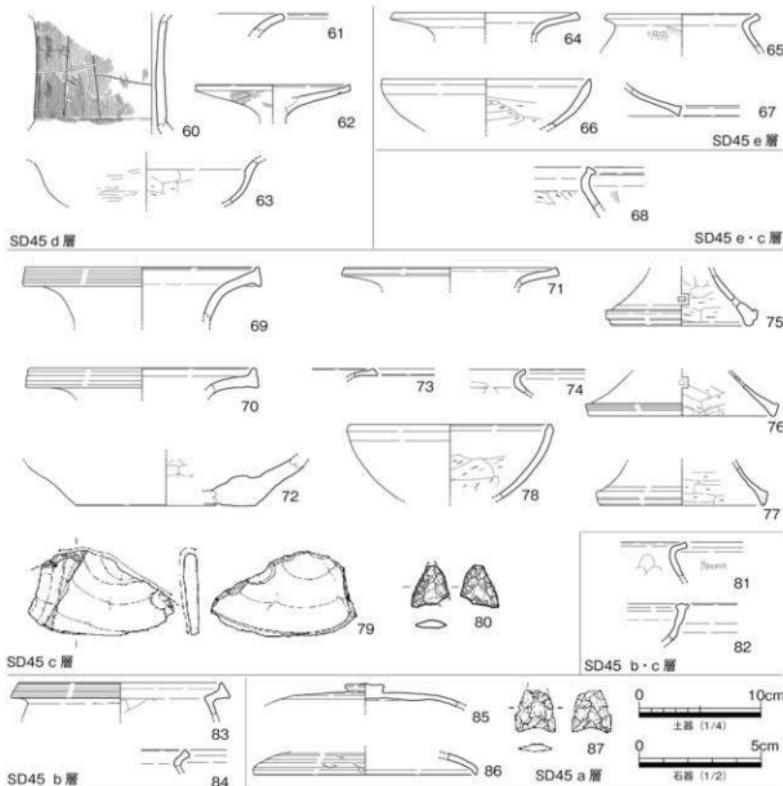


第 26 図 SD42・43・45 断面図・出土遺物



第27図 SD45・47・48、SX41 断面図





第29図 SD45 出土遺物

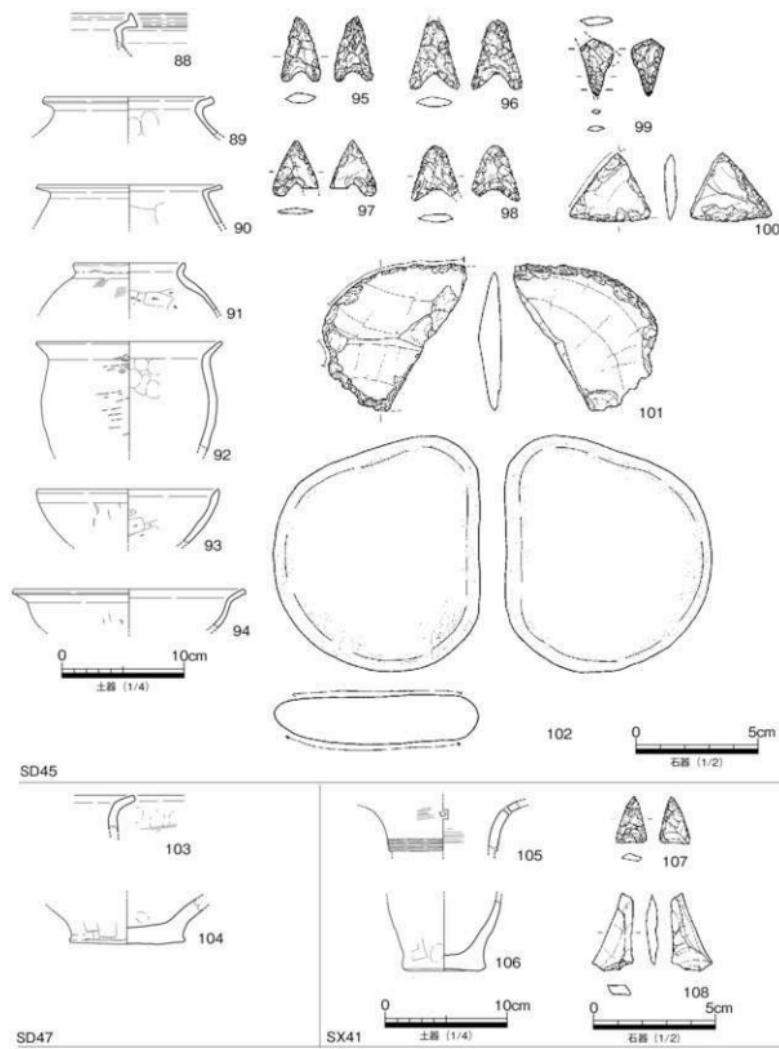
あるため、b層以下の埋没は後期後半(後期II-2)と判断できる。一方、最上層のa層に伴う85・86は9世紀にまで降る。以上、堆積状況と出土遺物の関係からSD45は、弥生時代後期後半(後期II-2)までに掘削→掘削直後にd層堆積→機能後、e・c層が体積→埋め戻しを経ながら後期後半(後期II-2)にb層堆積→最終的には9世紀に埋没、の過程をたどったことがわかる。

SD47 (調査時遺構名: 8・9区 SD07)

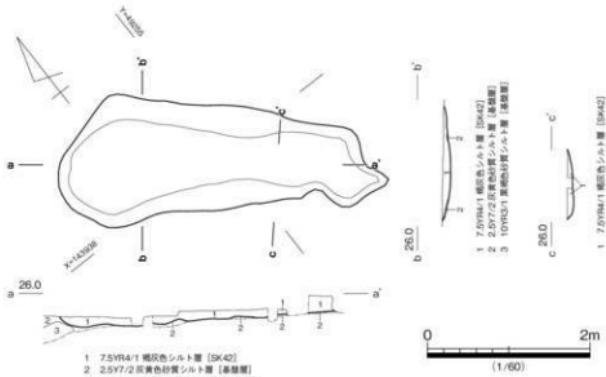
8区から9区にかけて検出した水路である。浅い東端部から、西に向かって深くなり、西端部ではSD48・50に合流する。褐色～にぶい黄橙色シルト層を主体とし、部分的にラミナ状になる層や細砂層を含む。

遺物 103は壺口縁部、104は壺底部である。

時期 103・104から弥生時代前期後葉と判断できる。炭化していない小片も同時期と思われる胎土

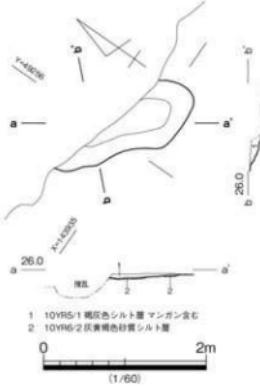


第30図 SD45・47、SX41 出土遺物



第31図 SK42 平・断面図

の土器片である。



第32図 SK43 平・断面図

SX41、SK42・43 (調査時遺構名: 8・9区 SX01、9区 SK02・03)

SX41は8・9区南部に広がる薄い包含層で灰白色～灰黃褐色シルト層を主体とする。北のラインはおおむねSD47に合致する。SK42はSX41下位で検出した浅い落ち込み状の遺構である。SX03も同様の遺構だが、SX41の範囲からはやや外れる。いずれも弥生時代前期の遺物しか含まず、遺構の位置関係からみれば、本来は同時期の水路SD47の一部を構成し、後世の削平を被った際に浅く残存したもの可能性がある。

遺物 105・106は弥生土器壺、107はサヌカイト製石器、108はサヌカイト製剝片である。

時期 105・106からSD47と同時期の弥生時代前期後半と判断できる。

SD48 (調査時遺構名: 9区 SD08)

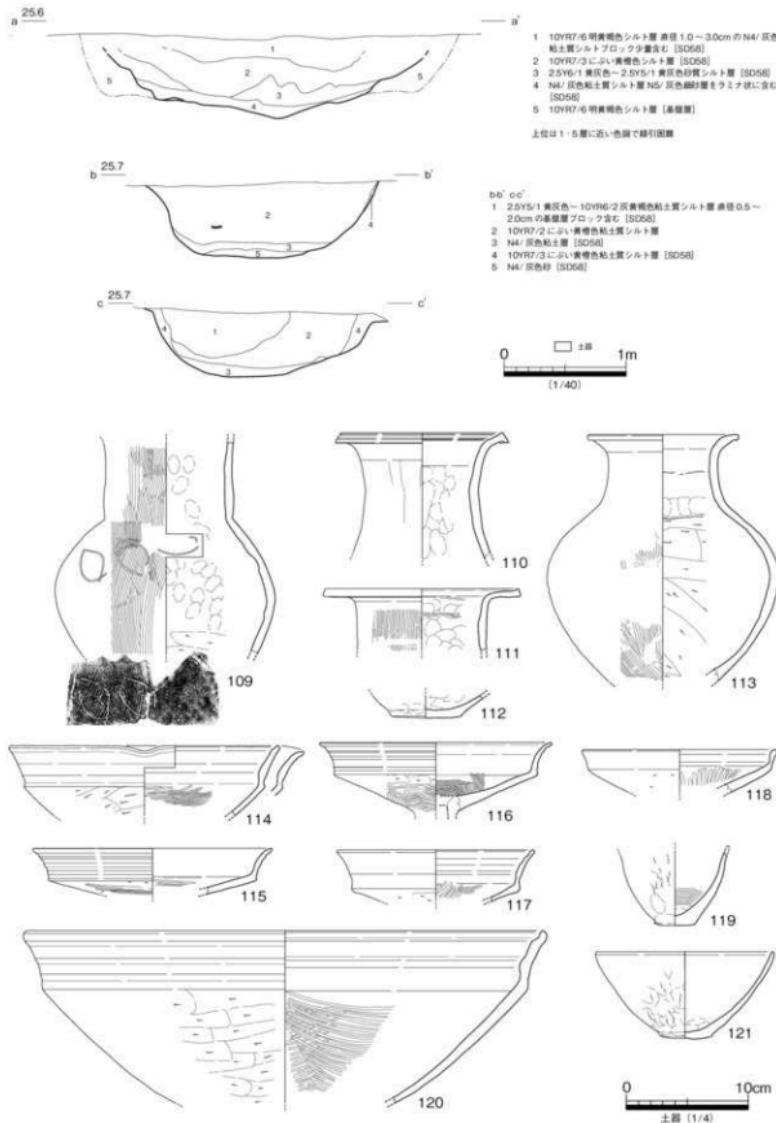
8区西端部で検出した南北方向の水路で、a～d層に大別できる(第10図9区西壁断面図参照)。

a層 SD45a層と連続する同一層で、褐灰色～灰黃褐色粘土質シルト層を主体とする。

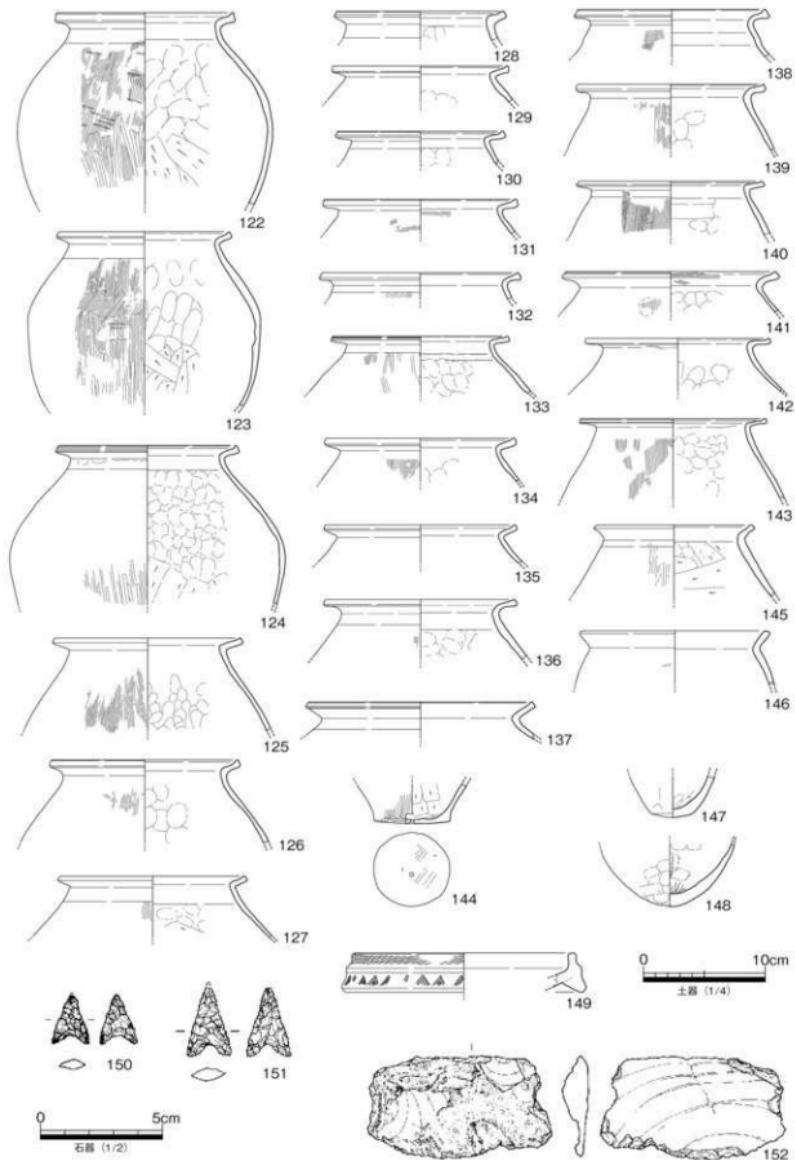
b層 褐灰色粘土質シルト～シルト層でSD45b層と連続する。

c層 北端部、SD45との合流部付近の浅い窪地に堆積した、黒褐色～灰色粘土～シルト質粘土層である。SD45c層と土質は近い。

d層 底部付近は暗灰色粘土層、その上位は黄灰色シルト～シルト質粘土層である。一部はSD47から連続する。



第33図 SD58 断面図・出土遺物

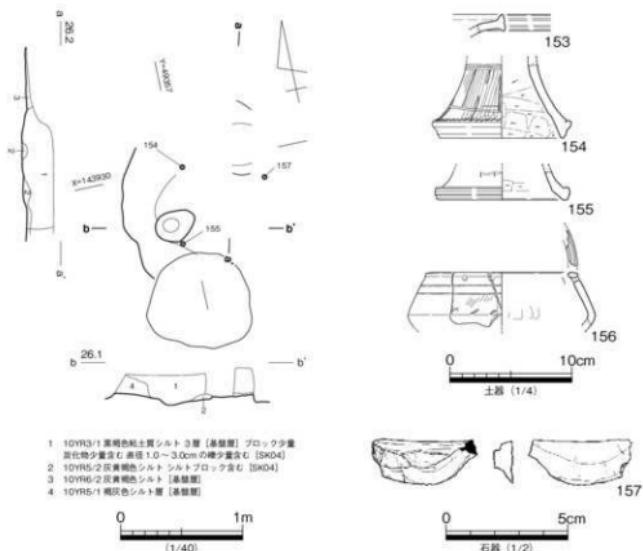


第34図 SD58 出土遺物

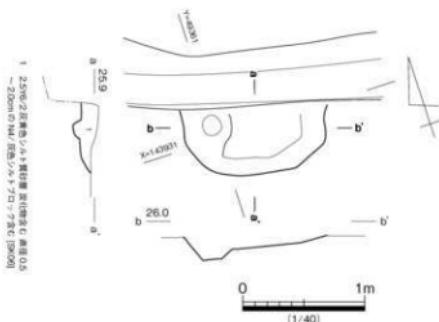
遺物 図化はしていないが、弥生時代前期とみられる土器の小片が出土している。
時期 SD45・47との連続する堆積状況から、d層は弥生時代前期後葉、b・c層は弥生時代後期後半、a層は9世紀の埋没と判断できる。

SD50 (調査時遺構名: 9区 SD10)

9区西端で検出した、SD47に連続する小規模な水路である。周辺地形から南西から北東への流下と考えられる。



第35図 SK04 平・断面図・出土遺物



第36図 SK06 平・断面図

遺物 団化はしていないが、弥生時代前期の土器片が出土している。

時期 出土遺物と SD47 に接続することから弥生時代前期後葉の埋没と判断できる。

SD58 (調査時遺構名: 10・11 区 SD08)

10・11 区で検出した南西から北東へ向かう直線的な水路である。上位層の埋土の土質が基盤層に類似しており、特に北端部では遺構検出面での掘り込み部分の検出が困難で、底部に体積した灰色粘土質シルト層を手がかりに掘り込みを確認した。

遺物 109～149 は弥生土器である。長頸壺 109 の胴部上半部には楕円状の文様 3 点が描かれる。破片の幅全体に描かれているため、文様が周回する可能性もある。香東川下流域産の壺 144 の底部中央には直径数 mm 程度の穿孔が認められる。149 は器台である。150・151 はサスカイト製石鏃である。サスカイト製の 152 は片面に自然面を残すが、長軸方向の両端に抉りがあるため石庖丁とみていいだろう。

時期 110 のような後期前半の壺も含むが、それ以外の土器はおおむね後期後半を示す。特に香東川下流域産の壺 (124・125・127 など) から最終埋没は弥生時代後期後半 (後期 II-2) と判断できる。

土坑

SK04 (調査時遺構名: 1 区 SK04)

1 区で検出した平面形不明の落ち込み状の土坑である。包含層掘り下げ途中に残していたベルトで確認し、包含層途中から掘りこまれる土坑と判断した。南部は SP290 に破壊される。

遺物 153 は壺の口縁部である。高杯脚部 154 の外面には横位の沈線が巡り、直交して縦位の沈線が認められる。縦位の沈線は、上下端を空けるものと、中間が途切れるものとが交互に配される。台付鉢 156 の口縁部は 2 孔を有する。157 はサスカイト製剥片である。

時期 153 から弥生時代中期後葉 (中期 III-3) と判断できる。

SK06 (調査時遺構名: 1 区 SK06)

1 区東部で検出した土坑である。西端部の深い部分を柱痕とみれば、やや大きめの柱穴の可能性もある。

遺物 遺物は出土していない。

時期 包含層下面での検出や埋土からみて、周辺の遺構と同じく弥生時代中期後葉の遺構だろう。

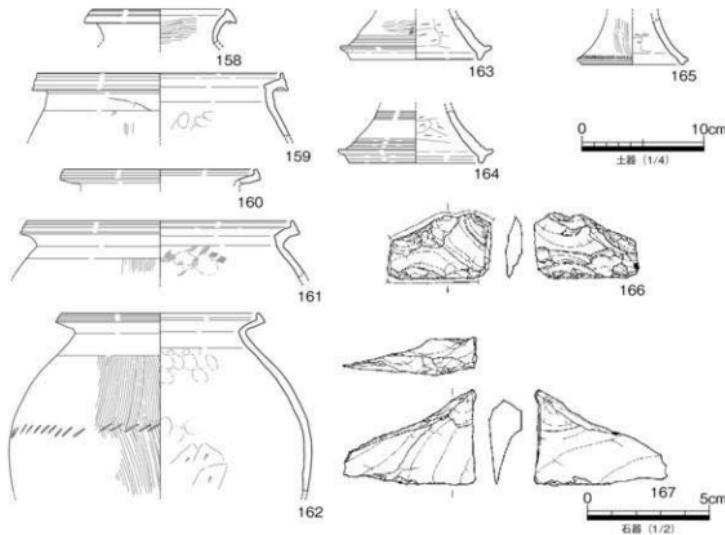
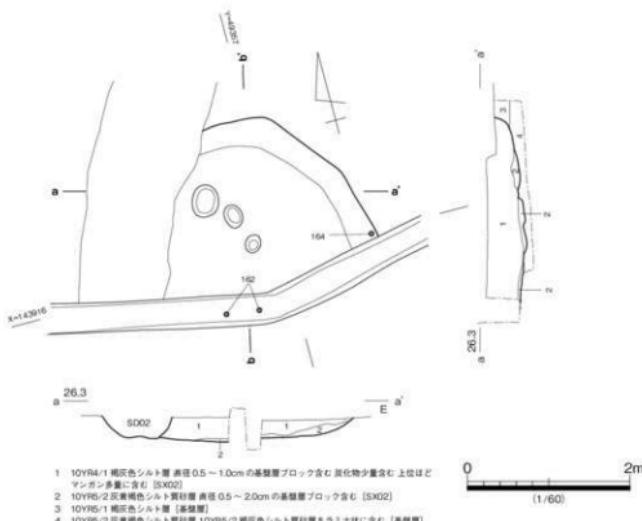
SK09 (調査時遺構名: 2 区 SK09)

2 区南東部で検出した緩やかに落ち込む土坑で、西半部は弥生時代中期後葉の水路 SD02 で破壊されている。底面の一部には窪地状の落ち込みがある。

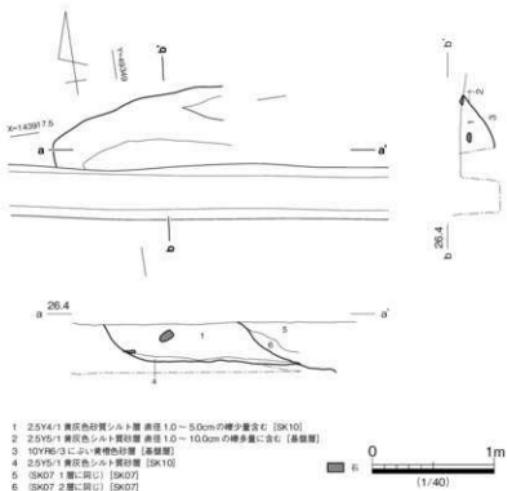
遺物 158～164 は弥生土器、166・167 はサスカイト製剥片である。

時期 160～162 から弥生時代中期後葉 (中期 III-2) と判断できる。

SK10 (調査時遺構名 2 区 SX03)



第37図 SK09 平・断面図・出土遺物



第38図 SK10 平・断面図

2区南部で検出した土坑である。東部をSK07で破壊され、南部は調査区外になるため全体の平面形は不明である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 埋土が類似する周辺の遺構の時期から弥生時代中期後葉と推測できる。

柱穴

SP291(調査時遺構名:1区SK02)

1区の包含層掘り下げ途中に検出した遺構で、中央部が柱痕状に窪むため柱穴と考えた。

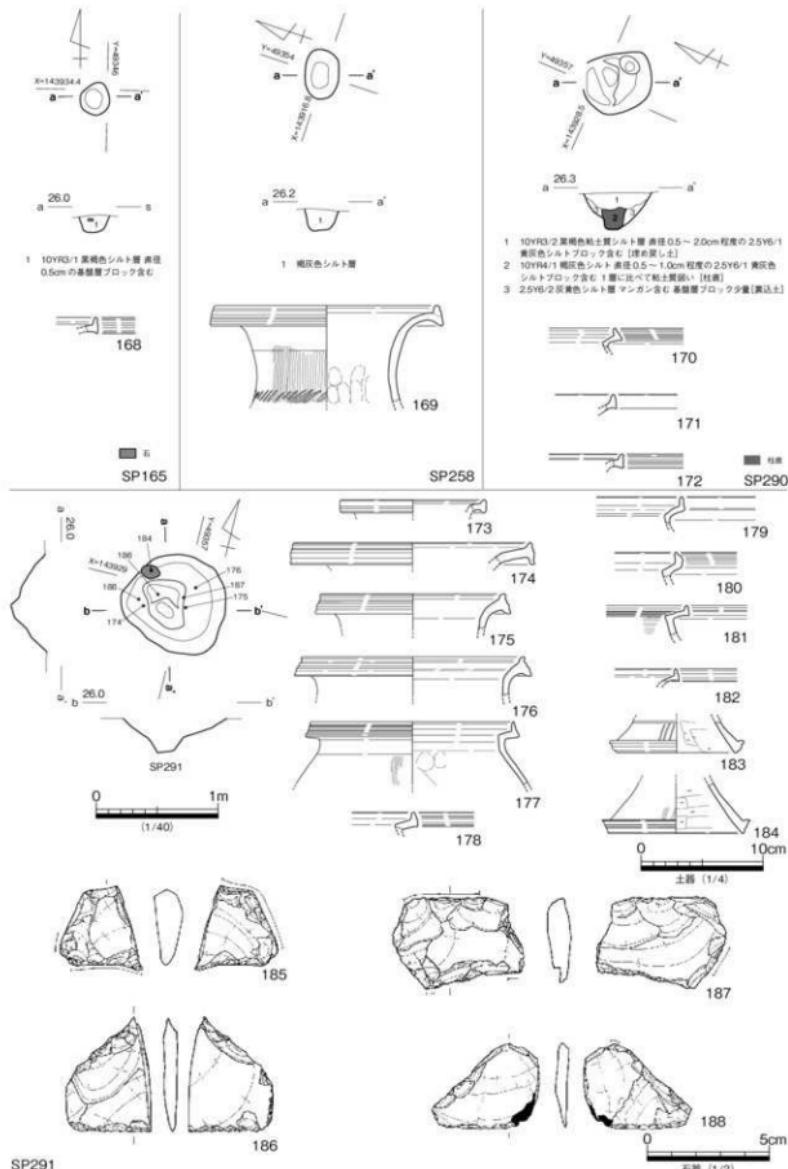
遺物 173～184は弥生土器、185～188はサヌカイト製剝片である。高杯脚部183の外面には、横位の沈線と脚端部との間に3条の沈線が縦位に描かれる。

時期 壺177～181から弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-3)と判断できる。

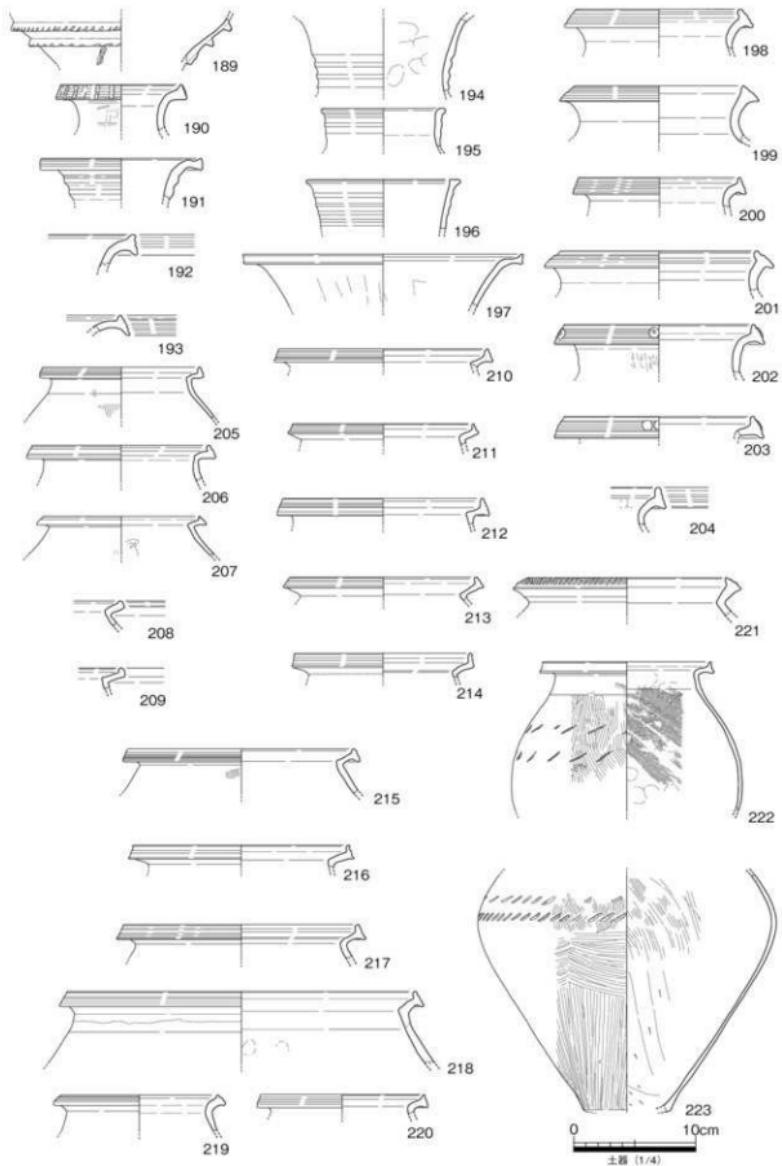
1・2区包含層

1・2区の包含層は弥生時代中期後葉の遺物を多量に含む。基本層序の項で述べたように、1・2区の包含層下面で検出した弥生時代中期後葉の遺構は、本来は包含層上面または途中からの掘り込みであり、包含層として取り上げた遺物の大半は遺構に伴うものであった蓋然性が高い。よって、包含層の遺物の時期は、1・2区で弥生時代中期後葉とした遺構の時期幅に対応する。

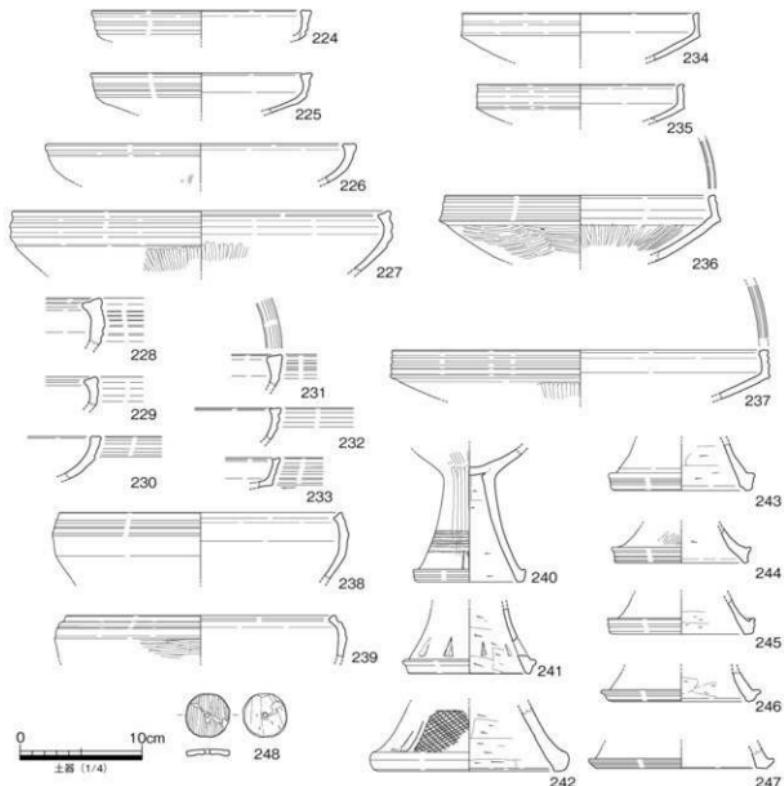
遺物 189～247は弥生土器である。197はラッパ状に開き、屈曲して口縁部となる。あまり例をみないが壺とした。248は壺の胴部下半を円盤状に形成し、中央への穿孔により紡錘車としたもので



第39図 SP165・258・290・291 平・断面図・出土遺物



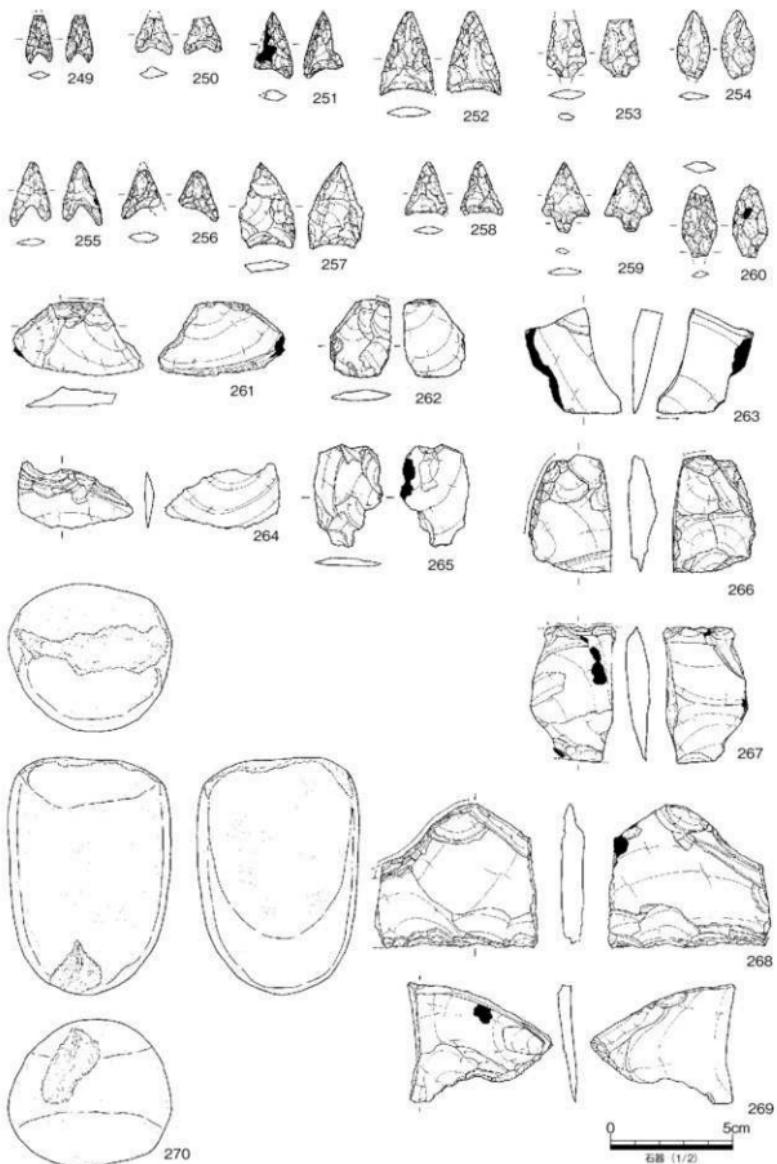
第 40 図 包含層 出土遺物①



第41図 包含層 出土遺物②

ある。249～260はサスカイト製石錠、261～269はサスカイト製剥片である。270は周辺の礫層を構成するような礫の上下端に敲打痕が認められる。敲石であろう。271～273も敲打痕があり、敲石と判断した。274～276は平坦面に研磨痕が残る砥石である。

時期 弥生土器のほとんどは、竪穴建物や掘立柱建物といった0～2区の遺構出土遺物と同じ弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-2～3)を示す。中期中葉にさかのばる189や221は、少數ながら周辺に当該期の遺構が展開する可能性を示唆する。



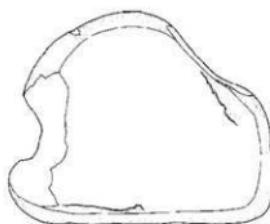
第42図 包含層 出土遺物③



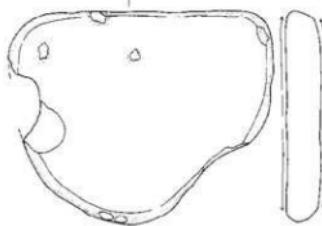
274



274



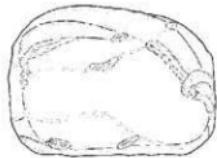
275



-



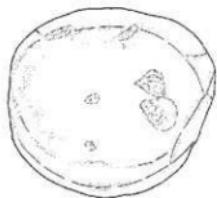
273



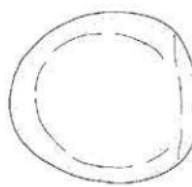
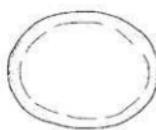
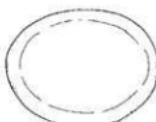
5cm
6mm (1/2)



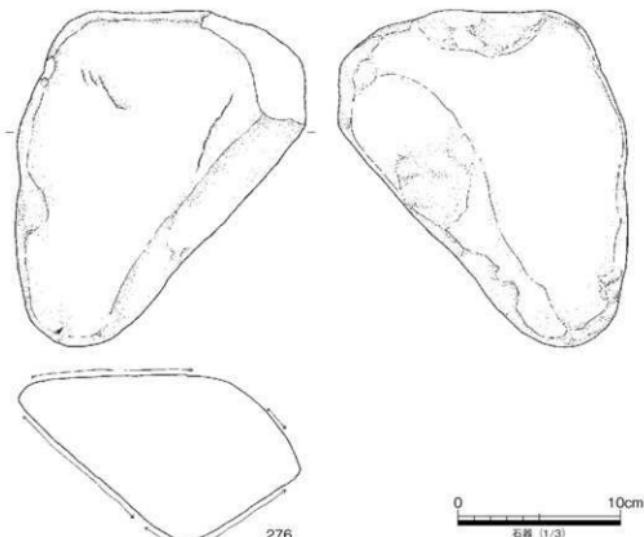
272



271



第43図 包含層 出土遺物④



第44図 包含層 出土遺物⑤

第4節 古墳時代後期の遺構

掘立柱建物

SB08（調査時遺構名：2区 SB07）

2区南西部で検出した1間×2間、梁間4.4m、桁行4.6mの掘立柱建物である。柱穴は直径のわりには深さがあり、根石として砂岩の礫（周辺の礫層に由来か）が用いられる。また、柱材抜き取り後の埋め戻し土にも礫が入っており、これらの一部は本来根石として使われたものだろう。

後述するSD49を除いて同時期の遺構は確認できていないが、調査対象地外（南）に建物が展開する可能性も十分に考えられる。

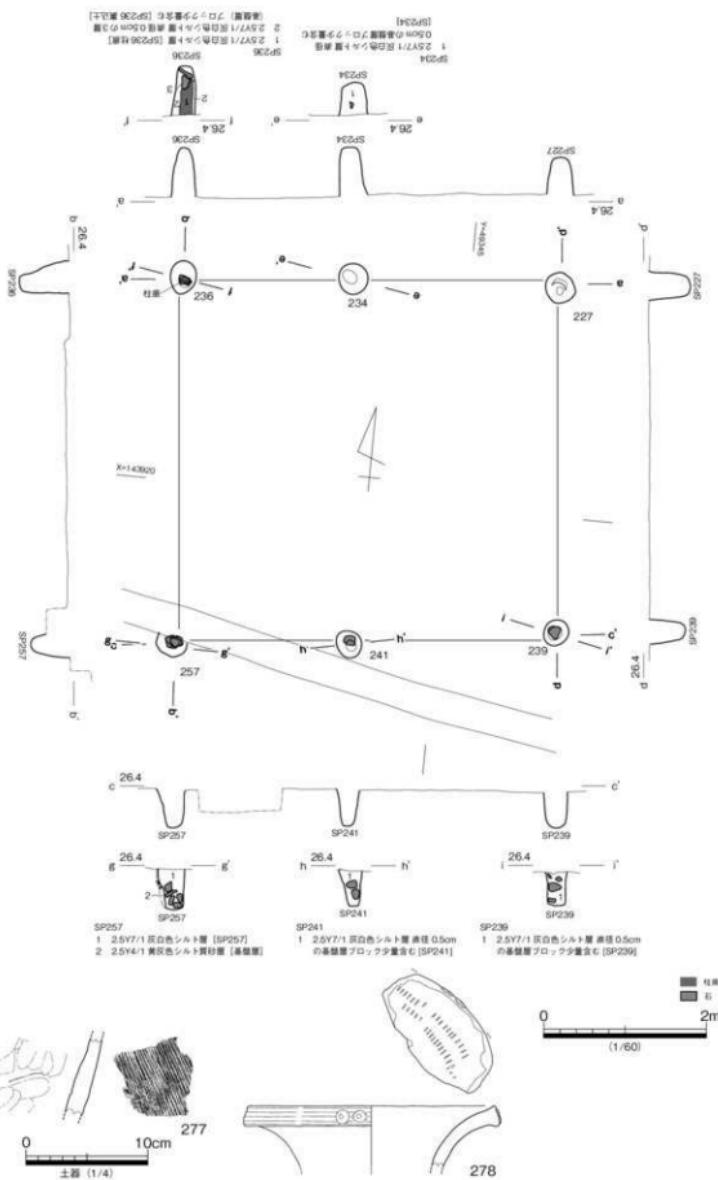
遺物 277はSP227から出土した須恵器甕の胴部片、278はSP239出土の弥生土器壺口縁部である。

時期 277からTK47型式並行期と考えたい。柱穴の埋土も周辺にある弥生時代中期後葉の遺構とは異なる。

溝状遺構

SD49（調査時遺構名：9区 SD09）

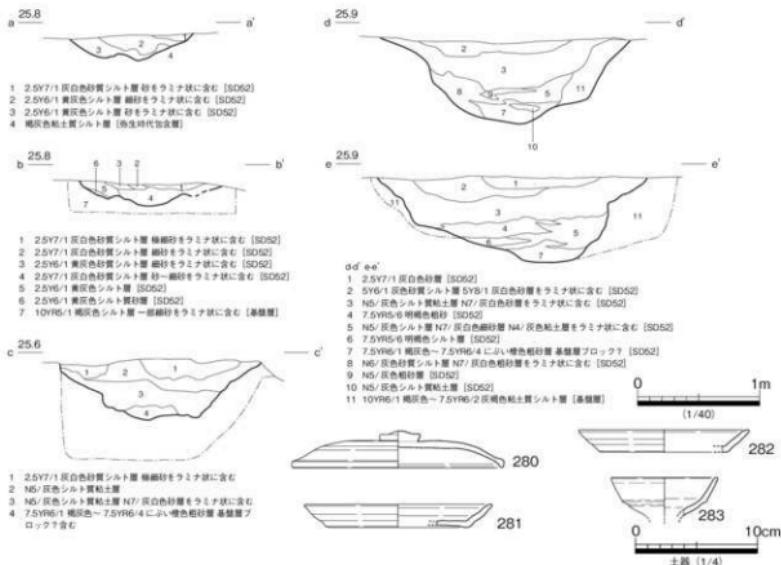
9区南西部で検出した溝状遺構である。底面の凹凸が顕著で水路とは言いがたいが、埋土の一部に



第45図 SB08 平・断面図・出土遺物



第46図 SD49 断面図・出土遺物



第47図 SD52 断面図・出土遺物

はラミナ状の堆積も認められる。流水を伴う遺構であった場合には、南東から北西への流路方向であろう。

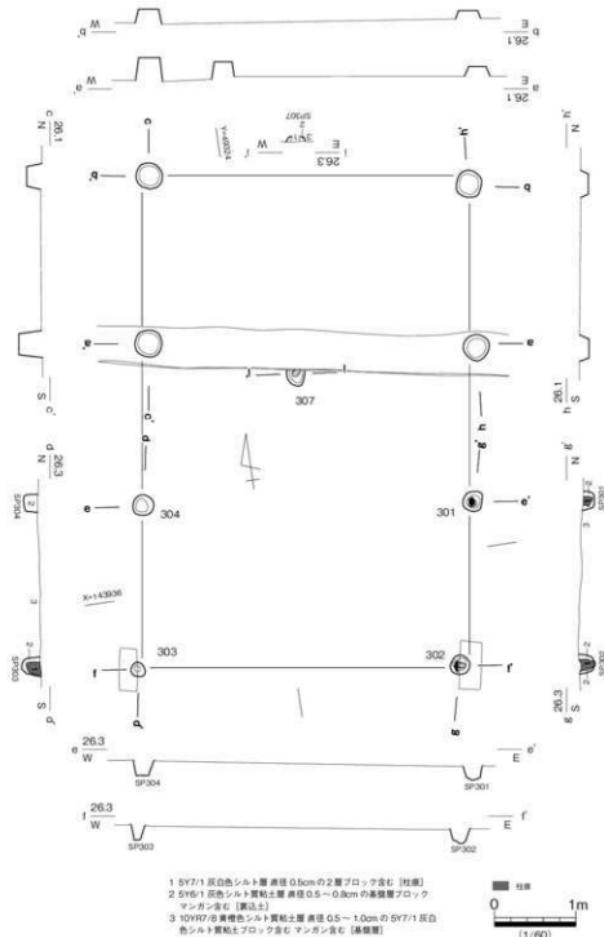
遺物 279 は須恵器杯蓋である。

時期 279 から T K 47 型式並行期と判断できる。

第5節 古代の遺構と遺物

溝状遺構

SD52 (調査時遺構名: 10・11区 SD02)

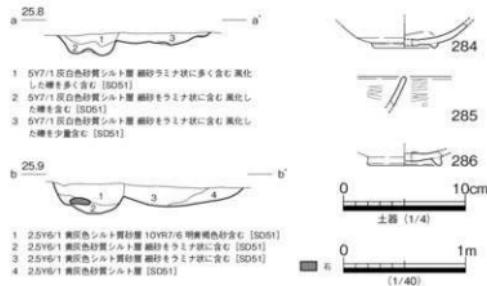


第48図 SB09 平・断面図

10・11区東端部で検出した直線的な水路である。北半部は基盤層を構成する土が複雑なため、平面的な掘り込みラインの確認が困難であった。複数のトレンチによる断面観察で土の堆積状況を把握してから平面的な形状を復元し、掘り下げを行った。南半部は全体的に白色砂をラミナ状に含む堆積層で埋土が構成される。底面のレベルを比べると北東よりも南西のほうが深さがあるため、流水方向は大局的な地形に逆行する北東→南西と考えざるをえない。

遺物 280は須恵器蓋、281・282は須恵器皿、283は須恵器はそうである。

時期 283はやや古い時期を示すが、280～282から9世紀の埋没と判断できる。



第49図 SD51 断面図・出土遺物

第6節 中世以降の遺構と遺物

掘立柱建物

SB09 (調査時遺構名: 3区 SB01)

0区から3区にかけて検出した1間×3間の掘立柱建物で、梁間は4.0m、桁行は6.0mである。中央にあるSP307は東柱だろうか。主軸方向は周辺の条里型地割に合致する。

遺物 遺物は出土していない。

時期 柱穴の形状や埋土から1・2区の柱穴群と同時期、12世紀前半～13世紀後葉と考えておきたい。

溝状遺構

SD51 (調査時遺構名: 10・11区 SD01)

10・11区を横断するかたちで検出した溝状遺構で、周辺の条里型地割と方向をそろえる。北半部は基盤層の土が複雑で溝の掘り込みを明確に検出できないまま、遺構検出面全体を掘り下げてしまった。調査後の平面図では東辺が乱れているが、本来は南半部の東辺ラインを延長して直線的になる。断面観察では、東側の浅い部分が埋没した後、西側を深く掘りなおしていることがわかる。なお、周辺の条里を復元すると、本遺構は1坪を東西に2分割するラインにあたる。

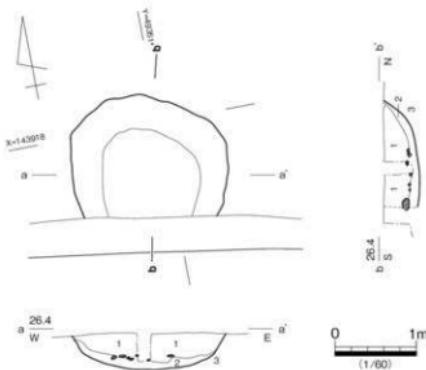
遺物 284・285は十瓶山窯系須恵器椀、286は黒色土器椀である。

時期 284から12世紀後半～13世紀第1四半期と判断できる。

土坑

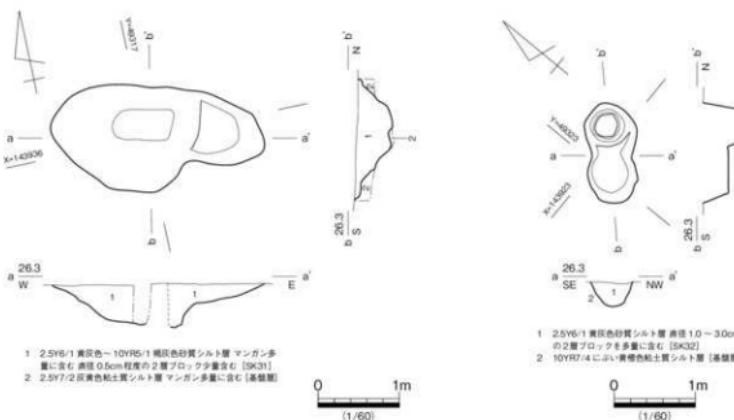
SK07 (調査時遺構名: 2区 SK07)

2区南部で検出した平面形円形の土坑で、弥生時代中期後葉の土坑SK09を破壊する。底面は平坦で



- 1 10YR6/2 底白色砂質シルト層 マンガニ含む 直径1.0～3.0cmの
縦少筋含む [SK07 壁面裏土]
- 2 10YR5/2 黄褐色砂質 マンガニ含む 直径1.0～5.0cmの縦含む
[SK07 壁面裏土]
- 3 2.5Y6/2 底黄色粘土層 [基盤層]

第50図 SK07 平・断面図



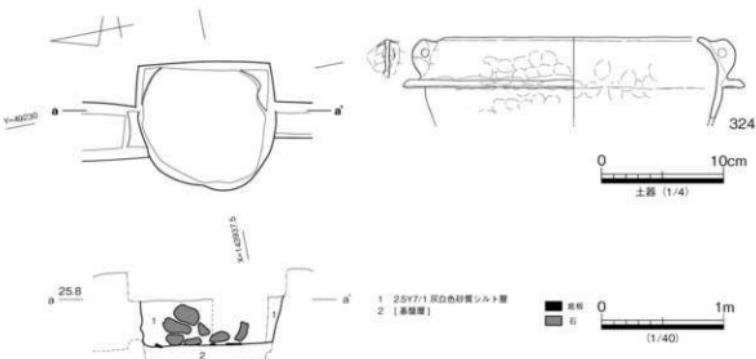
第51図 SK31・32 平・断面図

はなく緩やかに湾曲する。

遺物 固化していないが、国分寺楠井遺跡C類の土師質土器鍋小片と須恵器甕小片が出土している。

時期 土師質土器鍋から15世紀中葉～16世紀前半の遺構と判断できる。須恵器甕はTK47型式並行期とみられるが、古い遺構に伴うものであろう。

SK31 (調査時遺構名: 3区 SK01)



第52図 SK51 平・断面図・出土遺物

3区で検出した平面形不定形の土坑で、底面の形状も安定しない。基盤層に近い埋土でしまりもありないため、風倒木痕の可能性もある。

遺物 遺物は出土していない。

時期 時期特定は困難だが、埋土から中世以前とは考えにくいため、近世以降の埋没としておく。

SK32 (調査時遺構名: 4区 SK02)

4区南部で検出した土坑である。底部の形状は、一段落ちて平坦面があり、そこからさらに一段落ちる。深さのある側は平面形がほぼ円形で、底部が輪状に窪む。高台をもつ大型の容器を埋設していた痕跡と思われる。

遺物 固化していないが、陶器・磁器片、平瓦片、チャート製火打石が出土している。

時期 出土遺物から18世紀後半以降と判断できる。

SK51 (調査時遺構名: 10区 SE01)

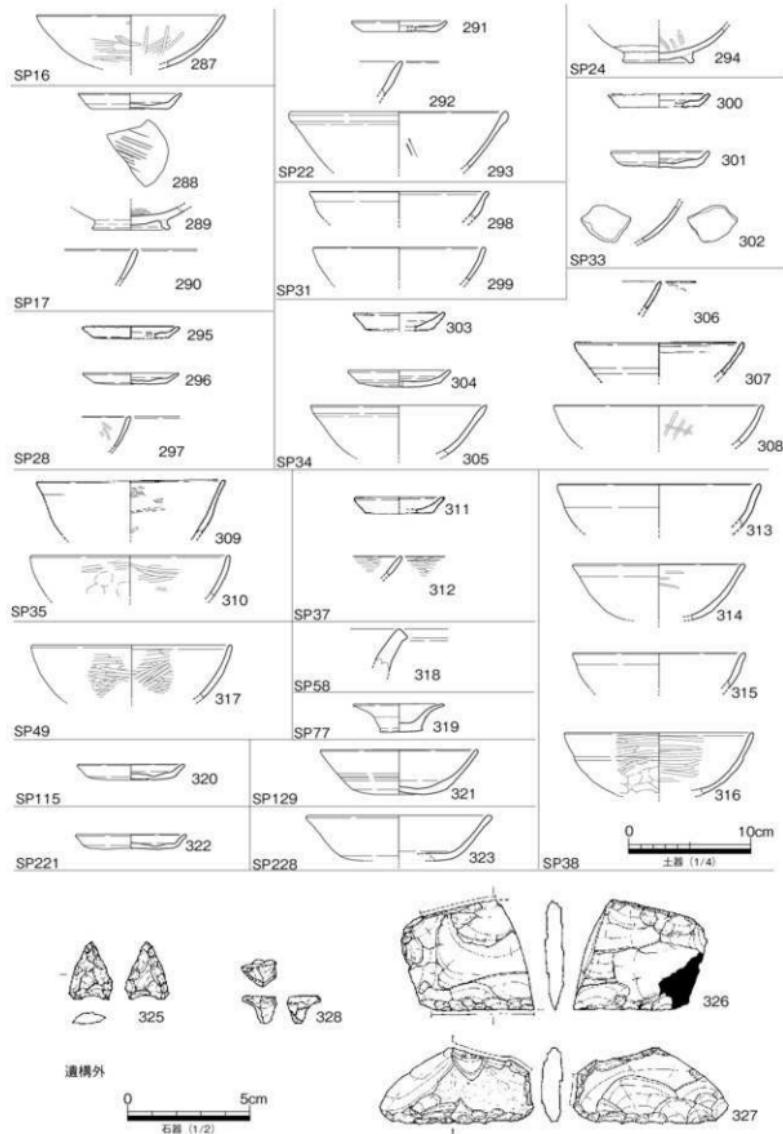
10区東端部で検出した平面形が円形の土坑で、底部には板が敷かれていた(写真59参照)。埋め戻し土と思われる埋土は多量の石を含んでいたが、石組があった痕跡は確認できなかった。側壁は垂直に近い角度で立ち上がることから、木製の枠が設置されていた可能性がある。

遺物 324は瓦質土器の羽釜である。その他、器種不明の土質質土器小片、古墳時代後期の須恵器小片が出土している。

時期 324から19世紀前半と判断できる。

1・2区柱穴出土遺物

1・2区の弥生時代包含層を掘り込む柱穴は灰色～灰白色シルト系の埋土で、包含層下面で検出した弥生時代中期の柱穴群とは埋土が異なる。SB09のような掘立柱建物に復元はできないものの、条里型



第 53 図 SP・遺構外出土遺物

地割に沿って東西方向に柱穴が平行して並んでおり、複数の柵列のような区画を意図する施設に復元できる可能性がある。

遺物 287・290・292・315・316・317は十瓶山窯系須恵器椀である。309は土師質土器にもみえるが十瓶山窯系須恵器椀か。288・291・295・296・300・301・303・304・311・320・322は土師質土器小皿である。黒色土器椀289・294・297・299・302・306・307・308・310・312・313・314は内面にのみ黒色がみられる。298は内外面ともに炭素吸着が認められる黒色土器椀である。293・305は白磁椀である。318は須恵器壺の口縁部、319は土師質土器の円盤状高台をもつ小皿、321・323は土師質土器杯である。

時期 出土遺物はいずれも12世紀後半～13世紀第1四半期を示す。遺物の出土していない柱穴群や隣接する0・3区のSB09や柱穴群も同様の時期ととらえられる。

遺構外出土遺物

325はサスカイト製石鎌、326・327はサスカイト製剥片、328はチャート製火打石である。325～327は弥生時代、328は近世以降のものだろう。

第4章 大下遺跡の発掘調査記録

第1節 調査の方法

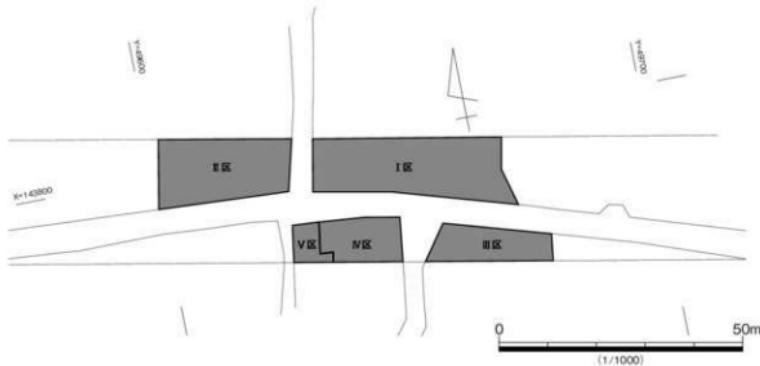
調査対象地は南北約25m、東西約80mの範囲で、調査当時に使用されていた道路や水路、土地区画によって対象地内が分割される。この区画に応じて対象地内をI～V区に分けて調査を実施した。

遺構検出面および、一部については遺構検出面直上の包含層までの掘削には重機を使用し、以後は人力で掘り下げた。

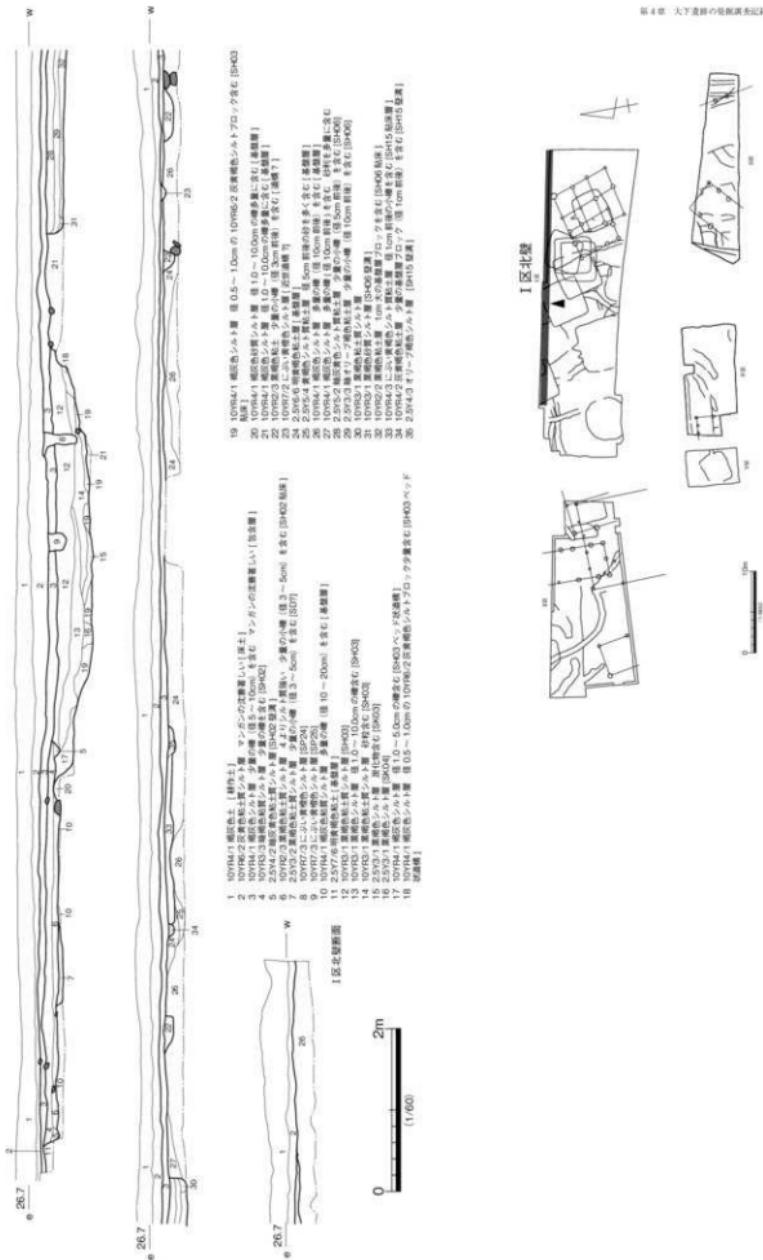
第2節 基本層序

調査前の地表面は耕作土や耕作土状の盛土である。II区では耕作土と耕作に伴う床土の直下に疊層を主体とする基盤層があり（II区4層）、この上面に弥生時代～7世紀の遺構が展開する。この面のレベルは26.5～26.6mである。III・IV区では耕作土と床土の下位に黒褐色粘土層が堆積している。この層は弥生時代～7世紀の遺物を含む包含層で、この層の下面で遺構を検出した。包含層の下位はII区と同じく疊層を主体とする基盤層で、上面のレベルは26.9mである。I区にも褐灰色シルト層の包含層が広がり、古代末～中世の柱穴SP23～25は包含層上面で検出した。弥生時代～7世紀の遺構検出はIII・IV区と同じく包含層下面となった。ただし、一部包含層の途中で掘り込みを確認した遺構もあることから、弥生時代～7世紀の遺構は包含層上面、または途中から形成されているのだろう。包含層の下位は基盤層で、I区東西両端は疊層、中央部分は褐灰色シルト～黄褐色砂質シルト層で構成される。I区の基盤層上面レベルは26.6mである。

層位関係の所見をまとめると、調査対象地は南側のIII・IV区が高く、北東のI区が低い。遺構面が高

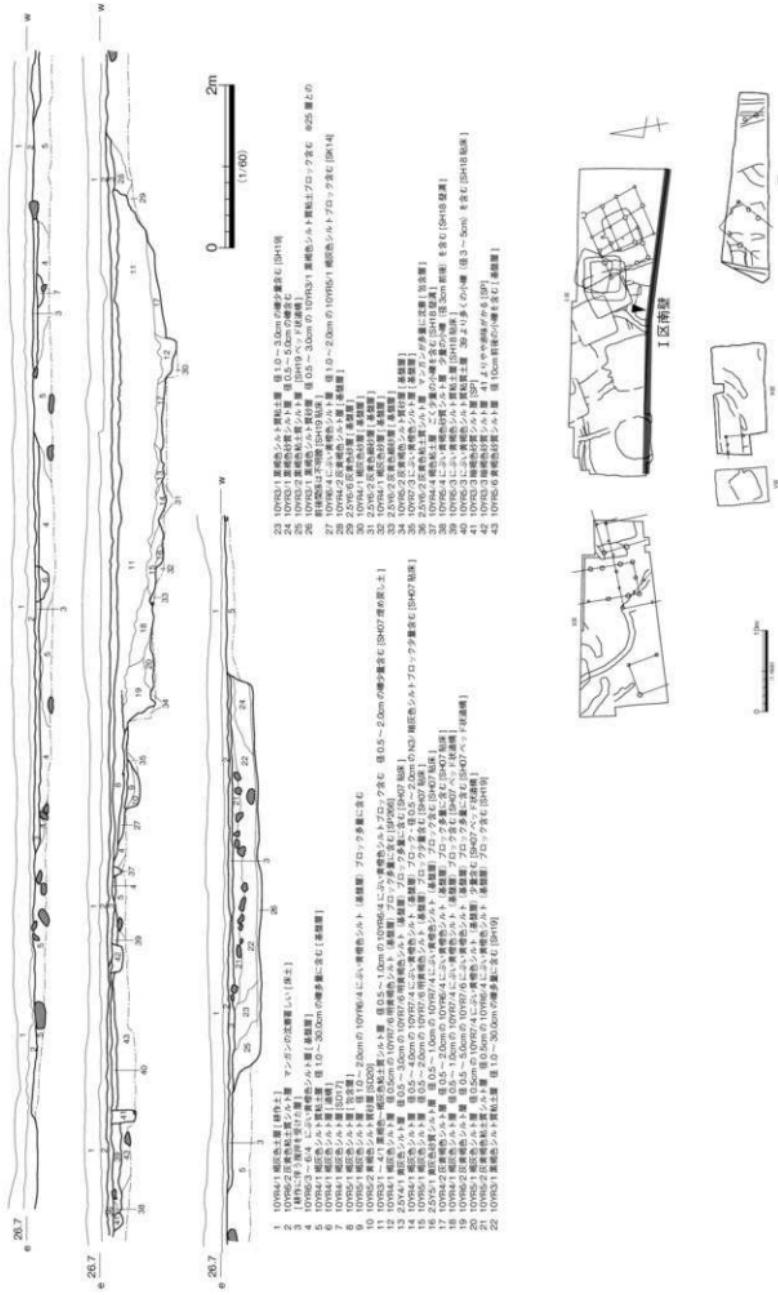


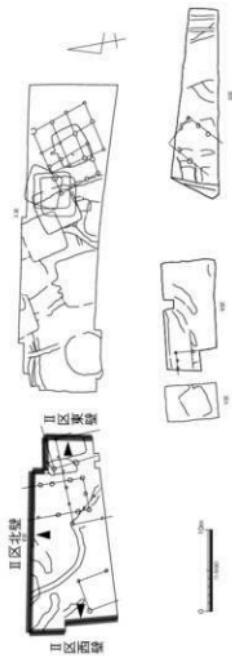
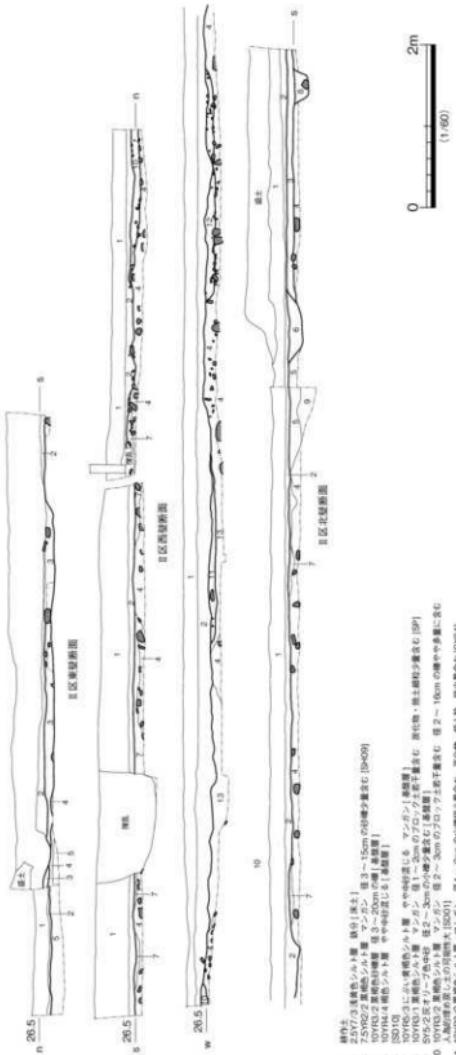
第54図 大下遺跡調査区割図



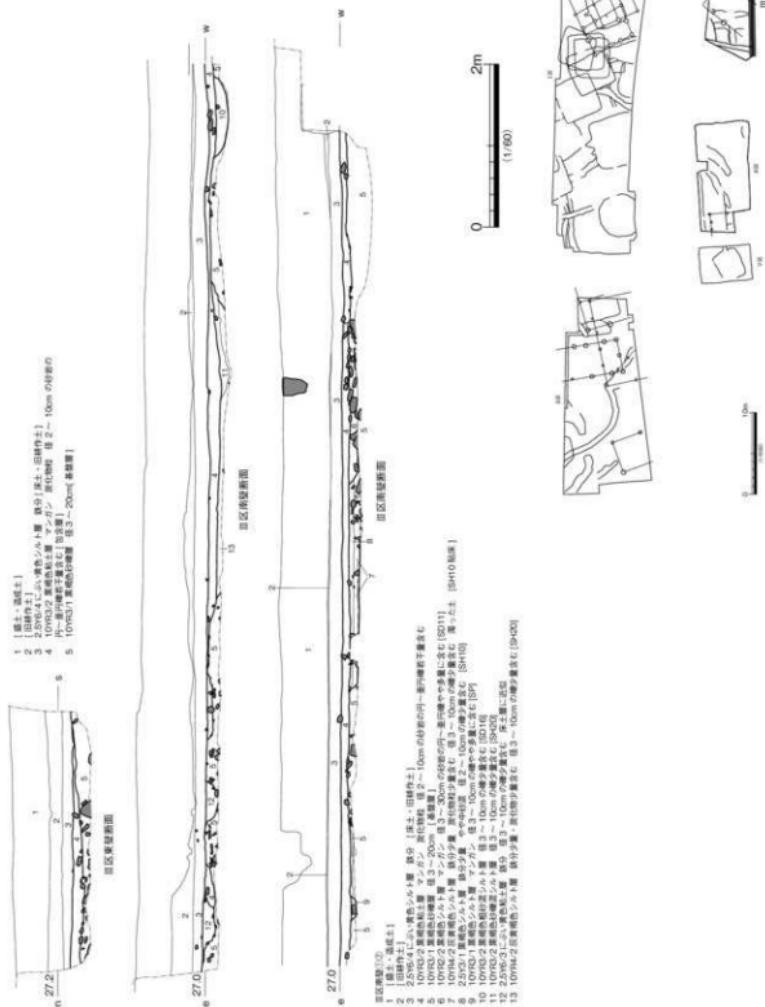
第55図 I区北壁断面図

第56図 I区南壁断面図

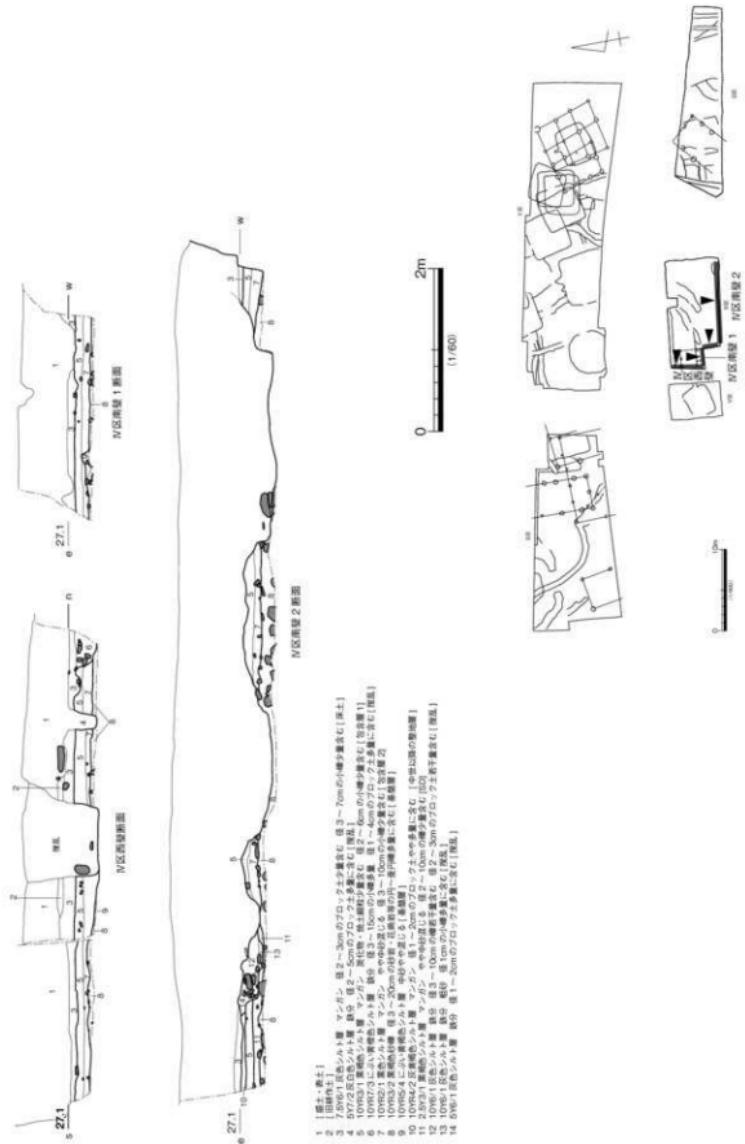


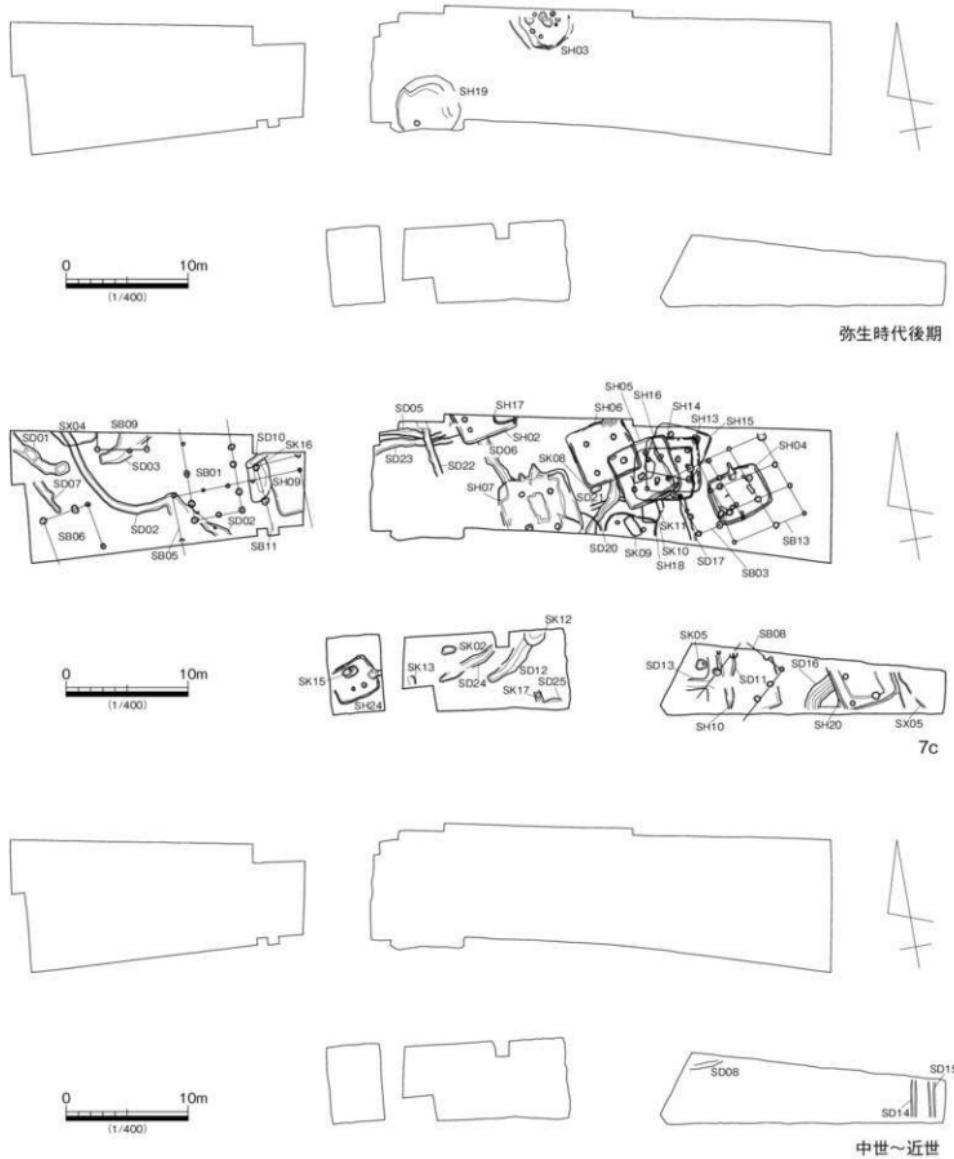


第57図 II区東・北・西壁断面図



第58図 Ⅲ区東・南壁断面図





第 60 図 時期別遺構配置略図

いII～IV区では疊層が盛り上がり、低いI区では部分的にシルト～砂質シルト層がみられる。このシルト～砂質シルト層周辺に7世紀の竪穴建物が集中している。

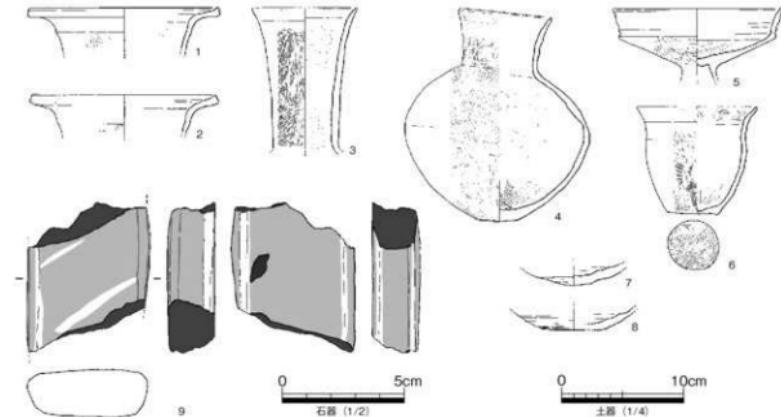
第3節 弥生時代後期の遺構と遺物

竪穴建物

SH03

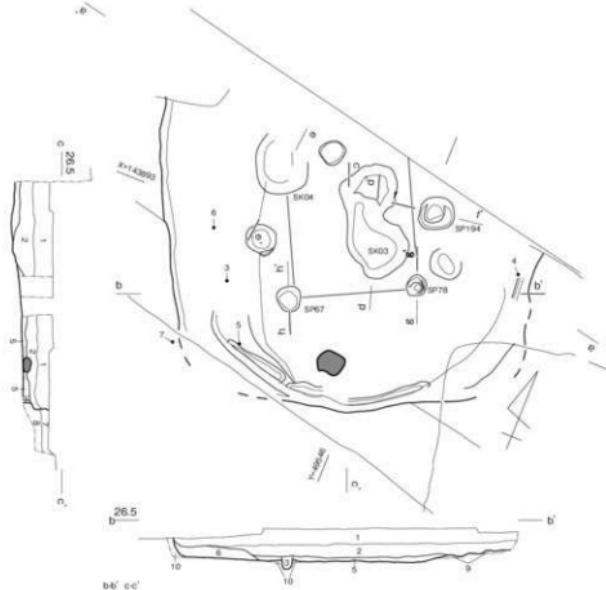
I区西北部で検出した。当初、隅丸方形状の平面形を確認したが、東隅はSH06に切られ、南西辺から南隅にかけての検出が困難で掘り込みラインが不明瞭なため、本来は円形に近い平面形の可能性もある。長軸長は4.1mで、北西部が調査区外に延びるため、全体形は不明である。堆積層のうちa-a'・b-b'・1・2層の差は不明瞭だが、1層には須恵器を含み、2層以下には含まない。完形に近い弥生土器4～6はベッド状遺構上面や床面上から出土している。これらの状況から、本竪穴建物は弥生時代後期に構築され、廃絶後に土が堆積するものの400～500年は窪地の状態であり、7世紀になって完全に埋没した(おそらく埋め戻し)ものとみられる。

南西辺に設けられたベッド状遺構は、北西側が基盤層の掘り残し、南東側が盛り土で構築されている。中央部では貼床層とみられるb-b'6層のやや上位で炭化物の広がる層を確認、その層を掘り下げるSK03の埋土に連続した。炭化物の集中からSK03は中央土坑と判断できるが、その堆積層はSK03の窪みよりもやや広い範囲で床面に広がっていたことになる。b-b'・c-c'の5層上面、または下面で5基の小穴を検出したが、いずれも浅く、明瞭な柱穴とは断定しがたい。位置関係からはSP67・78を主柱穴とみることもできる。また、南西辺寄りの床面上には上面が平らな石が置かれていた。この石には台石のような機能が考えられるだろうか。

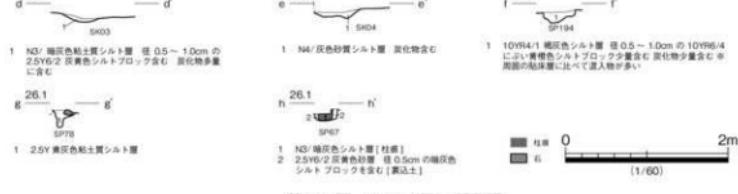


第61図 SH03出土遺物

【基盤】コルク層 [0m00.0cm - 0.1m] 砂質土質 [SH04] E1
 1 SH04/1 黄褐色砂質シルト層 [0.1m - 0.2m]
 2 SH04/2 黄褐色砂質シルト層 [0.2m - 0.3m]
 3 SH04/3 黄褐色砂質シルト層 [0.3m - 0.4m]
 4 SH04/4 黄褐色砂質シルト層 [0.4m - 0.5m]
 5 SH04/5 黄褐色砂質シルト層 [0.5m - 0.6m]
 6 SH04/6 黄褐色砂質シルト層 [0.6m - 0.7m]
 7 SH04/7 黄褐色砂質シルト層 [0.7m - 0.8m]
 8 SH04/8 黄褐色砂質シルト層 [0.8m - 0.9m]
 9 SH04/9 黄褐色砂質シルト層 [0.9m - 1.0m]
 10 SH04/10 黄褐色砂質シルト層 [1.0m - 1.1m]
 11 SH04/11 黄褐色砂質シルト層 [1.1m - 1.2m]
 12 SH04/12 黄褐色砂質シルト層 [1.2m - 1.3m]
 13 SH04/13 黄褐色砂質シルト層 [1.3m - 1.4m]
 14 SH04/14 黄褐色砂質シルト層 [1.4m - 1.5m]
 15 SH04/15 黄褐色砂質シルト層 [1.5m - 1.6m]
 16 SH04/16 黄褐色砂質シルト層 [1.6m - 1.7m]
 17 SH04/17 黄褐色砂質シルト層 [1.7m - 1.8m]
 18 SH04/18 黄褐色砂質シルト層 [1.8m - 1.9m]
 19 SH04/19 黄褐色砂質シルト層 [1.9m - 2.0m]
 20 SH04/20 黄褐色砂質シルト層 [2.0m - 2.1m]
 21 SH04/21 黄褐色砂質シルト層 [2.1m - 2.2m]
 22 SH04/22 黄褐色砂質シルト層 [2.2m - 2.3m]
 23 SH04/23 黄褐色砂質シルト層 [2.3m - 2.4m]
 24 SH04/24 黄褐色砂質シルト層 [2.4m - 2.5m]
 25 SH04/25 黄褐色砂質シルト層 [2.5m - 2.6m]
 26 SH04/26 黄褐色砂質シルト層 [2.6m - 2.7m]
 27 SH04/27 黄褐色砂質シルト層 [2.7m - 2.8m]
 28 SH04/28 黄褐色砂質シルト層 [2.8m - 2.9m]
 29 SH04/29 黄褐色砂質シルト層 [2.9m - 3.0m]



- b' b
 d d
 e e
 f f'
- 1 10YR3/1 黄褐色砂質シルト層 0.5 ~ 1.0cm の 10YR6/3 に似る黄褐色シルトブロック含む
 2 10YR3/1 黄褐色砂質シルト層 0.5 ~ 1.0cm の 10YR6/3 に似る黄褐色シルトブロック少量含む
 3 10YR3/2 黄褐色砂質シルト層 [SP67] 含む
 4 10YR3/2 黄褐色砂質シルト層
 5 10YR4/2 及黄褐色砂質シルト層 0.5cm の 10YR6/3 に似る黄褐色シルトブロック多量に含む [粘土層]
 6 10YR3/2 黄褐色砂質シルト層 0.5cm の 10YR5/3 に似る黄褐色シルトブロック含む 5層によく
 7 10YR4/3 黄褐色砂質シルト層 0.5 ~ 1.0cm の 10YR6/4 に似る黄褐色シルトブロック含む [粘土層]
 8 10YR4/4 1.0 ~ 1.5cm の 10YR6/4 黄褐色砂質シルト層 [基礎層]
 9 10YR4/1 黄褐色砂質シルト層 0.5 ~ 1.0cm の 10YR6/4 黄褐色砂質シルト層 [基礎層]
 10 10YR4/1 黄褐色砂質シルト層 [基礎層]



第62図 SH03平・断面図

遺物 弥生土器 1～6 のうち 1～3・5 は香東川下流域産である。短頸壺 4 の胎土は褐色で黒雲母が目立ち、一見すると香東川下流域産に似るが、角閃石の含有は微量である。粗いハケや肩部から胴部にかけての散漫なヘラミガキといった調整も香東川下流域産とは異なる。6 は多量の角閃石と黒雲母を含み、胎土からは香東川下流域産とみられるが、器形は例を見ない。須恵器杯 7・8 は埋土上位層から出土した。9 は凝灰岩製の砥石である。

時期 1～6 から弥生時代後期後半の構築と判断できる。最終的には 7・8 の示す TK209～217 型式並行期に埋没したのだろう。

SH19

I 区西部で検出した平面形が円形の竪穴住居で直径は約 5.2 m である。周辺は疊層が検出面に露出しており、その疊層を掘り込んで構築されている。堆積層のうち、1 層は灰黄褐色シルト層で須恵器や鉄製品、鉄滓、種子（モモカ）が出土している。疊層に由来する礫を多量に含む黒褐色粘土質シルト層（2 層）は弥生土器を包含する。よって、本建物は弥生時代後期に構築、廃絶された後、最終的には 7 世紀に埋没したと判断できる。また北から東にかけてベッド状遺構が巡る。貼床とみられる 4 層の上位に、しまりの強い褐灰色シルト層を盛ってベッド状遺構とする。壁溝は確認できなかった。南東部では浅い柱穴 SP277 を検出した。2 層中、または貼床層とみられる 4 層上面での柱穴の特定は困難で認識することができなかつたが、SP277 に対応するような掘り込みの浅い主柱穴が存在した可能性もある。

遺物 10～18 は弥生土器である。10・12 は香東川下流域産の壺と甕である。甕 11 は、にぶい黃橙色を呈し、胎土に角閃石や大きめの黒雲母は確認できない。胴部外面はハケ、内面は頸部にまでケズリが施されている。また、口縁部に沈線状の窪みが巡る。13～18 は鉢である。19～35 は須恵器である。杯 24～32 のうち、カエリのない 25～32 については杯蓋の可能性もある。35 は須恵器の不明土製品で、外面には渦巻状のハケがみられ、内面はナデで指紋も残る。これらの調整からみて他器種の転用とは考えにくく、当初から意図して土製品を製作したのだろう。なお、周間に割れ面があり、完形品ではないようだ。36～39 は土師器甕、40・41 は土師器瓶である。42・43 は棒状鉄製品で a 層から出土した。砂岩製砥石 44 は大半を欠損しており、1 面のみ研磨面が残る。1 層からの出土である。同じく 1 層からの出土遺物に鉄滓（210～215）とモモとみられる種子（205～209）がある。

時期 b 層出土の弥生土器 10～12 から弥生時代後期後半の構築と判断できる。最終埋没は、須恵器、特に 19・20・23 から TK217 型式併行期とみられる。

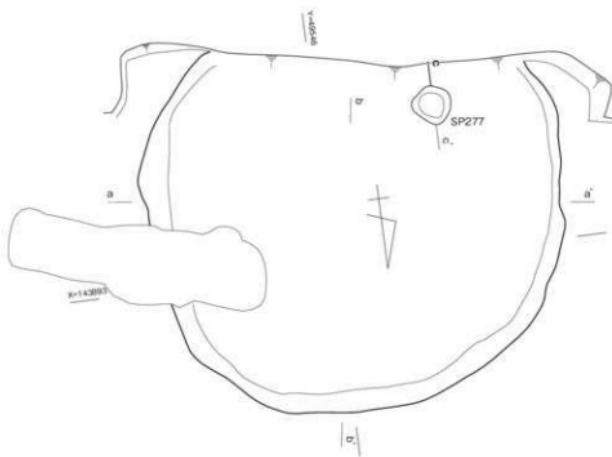
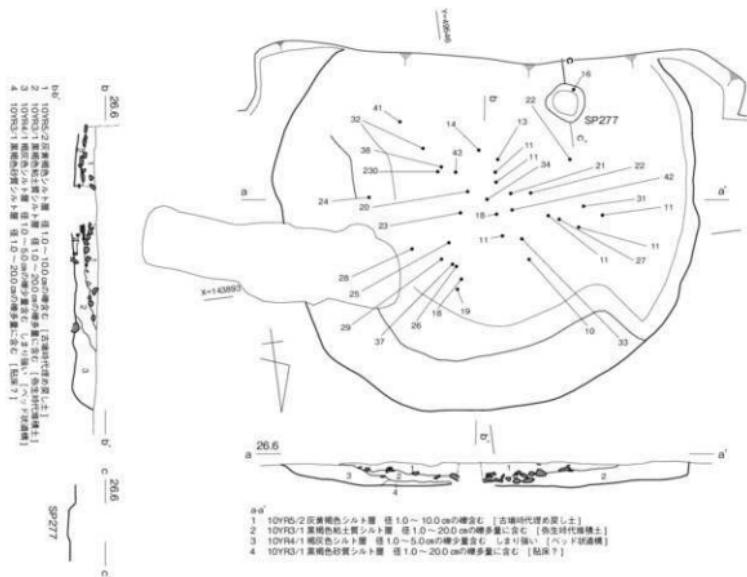
溝状遺構

SD16

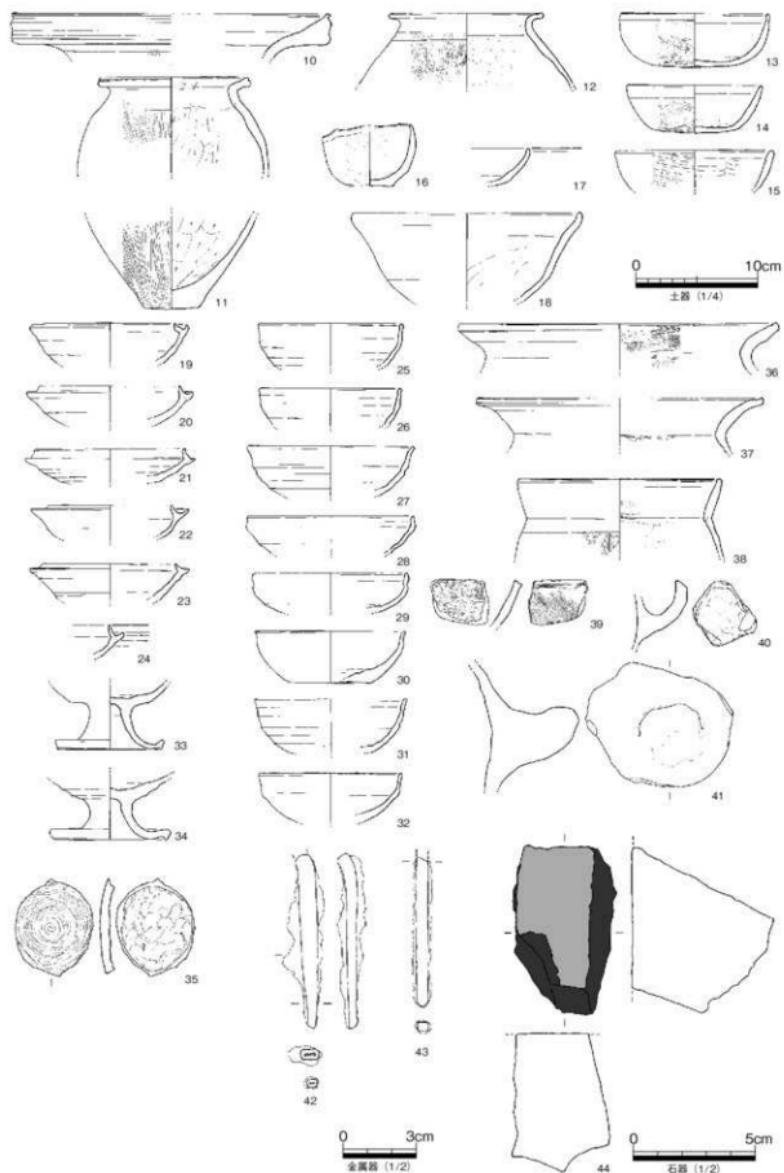
III 区中央部で検出した溝状遺構で、竪穴建物 SH20(TK217 型式古段階) に壊されている。埋土は上下 2 層に分かれ、上位の 1 層では溝中央部に礫を多量に含んでいる。

遺物 香東川下流域産の弥生土器片などが少量出土している。

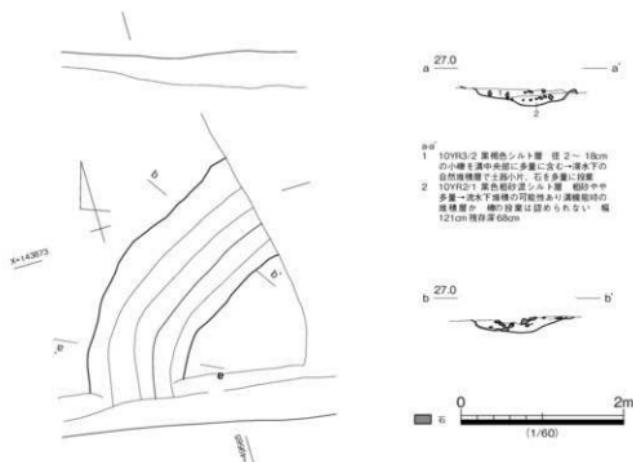
時期 SH20 より古い点と少量ながらも出土している弥生土器から、弥生時代後期後半と考えたい。



第63図 SH19 平・断面図



第 64 図 SH19 出土遺物



第65図 SD16 平・断面図

第4節 7世紀の遺構と遺物

竪穴建物

SH02

I区北西部で3辺を検出した平面形方形の竪穴建物で、東西長約4.8m、南北長は3.0m以上である。当初、弥生時代後期の竪穴建物SH03との新旧関係を逆にとらえて、両建物の重複する箇所をSH03として掘削したため、南東隅部分の形状は不明である。その後、出土遺物や層位関係を検討し、当竪穴建物はSH03埋没後に構築されたことが明らかになった。また、溝状遺構SD06(7世紀か)も本建物に先行する。貼床を掘り込んで3辺に壁溝を巡らせている。SP193は検出面から40cmの深さをもつ主柱穴として調査したが、基盤層との土質の差は微妙なため、明瞭な柱穴とは言いがたい。

遺物 45は須恵器杯の底部である。46は板状の鉄製品で、片方は厚く、もう一方は刃部状に薄くなっている。

時期 45と周辺の遺構の状況からTK217型式並行期と考えられる。

SH17

I区北西部で壁溝の一部のみを検出した平面形方形の竪穴建物で、SH02に先行する。

遺物 遺物は出土していない。

時期 平面形と周辺遺構との関係からTK217型式並行期と考えられる。

図 4 世 大下遺跡の発掘調査記録

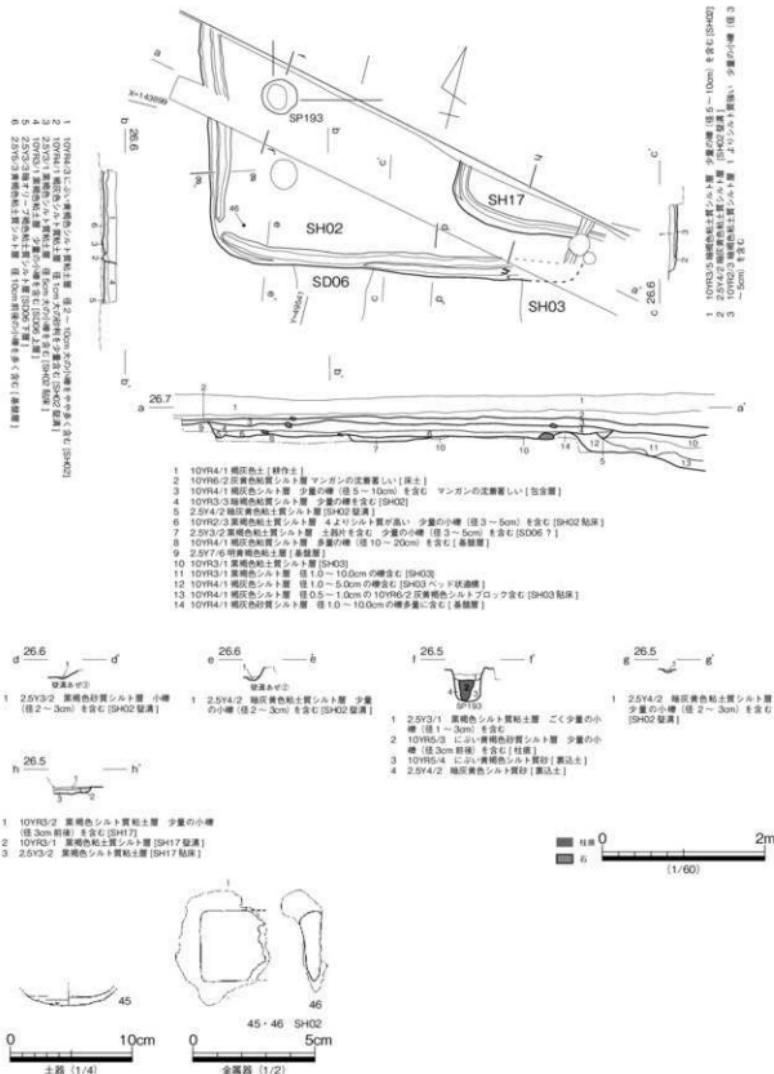


図 66 図 SHO2・17 平・断面図・出土遺物

SH04

I 区東部で検出した南北長 4.0 m、東西長 4.8 m の平面形方形の竪穴住居である。北辺中央部に竪をもつ。竪と北東角を除いて壁溝が巡り、西辺沿いには盛土によるベッド状遺構がある。断面の観察からベッド状遺構は貼床構築以前に設けられたことが明らかである。主柱穴として SP81 ~ 84 を検出したが、いずれも基盤層との埋土の差が明瞭ではなく、調査時に掘り下げた規模・深さになるかは疑わしい。よって 4 基の柱穴の記録は可能性にとどまる点を付しておく。

竪の袖は建物の床面に盛土で構築され、その後、床が張られている。焚口はやや窪み、内部には炭化物と焼土を含む土が堆積する。その上位には天井構成土を含む土がある。焚口の北寄りには置き土があり、焚口から煙道にいたる途中にわずかな平坦面を設けているようにもみえる。その平坦面から煙道まではやや傾斜をもって立ち上がり、煙道の傾斜はかなり緩やかである。削平されているため、煙道がどこまで伸びていたかは明らかでない。

遺物 47 ~ 60 は須恵器の杯・壺・高杯・平瓶、61 は土師器壺、62 は弥生土器鉢である。63 はサヌカイト製石鎌で、片面は簡素な調整しか認められない。64 はサヌカイト製で、刃部らしきものをもつたスクリーバーと考えられる。65 はやや扁平な棒状の鉄器で片方のみ端部が残る。66 は碧玉製の玉で暗オリーブ灰色を呈する。

時期 須恵器のうち特に 49・50・53 から TK217 型式新段階～TK46 型式並行期と判断できる。62 は古い時期の遺構に伴うものであろう。

SH05・06・13～16

I 区中央部にある重複した 6 基の竪穴建物で、新旧関係は古いものから順に SH15 → 14 → 13 → 16 → 05 → 06 である。SH05・06 の新旧関係は、検出面では断定にいたらず、主柱穴 SP145(SH06) と SP160(SH05) の新旧関係、および SH05 の竪を確認できなかった点 (SH06 に破壊された可能性) を根拠に SH06 を新しい遺構と判断した。SH06 は弥生時代の竪穴建物 SH03 を壊しているが、SH03 の最終埋没は TK209 ~ 217 型式並行期のため、SH03 埋没(おそらく埋め戻し)から SH06 構築までの時間差はさほどないようだ。以下、時期の新しい建物から報告する。

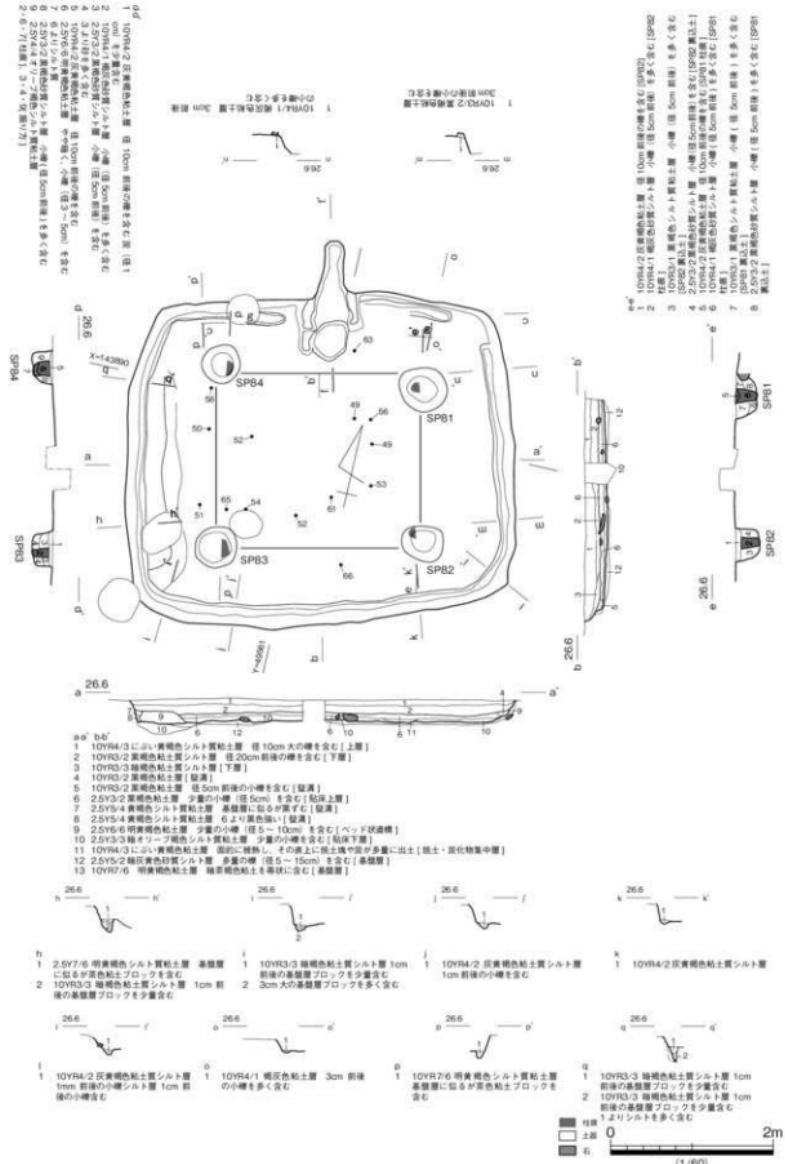
SH06

東西 5.0 m、南北 4.9 m の平面形方形の竪穴建物である。北辺の北東隅に竪をもち、その竪を避けて壁溝が巡る。4 基の主柱穴 SP134・136・145・175 は、いずれも基盤層との土の差が不明瞭で、調査時の掘り下げとともに記録が実態と異なる可能性もある点を断つておく。

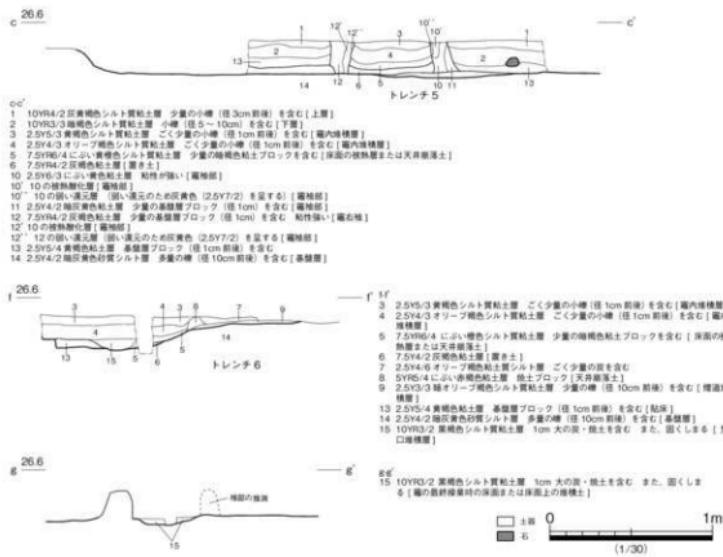
竪の袖は盛り土で構築されている。東側の袖は貼床上に、西側の袖は基盤層の上に設けられているが、これは竪穴建物の掘りかたの凹凸とそれを解消するための貼床の関係に依拠しているのだろう。両袖の下面のレベルが近いことがそれを裏付ける。両袖に挟まれた若干の窪みが焚口の位置にあたるが、内部の堆積層中に顯著な炭化物は確認できなかった。煙道は調査対象地外にあり、形状などは不明である。

遺物 67・68 は須恵器蓋、69～73 は須恵器杯である。74 は須恵器壺の口縁部と思われる。75 は土師器壺の口縁部で、内面には細かなハケが施されている。76 の土玉は半分のみの残存で、孔径は 3.5mm である。

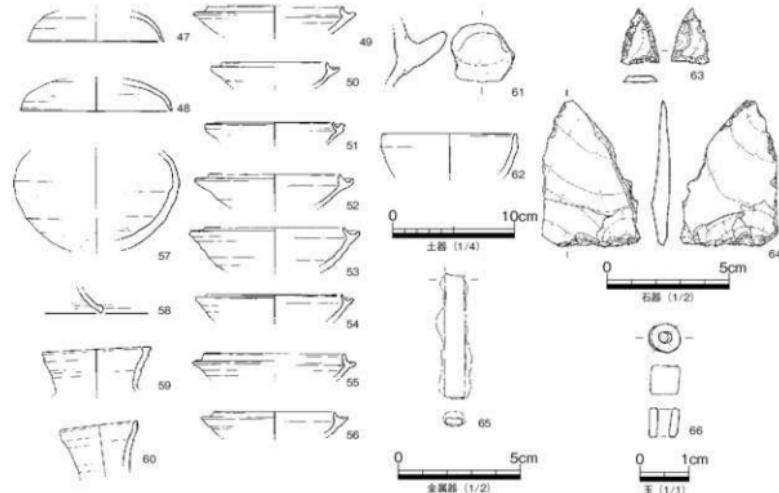
時期 69・71 から TK217 型式並行期と判断できる。



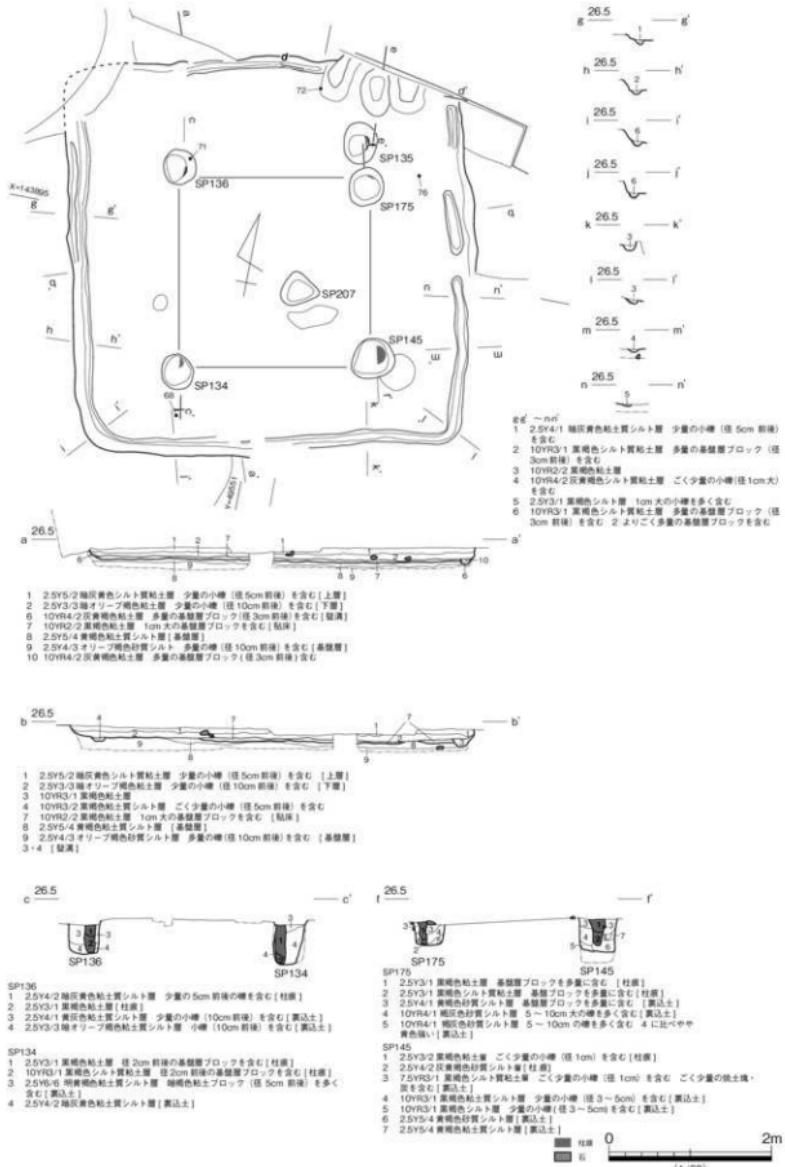
第67図 SH04平・断面図



第68図 SH04 窓断面図



第69図 SH04出土物



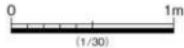
第 70 図 SH06 平・断面図



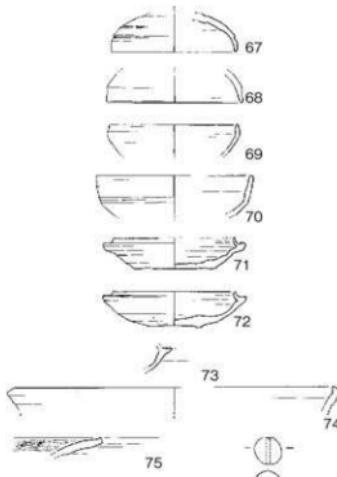
1. 10YR5/4に少し濃褐色粘土層 10cmの基礎層ブロックを少數含む [貼床]
2. 2.5Y5/4 黄褐色粘土層 ごく少額の基礎層ブロック含む [壁面等]
3. 2.5Y5/4 黄褐色粘土層 2枚目より厚い [壁面等]
4. 2.5Y5/4 黄褐色粘土層 ごく少額の基礎層 [壁面等]
5. 10YR4/2 黄褐色粘土層シート層 少額の小磚 (径 3cm 前後) を含む
6. 10YR4/3に少し濃褐色粘土層シート層 少額の小磚 (径 1cm 前後) を含む
7. 10YR5/3に少し濃褐色粘土層シート層 少額の小磚 (径 1cm 前後) を含む [貼床]
8. 10YR5/3に少し濃褐色粘土層シート層 [下層]
9. 2.5Y3/3層リーフ状褐色粘土層シート層 破片があり多くなる [贴床] → 層の端はこの貼床土に構築
10. 2.5Y4/2 深褐色粘土層シート層 径3~10cmの礫多く含む [基础層] → 層の端はこの基础層に構築
- 4~7 壁内側壁、二重壁、三重壁など、必ずあるに見られる。17壁にごくわずかに見られる。
- 9~10 層の端は基礎層上に、各壁は貼床土に構築。なお、貼床下には貼床が走らず複数レベルもやや高い。



5. 10YR4/2 黄褐色粘土層シート層 少額の小磚 (径 3cm 前後) を含む
6. 10YR4/3層リーフ状褐色粘土層シート層 少額の小磚 (径 1cm 前後) を含む
7. 2.5Y5/3 黄褐色粘土層 ごく少額のごく弱い・焼成土土色含む [贴床]
9. 2.5Y3/3層リーフ状褐色粘土層シート層 破片があり多くなる [贴床] → 層の端はこの贴床土に構築
10. 2.5Y4/2 深褐色粘土層シート層 径3~10cmの礫多く含む [基础層] → 層の端はこの基础層に構築
- 5~6 [内側壁など]
- 9~10 肥厚の端は基礎層上に、右側は貼床土に構築。なお貼床下には貼床が走らず複数レベルもやや高い。



第71図 SH06 窓断面図



第72図 SH06 出土遺物

SH05

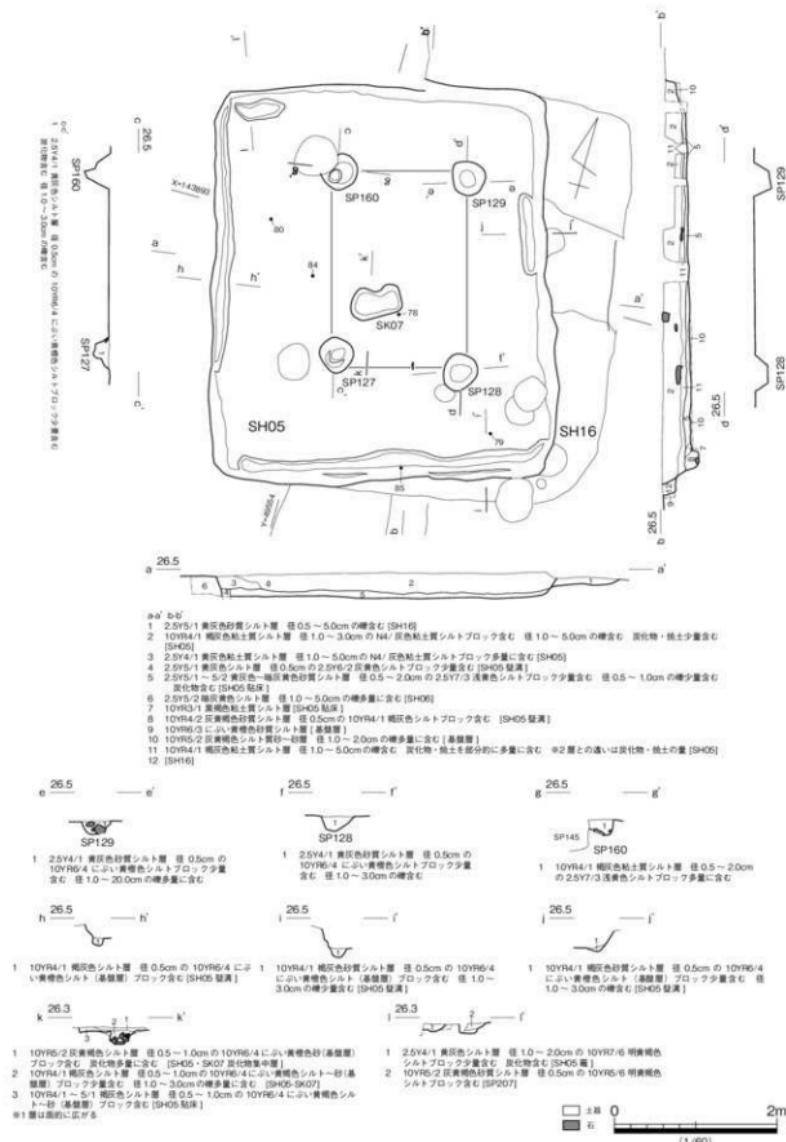
南北長 4.9 m、東西長 4.2 m の平面形方形の竪穴建物である。東西辺の一部と南辺に壁溝をもつ。主柱穴 SP127 ~ 129・160 は貼床下面から深さが 15 ~ 20 cm と浅い。土坑 SK07 は貼床下面で検出したため SH05 にともなう遺構の可能性があるが、埋土に炭化物が目立つわけではなく中央土坑とは判断しがたい。当該時期の残存状況の良好な竪穴建物は竪をもつため、本建物に後出する SH06 構築時に竪が破壊された可能性を考えている。その場合、北西隅で検出した浅い窪みは、堆積土中に炭化物を含んでおり焚口の痕跡とも考えられる。SK07 以外には、竪穴建物の埋土中で構築材や焼土、炭化物が集中する箇所といった竪の痕跡は確認できなかった。

遺物 77・79 は須恵器杯、78 は須恵器壺である。80 は須恵器の壺としたが、異なる小型の器種の可能性もある。81 は須恵器高杯、82・83 は土師器甕、84 は土師器瓶である。85 は銹化が著しく X 線撮影により外郭線と折り曲げ部分を確認して鉄製鉢・鋤先と判断した。直線的な箇所を上端としたが、この箇所については欠損している可能性もある。

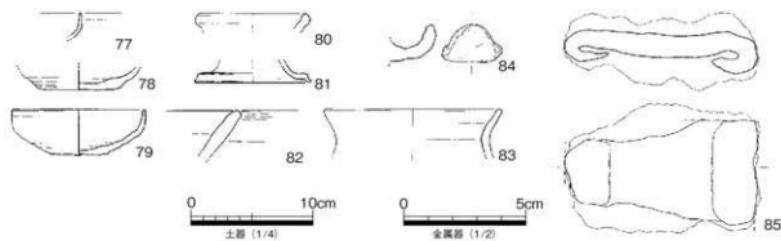
時期 79 から TK217 型式並行期と判断できる。本建物の埋没後に構築される SH05 の時期 (TK217 型式並行期) とも矛盾しない。

SH16

南北長 5.0 m、東西長 4.0 m 以上の平面形方形の竪穴建物である。当初は SH05 を含めて 1 基の竪穴



第 73 図 SH05 平・断面図



第74図 SH05出土遺物

建物として認識していたが、床面のレベルが異なることから竪穴建物の重複に気づき、途中から2基の竪穴建物として調査を進めた。検出面からの深さが浅く、より深いSH05構築時の破壊により西側を中心とした大半は残存していない。よって全体の規模は不明である。東辺沿いには壁溝がある。竪穴建物外郭線との位置関係から浅い窪みのようなSP103を主柱穴と考えたい。対応する主柱穴は確認できおらず、SH05に破壊された可能性もある。未確認の竪についてもSH05構築時に失われたとも考えられる。

遺物 遺物は出土していない。

時期 新旧関係からTK217型式並行期と考えられる。

SH13

南北長4.3m、東西長2.7m以上の平面形方形の竪穴建物である。より深いSH05・16に破壊されているため西半分は残っていない。残存部分の北・東・南辺沿いには壁溝が巡る。壁溝は床を張った後に掘削されている。SP186・188・189・191を主柱穴と考えているが、いずれも基盤層との土の差を明確にしがたかったため、記録に残した規模や堆積状況は可能性の範囲にとどまる。竪は確認できなかったが、SH05・16構築にともない破壊された可能性もある。

遺物 86は須恵器杯である。

時期 86からTK217型式並行期と判断できる。

SH14

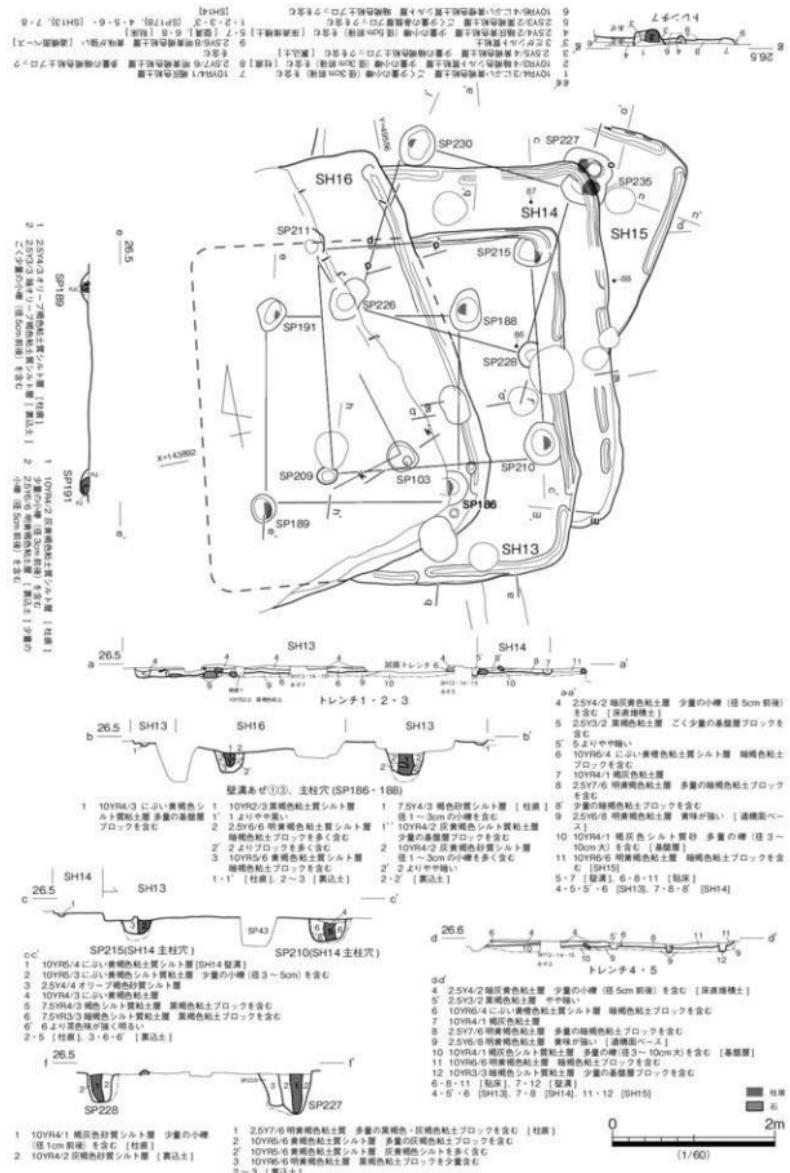
南北長4.5m、東西長2.6m以上の平面形方形の竪穴建物である。西半部を中心としてSH05・13・16に大半を壊されており、全体の規模は不明。残存する北・東辺沿いに壁溝が巡る。SH05・13・16による削平をまぬがれたSP209・210・211・215を主柱穴と考えているが、SP210・211・215は基盤層との土質の差が不明瞭で、規模や堆積状況の記録が実態に表しているとはいがたい。

遺物 87は須恵器杯である。

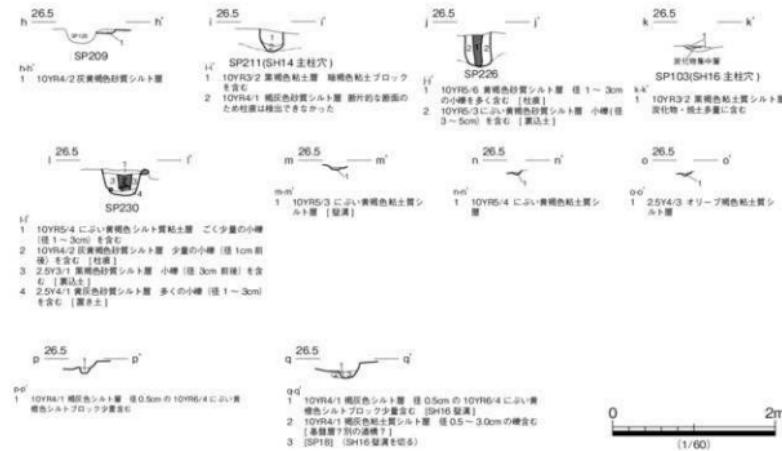
時期 87からTK217型式並行期と判断できる。

SH15

30m×1.4m以上の平面形方形の竪穴建物である。東辺の一部と北辺に壁溝をもつ。主柱穴は



第 75 図 SH13・14・15・16 平・断面図



第76図 SH13・14・15・16断面図



第77図 SH13・14・15出土遺物

SP226-228・230 および重複する SP227-235と考えているが、基盤層との差の識別が困難であったため、規模や堆積状況の記録は可能性としてのものである。

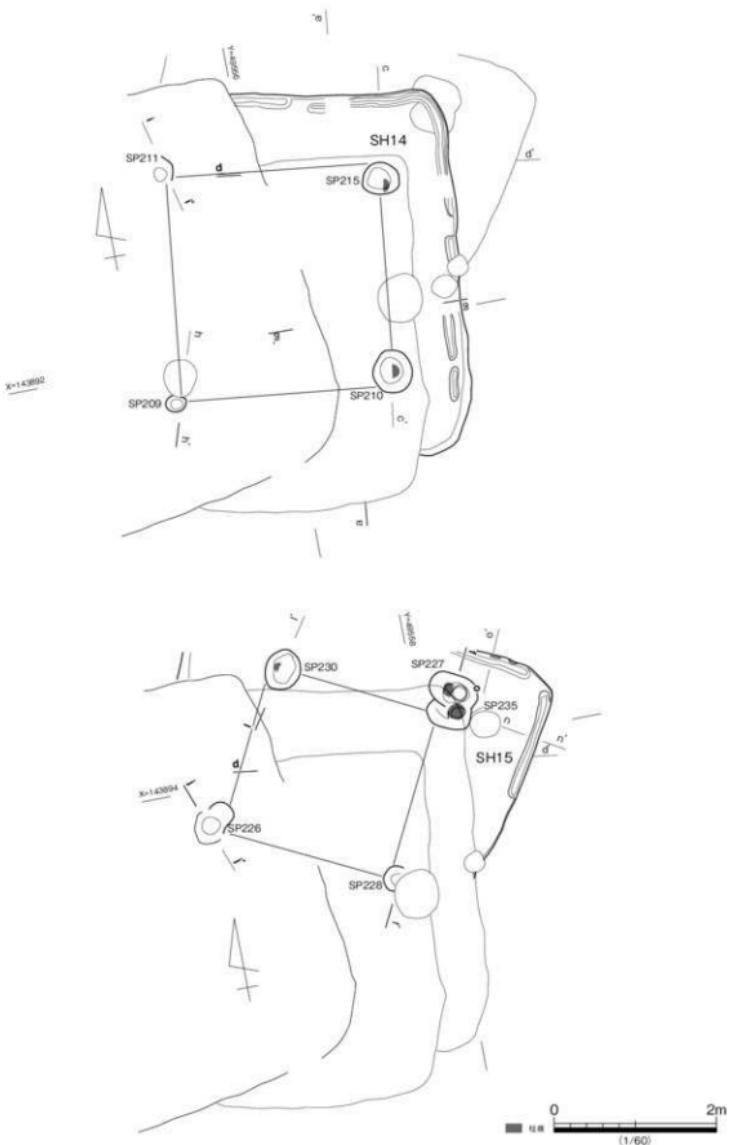
遺物 88は須恵器高杯の脚端部である。

時期 88と新旧関係からTK217型式並行期と判断できる。

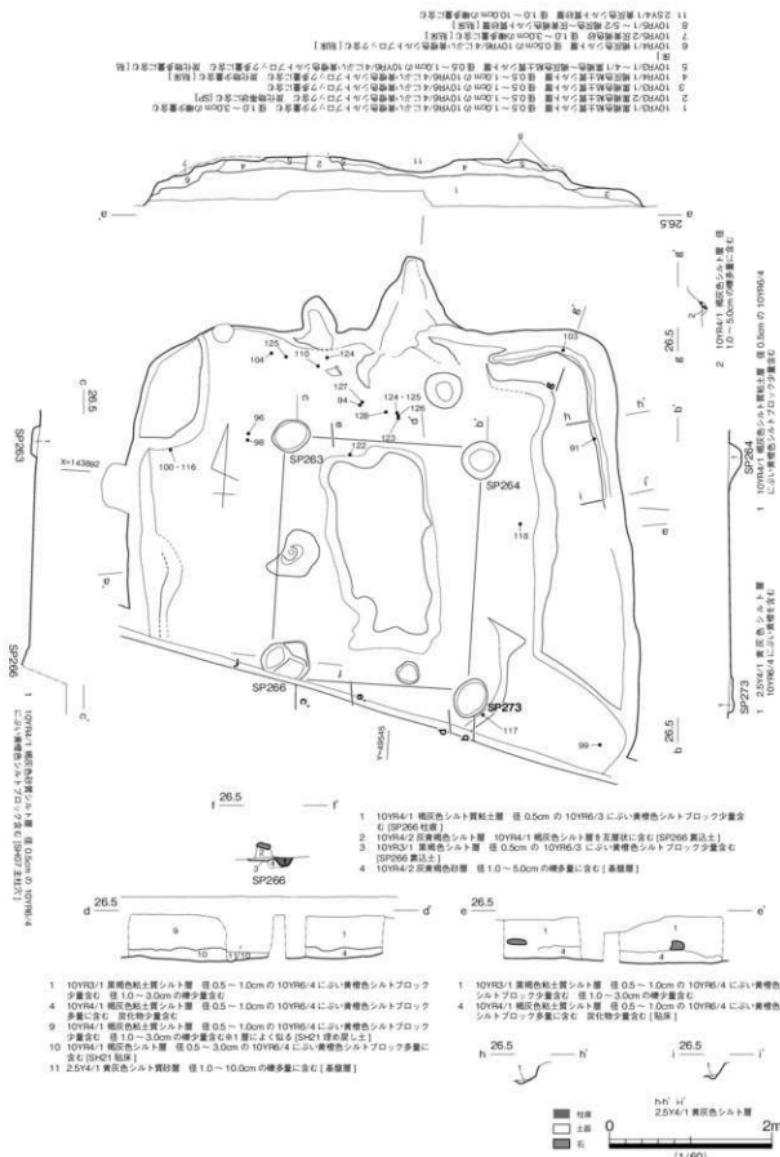
SH07 (調査時遺構名: SH07・21)

SH07は東西長6.2m、南北長5.5m以上の方形の堅穴建物である。東辺と北西隅に削り出しによるベッド状構造をもつ。壁構は東辺沿いのベッド状構造上的一部に認められる。SP263・264・266・273の4基を主柱穴と判断したが、竈の本来の構造によっては、SP263を主柱穴とみなすことができないかもしれない。底面の掘りかたは凹凸があり、特に中央付近は台状に掘り残されている。そのため床の土は比較的厚く張られており、貼床上面ではほぼ水平の床面となっている。

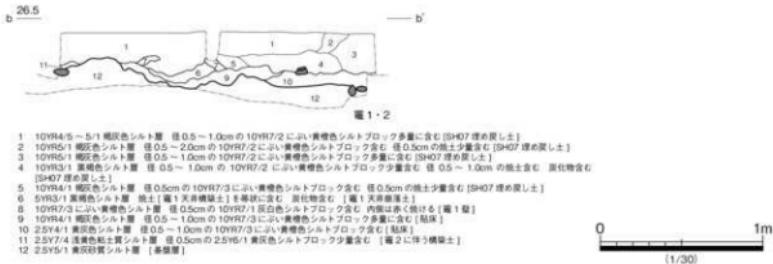
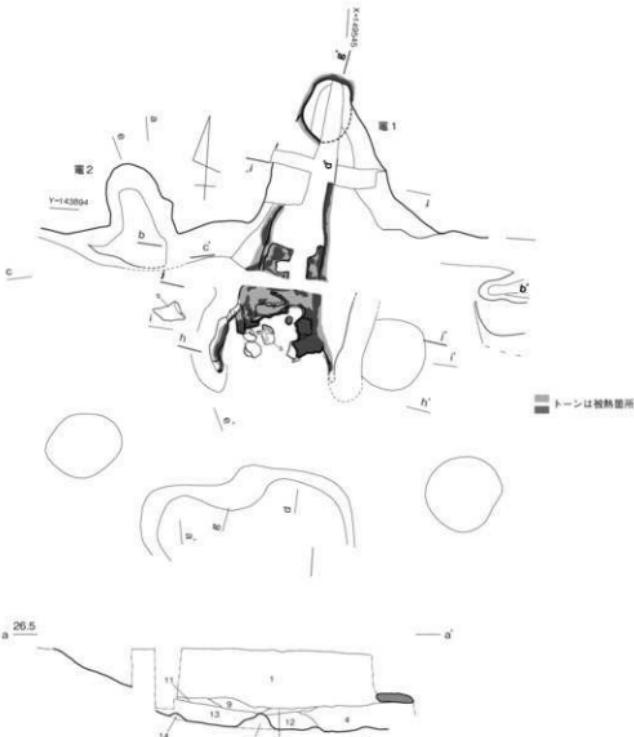
竈は北辺に2基設けられている。特に東側の竈(竈1とする)は良好な状態で検出できた。同時期の他の堅穴住居の深さがせいぜい0.3m前後であるのに対して、SH07は検出面から床面まで0.6mと深いため竈の残存状況に恵まれたのだろう。竈1は袖部、焚口天井部とともに粘土を構築材として掛け口を作り出している。袖部の基部にも削り出しの痕跡はない。堅穴住居の埋土を掘り下げながら慎重に検出を試みたが、被熱により赤色化した部分でようやく竈構築材の確認に至った。被熱箇所は本来は竈の内側にあたり、結果的に構築材を少し削りこんだ状態で検出したことになる。よって、本来の竈は検出状態



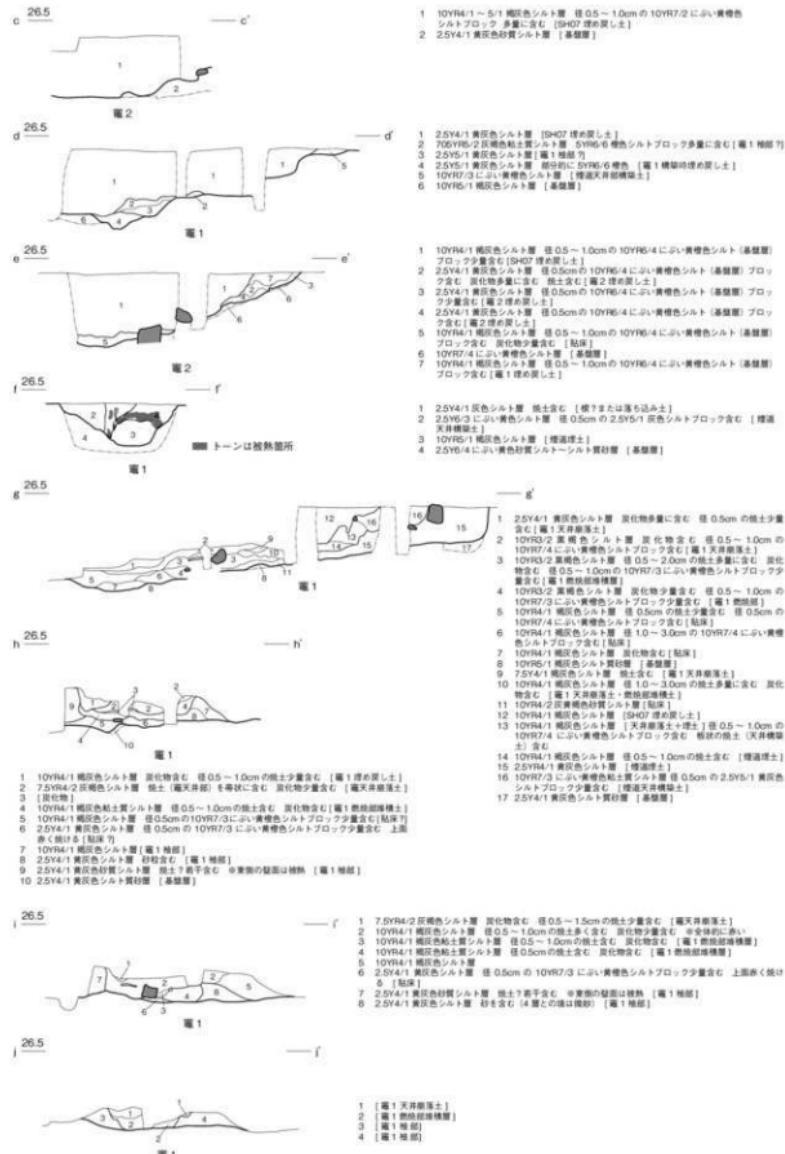
第78図 SH14・15 平面図



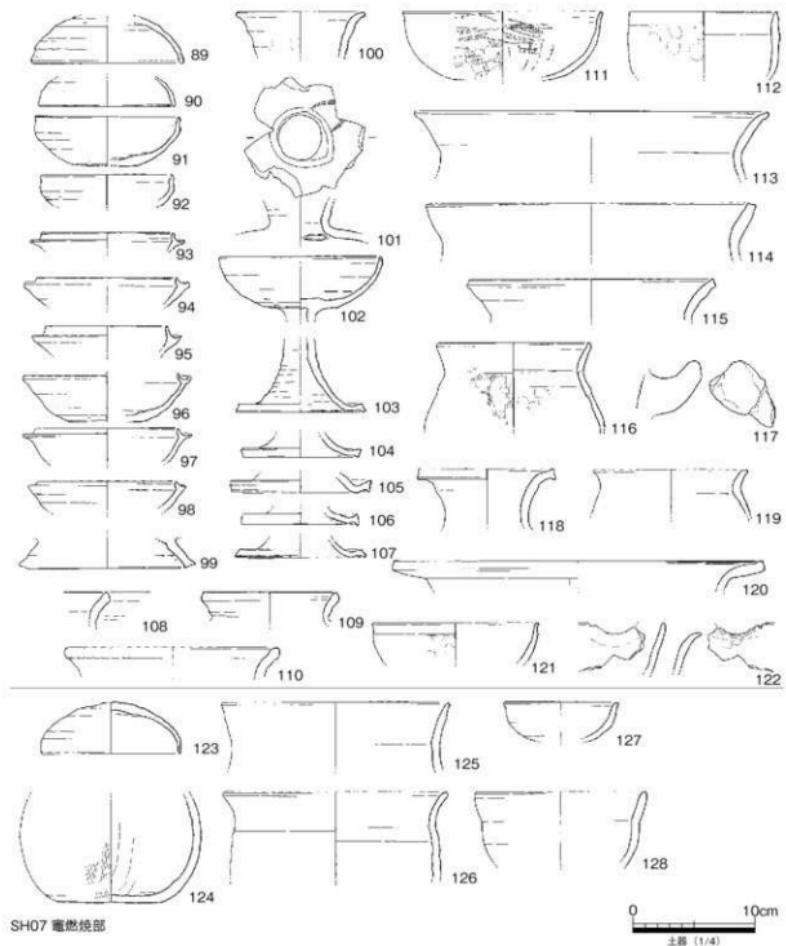
第79図 SH07 平・断面図



第 80 図 SH07 竪平・断面図



第81図 SH07 縦断面図



第 82 図 SH07 出土遺物

よりもひとまわり大きく復元できる。焚口は若干窪むものの明瞭な掘り込みではない。円形の掛け口の真下には被熱痕のある砂岩が置かれていた。支脚として使われていたのだろう。煙出は円形で、煙道は地下を通って焚口に接続する。地表から、いったんオープンカットで掘り込んで煙道部分をつくり出した後、天井部分を埋め戻して地下を通る煙道としている。確認はできていないが、煙道から煙出しにあたる部分に筒状の有機物のようなものを入れて上部を埋め戻したのだろうか。

また、竈1の西方にも煙道の痕跡がある(竈2とする)。焚口付近に構築材などは確認できなかったため、堅穴住居廃絶時には東側の竈のみが機能していたのだろう。よって、SH07に伴う竈の変遷は、①竈2機能→竈2廃絶→竈1構築・機能、または、②竈1・2機能→竈2のみ廃絶、のふたつの可能性が考えられることになる。変遷①の場合には堅穴建物自体の拡張または建て替えも考えられるが、主柱穴と他の小穴の位置関係からみて、その蓋然性は低いだろう。

遺物 89・90は須恵器杯蓋、91～98は須恵器杯である。99は須恵器台付椀の脚部とみられる。101は須恵器壺で、肩部外面に沈線による記号が施されている。また、内面には円盤状に粘土を充填したような痕跡が確認できる。102～107は須恵器の高杯、108～110は須恵器甕である。111はいわゆる畿内系土師器の椀で外面はヘラケズリ後にヘラミガキが施され、内面のヘラミガキは下半部が放射状、上半部がおおむね水平方向となっている。112は土師器の鉢と考えたが、弥生土器の可能性もある。113～116は土師器甕、117は甕である。100・118～122は弥生土器で、ほ本建物構築以前の遺構に由来する。118は香東川下流域產土器の長頸壺である。甕119は、にぶい褐色を呈し胎土中に角閃石を含まない。鉢の口縁部とみられる120は浅黄橙色で胎土中に大きめの砂粒を含む。鉢121・122も香東川下流域產土器ではない。123～128は竈1の燃焼部付近から出土した。123は須恵器蓋である。124～126は土師器甕で、いずれかが竈に設置されていたのだろう。もっとも残存状況の良好な124をその筆頭候補と考えたい。弥生土器鉢128は、胎土や摩滅度からすると121と同一個体の可能性がある。127は古い遺構に伴うものだろう。

時期 91・92・94・96・98・99 から TK217型式新段階～TK46型式並行期と判断できる。

SH09

II区東端で検出した、南北長5.2m以上、東西長3.0平面形方形の堅穴建物である。西辺の一部はSD10とSK16によって削平されている。壁面の立ち上がりがかなり緩やかで、検出面から底面までの深さは0.2m程度と浅い。主柱穴SP01・196は、ともにボウル状の断面形状で深くない。

遺物 129は須恵器台付椀、130は香東川下流域產土器の弥生土器甕である。

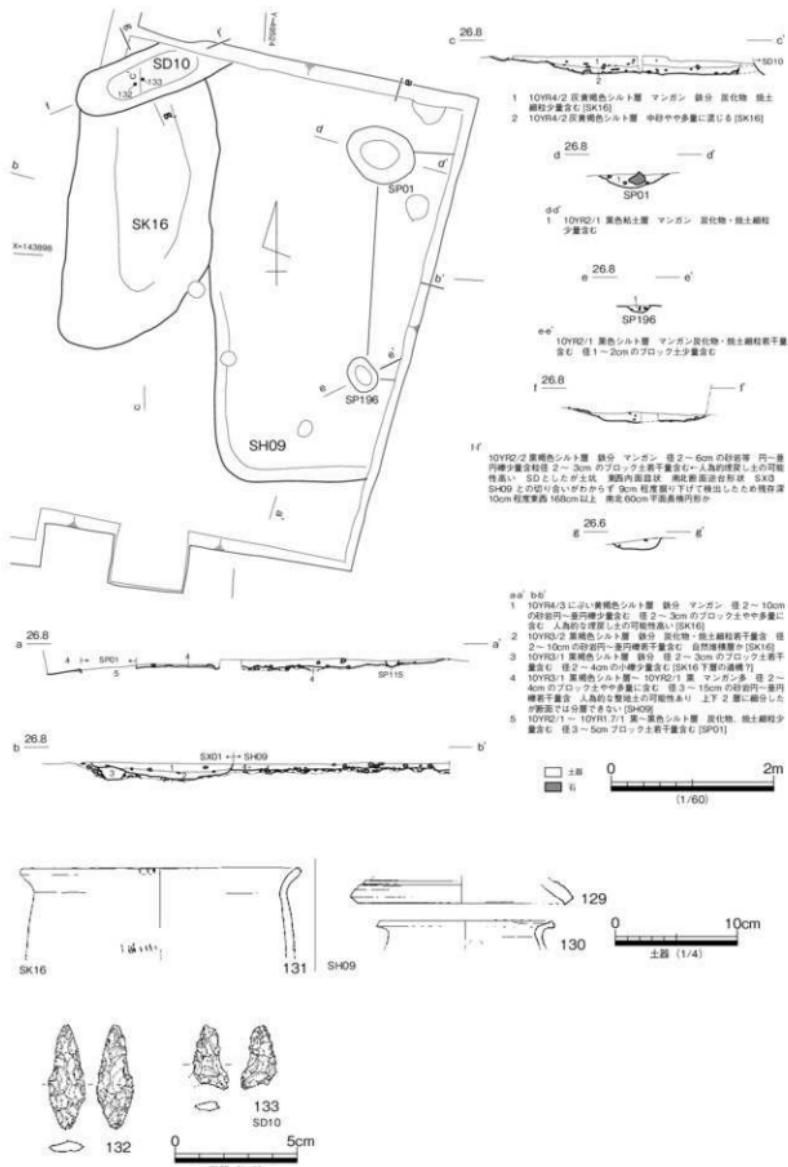
時期 129から TK217型式新段階～TK48型式並行期と判断できる。

SK16（調査時遺構名 SX01）

II区東端で検出した平面形が長楕円形の土坑である。堅穴建物 SH09、溝状遺構 SD10と重複関係にあり、時期の古いものから順に SH09→SK16→SD10となる。上下2層に分かれ、下層は自然堆積層、径2～3cmのブロック土を含む上層は埋め戻し土とみられる。

遺物 131は弥生土器甕である。

時期 SH09より新しいのは確実であることから、TK217型式新段階～TK48型式並行期以降と判断できる。弥生時代前期の131は古い遺構に伴うのだろう。



第 83 図 SH09・SK16・SD10 平・断面図・出土遺物

SD10

II区東端でSK16、SH09の上面で検出した溝状遺構である。

遺物 132・133はサヌカイト製石錐である。

時期 SH09、SK16埋没後に構築されているため、TK217型式新段階～TK48型式並行期以降となるのは確実である。石錐132・133は、本遺構以前の弥生時代の遺構に伴うものだろう。

SH10（調査時遺構名：SH10・12）

III区で検出した東西長4.5m、南北長5.0m以上の平面形方形の堅穴建物である。SD11の下面で西辺ラインを検出した。東西に長い搅乱（試掘トレンチ）を境に北部と南部を別の堅穴建物として調査を進めたが、上端ラインがそろうことから同一遺構と判断した。b-b'の東端部で床面がわずかに窪む箇所があるものの、明確な壁溝は確認できなかった。床面で柱穴を複数検出したが、いずれも掘り込みが浅く主柱穴とは断定し難い。

遺物 134は須恵器蓋である。

時期 134からTK217～46型式並行期と判断できる。

SH18

I区南端で検出した東西長4.2m、南北長1.9m以上の平面形方形の堅穴建物である。北東部では埋没後の土坑SK10を破壊している。周囲に巡る壁溝は貼床上面から掘り込まれる。主柱穴とみられるのはSP220・221である。竪の痕跡は確認していない。

遺物 遺物は出土していない。

時期 周辺の堅穴建物とはほぼ同様のTK217～46型式併行期と考えられる。

SH20

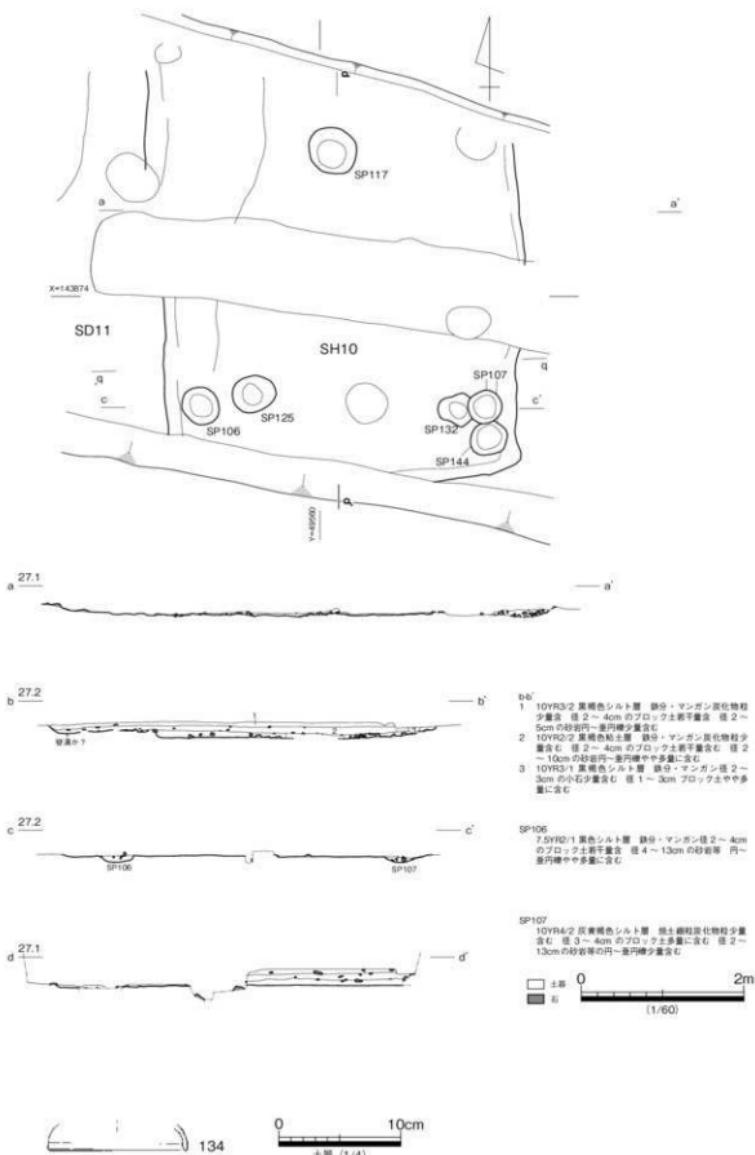
III区で検出した東西長5.0m、南北長4.1m以上の平面形方形の堅穴建物である。堆積土は3層に分かれるが、貼床は判断がつかなかった。中央部分が若干窪むものの、その周囲がベッド状遺構と認識されるほどの段差はない。底面で検出した3基の小穴のうち、位置関係からSP262は主柱穴の可能性があるが、対応する柱穴は認められない。

遺物 須恵器杯135は底部にヘラケズリが認められない。136・138は須恵器甕、137は土師器甕である。139～141は弥生土器甕で、いずれも香東川下流域産である。142・143は砥石で、142は砂岩製で2面に使用痕が認められる。凝灰岩製で柱状の143は欠損する2面を除く4面が使われている。湾曲する面は特に使用が顕著な部分だろう。144はサヌカイト製の石錐、145は形状不明の鉄製品である。緑色凝灰岩製の管玉146はX線撮影をして断面を図化した。孔は両端から穿たれている。147は暗青色を呈するガラス製の白玉である。

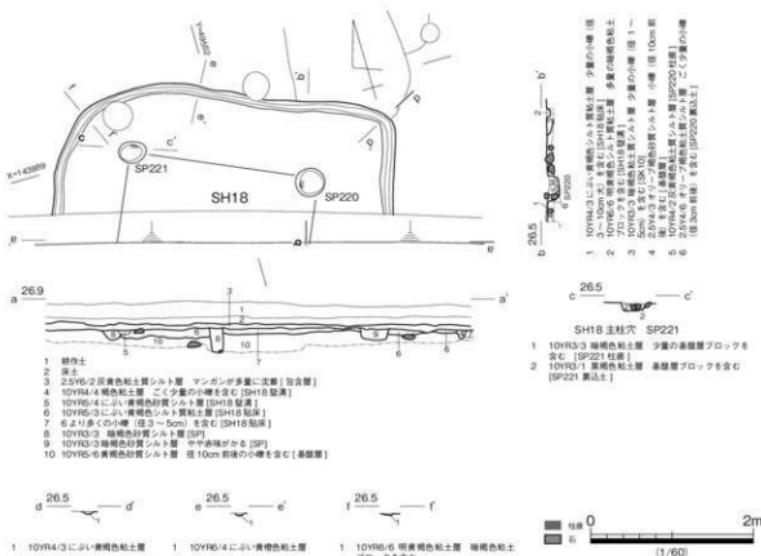
時期 135からTK217型式古段階並行期と判断できる。

SH24

V区で検出した東西長3.2m、南北長3.2mの平面形方形の堅穴建物である。東辺のやや南寄りに竪



第 84 図 SH10 平・断面図・出土遺物



第85図 SH18平・断面図

をもち、竈を避けるように壁溝が巡る。主柱穴とみられる柱穴はSP267・268・274の3基だが、対応関係は不明である。

竈の袖は盛り土で、底面上に構築された後、床が張られている。焚口はやや窪み、炭化物を包含する土が堆積している。その上位層には崩落した天井構成土を含む。焚口奥から若干の傾斜をもって煙道になるが、途中からは調査対象地外のため、煙道の規模などは不明である。

遺物 148は須恵器杯、149は土師器甕、150は香東川下流域産土器の弥生土器甕である。

時期 148からTK217型式古段階並行期と判断できる。

掘立柱建物

SB01

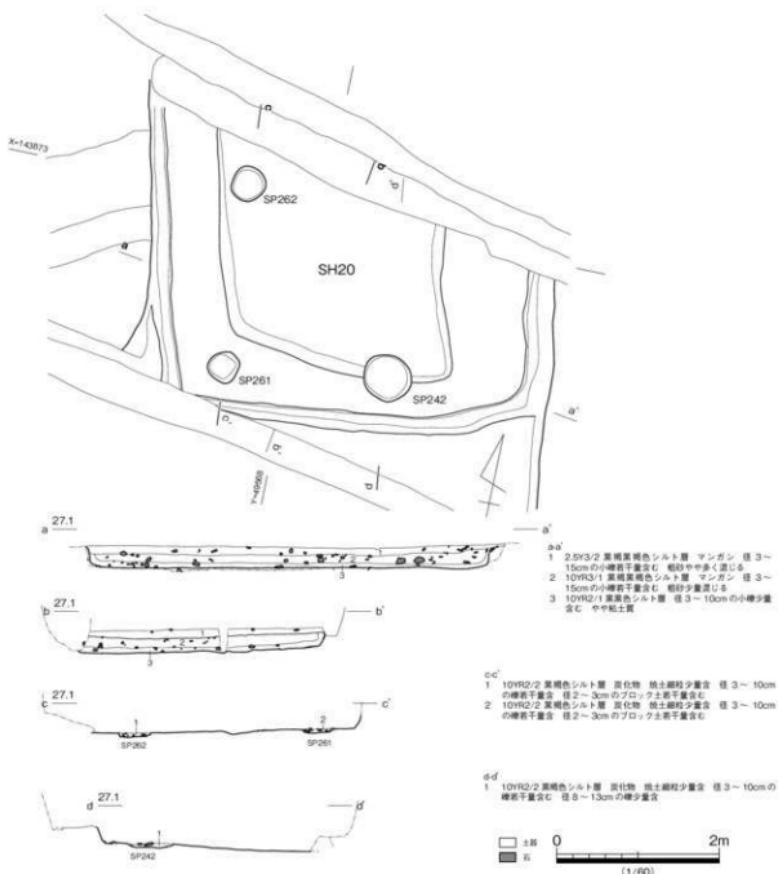
II区東部で検出した掘立柱建物で、梁間は3.9m、桁行は6.4m以上である。

遺物 SP03から出土した土師器151は鉢とみられる。

時期 151、および主軸方向が周辺の堅穴建物とそろうことから、TK217~46型式並行期と考えられる。

SB03

I区東部で検出した2間×3間の掘立柱建物で、梁間は北辺3.6m、南辺3.8m、桁行は東辺5.5m、



第 86 図 SH20 平・断面図

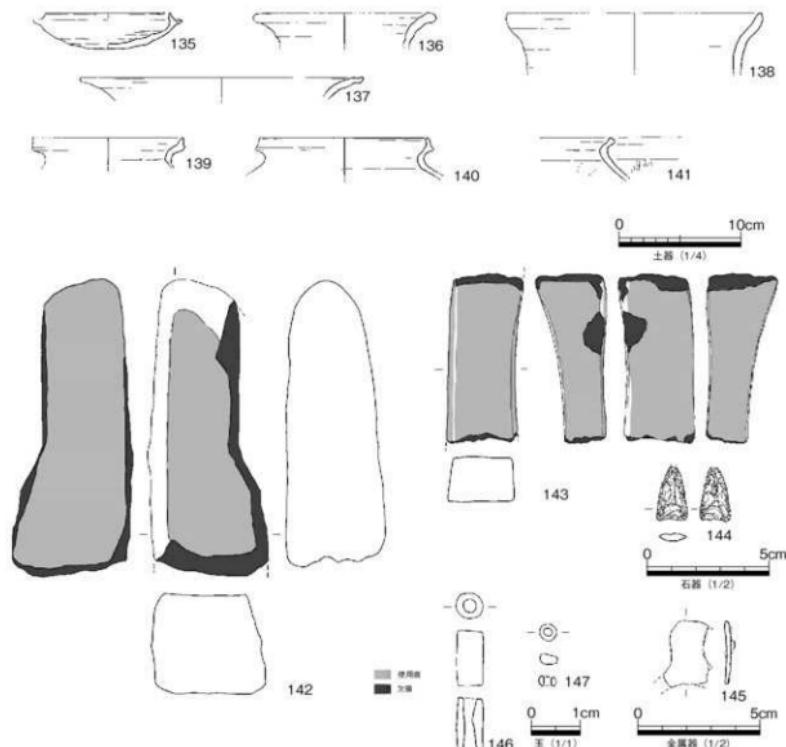
西辺 5.2 m である。堅穴建物 SH05・13・14・15・16 埋没後に構築されている。

遺物 柱穴から須恵器や土師器壺の小片などが出土している。

時期 堅穴建物 SH04・13~16 埋没後の構築であることから、TK217 型式新段階～TK46 型式並行期以降と判断できる。

SB05

II 区南東部で検出した 5 間 × 2 間以上の掘立柱建物で、梁間は 3.2 m 以上、桁行は 10.6 m である。柱穴は SH09、SK16 の下面で確認したため、両遺構より古い構築と判断できる。



第87図 SH20出土遺物

遺物 SP153から土師器と思われる小片が出土している。

時期 周辺の堅穴建物と主軸方向がそろうことから、TK217～46型式並行期とみられる。

SB06

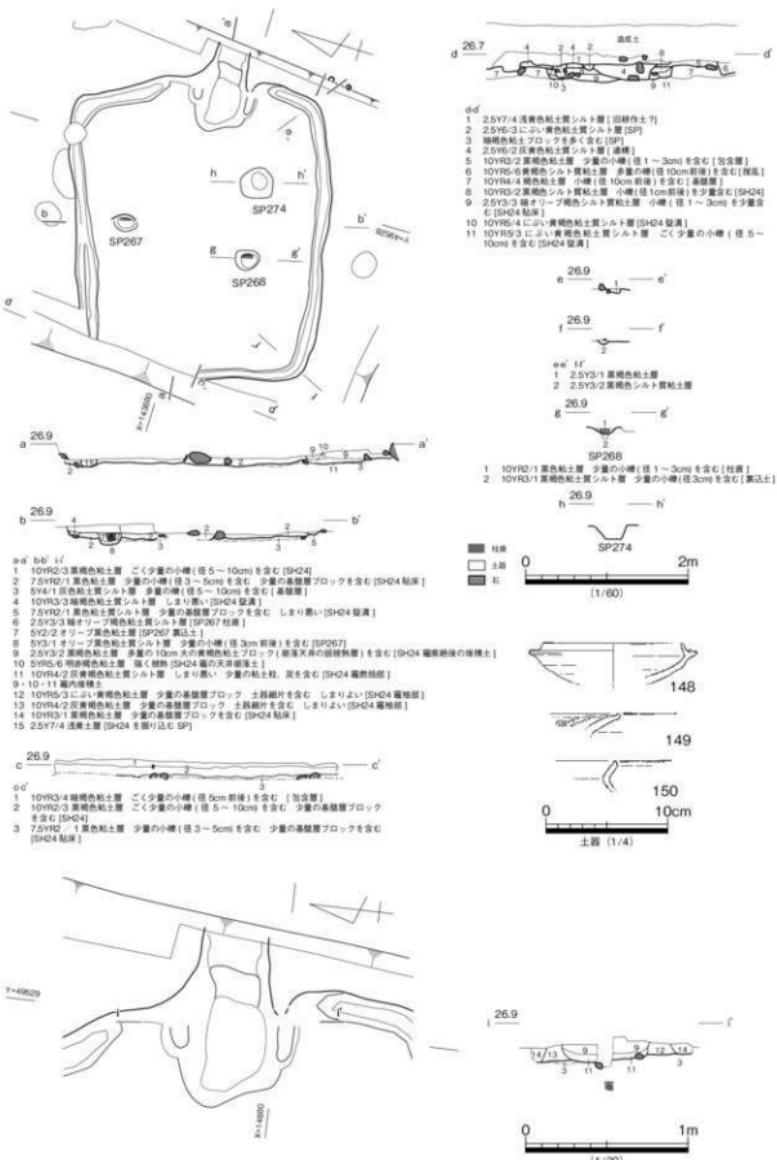
Ⅱ区南西部で検出した掘立柱建物である。直交する2辺は確実だが、それ以上は調査区外に伸びる可能性もあるため、梁間、桁行の長さは不明である。

遺物 遺物は出土していない。

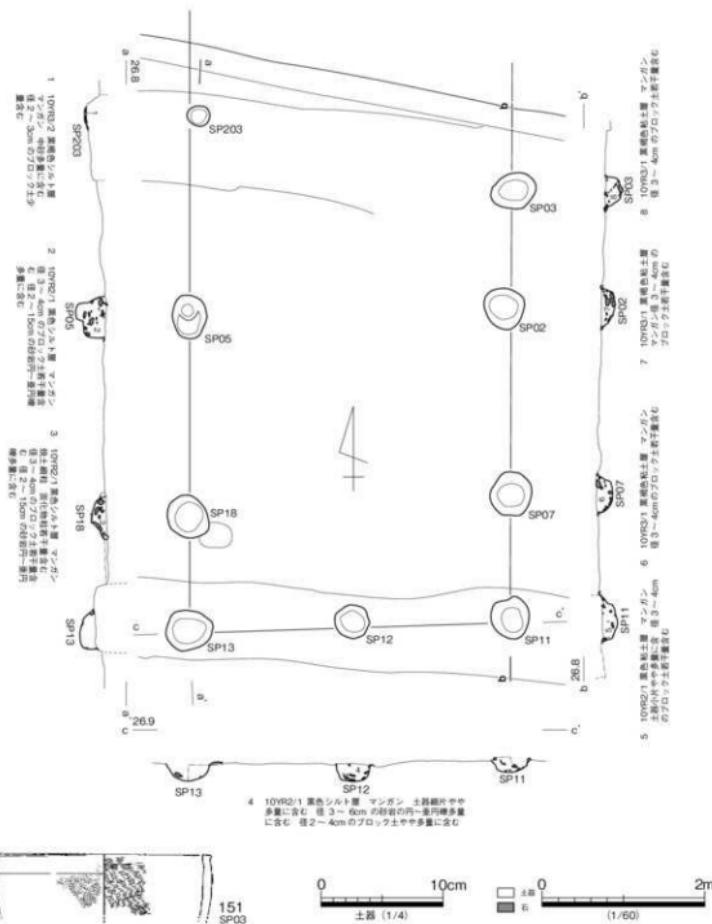
時期 周辺の掘立柱建物や堅穴建物とは同様に TK217～46型式並行期の構築だろう。

SB08 (調査時遺構名: SB07・08)

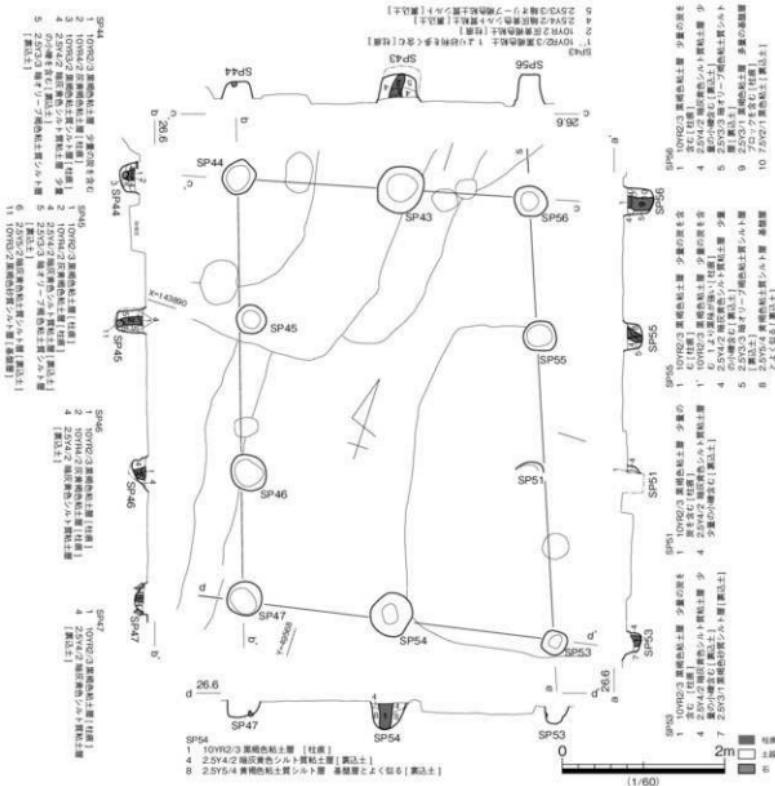
Ⅲ区西部で検出した2間×2間以上(4.1m×3.4m以上)の掘立柱建物で、SH10の下面で確認した。SP122・147間の柱穴を確認できなかつたため、桁行は南に伸びると考えている。



第 88 図 SH24 平・断面図・出土遺物



第89図 SB01 平・断面図・出土遺物



第90図 SB03平・断面図

遺物 SP147 から須恵器壺片と土師器壺片が出土、その他の柱穴からは土師器または弥生土器の小片などが出土している。

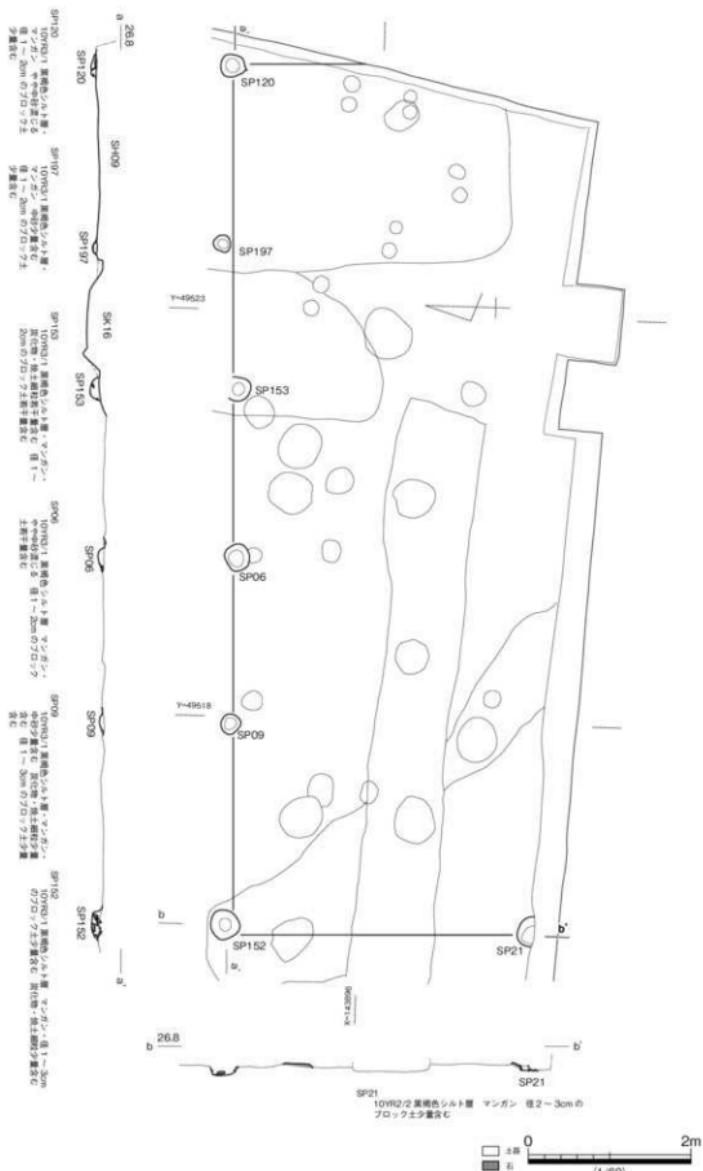
時期 SH10(TK217～46型式並行期)に先行し、須恵器および土師器が出土していることから TK217～46型式並行期と考えられる。

SB09

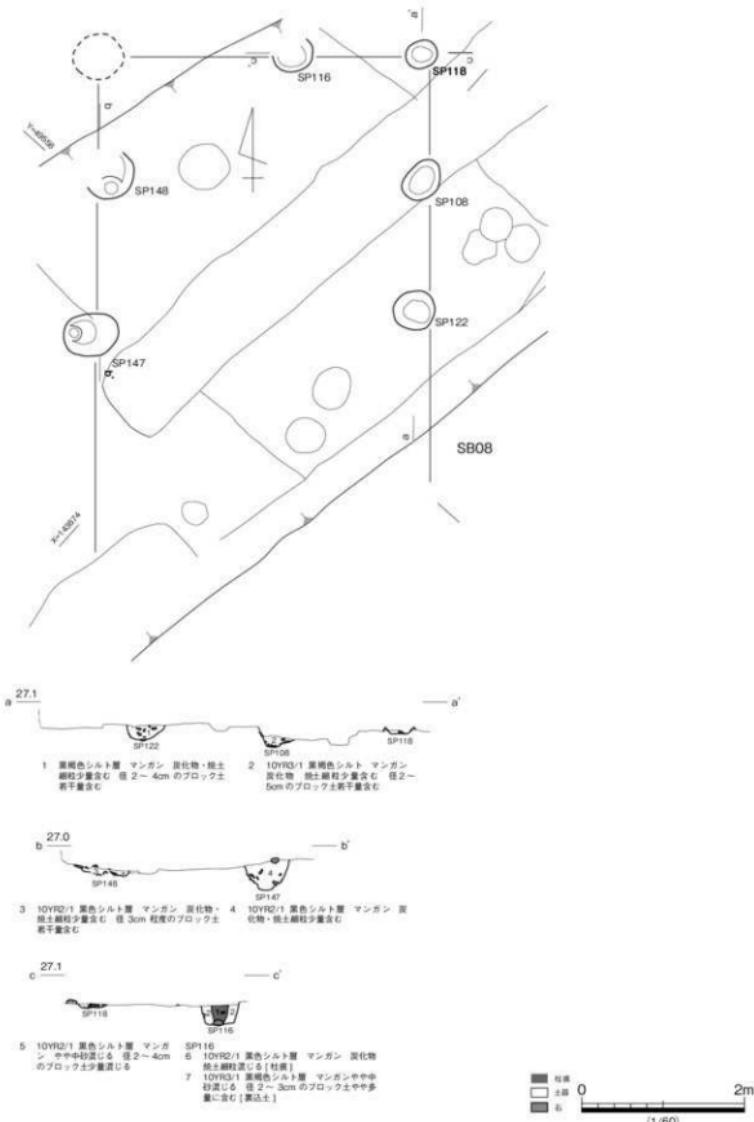
II区北西部で検出した、直線的に並ぶ3基の柱穴である。SP176は7世紀の溝状遺構SD03埋没後に掘りこまれている。対応する柱穴は対象地外になるとえた。1辺の長さは4.1m、直交する辺の長さは1.5m以上である。

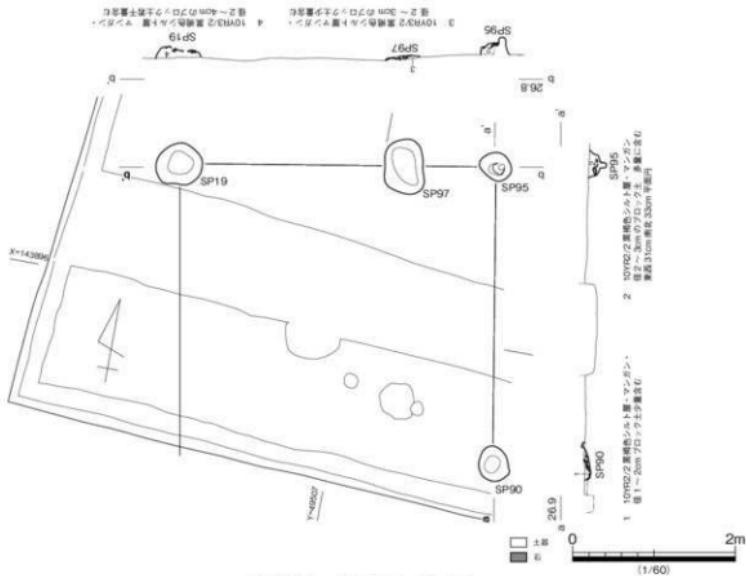
遺物 152～154は弥生土器の壺で、いずれも弥生時代前期のものである。

時期 埋土の状況からは7世紀の遺構とみられ、柱穴がSD03に後出する点も踏まると、SD03埋

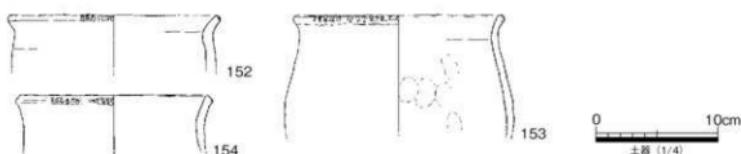
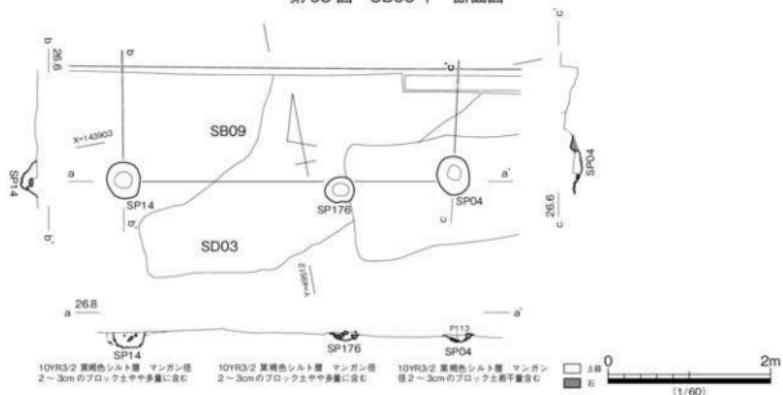


第91図 SB05 平・断面図

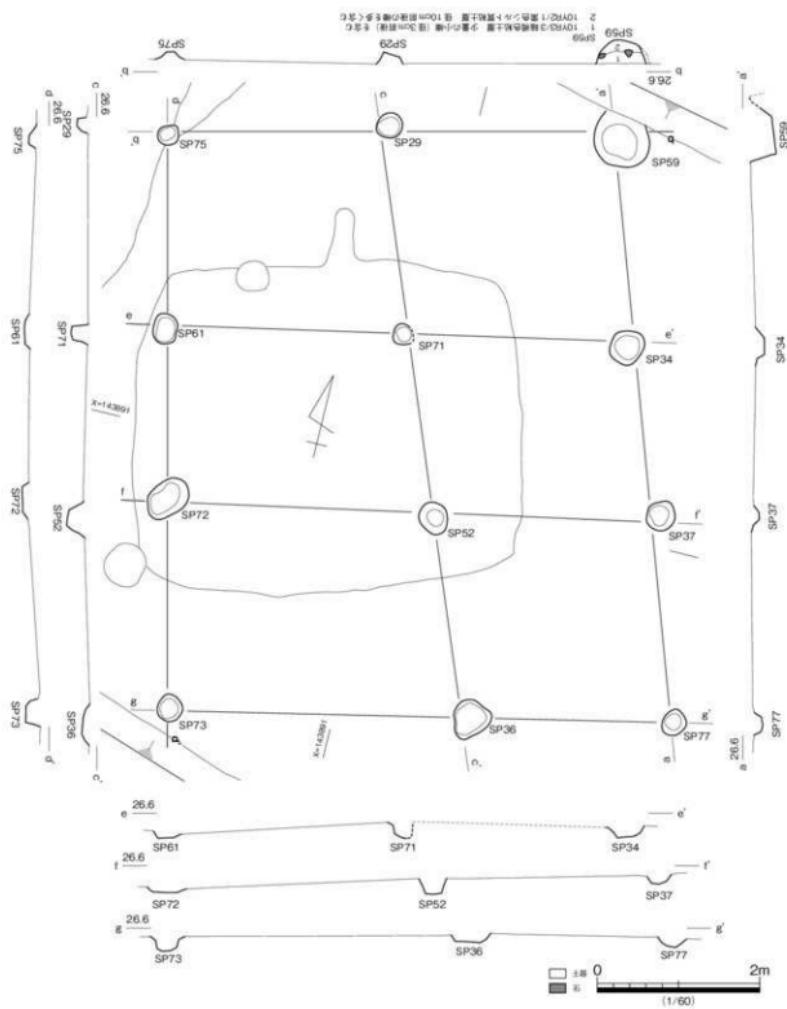




第93図 SB06 平・断面図



第94図 SB09 平・断面図・出土遺物



第95図 SB13平・断面図

没直後に築かれた建物と考えられる。152～154は古い時期の遺構に伴うものであろう。

SB13

I区東部で検出した2間×3間の総柱の掘立柱建物で、梁間は北辺5.6m、南辺6.2m、桁行は東辺7.2m、西辺7.1mである。柱間がやや長めである点と、南北方向の柱筋が並行にならない点には違和感もあるが、柱穴が並ぶ点を積極的にとらえて掘立柱建物として調査した。構築は竪穴建物SH04埋没後である。

遺物 柱穴から土師器と思われる遺物の小片が出土している。

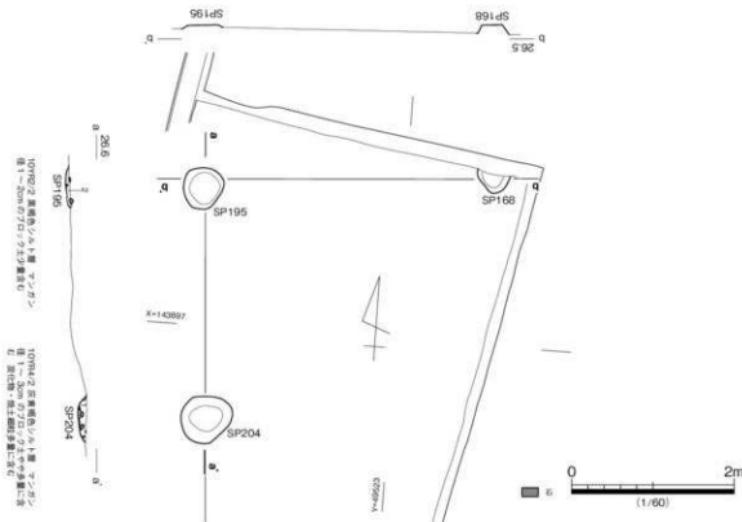
時期 構築がSH04後のため、TK217型式新段階～TK46型式並行期以降と判断できる。また、埋土からは7世紀を降ることはないといわれる。

溝状遺構

SD01・03、SX04（調査時遺構名：SD01・03、SH01）

SD01・03はII区西北部で検出した2本の溝状遺構で、いずれも調査区外に伸びるため全体形は不明である。検出できた部分では両溝とも弧状を描き、一部が途切れる周溝状の遺構にもみえる。その内側で、両溝からほぼ等間隔の位置に不定形の浅い落ち込みSX04がある。底部が平坦で壁の立ち上がりが垂直に近いため調査時は竪穴建物としていたが、平面形や竪穴建物に付随する施設を確認できなかった。機能は不明だが、位置関係からこれらの遺構は関連する遺構群と考えてもいいだろう。

遺物 SD03から出土した155～157は前期の弥生土器壺と甕である。この他、SD03からは須恵



第96図 SB11 平・断面図

器壺や土師器の小片が出土している。158 は SX04 から出土した香東川下流域産の弥生土器壺である。SD01 からはサヌカイト製石鏃 159・160 に加えて、前期の弥生土器小片が出土している。

時期 須恵器と土師器の小片が出土している SD03 は 7 世紀の遺構と判断できる。SD01、SX04 も関連する遺構とするならば、やはり 7 世紀の構築だろう。

SD02

II 区中央部を横断するかたちで検出した溝状遺構である。南からほぼ直線で伸びてきた溝は途中で屈曲し、そこからは湾曲しながら北へと伸びる。屈曲部付近には焼土が集中する範囲があるが、周辺に焼土に関連しそうな遺構は認められない。

遺物 161 は土師器壺である。口縁部から肩部にかけてのパツと底部は接合しないが、胎土や調整から同一個体であることは間違いない。162 は前期の弥生土器壺、163 はサヌカイト製石鏃である。この他に須恵器壺の小片などが出土している。

時期 161 や須恵器壺から 7 世紀の遺構と判断できる。

SD05・06・22・23

I 区西部で検出した溝状遺構群である。SD06 は SH02・07 に、SD05・23 は SH02 によって破壊されている。いずれも埋土はよく似る。SD06・22 は並行するように見え、関連する遺構群であろう。SD05・23 は近接して並ぶことから、削平された同一の溝状遺構の可能性もある。

遺物 164・165 は SD05 から出土した香東川下流域産土器の弥生土器である。SD23 からは須恵器片と弥生土器片、SD06 から弥生土器の小片が出土している。

時期 SD23 出土須恵器と遺構の新旧関係から 7 世紀の遺構と考えたい。

SD07

II 区西端で検出した北西 - 南東方向の溝状遺構である。検出部分に限れば SD02 に並行するようにもみえるため、SD02 と同時期に機能していた遺構の可能性もある。

遺物 遺物は出土していない。

時期 周辺の遺構の状況から 7 世紀と考えられる。

SD11・13

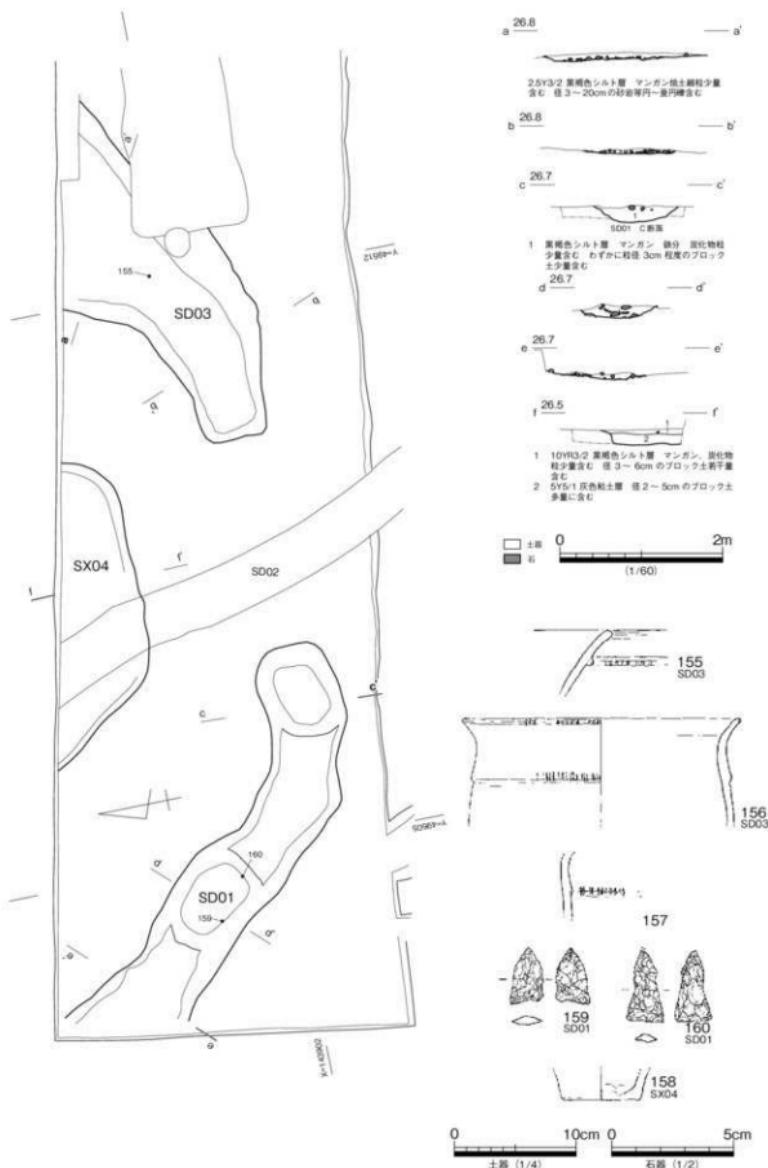
III 区西部で検出した直交する 2 条の浅い溝状遺構である。SH10 埋没後に構築され、SD08 に破壊されている。

遺物 SD11 からは土師器もしくは弥生土器の小片、SD13 からは 7 世紀とみられる須恵器壺小片と香東川下流域産土器の弥生土器が出土している。

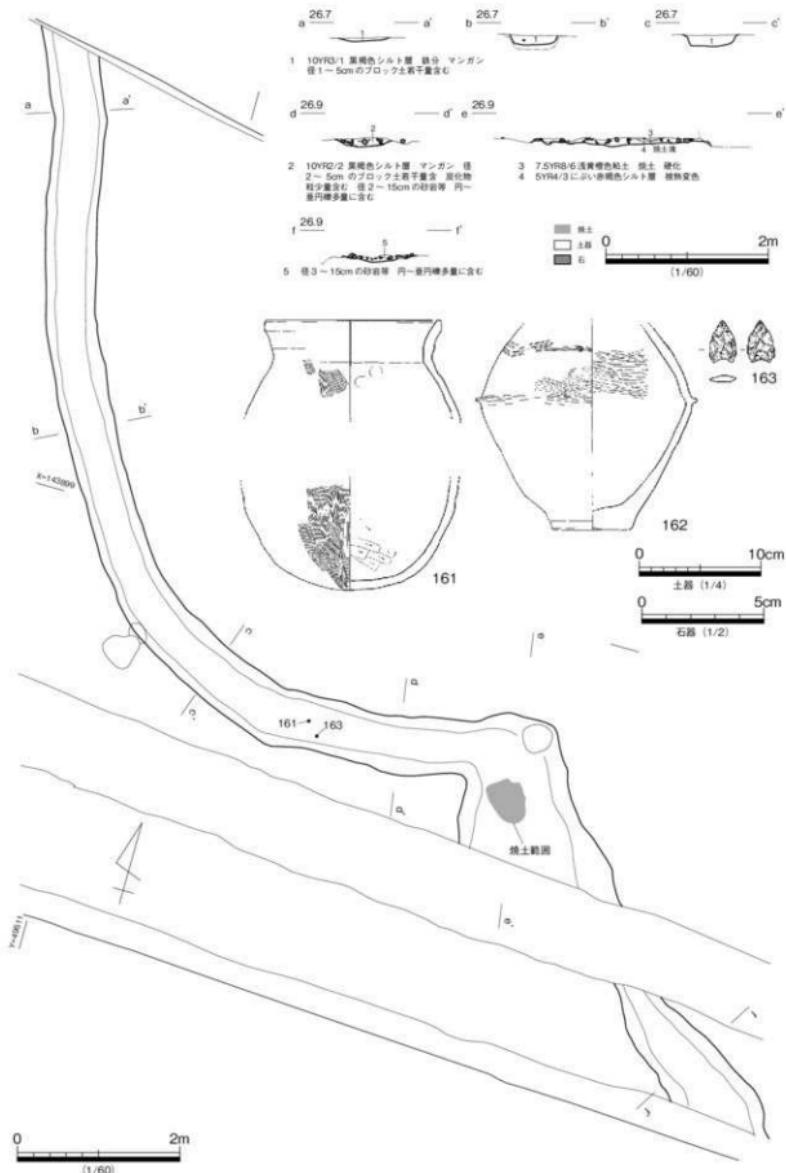
時期 SD13 出土の須恵器と SH10 より新しい点から TK217 ~ 46 型式並行期とみたい。

SD12・24

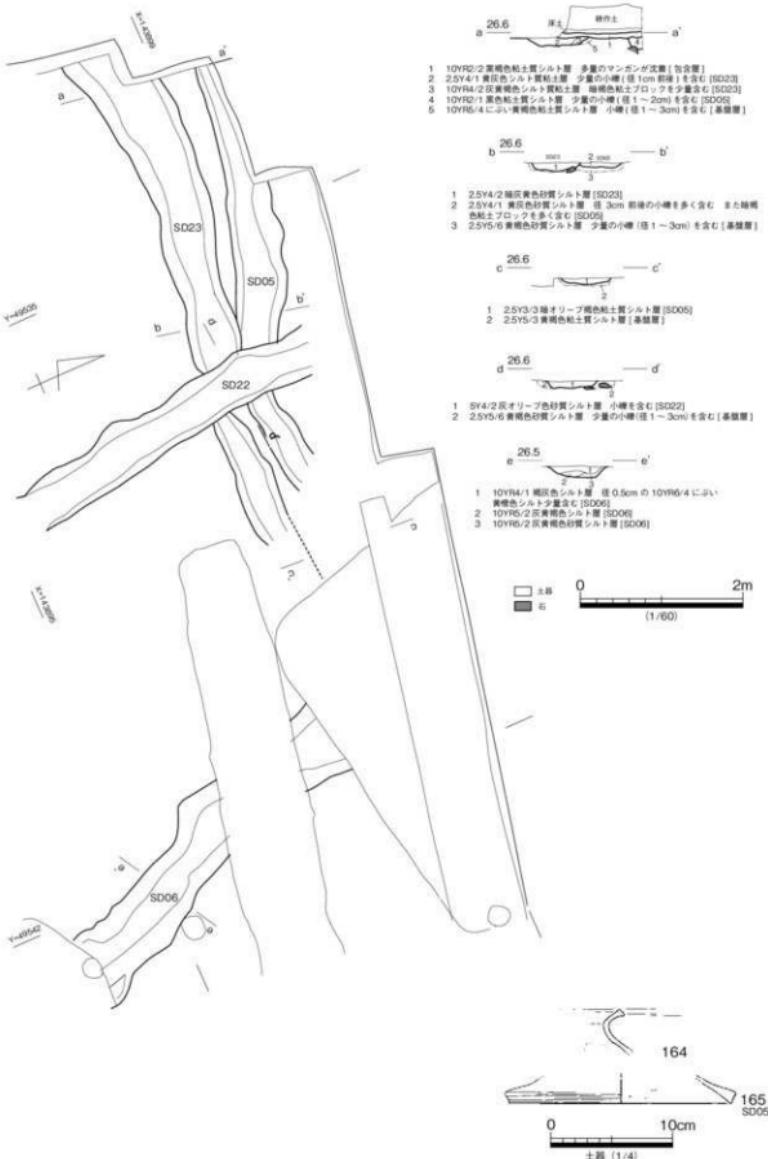
IV 区で検出した並行する 2 条の溝状遺構である。SD12 と SD24 の南西部の主軸方向は、7 世紀の堅穴建物群のそれに近い。



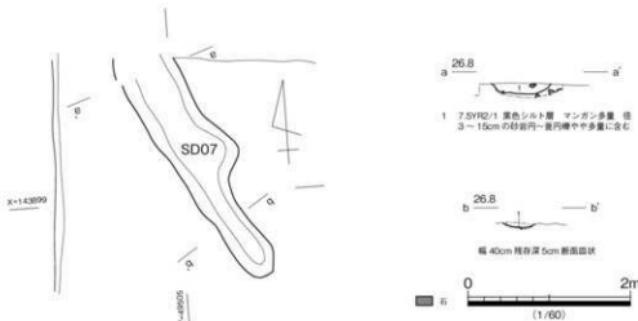
第97図 SD01・03・SX04 平・断面図・出土遺物



第 98 図 SD02 平・断面図・出土遺物



第99図 SD05・06・22・23平・断面図・出土遺物



第100図 SD07 平・断面図

遺物 SD12から7世紀の須恵器高杯が出土している。時期特定は難しいが須恵器壺と土師器壺、弥生時代後期の香東川下流域産の弥生土器甕がある。SD24からは遺物が出土していない。

時期 SD12出土の須恵器からTK 217~46型式並行期と考えられる。主軸方向も当該期とする根拠になるだろう。

SD17

I区南東部で検出した溝状遺構で、SH13に破壊される。

遺物 遺物は出土していない。

時期 埋土とSH04に主軸方向がそろう点からTK217型式並行期と考えたいが、弥生時代の可能性も否定できない。

SD20

I区中央部で検出した溝状遺構で、SH06およびSP192に壊されている。

遺物 166は土師器壺である。その他、図化していないが須恵器杯・甕の小片が出土している。

時期 出土遺物と周辺遺構の時期から、TK217~46型式並行期と判断できる。

SD21

I区中央部で検出した溝状遺構で、SH05、SD21に破壊されている。

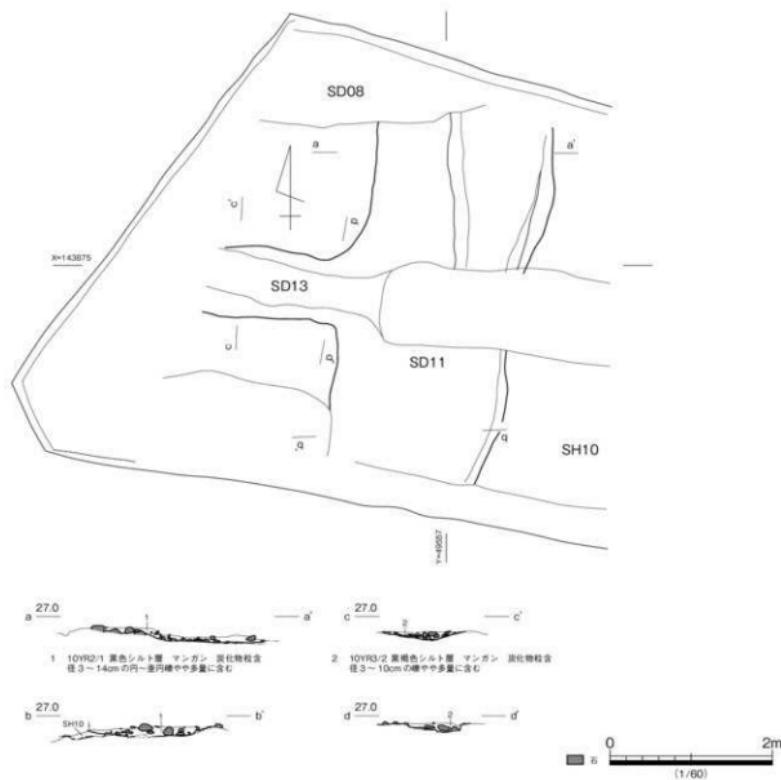
遺物 遺物は出土していない。

時期 SD20と埋土が似ているためTK217~46型式並行期としたが、弥生時代にさかのほる可能性もある。

SD25

IV区南東隅で検出した遺構である。溝状遺構としたが、調査区外の状況によっては土坑などの可能性もある。

遺物 遺物は出土していない。



第101図 SD11・13 平・断面図

時期 周辺の遺構の状況から、TK217～46型式並行期としておきたい。

土坑

SK08

I区で検出した土坑で、竪穴建物SH06に壊される。

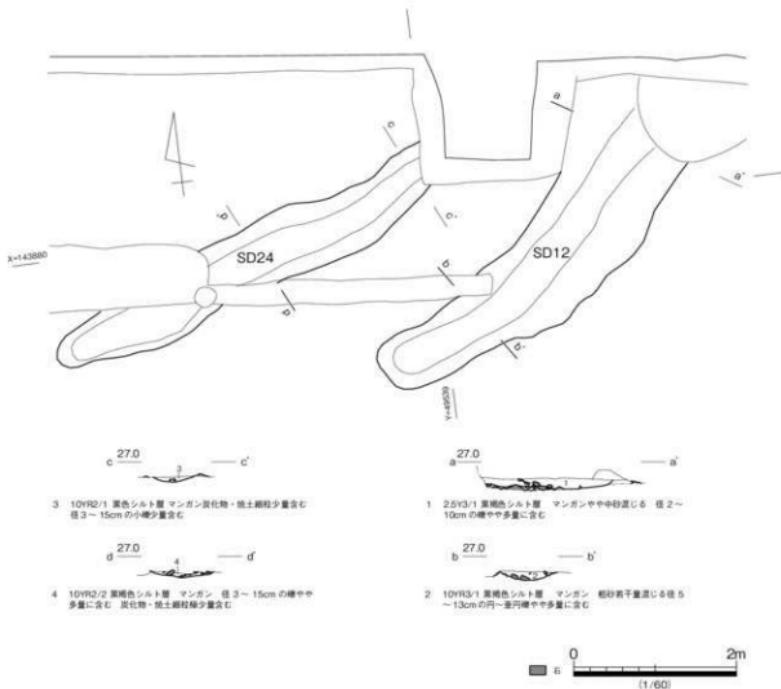
遺物 須恵器杯と弥生土器の小片が出土している。

時期 出土した須恵器杯と周辺遺構の時期から、TK217～46型式並行期と判断できる。

SK09

I区中央部で検出した平面形が長方形の土坑である。竪穴建物SH18埋没後に構築されている。

遺物 遺物は出土していない。



第102図 SD12・24 平・断面図

時期 埋土の状況から TK217~46型式並行期としたい。

SK10・11

I区中央部で検出した重複する2基の土坑で、SK10が新しい。竪穴建物SH05・16・18に破壊されている。

遺物 いずれも遺物は出土していない。

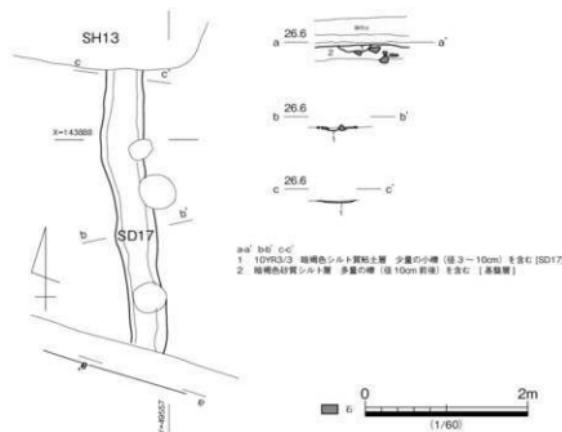
時期 埋土と周辺遺構の時期から TK217~46型式並行期と考えられる。

SK12

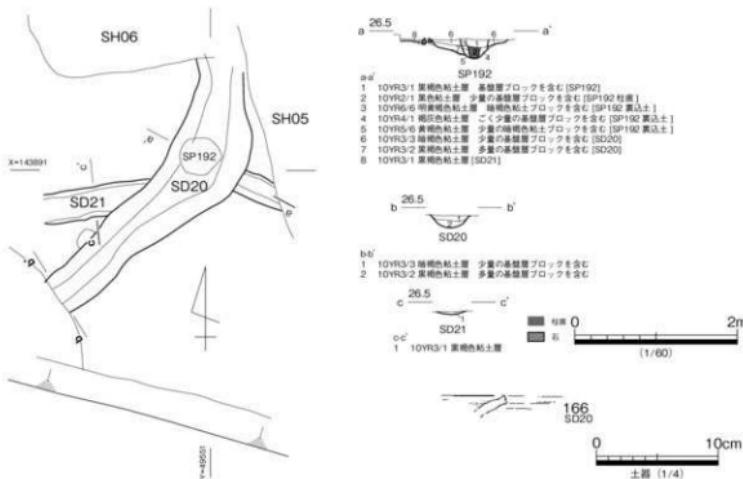
IV区で検出した検出した土坑で、溝状遺構SD12埋没後に構築されている。浅く傾斜も緩いため、人為的な掘り込みを伴わない落ち込み状遺構の可能性もある。

遺物 遺物は出土していない。

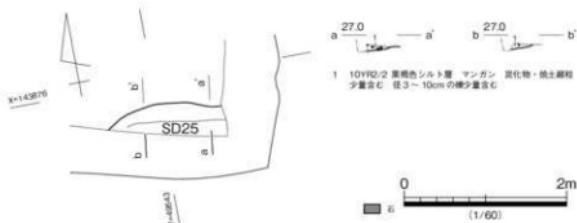
時期 埋土の状況とSD12より新しいことから、TK217~46型式並行期と考えたい。



第103図 SD17 平・断面図



第104図 SD20・21 平・断面図・出土遺物



第105図 SD25 平・断面図

SK15

V区で検出した土坑で、SH24内に位置する。SH24に伴う可能性もあるが、主柱穴と考えるSP267より古いため、SH24構築以前の遺構と判断した。

遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物は出土していないが、SH24構築以前の遺構であるため、TK217型式並行期古段階以前と判断できる。

SX17 (調査時遺構名: SX03)

IV区南東部で検出した土坑である。

遺物 167は土師器壺の口縁部である。

時期 167と周辺遺構の時期からTK217~46型式並行期としておきたい。

性格不明遺構**SX05 (調査時遺構名: SH23)**

掘り込み上面のラインが直線的で、底も平坦に近いため、調査時は堅穴建物と認識していた遺構である。堅穴建物の可能性はあるが、平面的な検出部分が少ない点、壁溝や主柱穴といった構成要素となるものを確認できなかったため、性格不明遺構として報告する。

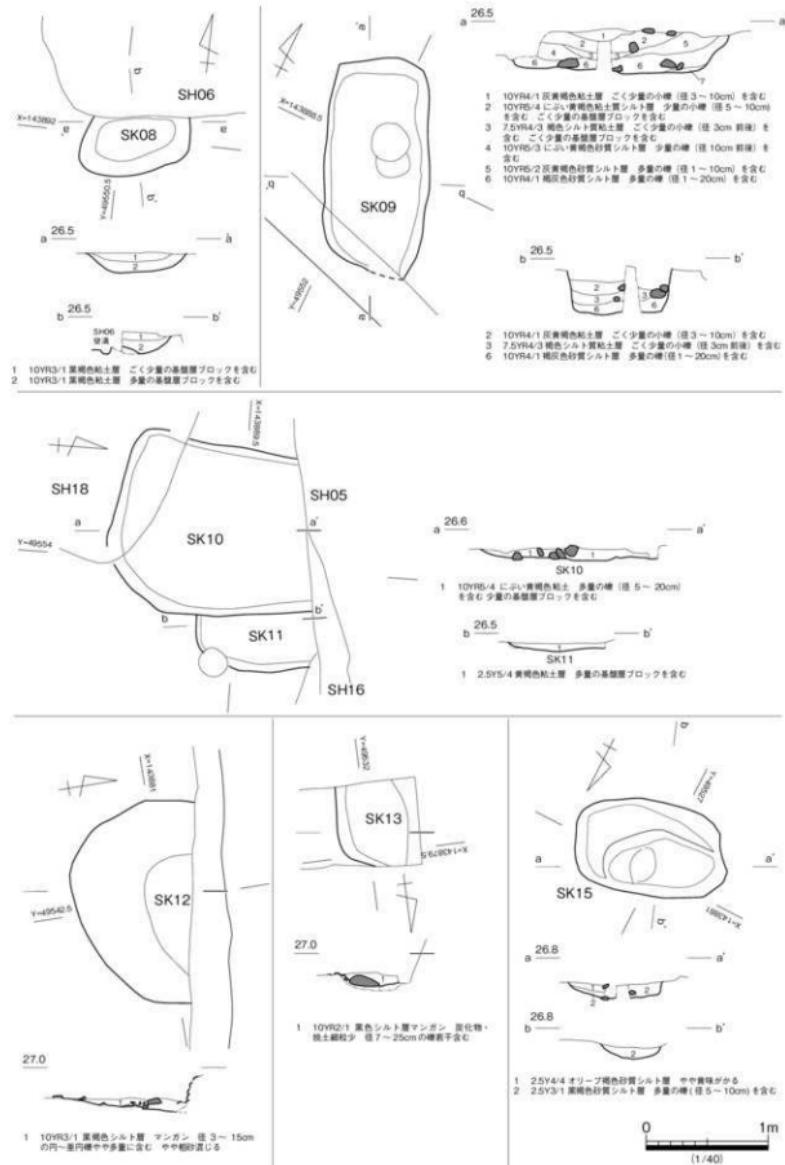
遺物 香東川下流域産の弥生土器が出土している。

時期 堅穴建物とすれば、平面形が方形になるのでTK217~46型式並行期であろう。それ以外の遺構であれば、出土遺物を考慮して弥生時代後期にまで時期の可能性が広がることになる。

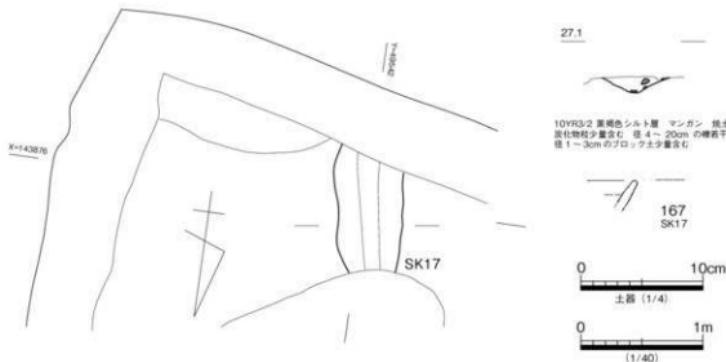
柱穴**SP205・206 (調査時遺構名: SB10)**

II区で検出した同規模の2基の柱穴である。調査時は掘立柱建物としたが、柱穴2基だけで建物とするのは難しいため、ここでは柱穴として報告する。

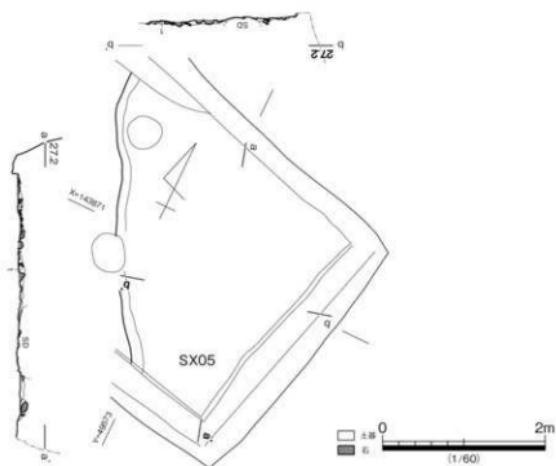
遺物 遺物は出土していない。



第106図 SK08・09・10・11・12・13・15 平・断面図



第 107 図 SK17 平・断面図・出土遺物



第 108 図 SX05 平・断面図

時期 埋土と周辺遺構の時期から、TK217～46型式並行期と考えたい。

SP195・204（調査時遺構名：SB11）

Ⅱ区で検出した2基の柱穴で、いずれも浅く、傾斜が緩い。掘立柱建物として調査したが、掘立柱建物と判断するには材料不足のため、2基の柱穴として報告する。

遺物 SP195からは土師器壺と弥生土器の小片、SP204からは土師器もしくは弥生土器片が出土している。

時期 出土遺物と周辺遺構の時期から、TK217～46型式並行期と判断できる。

SP245・254

Ⅲ区で検出した、形状の類似する2基の柱穴である。掘立柱建物を構成する柱穴として調査したが、対応する他の柱穴が不明なため、本報告書では柱穴とした。

遺物 いずれの柱穴からも、土師器もしくは弥生土器の小片が出土している。

時期 埋土と周辺遺構の時期から TK217～46型式並行期としたい。

SP143

平面形不定形の深い落ち込み状の遺構で、底面の一部は柱痕状に窪む。埋土中には疊と多量の土器片を含む。破片の大きな土器片は土師器壺 173 と須恵器壺の胴部に復元できた。これらの土器とともに埋め戻されたとみられる。

時期 173と須恵器壺から7世紀と判断できる。

その他柱穴群

遺物 168・169は須恵器杯、170は土師器壺、171はサヌカイト製石鎌である。172は後期の弥生土器直口壺、174は須恵器杯、175は土師器壺、176は土師器壺、177は器種不明だが高杯と考えたい。178は香東川下流域産の弥生土器高杯、179は須恵器杯、180は須恵器蓋である。

時期 171・172・178を除いた遺物は7世紀を示すため、当該期の柱穴と判断できる。弥生時代の遺物 170・171・178が出土した柱穴 SP104・133・219も埋土などから7世紀の遺構の可能性が考えられる。

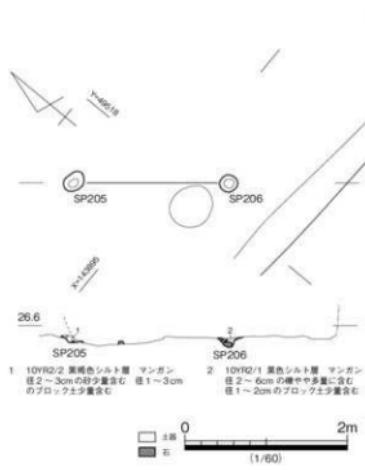
第5節 古代末以降の遺構と遺物

古代末～中世の遺構と遺物

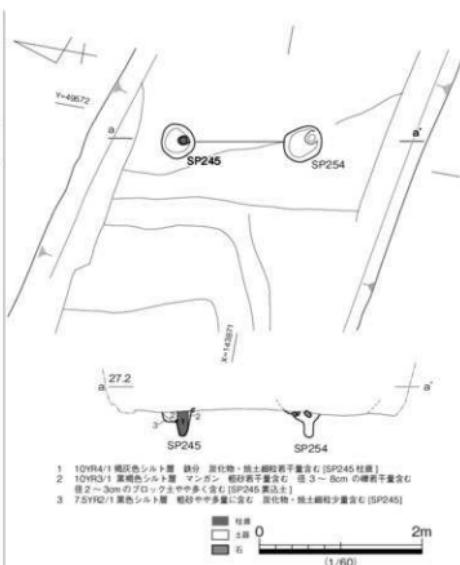
SD 14・15

Ⅲ区西端部で検出した2本の並行する溝状遺構で、現状の地割方向に合致する。

遺物 SD14からは須恵器と、弥生土器もしくは土師器の小片、SD15からはTK217型式並行期の須恵器杯が出土している。



第109図 SP205・206 平・断面図



第110図 SP245・254 平・断面図

時期 方向が地割に対応するため、古代以降であることは確実である。若干ではあるが、I区に12世紀前後の遺物があるため、同時期としておきたい。

SP23・24・25

I区北部で検出した3基の柱穴で、いずれも弥生時代の竪穴建物SH03埋没後に掘りこまれている。間隔は狭いが3基並ぶため、建物や柵列などの遺構を構成する可能性もある。

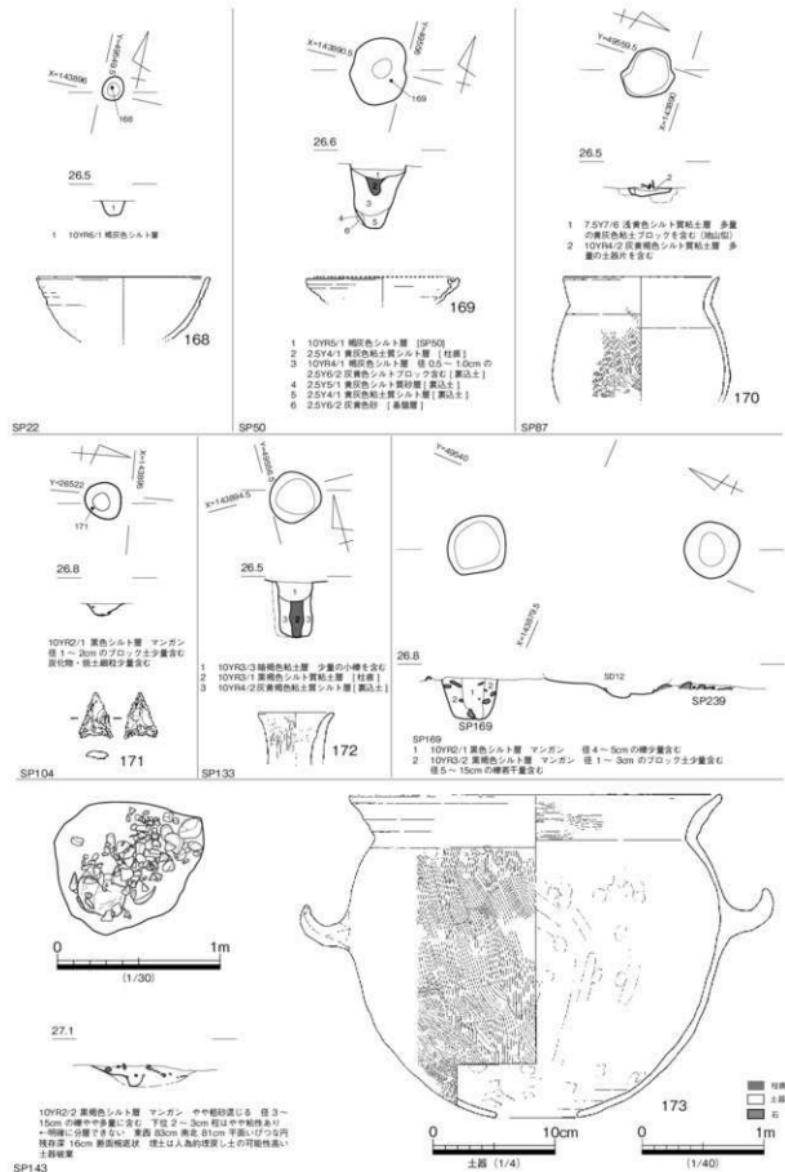
遺物 181は黒色土器椀、182は瓦器碗で、いずれもSP24からの出土である。

時期 出土遺物から12世紀と判断できる。

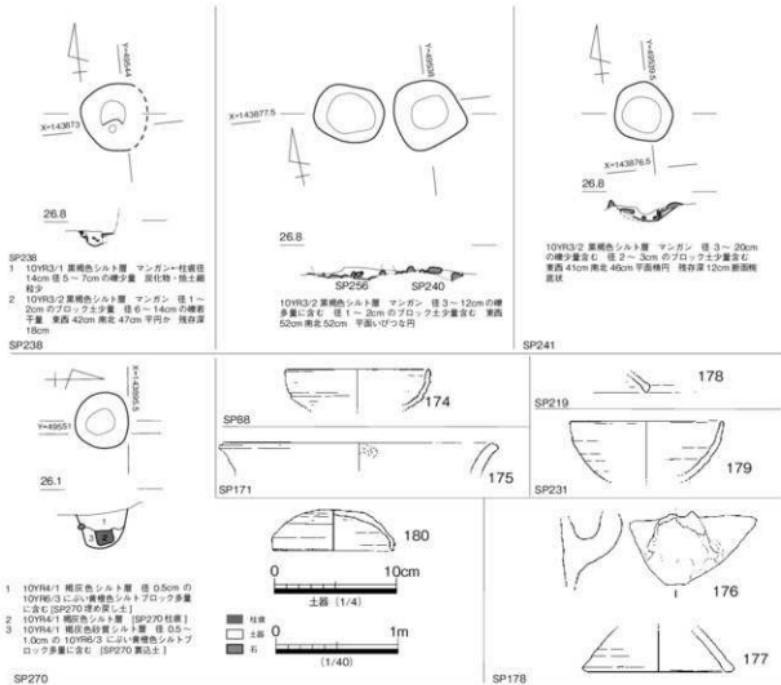
その他柱穴群

遺物 183は黒色土器椀 184は十瓶山窯系須恵器椀、185は産地不明の須恵器椀である。

時期 いずれも12世紀前後の時期を示すため、これらが出土したSP38・79・146は当該期の遺構と判断できる。



第111図 SP22・50・87・104・133・143・169・239 平・断面図・出土遺物



第112図 SP88・171・178・219・231・238・240・241・256・270平・断面図・出土遺物

近世の遺構と遺物

SD08

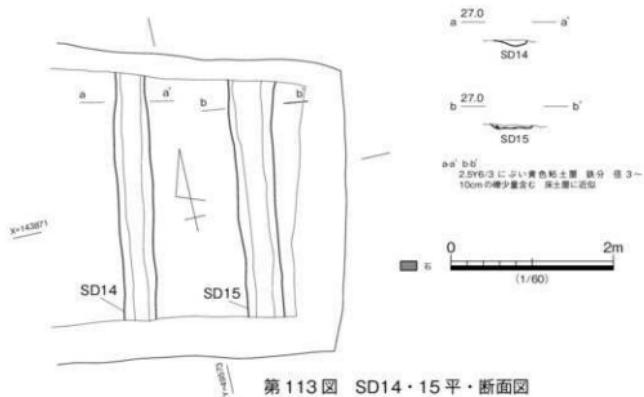
Ⅲ区で検出した溝状遺構である。SH10、SD11・13埋没後に掘り込まれている。1層がブロック土をやや多量に含むことから、最終的には埋め戻されたとみられる。

遺物 186は御殿産熔炉である。その他、固化はしていないが施釉陶器碗や土師質土器などが出土している。

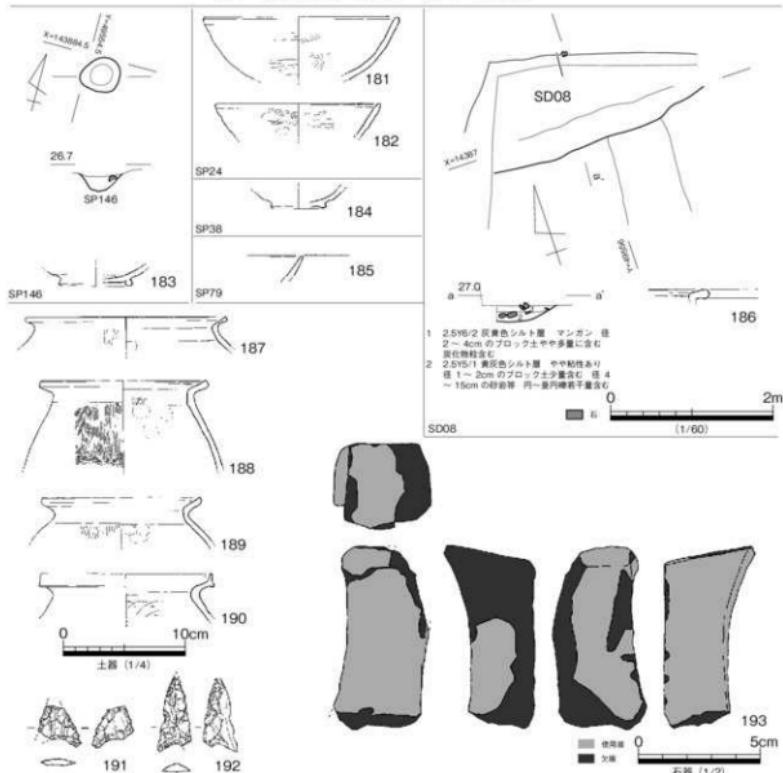
時期 出土遺物から19世紀前半～中葉(様相8)と判断できる。

第6節 遺構外の遺物

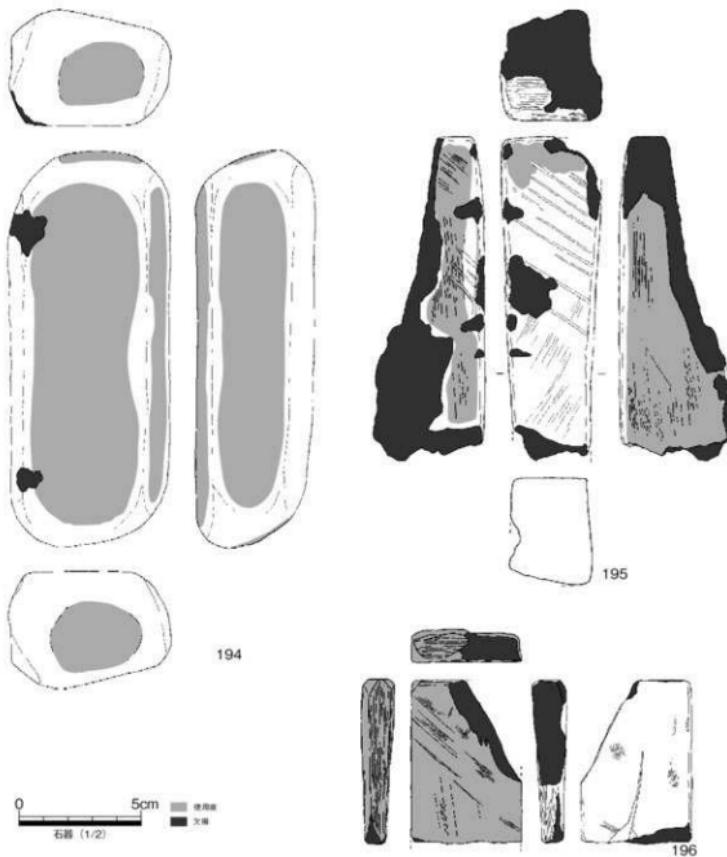
香東川下流域産の弥生土器壺 187・188は、当初、堅穴建物SH11として調査を進めたⅣ区西端の包含層から出土した。189・190は弥生土器壺である。191・192はサヌカイト製石鎌である。193



第113図 SD14・15 平・断面図



第114図 SP24・38・79・146・SD08 平・断面図・出土遺物・遺構外出土遺物 1



第115図 遺構外出土遺物2

は凝灰岩製の柱状砥石で、残存する5面すべてに使用痕が認められる。形状から弥生時代の遺物の可能性がある。194の砂岩製砥石も弥生時代と思われる。195は結晶片岩製砥石で、石材や擦痕からみて中世以降のものと考えられる。頁岩製の京都産砥石196は側面には切断時の痕跡が残る。確実に中世以降の砥石である。

第5章 自然科学分析

第1節 上東原遺跡の花粉分析

1 はじめに

上東原遺跡は、香川県高松市鹿角町に所在する。本報告は、香川県埋蔵文化財センターの委託により、弥生時代後期後半から古代にかけて埋まつた溝(SD45)内の堆積物を対象に、堆積時における遺跡内及び周辺の古植生を推定する目的で行った花粉分析の調査報告書である。

2 試料について

溝(SD45)から採取した、7試料の提供を受けた。分析試料はa層から試料1、2、b層から試料3、4、c層から試料5、8、d層から試料7が採取されていた。a、b層のそれぞれの試料には、肉眼的に層相の違いが認められなかつたが、c層の試料5はシルト質粘土、試料8は泥炭(あるいは腐植質粘土)と層相が異なつた。

3 分析方法及び分析結果

(1) 微化石概査

花粉分析用ブレバラート、及び花粉分析処理残渣を用いた微化石の概査結果を、表1に示す(植物片、炭は花粉分析用ブレバラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、花粉分析処理の残渣を観察した)。

(2) 花粉分析

分析処理の工程を図116のフローチャートに示した。ブレバラートの観察・同定には、400倍の光学顕微鏡を用いた。また、イネ属(Oryza)の同定には、1000倍の位相差顕微鏡を用いた。

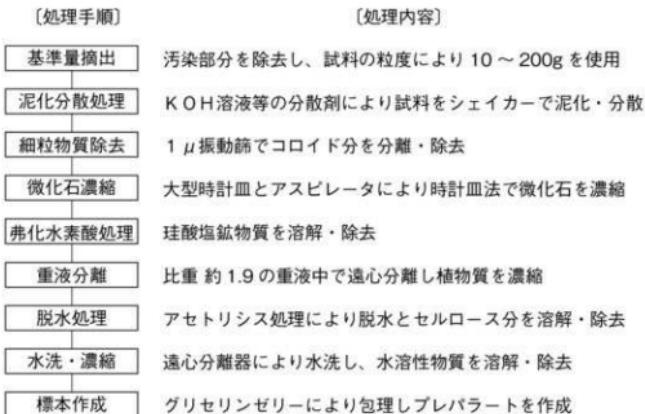
花粉分析では原則的に木本花粉(化石)総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子(化石)の同定も行った。通常1g当たり数万粒の花粉粒が検出されるが、今回の試料からは100~2000粒/gと花粉の含有量が少なかつた。特に最下位の試料7では128粒/gと少なく、作製したブレバラート全面を検鏡しても木本花粉の総数が200粒に達しなかつた。ま

番号	花 粉	根	植物片	珪 藻	火山ガラス	アラント・ホバー
1	○	△	△×	△	○	○
2	○	△	△	△×	○	○
3	○	○	△×	△×	○	○
4	○	○	△×	△×	○	○
5	○	○	△×	△×	○	○
7	△	○	△×	×	○	△
8	○	○	△×	×	○	○

凡例 ○: 十分な数量が検出できる ○: 少ないが検出できる △: 非常に少ない

△×: 極めてまれに検出できる ×: 検出できない

第1表 微化石概査結果



第116 図 花粉分析フローチャート

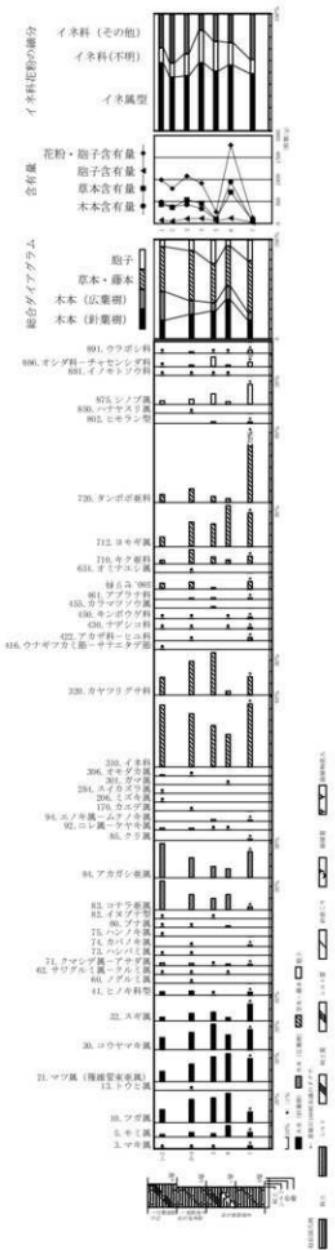
た、光学顕微鏡による検鏡(同定・計数)の後、(中村 1977)にしたがってイネ属(Oryza)の同定を行い、イネ科をイネ属型、イネ科(不能)、イネ科(その他)に細分した。ここではイネ科 100 粒を基準としたが、イネ科の花粉の検出量が少ない試料では、基準量に達していない。

分析結果を第2表の花粉ダイアグラムと第3表に示す。前述のように a 層、b 層では花粉化石群集に大きな差が認められること、試料の上下関係が不明瞭なことと層相の違いが観察できなかったことから、花粉ダイアグラム中では、検出数の合計を用いた。c 層の 2 試料は層相が異なることから、分けて示している。ただし、上下関係が分からぬ事から、便宜上試料 5 を上位に示している。「花粉ダイアグラム」の作成に当たり、木本花粉总数を基数として分類群ごとに百分率を算出し、木本花粉、草本・藤本花粉、胞子に分けてハッチを入れている。また、統計処理に充分な量の木本花粉が検出できなかつた試料 7 では、スペクトルに示した上で、他の試料と区別する目的で「*」を付けた。「総合ダイアグラム」では木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本・藤本花粉、胞子の总数を加えたものを基数として、分類群ごとに累積百分率として示した。「含有量」では、1g 当たりの換算重量を算出して示した。「イネ科花粉の細分」では、それぞれの分類群の割合を累積グラフで示した。

4 花粉化石の含有状況、微化石概査と堆積環境

今回の分析試料の花粉(胞子)含有量は、最も多い c 層試料 8 でも 1785 粒/g であった(表2)。沼沢地で堆積した粘土には通常数万粒/g の花粉(胞子)化石が含まれておらず、今回分析を行った各試料の花粉化石含有量は、これらの 1/10 ~ 1/100 であった。今回の分析試料の粒度はシルトあるいは細砂混じりとやや粗く、しかも有機質に富んでいたことから、一般的な沼沢地に比べ堆積速度が速かつたことが示唆される。このことが、各試料で花粉化石含有量が少なかった一因と考えられる。

一方、担当者に因れば、d 層は溝の周囲の崩落土、c 層は溝底の自然堆積層、b 層はブロックを含む埋め土、a 層は埋め土と自然堆積層の判断ができなかった、とされている。以下では、層ごとに堆積環境を検証していく。



d層：炭の含有量が多く、植物片は少なかった。炭は堆積後も化学的に分解しないことから地表面(土壤)で濃縮され含有量が多くなり、主として水成堆積物である泥炭中での含有量は少ない。また、炭片のほか、植物珪酸体、火山ガラスの含有量が多く、花粉(孢子)、植物片、珪藻の含有量が少ないことが土壤の特徴である。このように、試料7の微化石概査結果は土壤の特徴と一致し、d層が土壤(表土)に由来していた可能性が指摘できる(ただし、花粉化石含有量が少ないと前述のように他の要因で説明することも可能である)。試料7が微化石概査の上で土壤の特徴を持つことは、d層が溝周囲の崩落土(周囲の表土(土壤)が溝内に崩落した)とする観察結果によって、説明可能である。

c層：2試料の層相が異なり、花粉化石群集、含有量が異なった。更に微化石概査結果も異なるものであった。これらのこととは、両試料が異なる環境下で堆積したことを見唆す。試料8は泥炭であり、未分解の植物片が多量に含まれていた。溝内という狭い範囲であるが、局所的に湿原状態になっていたと考えられる。花粉化石含有量が少ない原因として、植物片が多いために希釈された可能性がある。一方、炭片が多く含まれることから、溝の周囲から表土(土壤)が継続的に流れ込んでいた可能性が指摘できる。試料5は有機質シルト質粘土であり、試料8堆積時に比べ周辺の湿性植物が減ったものと推定できる。また、花粉化石含有量が極めて少なく炭片が多く含まれるなど、土壤と似た微化石概査結果の特徴を持つことから、離水した期間があった可能性が指摘できる。あるいはd層(試料7)のように溝の周囲から表土(土壤)が多量に流れ込んでいた可能性もある。

b層：2試料間の花粉化石群集には、大きな差が認められなかった。さらに、a層からc層への花粉化石群集の変化は調和的であった。これらのこととは、b層を含め、c層からa層までが一連の自然堆積であったことを示唆する現象である。しかし、b層にはブロックが含まれ、埋め土と考えられている。分析した2試料の層相に差が認められなかったことから、2試料は同

起源のブロック(あるいはマトリックス部)から採取された可能性が高い。また、これらのブロック(あるいはマトリックス部)がどこから持ち込まれたものとすれば(「埋め土」とすれば、ブロックもマトリックスも、どこからか持ち込まれた可能性が極めて高い)、a層からc層への花粉化石群集の変化が、「偶然」(確率的には低いものの)調和的になったと考えられる。あるいは自然堆積と考えられているc層を含めたd～a層の全てが、同一起源の堆積物を用いた埋土である可能性も指摘できる。

a層：2試料ともに他の試料に比べ炭の含有量が少ない。前述のように、水成堆積物である湿地性堆積物中では炭の含有量が少ないとことから、(a層が埋め土でないとすれば)a～d層中最も穏やかな環境で堆積したと考えられる。

5 古植生復元

堆積物(堆積構造、抽出した微化石その他)から古環境を推定する場合、その場所(調査地点)で自然に堆積したものであることが、分析試料の基本条件である。今回の分析試料には(人為的な)埋め土(埋め土中のブロック)が含まれていた可能性があり、調査地点の環境を表していない可能性もある。ここでは全ての試料が一次的な堆積物であると仮定して、古植生を復元する。

(1) 調査地近辺の植生

試料8で木本花粉が50%を僅かに超えるものの、ほとんどの試料では50%未満である。この事から、得られた木本花粉化石のはほとんどは遠方から飛来したもので、SD45近辺には、イネ科、キク科の草本やシダ類が繁茂する草地が広がっていたと考えられる。一方で、イネ科花粉のおよそ50%以上をイネ属型花粉が占めることから、SD45流域に水田が広がっていた可能性も示唆される。水生草本であるガマ属やオモダカ属は、SD45内に生育していた可能性が高いが、流域の水田に「水田雜草」として生育していた可能性も否定できない。

(2) 森林植生

前述のように木本花粉の割合が低いことから、検出された木本花粉の多くが遠方から飛来した可能性が指摘できる。

① 弥生時代後半から終末

c層、b層ではツガ属、マツ属(複雑管束亜属)、コウヤマキ属を主とする針葉樹が、コナラ亜属、アカガシ亜属を主とする広葉樹の3～2倍の出現率を示す。

現存植生では、低地から山地にかけてアカガシ亜属などの常緑広葉樹を主とする照葉樹林(暖温帯林)が分布する。また山地高所では、針葉樹を主として、カシ類やブナ類を混生する温帶針葉樹林(中間温帶林)が生育する傾向にある。更に高所では、ブナ、ミズナラを主とする落葉樹林(冷温帯林)へと移り変わっていく。

現存植生と得られた花粉化石群集から、調査地南方の讃岐山脈には温帶針葉樹林が広く分布し、照葉樹林は調査地近辺の丘陵(淨願寺山、紫雲山(室山)、石清尾山)に、所によってナラ類を混生して分布していたと考えられる。また、ナラ類がコナラ林として分布した可能性もある。

前述のように、温帶針葉樹林は照葉樹林より高所に位置するのが一般的である。しかし和歌山県新宮市「浮島」のスギ林のように、暖温帯林域の海岸近くに天然のスギ林が残る例外的な事象も知られていく。

	a 層			b 層			c 層			d 層		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2 Podocarpus	マキ属	1 0%	1 0%	2 0%	1 0%	1 0%	1 1%	2 2%				
5 Alnus	モミ属	8 2%	8 2%	10 2%	12 5%	8 2%	17 4%	4 2%	20 10%	3 2%	7 8%	
10 Taxus	ツガ属	21 10%	29 12%	30 11%	28 17%	47 22%	86 20%	28 27%	51 25%	7 8%		
13 Prunus	トケイモチ					1 0%	1 0%					
21 Pseudotsuga	マツモチ(温帯樹木層)	26 11%	16 7%	40 9%	35 16%	30 14%	65 15%	38 21%	49 34%	15 20%		
30 Salicaceae	コウヤマキ属	22 10%	25 11%	47 10%	23 10%	41 20%	64 15%	29 22%	26 13%	12 17%		
32 Cryptomeria	スギ属	8 4%	8 3%	14 3%	22 10%	8 2%	28 6%	10 8%	6 3%	11 14%		
41 Cupressaceae	ヒノキ属	7 3%	7 3%	14 3%	10 4%	5 2%	15 3%	1 1%		2 3%		
44 Planera	アブクマノキ属					1 0%						
62 Myrsinaceae-Juglans	サザンカ(温帯樹木層)		2 1%	2 0%	3 1%		2		1	0%		
71 Carya-Ostrya	カワヅシロバ・アサガホ	4 2%	7 2%	11 2%	5 2%	4 2%	9 2%	1 1%	3 1%	1 1%		
73 Corylus	ハジキ属	1 0%	1 0%	2 0%		1 0%	1 0%					
74 Betula	カバノキ属					1 0%	1 0%					
75 Alnus	バンノキ属	1 0%	1 0%	2 0%	1 0%		1		3 1%			
89 Fagus	ブナ属		1 0%	1 0%	1 0%							
92 Fagopyrum	イヌタマゴ属	1 0%		1								
93 Tilia	カシ属	42 29%	50 21%	112 25%	30 12%	27 13%	57 12%	13 10%	27 12%	2 2%		
94 Cyathocalyx	アカマツ属	56 27%	75 32%	133 29%	33 16%	36 19%	74 17%	13 10%	16 8%	17 22%		
95 Castanea	クリ属									1 1%		
97 Ulmus-Zelkova	ニレノキ属	3 1%	6 2%	8 2%	4 3%	1 0%	7 2%	1 1%	2 1%	1 1%		
94 Aphananthe-Celtis	ムクニノキ属・エニシダ属					1 0%		1 0%				
170 Acer	カエデ属											
205 Cornus	ミズナ属	1 0%	1 0%	1 0%								
284 Lonicera	スイカズラ属	1 0%	1 0%	1 0%								
306 Tilia	カシノキ属		5 2%	5 1%						1 0%		
310 Grewia	イヌ科	107 49%	132 57%	239 53%	102 46%	95 45%	197 46%	47 36%	57 28%	41 54%		
320 Cupressaceae	カヤツリグサ科	30 14%	39 17%	69 15%	58 26%	66 32%	125 28%	46 36%	7 3%	12 16%		
416 Echinochocac-Persicaria	ウツボグサ属・エナシタケナズリ属	2 1%										
422 Chenopodiaceae	カブトグサ・ヒユ科					3 1%	1 0%	4 1%			2 2%	
Amaranthaceae												
430 Caryophyllaceae	アシソクゴ	1 0%		1 0%	1 0%	1 0%	2 0%			2 1%	1 1%	
450 Rosaceae	キンミズクサ科	2 1%	1 0%	3 1%	3 1%		3		2 1%	1 1%		
455 Thymelaeum	カラマツノキ属									2 2%		
461 Crassulaceae	アブチノボ	13 6%	10 4%	23 5%	8 4%	5 2%	9 1%	2 2%	1 1%	1 1%	5 7%	
561 Urticaceae	セリ科					1 0%		1 0%				
562 Petroselinaceae	セリ科											
712 Artemisia	ヨモギ属	18 8%	19 8%	28 8%	48 22%	44 21%	92 32%	26 20%	72 28%	22 22%		
720 Cicurinaceae	ランボク科	15 7%	17 7%	30 7%	28 13%	23 11%	51 12%	7 5%	7 5%	3 3%	55 72%	
802 Ulmaceae-hedysarum-type	モミノキ属								2 2%	1 1%		
850 Ostryo-	ハナミズク属											
875 Desmodium	シノノミ属	8 2%	8 2%	14 3%	11 5%	8 4%	19 4%	19 4%	12 9%	9 2%	13 17%	
884 Piperaceae	イソノトボ科	2 1%	2 1%	4 1%	2 1%	2 1%	4 1%	1 1%	1 1%	1 1%		
886 Aspid.-Aralia	オシロイバ・タセンシダ科	1 0%	1 0%	2 0%	1 0%	5 2%	7 2%	11 8%	3 1%	3 4%		
938 MONOCOTY-TYPE	クサリ科	1 0%	1 0%	2 0%	3 0%	3 1%	6 1%	1 1%	1 1%	0 2%		
999 THYLATE-TYPE-SPORE	裸子植物	9 4%	8 2%	17 4%	11 5%	15 7%	26 6%	18 14%	3 1%	30 26%		
計本種数	16	14	30	37	25	11	36	17	61	14%	42	32%
占本種数割合	86 40%	89 39%	100 37%	141 53%	136 65%	277 64%	101 77%	152 75%	53 70%			
木本樹種割合	218 49%	220 47%	451 48%	223 47%	209 37%	432 39%	132 37%	204 53%	76 27%			
草木樹種割合	199 44%	201 46%	425 49%	277 50%	284 50%	961 50%	142 39%	199 40%	145 52%			
灌木樹種割合	19 8%	20 7%	75 13%	53 10%	125 15%	116 11%	24 6%	7 8%	62 21%			
総割合	458	458	644	558	554	1119	391	595	241	28%		
312 Glycine	イネ科	58 58%	46 48%	104 52%	47 47%	58 58%	105 52%	24 31%	32 58%	20 49%		
313 Graminaceae (indistinct)	イネ科(不確)	13 13%	12 12%	25 13%	19 19%	28 28%	47 24%	12 26%	11 19%	5 12%		
314 Gramineae (others)	イネ科(その他)	26 29%	42 42%	71 36%	34 34%	14 14%	48 26%	11 23%	14 25%	16 39%		
イネ科割合	100	100	200	100	100	200	47	57	37	41		
合 计	458	458	793	1079	915	240	1765	128				
合 计 %	99.0	99.0										

第3表 花粉組成表

る。このような事象から、現存植生を人為的擾乱による残存植生と捉えると、温帯針葉樹林が冷涼な気候を示すとは考えにくい。また多くの針葉樹種は、カシ類などの極相林要素の樹種に比べ、地形・土壤条件が劣悪な環境でも生育している。このように土地条件を加味して植生を推定すると、ツガ、コウヤマキ、アカマツなどを主とする温帯針葉樹林は、讃岐山脈のみではなく、調査地周辺地域のベースを成す「砂礫がちな扇状地堆積物」(高桑 1973)上にも生育していた可能性が高い。

②古墳時代後期～古代

a 層では一軒して広葉樹が針葉樹の 1.5 倍程度の出現率を示す。

現存植生の高度分布を基にすると、b 層から a 層の変化は、気温の上昇に伴い温帯針葉樹林が縮小し、照葉樹林(あるいは二次林)が拡大したものと考えられる。一方、同時期は人為的擾乱の激しい時期でもある。針葉樹種の減少は、生活域に近い扇状地上の開墾や有用材採取のために、針葉樹が伐採されたことを示唆する。一方で堆積物内の木本花粉含有量の変化は乏しく(堆積状況が異なり、単純に比較

はできないが)、森林面積そのものが減少したとは考えにくい。したがって、開墾(草地化:森林の減少)ではなく、針葉樹伐採による二次林化と、それに続く極相林化が示唆される。

6まとめ

上東原遺跡発掘調査に係る花粉分析及び微化石概査の結果、以下の事柄が推定できた。

①発掘調査時に観察された堆積状況について、花粉化石の含有状況及び微化石概査結果から検証を行った。これらの結果は、観察結果をほぼ裏付けるものであった。

②調査地近辺には、イネ科、キク科、シダ類などからなる草地が広がっていた。また、SD05流域には水田も広がり、SD45内(あるいは水田内)には、ガマ類やオモダカ類が生育していた。

③弥生時代後半から終末期にかけては、調査地周辺の扇状地上をツガ、アカマツ、コウヤマキなどを主要素とする針葉樹林が覆っていた。また、近辺の丘陵上には、カシ類を主要素とする照葉樹林やコナラ林が広がっていた。

④古墳時代後期から古代にかけては、扇状地上の針葉樹(林)が伐採され、コナラ林やカシ林に変わった。

川崎地質株式会社

引用文献

- 中村 純(1977)植付とイネ花粉、考古学と自然科学、10、21-29。
高桑 札(1973) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類図)「高松南部」、香川県。

第2節 上東原遺跡 SD45 出土のウマについて

1はじめに

上東原遺跡は、香川県高松市鹿角町に所在する弥生・古墳・平安時代の集落跡である。県道太田上町志度線道路改築工事に伴い、2011年度(平成23年)に発掘調査が行われ、弥生時代後期後半から9世紀の大溝(SD45)が検出された。大溝の弥生時代前期末から後期後半の遺物を含む堆積層からウマの歯が出土しており、本稿でその概要について報告する。

2資料の観察

歯は整列した状態で検出された。歯は下顎骨および頭蓋骨にはまったく状態で埋没し、その後骨質部分は消失したものと考えられる。南側の一群をAグループ、もう一方をBグループとした。Aグループは下顎歯で、右頸は頬側が上を向いた状態で出土し、下顎第2前臼歯から下顎第3後臼歯が並び、下顎第4前臼歯と下顎第1後臼歯は残存状態が悪く計測不可であった。左頸は舌側が上を向いた状態で出土し、下顎第2前臼歯から下顎第3後臼歯までを確認することができたが、下顎第2前臼歯の口先側は残存状態が不良のため計測不可であった。

Bグループである上顎歯は、残存状態が不良で歯列が不明瞭であったが、2列に並ぶことから、上顎の左右と考えられる(註1)。下顎から違い並びに左上顎臼歯(第3前臼歯～第2後臼歯のいずれか)が確認できため、下顎資料に近いほうの並びが右上顎で、もう一方が左顎と判断した。検出された状況から、第4前臼歯の可能性が高い。

NO.	遺跡名	県名	所在	時代
1	上東原遺跡	香川	高松市	弥生後期～8世紀
2	瓦堀遺跡	香川	高松市	本・平安初期か。1996「皇朝御孫文化財発掘調査平成7年度」香川県教育委員会・財团法人香川県歴史文化財監査センター
3	東山崎・木田遺跡	香川	高松市	桂・奈良時代
4	高松城跡／丸塙	香川	高松市	16～17世紀
5	高松城跡	香川	高松市	中世～近世
6	大瀬沼遺跡	香川	坂出市	古墳・古代
7	川津一ノ丸塙	香川	坂出市	7世紀
8	川西北七条1遺跡	香川	丸龜市	弥生・中世～近世
9	水手塚跡	香川	西条市	古墳時代
10	矢ノ原遺跡	香川	西条市	弥生後期～8世紀
11	田神只塙跡	香川	西条市	古墳後期～9世紀
12	大門遺跡	香川	三豊市	古墳後期～古代
13	殿谷寺遺跡	鳥羽	柏原町	8～10世紀
14	庄遺跡	鳥羽	鷲島鳥羽	近世・近代
15	新宿3丁目遺跡	鳥羽	鷲島鳥羽	17～19世紀
16	鳥島城下町遺跡	鳥羽	鷲島鳥羽	中世末～近世
17	松山大学構内遺跡	愛媛	松山市	古墳時代～昭和
18	文宗池跡	愛媛	松山市	古墳・古代
19	野見遺跡	愛媛	松山市	18世紀後半～19世紀前半
20	姫島遺跡	愛媛	松山市	古墳・中世
21	久枝丘遺跡	愛媛	西条市	7～8世紀
22	八尺地遺跡	愛媛	伊予市	6世紀初期～末
23	久万高原町	愛媛	久万高原町	國文後期？
24	平城日ノ原	愛媛	佐渡町	國文？
25	赤原備塙跡	愛媛	今治市	古墳・中世
26	田井遺跡	高知	高知市	古墳
27	田井遺跡	高知	高知市	中世全
28	具岡山遺跡群	高知	中村市	古代～中世
29	高見遺跡	高知	高美市	中世
30	下ノ片遺跡	高知	高美市	古墳
31	居屋遺跡群	高知	土佐市	古墳前期～古代

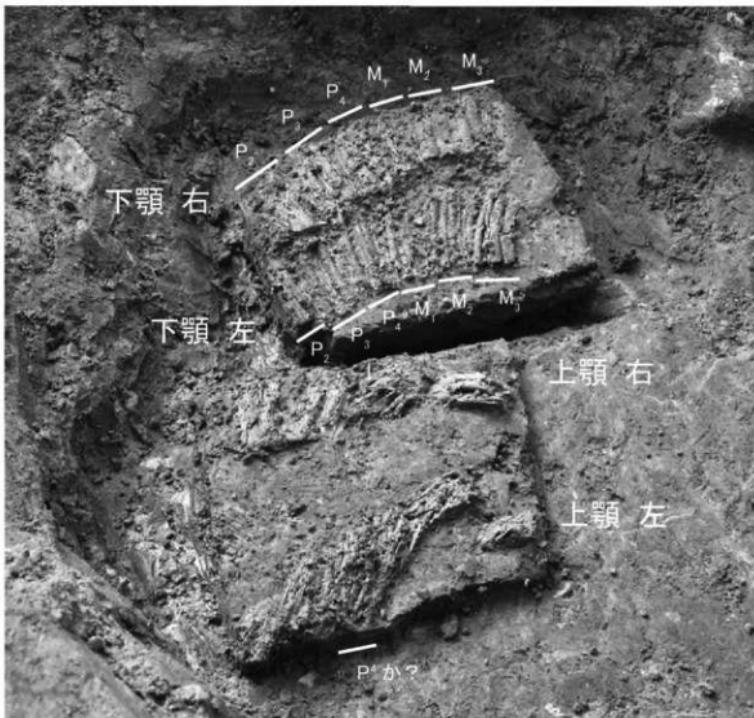
出土報告・参考文献

＊時代は、ウマの出土した時期を記した。

グループ	歯列	左右	全長 (mm)	歯冠高 (mm)	推定年齢
A	下顎 P2	R	33.45 ±	-	
A	下顎 P3	R	29.72 ±	58.07 ±	4 ~ 5
A	下顎 P4	R	-	-	
A	下顎 M1	R	-	-	
A	下顎 M2	R	26.47 ±	59.62 ±	7 ~ 8
A	下顎 M3	R	39.18 ±	54.58 ±	7 ~ 8
A	下顎 P2	L	27.79 ±	-	
A	下顎 P4	L	28.00 ±	59.32 ±	5 ~ 6
A	下顎 M1	L	-	58.68 ±	5 ~ 6
A	下顎 M2	L	24.37 ±	61.83 ±	5 ~ 6
A	下顎 M3	L	-	58.23 ±	6 ~ 7

*グループBについては、破損が強著のため計測不可

第5表 ウマの歯列および計測値



第117図 ウマ歯列

以上の観察事項から、1個体分の頭部の上顎と下顎が合わさった状態で同時に溝に投棄されたものと推測される。骨質部はほぼ完全に消失していることから、体部の骨も存在したが埋没の過程で消失した可能性が高い。また、資料の状態は良くないが、下顎歯の復元歯冠高を計測した結果から、5~7才の個体であったと推測される（註2）。

3 まとめ—四国地域へのウマの移入と利用研究の展望—

日本列島において、馬具や馬形埴輪の出土から、古墳時代にはウマが存在したことは確実である。香川県域においても、川津一ノ又遺跡（7・8世紀）や旧練兵場遺跡（弥生～中世・近世：ウマは主に古墳時代後期・古代、中世層から出土）などの複数の遺跡でウマが出土している（松井1998、石丸2013など）。本資料は弥生時代後期後半と考えられる堆積層中から出土しており、日本列島におけるウマの移入と利用を考えるうえで興味深い報告例となった（註3）。現在のところ日本列島最古のウマの出土例は、山梨県甲府市塙部遺跡の4世紀第3四半期の方形周溝墓から出土したものとされている（西本1996）。

日本列島全体で比較すると、東北や関東、近畿地方など多数の出土報告がある地域には及ばないが、これを契機にこれまでに報告されている四国地域でのウマの出土遺跡を調査した（第4表）。香川県においては前述した遺跡に加えて、兀塚遺跡（古墳末）や大浦浜遺跡（古墳・古代）、徳島県では阿波國府跡に関連する觀音寺遺跡（8～10世紀）や、近世ではあるが新蔵町3丁目遺跡や徳島城下町遺跡でもウマが出土している（藤好ほか1996、樽野1988、西本2008、富岡・沖田2000、富岡2004）。また愛媛県では、文京遺跡（古墳・古代）や姫原遺跡（古墳・中世）、松山城跡県民館跡地や番町遺跡などの近世遺跡で、また、高知県では原南遺跡（中世）や具同中山遺跡群（古代～中世）などで報告されている（田崎ほか2004、相原ほか1998、石丸ほか2011、石丸2008、出原1991、森田1995）。

以上のように、四国地域におけるウマの出土報告例を確認し、現状ではまだ限定的かつ少量ではあるが、古墳時代には導入が進み、古代には中枢的な機能を持った集落を中心に分布が広がっていったであろうことがうかがえる。遺跡の機能や規模を理解する上でも、今後ウマの出土には注視していく必要があり、ウシ利用との相違や移入種利用の時代的変遷など、今後四国地域の家畜種の出土事例には注目していきたい。また、四国地域にいつウマが持ち込まれ、どのように利用されたのかについて、周辺地域との比較も含めてさらに考察を深めたいと考えている。

謝辞

本稿作成にあたり、下記の方々に多大なるご協力とご教示をいただきました。記して、厚く感謝申し上げます。乗松真也氏（香川県埋蔵文化財センター）、菊地大樹氏（奈良文化財研究所）、覚張隆史氏（日本学術振興会・北里大学）、柴田昌児氏（愛媛大学埋蔵文化財調査室）

石丸恵利子（徳島大学埋蔵文化財調査室）

注

1 上顎資料は、報告書作成のための最終的な観察の際、手続きの都合上すでに年代測定用に試料が切り取られていたため、歯列の判断が明確にできなかった。反省とともに、今後、残された資料に付着した土壌を丁寧に取り除くことによって、再度観を試みたい。

2 計算式は、西中川駿編（1991）による。

3 ウマの歯の放射性年代測定が行われており、結果については別稿を参照いただきたい。

参考文献 *第4表に記した文献以外

- 西中川誠編 1991「古代遺跡出土骨から見たわが国の牛・馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部科学省科学研究費
補助金(一般研究B)研究成果報告、鹿児島大学農学部獣医学科
- 西本豊弘 1996「塙部遺跡 SY033号方形周溝墓」出土のウマ」「塙部遺跡－山梨県立甲府工業高等学校改築に伴う発掘調査－」
山梨県埋蔵文化財センター調査報告第123集、山梨県埋蔵文化財センター

第3節 上東原遺跡 SD45 出土ウマの年代測定

1 はじめに

香川県上東原遺跡の溝からウマの上・下顎の歯が出土した。溝からはウマの歯以外に弥生土器も出土し、弥生時代のウマでないかと疑われた。そこで、ウマの歯の年代を炭素14年代測定によって確認することとした。

2 資料について

ウマの歯は遺跡から土ごと取り上げられて、香川県埋蔵文化財センターに保管されていた。その土と歯の表面には石油系樹脂(アクリル系樹脂)を強化材が塗布されていた。そこで、保存材の影響を除去するために、土がつきの上顎歯を一個採集して国立歴史民俗博物館(以下歴博)に持ち帰ってきた。

歴博では歯の表面を除去し、歯の内部のエナメル質のみを年代測定試料として採取した。

測定は(株)パレオ・ラボにて行われた。

3 年代測定結果について

測定を依頼した(株)パレオ・ラボからの結果は以下のとおりである。

年代測定結果、 $1515 \pm 2014\text{CBP}$ であり、その較正年代は440calAD-485calAD(8.8%)、532calAD-605calAD(86.6%)である。 $\delta^{13}\text{C}$ は -13.28 ± 0.11 であり、雑穀類の摂取が推測される結果である。これから結果をみるとその年代は6世紀中葉から後葉である可能性が高い。

4 考察

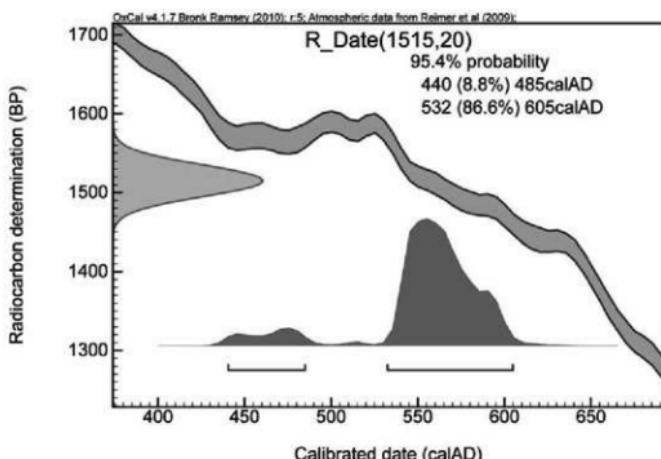
この資料はエナメル質を焼いて炭素14年代測定を行ったものである。そのため、外部からの影響がある可能性がある。特に、この資料は強化材が塗布されていたので、その影響を考えるべきである。もし、このアクリル系樹脂が混入して測定されたとすれば、非常に古い値がでる可能性が高い。ところが、測定結果をみると、古墳時代のものであり、強化材の影響は除去されたと推測される。

さらに、測定結果の $\delta^{13}\text{C}$ の値をみると、海の影響が考えられるが、少量の塩分や海藻・海産物の摂取が考えられる。つまり、海洋リザーバ効果により今回の結果は古くなっている可能性がある。

この状況を考慮して較正年代をみると、6世紀中葉から6世紀末である可能性が高く、もしくは新しいことである。このウマは出土状況から弥生土器との共伴により弥生時代のウマと考えられたが、測定結果、ウマの年代は古くなても5世紀代であり、弥生時代ではない。遺跡は古墳時代の遺構も確認されているので、このウマは古墳時代以後であるのが確実である。

測定番号	$\delta^{13}\text{C}(\text{‰})$	14C 年代	較正年代(calAD%)
PLD-19838	-13.28 ± 0.11	1515 ± 20	440-485(8.8) 532-605(86.6)

第6表 炭素 14 年代測定結果



第118図 測定試料の較正年代

5 おわりに

以上に述べてきたように香川県の上東原遺跡出土のウマの歯について炭素 14 年代測定を行った。その結果、古墳時代のウマであることが分かった。古墳時代では多くの遺跡からウマの骨が確認されているし、遺跡周辺も古墳時代の住居や遺構などが確認されているので、出土状況とも符合する結果であった。

謝辞

この資料の年代測定にあたり香川県埋文化財センター職員の方々にお礼を申し上げます。

西本豊弘(国立歴史民俗博物館研究部)・金憲爽(国立歴史民俗博物館外來研究員)

※所属は分析時

第4節 上東原遺跡 SD45 出土ウマの臼歯の ^{14}C 年代

1 はじめに

香川県高松市上東原遺跡にて弥生時代の地層からウマの臼歯が出土した。これまで、弥生時代以前に属するとされるウマの遺体は確認されていないため、考古関係者の興味を引いている。そこで、臼歯そのものを年代測定することで、弥生時代の日本にウマが存在したことを確証することが期待された。上東原遺跡から出土したウマの臼歯は粘土質土壤中に埋まっており、かなり風化が進んでいた。この臼歯が名古屋大学に持ち込まれ、名古屋大学年代測定総合研究センターに設置されているタンデトロン加速器質量分析計を用いて放射性炭素 (^{14}C) 年代測定が実施された。

2 動物の骨や歯の ^{14}C 年代測定の原理

自然界の炭素には、2種類の安定同位体 (^{12}C および ^{13}C) と1種類の放射性同位体 (^{14}C) が存在し、それらの存在割合はほぼ一定の値である。動物は、生存している間は食物の摂取を介して外界と物質交換を行なうため、体内にもつ炭素の同位体比は自然界におけるそれと平衡を保っている。しかし、死亡することによって外界との物質交換が停止すると、体内的炭素 ^{12}C 、 ^{13}C 、 ^{14}C のうち、 ^{14}C のみが放射性崩壊により時間経過と共に減少する。そこで、動物の骨や歯の炭素（例えば骨や歯のコラーゲンに含まれる炭素）につき、 ^{14}C の減少割合を測定することで、動物が死亡してから経過した時間を知ることができる。

3 試料と年代測定

(I) 馬の臼歯から回収された有機質フラクション中の炭素成分

以下に示す各試料調製段階を経て、臼歯中の有機質フラクションの炭素成分を回収し、 ^{14}C 年代測定に用いた。

① 試料の洗浄と粉碎

試料に付着した土壤や汚れを超音波洗浄やデンタルドリル等を用いて除去した後、蒸留水を用いて汚れがでなくなるまで超音波洗浄を行った。次に、臼歯を凍結乾燥した。乾燥した臼歯試料の計量を行い、ステンレス乳鉢で粉碎した。

② 塩酸による脱灰

得られた臼歯粉末 2.6g を蒸留水と共にセルロースチューブ（透析用チューブ）に入れ、冷蔵庫内（4～5°C）で 0.4N 塩酸に浸して 1 日間脱灰（臼歯の分解）を行った。脱灰終了後、塩酸を捨てて蒸留水に替えて透析を行って塩酸を除去した。塩酸が完全に除去されるまで蒸留水を繰り返し交換した。

③ 酸可溶性画分 (SC) の分離

セルロースチューブの内容物を遠沈管に移し、3000rpm で 10 分間遠心分離を行って溶液相を別容器に移した。冷凍庫内で予備凍結を行った後に凍結乾燥を行って、酸可溶性画分 (SC) 0.35mg を得た。残念ながら、 ^{14}C 年代測定には不十分な量であった。

④ アルカリ可溶性画分 (フミン酸 : HA) の分離

遠沈管内に残っている固形部分にアルカリ (0.1N 水酸化ナトリウム水溶液) を加え、数分間室温に保つ

試料名称	試料材料	コラーゲン抽出に用いたウマの臼歯の重量 (mg)	SC 収量 (mg) (収率 : %)	GC の収量 (mg) (収率 : %)	HA の収量 (mg) (収率 : %)
KGWHBI	ウマの臼歯	257152	0.35 (0.014%) (測定不可)	N.D. (測定不可)	204 (0.085%) (測定可能)

第7表 分析に用いたウマの臼歯の重量と回収された SC, GC 及び HA の重量

た。このアルカリ処理の後、遠心分離を行って溶液相を分離し保存した。

⑤ ゼラチンコラーゲン (GC) の抽出

遠沈管内に残った固形成分に蒸留水を加えて洗浄し、遠心分離した後上澄みを捨てた。0.1N 塩酸を加えてアルカリを中和し、遠心分離した後に上澄みを捨てた。再度蒸留水を加えて洗浄し、遠心分離し上澄みを捨てた。残った固形成分に蒸留水を数 ml 加え、ごく少量の塩酸で pH3 に調製し、ブロックヒーターを用いて 90℃で一晩加熱抽出を行った。溶液相を温かいうちに遠心分離して別容器に移し、冷凍庫内で予備凍結を行った後に凍結乾燥を行ってゼラチンコラーゲン (GC) を回収しようとしたが、ほとんど残らなかった。(第7表)

⑥ アルカリ可溶性画分 (HA) の回収

上記④でアルカリ溶液中に回収された HA を以下のようにして固形物として回収した。アルカリ溶液に 1.2N 塩酸を加えて溶液を酸性になると HA が沈殿した。上澄みを捨てて沈殿を回収し、蒸留水を少量ずつ加えながら湯煎して蒸発乾固により塩酸と水分を除去して、粉末状のアルカリ可溶性の HA を得た。(第7表)

⑦ アルカリ可溶性画分 (HA) からの炭素回収

前述のようにウマの臼歯からコラーゲンがほとんど回収できなかっため、臼歯を塩酸による脱灰をして得られた固形物についてアルカリ処理を行い、アルカリ溶液に抽出された HA 画分について、二酸化炭素を回収した。

HA 画分から二酸化炭素の回収は、以下のように行った。所定量(第8表)の HA を助燃剤(酸化銅)と共に石英管に真空封入し、850℃に加热して完全燃焼し、二酸化炭素、水その他の成分に分解した。ガラス真空ラインを用いて二酸化炭素のみを分離・精製して回収した。今回抽出した HA 成分からの二酸化炭素の收率は、もとの HA の重量に対する回収された炭素の重量の比として 18.0% と得られた。

試料名称	試料材料	炭素抽出に用いた HA の重量 (mg)	炭素収量 (mgC)(收率 : %)	グラファイト作成に使用した炭素量 (mg)
KGWHB-1HA	ウマの臼歯から採取した HA	204	0.368(18.0%)	0.368

第8表 炭素回収に用いたフミン酸 (HA) の重量と炭素回収量

(2) 馬の臼歯のエナメル質から回収されたハイドロキシアバタイト中の炭素成分

① 試料の洗浄と酢酸による炭酸塩の除去

(1) ①で説明したように、蒸留水を用いて超音波洗浄を行った臼歯試料について、0.1N 酢酸に漬して室温で 3 日間放置した。酢酸による処理を終了後、試料を蒸留水で繰り返して洗浄して酢酸成分を除去して凍結乾燥した。凍結乾燥した試料は重量を計測したあと、ステンレス乳鉢を用いて粉碎した。

② リン酸分解法による炭素の回収

二又フラスコに、粉碎した試料と 85% リン酸を分離して入れ、真空中に排気したあと両者を混合して二酸化炭素を発生させた。ガラス真空ラインを用いて発生した二酸化炭素を分離・定量・回収した(第9表)。

試料名称	試料材料	炭素抽出に用いた臼歯試料の重量 (mg)	炭素収量 (mgC)(收率 : %)	グラファイト作成に使用した炭素量 (mg)
KGWHB-3AP	ウマの臼歯	908.80	4.753(0.52%)	1.664

第9表 臼歯の無機成分 (ハイドロキシアバタイト) 中の炭素回収に用いた臼歯試料の重量と炭素回収量

(3) グラファイトの合成

上述のようにして回収した二酸化炭素2試料(第8・9表)につき、体積比で2倍量の水素と1~2mgの鉄粉(触媒)と共に石英管内に封入し、650°Cにて6時間以上加熱して二酸化炭素を水素還元し、元素態炭素(グラファイト)を得た。得られたグラファイトをアルミニウム製のホルダーに圧縮封入して、年代測定用に用いるターゲットを作成した。

(4) ^{14}C 年代測定

^{14}C 年代測定は、名古屋大学年代測定総合研究センターに設置されている加速器質量分析計(タンデムトロンAMS)を用いた(中村 1999・2001)。

上に示したようにして作成した測定用ターゲットをセシウムビームでスパッタすることにより、炭素のマイナスイオンを発生させる。炭素マイナスイオンはタンデム加速器によるエネルギー付与を経て、電磁石による質量分析(重さの違いによるふるい分け)にかけられ、 ^{12}C 及び ^{14}C は電流値として、 ^{14}C は1原子ずつのカウントとして計測される。測定に際しては、試料由來のターゲットに加え、炭素同位体比が既知の標準物質(NIST-SRM4990C シュウ酸標準体、通称はHOx-II)、および ^{13}C を全く含まないはずの炭素から合成したプランク試料(キシダ化学(株)製の特級シュウ酸(2水和物)試薬(57952))より作成されたターゲットについても併せて炭素同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比、 $\delta^{13}\text{C}$ 値)を測定し、三者の炭素同位体比の比較から ^{14}C 年代値が算出される。なお、 ^{14}C 年代値の算出にあたっては、試料及び標準物質の ^{14}C 濃度からプランク試料の ^{14}C 濃度を差し引き、さらにAMSで測定された $\delta^{13}\text{C}$ 値を用いて炭素同位体分別の補正を行い、また ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期である5568年を用いた(2003a)。 ^{14}C 年代値は、西暦1950年から過去へ遡った年数で与えられ、BP(before present)の単位で表示される(第10表、中村 1999)。

得られた同位体分別補正 ^{14}C 年代を、 ^{14}C 年代 - 歴年代較正曲線(IntCal09、Reimer et al. 2009)および較正プログラム OxCal4.1(Bronk Ramsey 2009)を用いて歴年代に較正した(第10表、中村 2003b)。較正年代は、歴年代に相当する年代としてcal ADで示してある。 ^{14}C 年代を表すBPと対比して、cal(calibrated)は較正された年代を示す略記である。較正年代は、2標準偏差で、可能性の範囲とその相対的確率で示される(第10表)。較正年代の可能性の範囲は、IntCal09較正曲線の凸凹な変動(第119・120図)に応じて複数個の範囲が存在することがある。

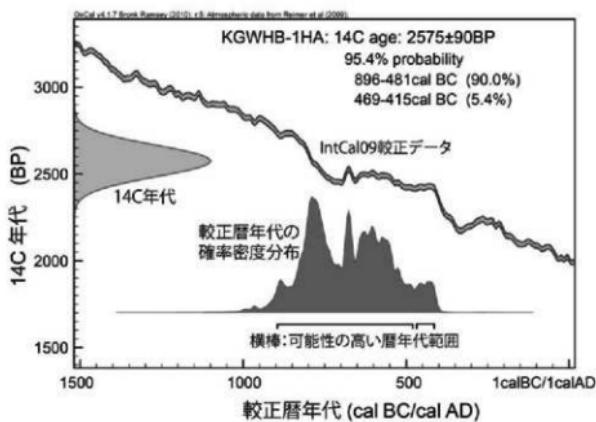
試料名	試料材料	^{14}C 年代 ($\pm 1\sigma$) (BP)	^{14}C 年代を歴年代に較正した 較正年代範囲($\pm 2\sigma$ の範囲) (可能性の確率: probability)	$\delta^{13}\text{C}^*$ by AMS (‰)	実験室測定番号
KGWHB-1HA	ウマの臼歯	2575 \pm 90	896 - 481 cal BC (90.0%) 469 - 415 cal BC (5.4%)	-20 \pm 1	NUTA2 -20474
KGWHB-3AP	ウマの臼歯	1446 \pm 30	cal AD564 - 653 (95.4%)	-10 \pm 1	NUTA2 -20867

第10表 香川県高松市上東原遺跡から出土したウマの臼歯試料の ^{14}C 年代及び較正歴年代

* $\delta^{14}\text{C} = [^{13}\text{C}/^{12}\text{C}_{\text{sample}} / (^{13}\text{C}/^{12}\text{C}_{\text{PDB}} - 1) \times 1000] \text{ ‰}$
ここで、PDBはFee Doe Belemniteの化石で炭酸カルシウムからなる化石類の化石であり、 $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比の標準体として用いられる。ここに示した $\delta^{13}\text{C}$ はAMSで測定した。測定誤差は $\pm 1\%$ と推定される。

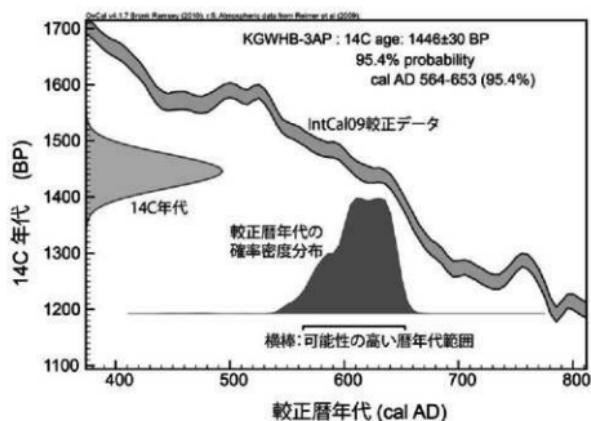
4 測定結果と考察

ウマの臼歯から抽出されたアルカリ可溶性画分(HA: KGWHB-1HA)および臼歯のエナメル質から回



校正により得られた確率密度分布のうち、2標準偏差の可能性の範囲は 896-415 cal BC の間に広がっている。

第119図 ウマの臼歯のアルカリ可溶性画分 (KGWHB-1HA) の¹⁴C年代 (2575 ± 90BP) の暦年校正結果



第120図 ウマの臼歯のハイドロキシアバタイト中の炭素 (KGWHB-3AP) の¹⁴C年代 (1446 ± 30BP) の暦年校正結果

取されたハイドロキシアバタイト (KGWHB-3AP) につき得られた ^{14}C 年代及び較正暦年代を第10表に示す。また、第119図及び第120図にそれぞれの ^{14}C 年代を暦年代に較正した際に得られた暦年代の確率密度分布を示す。

同じ試料から抽出した2種の炭素成分であるが、互いに異なった年代を示した。KGWHB-IHAは、白歯が出土した堆積層の推定年代（弥生時代）と一致している。この画分は、歯牙コラーゲンはほとんど回収が困難であったため、白歯を脱灰後の残留固形物からアルカリ水溶液で抽出したフミン酸である。従って、白歯が本来持っていた有機物ではなく、白歯が土壤中に埋まっていた間に、土壤中の有機物が白歯の風化に伴って白歯中に侵入してきた物質である可能性が高い。実際、KGWHB-IHAは堆積層の推定年代とはほぼ一致している。

一方、ハイドロキシアバタイトは白歯の無機成分を構成する主要素であり、考古学分野において骨や歯の ^{14}C 年代測定に利用されつつある。まだ開発の段階といえるが、今回、ハイドロキシアバタイトを用いた年代測定を試みた。その結果は、6世紀中葉から7世紀中葉の範囲を示した。この年代値は、弥生時代の日本ではウマの存在が確認されていないことと調和的である。

今回の ^{14}C 年代測定では、測定対象であるウマの白歯の保存が悪くゼラチンコラーゲンの抽出が困難であった。このため二次的に用いられる方法で抽出した炭素成分を用いて ^{14}C 年代測定を行った。このようなことから確定的な結論は難しく、試料を保存して今後の研究に期待したい。

中村俊夫・池田晃子（名古屋大学年代測定総合研究センター）

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1) 337-360.
- 中村俊夫 (1999) 放射線炭素法。考古学のための年代測定入門。長友恒人 (編)。古今書院。1-36。
- 中村俊夫 (2001) 放射性炭素年代測定とその高精度化。第四紀研究, 40 (6) 445-459。
- 中村俊夫 (2003a) 加速器質量分析 (AMS) による環境中およびトレーサ放射性同位体の高感度測定。Radioisotopes, 52 (3) 144-171。
- 中村俊夫 (2003b) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正。環境考古学マニュアル。松井 章編著。同成社。301-322。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk, R.C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, L., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J., Weyhenmeyer, C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 51(4), 1111-1150.

第5節 自然科学分析の目的と結果に関するコメント

1 花粉分析

弥生時代後期に開削され（開削時期は前期にさかのばる可能性もある）、古代に埋没する上東原遺跡の水路 SD45は、長期間オープンな状態で花粉化石の一定量の堆積が見込まれ、層位によって出土遺物の時期差が明瞭である点から、層位ごとに試料を採取して花粉分析を行った。分析の目的は周辺の植生推移の復元である。

結果、弥生時代後期に扇状地上に広がっていた針葉樹林が、古代にはコナラ林やカシ林に変化したことが推定された。高松平野では良好な花粉分析の事例が多くなく、今回の植生推移が平野全体に適用できるのか、局地的なものかは判断できない。特に後者の場合には、植生への人為的な関与の度合いを高く見積もる必要もあり、遺跡の評価にもかかわる。今後の他遺跡での分析データの蓄積を期待したい。

また、SD45の周辺には水田が広がっていた可能性が示唆されており、この点は、遺構としての水田が残存していないなかで、SD45(および周辺の水路網)の機能を推定する材料となる。

2 ウマの同定

上東原遺跡 SD45c層からは動物の顎と思われる資料が2ブロック(A・Bグループ)出土し、この資料について同定を行った。

同定の結果、出土資料は1個体のウマの上下顎と判断された。SD45c層は出土遺物から弥生時代後期後半の堆積層と考えており(第3章参照)、ウマが当該期のものであれば全国でも最古の例になる。

3 ウマの年代測定

ウマの時期特定は慎重に行う必要があると考え、年代測定を国立歴史民俗博物館と名古屋大学年代測定総合研究センターで実施した。

測定の結果、①紀元後6世紀中葉～末(第3節参照)、②紀元前5～9世紀(第4節参照)、③紀元後6世紀中葉～7世紀中葉(第4節参照)、のデータが得られた。

SD45c層には弥生時代前期の土器も含まれ、開削時期が前期にさかのほる可能性もあるが、②の年代は土器よりもやや古い時期を示している。

①・③は近い年代であり、ウマが6世紀中葉～7世紀中葉であれば弥生時代後期後半とするSD45c層の時期とは合わない。この場合、(i)溝の上位から別遺構が掘り込まれている、(ii)SD45c層が6世紀中葉～7世紀中葉の堆積層である、の2つよりの可能性が考えられる。土の堆積状況や溝の底面からウマが出土したことなどから(i)のケースは考えにくい。(ii)のケースは、SD45c層から6～7世紀の遺物が「偶然」出土していないのであればありうる。ただし、SD45にはa層(古代埋没)まで含めても6～7世紀の遺物はなく、周辺にも6～7世紀に断定できる遺構は存在しないため当該期の生活痕跡を見出すことが難しい。唯一、SD52(古代埋没)出土のはそう片(283)は6～7世紀の可能性があり、この資料を積極的に評価すれば、当該期にウマが持ち込まれていたとみることも可能である。

弥生時代後期後半と考えるSD45c層の埋没時期を6世紀中葉～7世紀中葉にまで下げて断定するのは、資料的な制約がある現状では避けたい。出土遺物からの遺構の時期特定の限界性も踏まえて、SD45の時期については今後の検討課題としたい。

乗松真也

第6章 まとめ

第1節 上東原遺跡の水路と弥生時代集落

1 水路の変遷

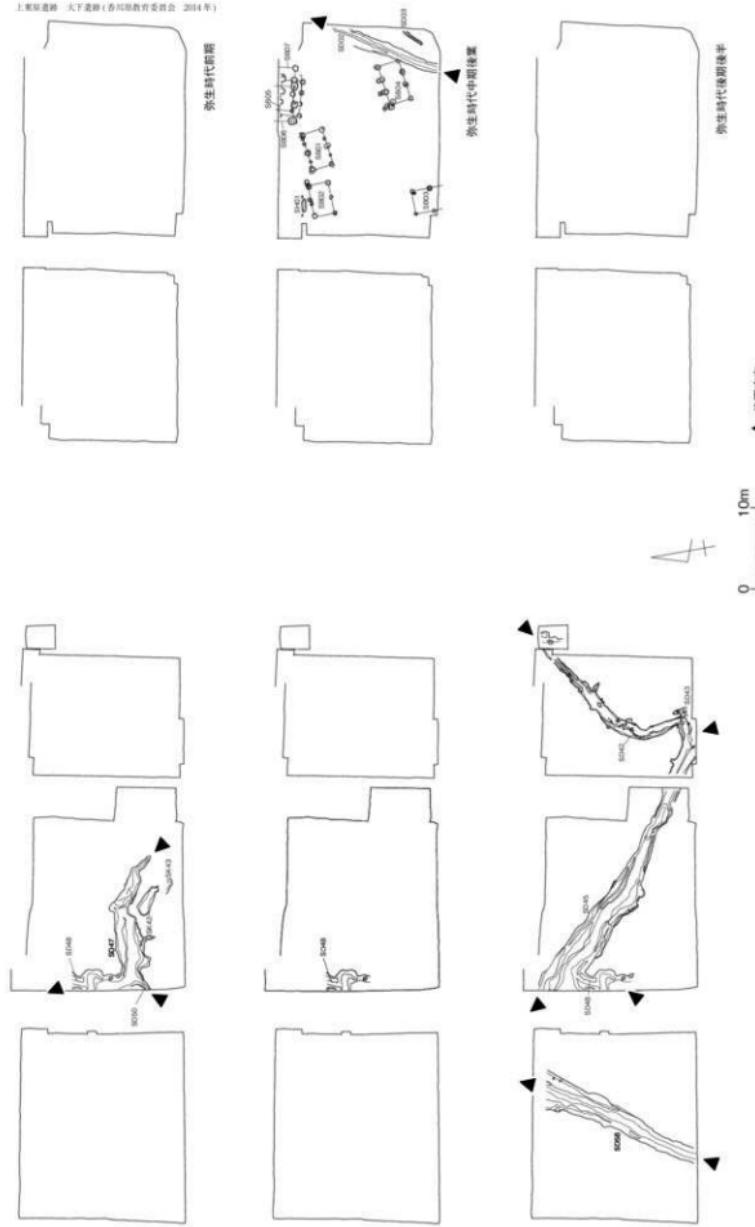
上東原遺跡では水路網とみられる溝群を検出している。詳細な層位関係や出土遺物は第3章に譲り、ここでは時期別の水路間の関係について概要を述べる。

弥生時代前期には南東から西へ蛇行しながら流下するSD47と、南西から流入するSD50がSD48で合流して北流する。SD47の南西に遺構は確認されなかったが、流入する水の供給源と後の削平を考慮すれば、SD47に連続する溝が存在した可能性は十分にある。また、落ち込み状の遺構SK42・43は削平され残ったSD47の一部と思われる。

SD47・50は中期を待たずに埋没するが、SD48は完全には埋まり切らず、窪地に近い状態であったようだ。この間、おそらく水路としては機能していないだろう。中期後葉には1・2区に南西から北東へ向かう直線的な水路SD02が設けられる。SD03はSD02から派生する小規模な水路であろう。これらの水路は中期末には埋没する。

後期後半には6～9区を横断するかたちで南東から南西へ流下する直線的な水路SD45が開削される。SD45は9世紀の最終埋没まで数百年間オープンな状態であり、調査地内最下流の9区では断面面積が3.1m²となる。長期間にわたっての機能と断面面積の大きさからはSD45を基幹的灌漑水路(大久保1995、信里2008)とみなせるだろう。前期の水路SD47は埋没しているが、中期から後期前半にかけては窪地であったSD48を利用するかたちでSD45が設けられたようだ。SD48もSD45に接続することで再び水路としての役割が与えられていた可能性がある。この時期の基幹的灌漑水路は「埋没などの老朽化が進んだ弥生前期に開削された灌漑水路に近接して見られる事例が多い」(信里2008)とされ、この点を踏まえれば、上流にはSD47の残骸もあり、それを利用してSD45が形成されたのかもしれない。10・11区に出現する直線的な水路SD58は、調査地外でSD45と合流するとみられる。北東から流入するSD42は湾曲してSD45に合流する。

高松平野は大局的には南西から北東にかけて緩やかに傾斜している。上東原遺跡が位置するのは高松平野の中央部で、平野内最大の河川、香東川の右岸である。周囲には香東川から派生する小河川や水路があり、埋没した旧河道とみられる低地もみられる。第122図は遺跡の周間に広がる条里型地割の乱れや現状の土地の高低などから上東原遺跡周辺の旧河道を推定した図である。上東原遺跡の東には現在でも小規模な水路があり、周囲の地割の乱れを含めて河道Aとした。水路との位置関係からみて河道AはSD58の取水、SD45の排水を担っていた蓋然性が高い。SD45の取水源は不明だが、約300m上流の推定河道に求められる可能性もある。つまり、後期後半には河道の流路を利用した灌漑水路網が形成されており、これは「弥生時代後期には基幹的灌漑水路を中心として最も多くの灌漑水路が開削される」(信里2008)香川県内の状況と符号する。



第121図 水路変遷図

第122図 周辺発生時代遺構位置図



2 水路周辺の土地利用

灌漑水路による導水の目的のひとつに水田経営が考えられるが、流域のどの程度の範囲に水田が伴うのかはわからない。SD45では花粉分析から当時の植生復元を試み、イネ科花粉の50%以上をイネ属花粉が占める結果を得て、9区のSD45周辺には水田が広がっていた可能性が指摘されている（第4章第1節参照）。少なくとも上東原遺跡の基幹的灌漑水路であるSD45の流域には水田が広がっていたとみていいだろう。また、SD42は6区で湾曲せず直線的に伸びていたとしてもSD45には接続する。湾曲は地形的な理由によるものかもしれないが、湾曲部分には護岸目的の杭列らしき遺構も確認され、流路の維持が図られていたと推測できる。そうであれば、水路の周囲は草原や放棄地ではなく、たとえば水田のような土地利用が行われ、それによって流路が規制されていたとも考えられる。

3 水路と集落

中期後葉には1・2区で堅穴建物や掘立柱建物が展開し、近隣に水路が掘削される。一方、SD42・45・58が開削され水路網が大規模となる後期後半には居住遺構は確認できない。やや広い範囲でみると、大下遺跡には後期後半の堅穴建物2棟があり（第3章参照）、太田原高州遺跡では区画墓内に堆積した後期後半のおびただしい土器量から直近に居住遺構の存在が考えられる。上東原遺跡の後期後半の水路群から最も近い大下遺跡までは300m近い距離がある。

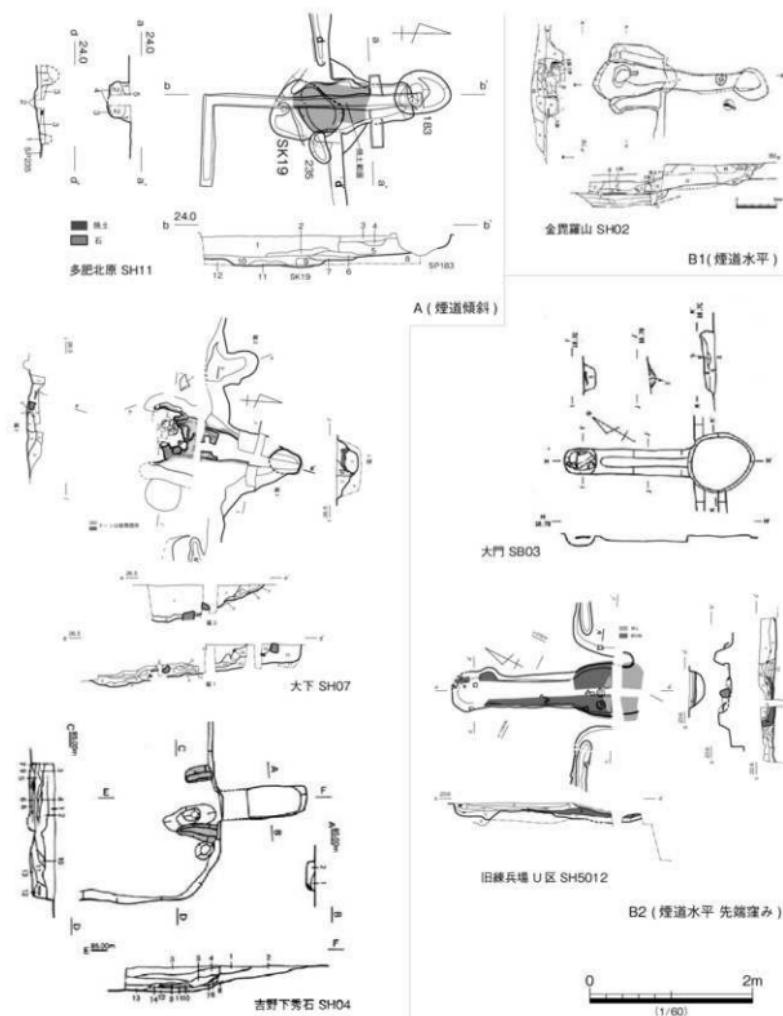
中期中葉を中心とする多肥松林遺跡や日暮・松林遺跡などでは居住遺構と水路は比較的近接して築かれる。後期後半では、空港跡地遺跡のように居住遺構のある微高地を水路が通る例もあるが、水路のみが確認される遺跡も多い。中期とは異なり、後期後半は必ずしも水路に近接して居住遺構が築かれるわけではない。中期に比べて後期の遺跡数は増加するものの、その割に居住遺構がさほど増えない状況（信里2008）は、居住域から離れた場所にも水路が開かれるとの表れであろう。水路を水田を含む農業などの生産にかかる遺構であるとすれば、生産の場が居住域から多少離れていても管理可能であったともいえる。後期後半には、中期に比べて、居住域から生産の場へ関与する範囲（領域？）が広がっているのかもしれない。

第2節 地域差からみた大下遺跡の造り付け竈

1 大下遺跡と周辺の造り付け竈

大下遺跡ではTK217～46型式並行期（以下、～期とする）の堅穴建物15棟が検出されており、うち4棟は造り付け竈（以下、竈とする）をもつ。残りの11棟の堅穴建物についても、四辺が検出されていない、削平を被っているなどの状況から竈を伴っていた可能性がある。残存しているものに限れば、大下遺跡の竈はいずれも置き土で床面から袖部が立ち上がって燃焼部を構成する。特に良好な残りのSH07を例にすれば、掛け口は1口で、燃焼部床面には支脚となる礫1石を有する。地下構造の煙道は、オープンカットで溝状に掘削された後、地下が筒状の空間になるよう天井部が埋め戻されている。煙道は約10°の緩やかな傾斜をもって伸び、先端部で垂直に立ち上がって煙り出しにいたる。

大下遺跡から900m東に位置する多肥北原遺跡では9基の堅穴建物で竈が確認されている。このうち、



第123図 竪分類図

第11表 香川県内堅穴建物造り付け窓一覧 (1)

第12表 松川里内豎穴建物造り付け面一覧 (2)

2基(SH02・11)についてはいずれも大下遺跡同様、袖部から置き土で構築されている。残存状況が良好ではないものの、6基の竈も置き土の蓋然性が高い。残る1基(BSH01)には袖部の基部1~2cmの削り出しが認められるようだ。SH11の煙道は残りが良く、大下遺跡 SH07 竈1と同じく溝状に掘られた後、埋め戻しによって天井部が構築されている。煙道先端部にあるSP183を煙出しの一部とみれば、煙道は若干の傾斜をもって伸び、煙出し付近で垂直方向に屈曲する。TK217期の高松平野中央部では置き土による袖部の構築を基本とし、緩やかな傾斜(7°)の煙道をもつ、という竈の構造をほぼ共有する。

2 竈の導入と変遷

高松平野では、空港跡地遺跡のTK47期の堅穴建物6棟に伴う竈が最も古い。同時期の太田下・須川で検出された堅穴建物5棟には竈の痕跡を看取できないため、竈出現期の高松平野では竈の受容に差があったようだ。現在のところ、調査中の萩前・一本木遺跡を除いて高松平野では6世紀~7世紀前葉(MT15~209期)の堅穴建物が報告されていないため、この間の竈の状況は不明である(註1)。大下遺跡や多肥北原遺跡を参照すれば、TK217型式期にはほぼすべての堅穴建物が竈を備えるようになる。

一方、丸亀平野に位置する旧練兵場遺跡では、TK208~23期の堅穴建物S区SH1037に竈が設置されており、これが香川県の出現期の例となる。破壊された煙道の状況は不明だが、袖部は床面から置き土で構築、支脚は1石のため掛け口は1口と推測される。旧練兵場遺跡では、これ以後、7世紀後半まで連続して堅穴建物が築かれる。多数の遺構が重複するため堅穴建物の全体構造が判明する例は多くないが、TK47期までは竈をもたない堅穴建物もある。MT15期以降のどこかで竈を伴う堅穴建物が基本となるのだろう。

香川県内では、TK47期の空港跡地遺跡例を除いて2口の掛け口を有する竈は確認されていない。基本的には一つ掛け竈である。この状況は、西日本が一つ掛け竈を主体とするという杉井健の指摘(杉井1993)に合致する。



第124図 竈分布図

3 窯構造の地域差

大久保徹也是吉野下秀石遺跡の竈を1・2類に分類した。1類は袖部を堅穴建物床面から置き土で築き、煙道が長く水平に延びるもの、2類は削り出しで袖部の基礎を作出、なだらかな勾配の短い煙道をもつものである。丸亀平野北東部に位置する下川津遺跡では2類が多く、吉野下秀石遺跡を含む同平野西部以西では1類が卓越するという地域性を指摘した(大久保 1997)。

袖部構築方法と煙道形状という要素は、良好な残存状況に恵まれることの少ない竈を一定数検討対象とするために有効な指標といえる。高松平野や丸亀平野での資料数が増加した現在、あらためて、この2要素から香川県内の竈を検討してみたい。

竈の袖部は置き土によるものが多数を占め、堅穴建物形成時に袖部の基礎を削り残しておく竈は、下川津遺跡で可能性のある事例が一定割合認められる。下川津遺跡でも主流は置き土の袖部と推測されるが、一定割合を積極的に評価すれば、削り出し袖部は下川津遺跡の特徴ともいえる。

煙道床面は、上方に傾斜しながら煙り出しにいたるものと、水平のものに分類され、ここでは前者を煙道A、後者を煙道Bとする。さらに、煙道床面が煙り出しまで水平なものをB1、先端部付近で一段窪むものB2に細分する。煙道Aは大下遺跡や多肥北原遺跡など高松平野を中心とした地域に分布し、煙道Bは金毘羅山遺跡や丸亀平野以西といった煙道Aの周辺地域にみられる(註2)。特に煙道B2は旧練兵場遺跡、吉野下秀石遺跡、大門遺跡と西寄りの分布が明瞭である。

両要素の分布をみると大久保が設定したような相関関係は少なく、香川県内での地域差は煙道構造により現れているようだ(註3)。

4 造り付け竈と移動式竈

造り付け竈は火を炊いて調理目的で煮炊きするための施設であるが、同様の機能を担うものに移動式竈が知られている。大下遺跡では移動式竈は出土しておらず、堅穴建物に造り付け竈が付設するために移動式竈の必要性がない点を理由としては考えやすい。近隣の多肥北原遺跡でも同様の状況にある。ところが、渡邊淳子による移動式竈の集成や(渡邊 2003)、近年の調査成果から得られた移動式竈の出土状況に造り付け竈のデータを重ねると、下川津遺跡や旧練兵場遺跡では造り付け竈付設堅穴建物に移動式竈が伴う事例が判明する。また、川津一ノ又遺跡や川津川西遺跡では、造り付け竈を備える7世紀の堅穴建物には伴わないものの、流路や溝などの遺構から移動式竈が出土しており、同一遺跡で同時期に造り付け竈と移動式竈が存在することは確実である。造り付け竈付設堅穴建物出土の移動式竈について、同建物での使用を断定するまでには手続きが必要と考えるが、两者を備えた堅穴建物の存在の可能性には言及できるだろう。その場合、両竈の機能差や使用局面の差などがその背景として考えられようか。少なくとも、大下遺跡や多肥北原遺跡のある高松平野と、下川津遺跡や旧練兵場遺跡に代表される丸亀平野では、移動式竈の取り扱いに差異がある点は指摘できる。

以上の検討を踏まえると、高松平野に位置する大下遺跡や多肥北原遺跡は、造り付け竈の煙道床面が傾斜する点、造り付け竈に移動式竈が伴わない点から、旧練兵場遺跡などとは煮炊きの場である調理空間の設置や、煮炊きのスタイルが異なることが指摘できる。

註

1 以下、萩前・一本木道路の内容は高松市埋蔵文化財センターの教示による。萩前・一本木道路ではTK10期には竈が確認できるとのことである。

- 2 金毘羅山遺跡は MT15期で、比較対象の他例が TK43～217期であるため、高松平野より東に位置する金毘羅山遺跡で遺道Aが分布するは地域差ではなく時期差の可能性もある。
- 3 瓢が良好な状態で記録された報告は多くない。特に袖部の構造は、瓢に対する認識不足が原因で調査データがなく状況不明なものも多い。

第3節 高松平野における6～7世紀の集落動向と大下遺跡

1 集落の動向

大下遺跡では TK217～46期の堅穴建物15棟、掘立柱建物7棟を検出している。特にI区では堅穴建物が数棟重複し、調査対象地外の北方に展開する可能性もある。つまり、この時期に居住遺構が集中して築かれる場所ともいえる。このような大下遺跡の状況を理解するために、高松平野での居住に伴う遺構の変遷を確認したい。

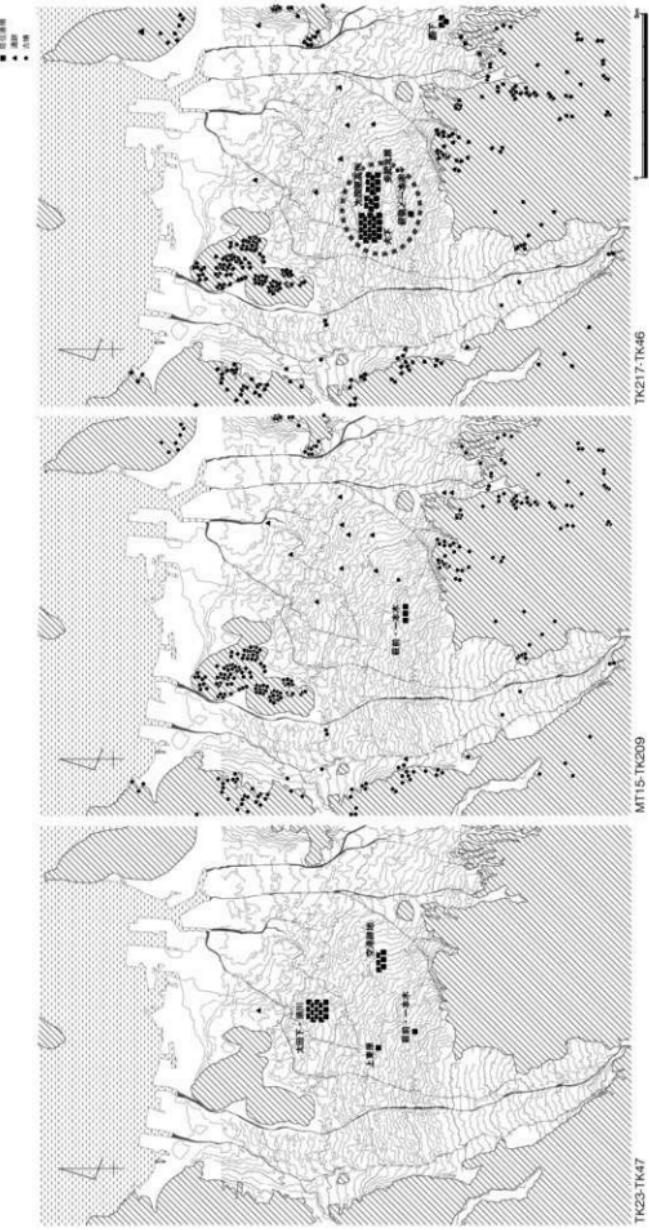
高松平野では、TK23～47期に太田下・須川遺跡と空港跡地遺跡で居住遺構が確認できる。現在調査が進められている萩前・一本木遺跡でも同時期の居住遺構があるようだ（註1）。太田下・須川遺跡は堅穴建物と掘立柱建物で構成する集落、空港跡地遺跡は堅穴建物のみが確認される集落である。また、瓢は空港跡地遺跡にのみ導入されるように、集落内の構造や建物構造に差異が認められる。続く6世紀には、萩前・一本木遺跡で TK43～209期を中心に堅穴建物などが展開するが、それ以外の遺跡では須恵器の出土はあっても居住遺構は確認できない。TK217期になると、大下遺跡の近隣の太田原高州遺跡や多肥北原遺跡に堅穴建物を中心とした集落が築かれる。多肥北原遺跡では大下遺跡同様、堅穴建物が重複するように配されている。また、高松平野東部の西下遺跡では大型の掘立柱建物3棟が確認されており、柱穴や上位の包含層出土遺物から TK217期と考えられている。

以上をまとめると、TK23～47期に高松平野の数箇所に点在していた居住遺構は、直後にははっきりとは見えなくなる。TK43期には高松平野中央部の萩前・一本木遺跡にある程度まとまった居住空間が設けられ、TK217期になると1kmほど北の大下遺跡や多肥北原遺跡で多数の堅穴建物が築かれるようになる。両遺跡では堅穴建物が重複して築かれており、居住地を形成する場に固執しているようにもみえる。西下遺跡のような掘立柱建物数棟の集落もあるが、高松平野、特に香東川右岸の発掘調査事例の蓄積を考慮すれば、大下遺跡周辺の平野中央部に居住遺構が集中する集落が形成されていることは指摘できそうだ。すなわち、大下遺跡の堅穴建物が築かれる TK217期は、高松平野での居住遺構の増加と集中といった特徴をもつ画期と評価できる。

2 古墳との比較

6世紀には横穴式石室を主体部とする古墳が築かれ、飛鳥時代に入る7世紀にも追送は継続され、一部の古墳の構築も続く。第121図には集落とともに古墳のドットも表示している。なお、TK23～47期築造と断定できる古墳はなく、以降の古墳についても築造時期や追送期間の認定が明らかな事例は少數である。そのため、図は厳密なものではなく、後期古墳のおおまかな分布傾向を知るためのものになっている（註1）。

MT15期以降の図をみると、高松平野での後期古墳の分布は、平野北部の石清尾山と周囲の山塊、西部の五色台山麓、東部の前田丘陵、南部の4箇所に集中域がある。これらの古墳の築造基盤を高松平野



第125図 6-7c 集落変遷図

内の集落に求めるのであれば、平野中央部にまとまる萩前・一本木遺跡および大下遺跡、多肥北原遺跡が候補となる。集落との距離でいえば石清尾山と周辺の山塊か南部が近く、石清尾山周辺は4地域のなかでは最も古墳の数が多い。また、いわゆる巨石墳は五色台山麓や前田丘陵にある。平野中央部の集落が、どの地域の古墳と関係があるのか推測するのは困難であるが、TK43期以降、平野中央部以外にまとまつた集落がないことを踏まえれば、4か所いずれもが候補となりうる。

ただし、横穴式石室墳の築造時期は、一般的にはTK209期までが多数を占めるだろうから、古墳の築造とTK217期の集落動向の画期は結び付かない可能性もある。古墳の築造と集落の関係については萩前・一本木遺跡の集落動向も重要な要素となるため、萩前・一本木遺跡の成果や古墳の築造時期や追送期間が明らかになった時点で再度検討したい。

3 高松平野における集落動向の画期としての大下遺跡

高松平野では、居住構造の増加と平野中央部への集中がみられるTK217期が集落動向の画期であり、大下遺跡はこの画期を示す集落である。大下遺跡や多肥北原遺跡では、同じ地点で建物の建て替えが行われており、居住域が限定されている印象を受ける。居住域外の状況は不明だが、たとえば生産域など周辺の土地利用に居住域が規制されているのかもしれない。また、大下遺跡では堅穴建物の主軸はほぼ2方向に限られ、多肥北原遺跡でも数度の幅のなかに収まる。居住域の集中と堅穴建物の限られた主軸方位は、居住域とその周辺域が計画的に空間配置されている可能性を示唆する。

また、高松平野における居住構造のTK217期における増加は、6世紀以降、旧練兵場遺跡で連続と居住構造が形成され続ける丸亀平野のあり方とは対照的にみえる。TK209期以前に居住構造が形成されている萩前・一本木遺跡は大下遺跡から約1kmの距離にあり、萩前・一本木遺跡から大下遺跡や多肥北原遺跡などへの集落立地の移動は考えやすい。ただし、居住構造数の大幅な増加は萩前・一本木遺跡からの移動だけでは説明ができない。この場合、平野外からの移動も視野に入れる必要があるが、堅穴建物の造り付け窓や移動式窓にみられる調理スタイルの差異から、移動元は丸亀平野以外に求めることになるだろう。

註

- 「香川県道路地図」に掲載されている古墳のうち、前～中期を除いて、主体部が横穴式石室と推測されるものをドットで示している。大半のものは築造時期と追送期間を断定できないため、MT15期以降の2枚の図の両方にドットがある。

参考文献

- 大久保徳也 1995 「基幹的灌漑水路と灌漑単位」香川県埋蔵文化財調査センター編『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6巻 上天神道路』
大久保徳也 1997 「吉野下秀石道路の発掘調査」香川県埋蔵文化財調査センター編『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成8年度』
木下晴一 1991 「桑里型地割施工以後の微地形変化－丸亀市瓶野町付近的事例－」『香川地理学会会報』11
杉井 健 1993 「畿の地域性とその背景」『考古学研究』40-1
信里芳紀 2008 「大溝の検討－弥生時代灌漑水路の位置付け－」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』IV
渡邊淳子 2003 「讃岐における古代移動式窓について」普通寺市教育委員会文化振興室編『四国学院大学構内道路発掘調査報告書』
- 発掘調査報告書
福本遺跡：福本遺跡発掘調査団編 1989 「福本遺跡～県道西白方善通寺線櫻敷路切削工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～」
太田原高州遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2011 「香川県埋蔵文化財センター年報 平成22年度」／香川県埋蔵文化財センター編 2012 「香川県埋蔵文化財センター年報 平成23年度」
川津一ノ又遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1997 「中小河川大東川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺

- 跡・香川県埋蔵文化財調査センター編 1998 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第30冊 川津一ノ又道路跡」
川津川西道路跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 1999 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第33冊 川津川西道路跡、飯山一本松道路跡」
旧練兵場道路：香川県埋蔵文化財センター編 2013 「独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 旧練兵場道路」
空港跡地道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 2002 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 空港跡地道路V」
／香川県埋蔵文化財センター編 2004 「空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 空港跡地道路VI」／高松市教育委員会編 2011 「高松市埋蔵文化財調査報告書第134集 住宅型有料老人ホームリモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空港跡地道路跡」
金毘羅山遺跡：香川県埋蔵文化財調査センター編 2000 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第36冊 金毘羅山遺跡I 塔の山南道路 府の谷道路」
佐古川・鶴田遺跡：香川県埋蔵文化財センター編 2006 「一般国道32号接続バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 佐古川・鶴田道路」
四国学院大学構内遺跡：善通寺市教育委員会文化振興室 2003 「四国学院大学構内遺跡発掘調査報告書」
下川津道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 1990 「伊弉大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津道路」
大門遺跡：香川県教育委員会編 1987 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 大門遺跡 矢ノ岡道路 利生寺道路 利生寺古墳 北条道路 道免道路」
多肥北原道路：香川県埋蔵文化財センター編 2012 「県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥北原道路」
多肥平塚道路：香川県埋蔵文化財センター編 2013 「県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 多肥平塚道路」
多肥松林道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 1999 「高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 多肥松林道路」
俊正道路：香川県埋蔵文化財センター編 2008 「一般国道32号接続バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 俊正道路」
仲村廢寺：善通寺市教育委員会編 1989 「仲村廢寺～旧練兵場道路における埋蔵文化財発掘調査報告書～」
西下道路：高松市教育委員会編 2008 「西下道路 高松市十河小学校校舎建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
林・坊城道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 1993 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 林・坊城道路」
東中筋道路：高松市教育委員会編 2001 「都市計画道路東浜造花ノ宮線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 東中筋道路第一回調査」
日暮・松林道路：高松市教育委員会編 1997 「都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路」
／高松市教育委員会編「香川県済生会病院移転新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路(済生会)」／高松市教育委員会編 2005 「特別養護老人ホーム(なでしこ香川)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 日暮・松林道路(済生会特養ホーム)」
弘田川西岸道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 2008 「広域基幹河川弘田川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 弘田川西岸道路」
宗高坊城道路：高松市教育委員会編 2004 「都市計画道路福岡三谷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 宗高坊城道路」
南天枝道路：香川県埋蔵文化財調査センター編 2003 「県道富田西志度線道路改良事業及び県道高松長尾大内線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 寺田・南天枝道路」
山田下吉田道路：綾川町教育委員会編 2007 「山田下吉田道路」
吉野下秀石道路：香川県埋蔵文化財センター編 2007 「一般国道32号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 吉野下秀石道路」

遺跡名	調査時 遺跡名	調査区	時間	施設			初期決定の指標		参考	国 籍 番 号
				長(m)	幅(m)	高さ(m)	施設類	回数	現存合計	
SB01			1 佐生中期後期				畜牛上部造(中期後期)、 サモサイト石頭・鋤形	○ ○	○	SK010-SK127-206
SB01	SB04	1-	佐生中期後期	46	27	3084' E	畜牛上部造 - 鋤・高杯(中期後期)	○ ○	○	SP203-205-139-179- 162-141-164-175- 167-169-161-177
SB02	SB05	1 佐生中期後期	38	25	N88° E	畜牛上部造 - 鋤・高杯(中期後期)	○ ○	○	SP174-184-190-157- 191-185-158-170-169	
SB03	SB06	2 佐生中期後期	22	28	S89° E	畜牛上部造(中期後期)	○ ○	○	SP249-250-259-251-246	
SB04	SB06	2 佐生中期後期	50	27	N89° E	畜牛上部造(中期後期)	○ ○	○	SP205-283-248-267- 268-269-278-275-277- 279-247-283-280-281	
SB05		0-1 佐生中期後期	44	24	N103° E	畜牛上部造(中期後期)	○ ○	○	SP413-151-136-137- 138-605-606-610	
SB06		0 佐生中期後期	42	20+	N103° E	畜牛上部造(中期後期)	○ ○	○	SP403-602-603	
SB07		0 佐生中期後期	52	22+	N106° E	畜牛上部造(中期後期) 早期後象・土師塗(後期)	○ ○	○	SP404-612-611-606	
SB08	SB07	2 古墳群削開面	46	43	N89° E	畜牛上部造	○ ○	○	SP236-234-227-239-241-257	
SB09	SB01	3 中世	49	20	309° E		○ ○	○	SP304-302-303-304-307	
SD01	SD01	1 佐生中期後期							○ ○	
SD02	SD02	1-2 佐生中期後期					サモサイト石頭(?)・石碑	○ ○	○ ○	
SD03	SD03	2 佐生中期後期					畜牛上部造(中期後期)、 サモサイト石頭・石碑	○ ○	○ ○	
SD42	SD04-02	5-6-12 佐生中期後期					畜牛上部造(奈良町下山城地)	○ ○	○ ○	
SD43	SD03-04	5 佐生中期後期					畜牛上部造	○ ○	○ ○	
SD45	SD05- 06, 倉1	0-6- 2-8-9 佐生晚期後期					畜牛上部造 - 鋤・高杯・鉢(春 夏期後象)、サモサイト石頭(?)・ 石碑(?)、サモサイト石頭・石碑 ・鋤形	○ ○	○ ○	
SD47	SD07	8-9 佐生晚期					畜牛上部造 - 鋤 - (前期)	○ ○	○ ○	
SD48	SD08	9 佐生晚期後期					畜牛上部造(古墳時期)	○ ○	○ ○	
SD49	SD09	9 古墳群削開面					畜牛上部造(古墳時期)	○ ○	○ ○	
SD50	SD10	9 佐生晚期					畜牛上部造(古代末~中世)	○ ○	○ ○	
SD51	SD06-11	10-11 古代末~中世					畜牛上部造(古代末)	○ ○	○ ○	
SD52	SD02	10-11 9m					畜牛上部造 - 鋤 - 高杯 - 鉢(?)、香乳頭下成層面 - 後期 段(?)、畜牛上部造(?)	○ ○	○ ○	
SD16	SD08	10 佐生晚期後期					畜牛上部造 - 鋤 - 高杯 - 鉢(?)、香乳頭下成層面 - 後期 段(?)、畜牛上部造(?)	○ ○	○ ○	
SD33	SD20	1 佐生中期後期					畜牛上部造、サモサイト石頭 - 鉢	○ ○	○ ○	SK001
SD34	SD24	1 佐生中期後期					畜牛上部造 - 高杯 - 鉢 (中期後象)、サモサイト石頭	○ ○	○ ○	
SD35	SD25	1 佐生中期後期					サモサイト石頭	○ ○	○ ○	
SD36	SD26	1 佐生中期後期						○ ○	○ ○	
SD37	SD27	2 古代末~中世					上耕質上部造、兜世谷燒(古墳時期)	○ ○	○ ○	
SD39	SD22	2 佐生中期後期					畜牛上部造 - 鋤 - (中期後象)	○ ○	○ ○	
SD41	SD21	3 古代末~中世					畜牛上部造 - 鋤 - (中期後象)	○ ○	○ ○	
SD42	SD22	4 近世					南壁根 - 鋤、稻壳、芋 壳、チャット大石	○ ○	○ ○	
SD41	SD21	6 佐生中期後期?						○ ○	○ ○	
SD42	SD22	8 佐生中期						○ ○	○ ○	
SD43	SD21	8 佐生中期						○ ○	○ ○	
SD31	SD21	10 9m					乳頭燒 - 鋤 - 土器	○ ○	○ ○	
SD30	SD21	1 佐生中期後期					畜牛上部造 - 鋤 - (中期後象)	○ ○	○ ○	
SD31	SD21	8-9 佐生中期					畜牛上部造 - (前期)	○ ○	○ ○	
SP01	SP01	1 古代末~中世						○ ○	○ ○	
SP02	SP02	1 古代末~中世					畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP03	SP03	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP04	SP04	1 古代末~中世					畜牛上部(中期後象)、畜 牛上部、サモサイト石頭	○ ○	○ ○	
SP05	SP05	1 古代末~中世					畜牛上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP06	SP06	1 古代末~中世					畜牛上部、サモサイト石頭	○ ○	○ ○	
SP07	SP07	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上 部、日本原土(?)、芋 壳、日本原土(?)、芋 壳、稻壳、芋壳	○ ○	○ ○	
SP08	SP08	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上 部、サモサイト石頭	○ ○	○ ○	
SP09	SP09	1 古代末~中世					畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP10	SP10	1 古代末~中世					畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP11	SP11	1 古代末~中世					畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP12	SP12	1 古代末~中世					畜牛上部、サモサイトチップ	○ ○	○ ○	
SP13	SP13	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP14	SP14	1 古代末~中世					上耕質上部 (?)、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP15	SP15	1 古代末~中世					畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP16	SP16	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP17	SP17	1 古代末~中世					上耕質上部(?)、上耕質 上部、泥質底	○ ○	○ ○	
SP18	SP18	1 古代末~中世					上耕質上部	○ ○	○ ○	
SP19	SP19	1 古代末~中世					上耕質上部	○ ○	○ ○	
SP20	SP20	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP21	SP21	1 古代末~中世					上耕質上部、畜牛上部	○ ○	○ ○	
SP22	SP22	1 古代末~中世					上耕質上部(?)、上耕質 上部、泥質底、畜牛上部	○ ○	○ ○	

第13表 上東原遺跡 遺構一覧表(1)

遺跡名	調査名	調査区	時期	範囲		地物	時限法定の指標		備考	解説 参考
				高 (m)	幅 (m)		地主	切り合い		
SP022	SP022	1	古代末～中世				○	○		
SP024	SP024	1	古代末～中世			土耕土層構 (11 - 12cm)、 土耕土層部、生牛土層	○	○	○	
SP025	SP025	1	古代末～中世				○	○		
SP026	SP026	1	古代末～中世			土耕土層小窓？	○	○	○	
SP027	SP027	1	古代末～中世				○	○		
SP028	SP028	北	古代末～中世			黑色土層構、土耕土層部、鑿牛土層	○	○	○	
SP029	SP029	南	古代末～中世			土耕土層小窓 (11cm - 13cm)、土耕土層	○	○	○	
SP030	SP030	1	古代末～中世			土耕土層部、土耕土層 部、生牛土層 (小窓)	○	○	○	
SP031	SP031	1	古代末～中世			黑色土層構、土耕土層 部、生牛土層	○	○	○	
SP032	SP032	1	古代末～中世			土耕土層部	○	○		
SP033	SP033	1	古代末～中世			土耕土層部、土耕土層 (11cm - 12cm)、土耕土層	○	○		
SP034	SP034	1	古代末～中世			土耕土層部 (11cm - 12cm) 、土耕土層、白面層、土耕土層鉢	○	○	○	
SP035	SP035	1	古代末～中世			土耕土層部 (11cm - 12cm) 、土耕土層、土耕土層 部、黑色土層	○	○	○	
SP036	SP036	1	古代末～中世				○	○		
SP037	SP037	1	古代末～中世			土耕土層小窓 (11 - 12cm)、黑 色土層構、土耕土層部、生牛土層 部 (小窓後壁)、サメカイ土層	○	○	○	
SP038	SP038	1	古代末～中世			子板 (土層系) 黑色土層構、黑色土層構、 土耕土層部 (12 - 13cm 前壁)、 土耕土層部、土耕土層	○	○	○	
SP039	SP039	1	古代末～中世			土耕土層部、土耕土層 (11cm - 12cm)、土耕土層	○	○	○	
SP040	SP040	1	古代末～中世			土耕土層部、土耕土層	○	○	○	
SP041	SP041	1	古代末～中世			黑色土層構、土耕土層 部、生牛土層	○	○	○	
SP042	SP042	1	古代末～中世			土耕土層部、黑色土層 部、サメカイ土層	○	○	○	
SP043	SP043	1	古代末～中世			土耕土層部 (前壁)、土耕土層上部、黑 色土層、サメカイ土層	○	○	○	
SP044	SP044	1	古代末～中世			土耕土層部 (前壁)、土耕土層上部 、生牛土層	○	○	○	
SP045	SP045	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP046	SP046	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP047	SP047	1	古代末～中世			生牛土層、サメカイ土層	○	○	○	
SP048	SP048	1	古代末～中世			土耕土層小窓？	○	○	○	
SP049	SP049	1	古代末～中世			黑色土層、十日山黒系粘土 層構、土耕土層	○	○	○	
SP050	SP050	1	古代末～中世				○	○		
SP051	SP051	1	古代末～中世			土耕土層小窓	○	○	○	
SP052	SP052	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP053	SP053	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP054	SP054	1	古代末～中世				○	○		
SP055	SP055	1	古代末～中世			サメカイ土層チップ	○	○	○	
SP056	SP056	1	古代末～中世				○	○		
SP057	SP057	1	古代末～中世			黑色土層、土耕土層	○	○	○	
SP058	SP058	1	古代末～中世			黑色土層、土耕土層	○	○	○	
SP059	SP059	1	古代末～中世				○	○		
SP060	SP060	1	古代末～中世			黑色土層	○	○	○	
SP061	SP061	1	古代末～中世				○	○		
SP062	SP062	1	古代末～中世			黑色土層	○	○	○	
SP063	SP063	1	古代末～中世				○	○		
SP064	SP064	1	古代末～中世			黑色土層	○	○	○	
SP065	SP065	1	古代末～中世				○	○		
SP066	SP066	1	古代末～中世			サメカイ土層チップ	○	○	○	
SP067	SP067	1	古代末～中世				○	○		
SP068	SP068	1	古代末～中世			黑色土層、土耕土層	○	○	○	
SP069	SP069	1	古代末～中世			黑色土層、土耕土層	○	○	○	
SP070	SP070	1	古代末～中世			黑色土層	○	○	○	
SP071	SP071	1	古代末～中世				○	○		
SP072	SP072	1	古代末～中世			土耕土層部、生牛土層	○	○	○	
SP073	SP073	1	古代末～中世			土耕土層、生牛土層	○	○	○	
SP074	SP074	1	古代末～中世			黑色土層、土耕土層	○	○	○	
SP075	SP075	1	古代末～中世				○	○		
SP076	SP076	1	古代末～中世			黑色土層	○	○	○	
SP077	SP077	1	古代末～中世				○	○		
SP078	SP078	1	古代末～中世			土耕土層部 (?)、很厚 層 (六朝時代)、土耕土層?	○	○	○	
SP079	SP079	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP080	SP080	1	古代末～中世			黑色土層、平底?	○	○	○	
SP081	SP081	1	古代末～中世			土耕土層?	○	○	○	
SP082	SP082	1	古代末～中世				○	○		
SP083	SP083	1	古代末～中世			○	○			
SP084	SP084	1	古代末～中世			○	○			
SP085	SP085	1	古代末～中世			○	○			
SP086	SP086	1	古代末～中世			○	○			
SP087	SP087	1	古代末～中世			生牛土層	○	○	○	
SP088	SP088	1	古代末～中世				○	○		
SP089	SP089	1	古代末～中世			○	○			
SP090	SP090	1	古代末～中世			○	○			
SP091	SP091	1	古代末～中世			土耕土層?	○	○	○	
SP092	SP092	1	古代末～中世				○	○		

第 14 表 上東原遺跡 遺構一覧表 (2)

遺物名	調査名	時期	電極			遺物	時間決定の指標			参考	H岡 番号
			長(m)	幅(m)	長幅方位		無生土層	無生土層	現生土層		
SP100 SP100	1	古代末～中世				無生土層、サメカキトチャブ	○	○	○		
SP104 SP104	1	古代末～中世				上部無生土層、無生土層	○	○	○		
SP106 SP106	1	古代末～中世					○	○	○		
SP108 SP108	1	古代末～中世					○	○	○		
SP109 SP109	1	古代末～中世				上部無生土層、無生土層、無生 土層（小野十重～後者）	○	○	○	○	
SP110 SP110	1	古代末～中世					○	○	○		
SP111 SP111	1	古代末～中世				無生土層	○	○	○		
SP114 SP114	1	古代末～中世					○	○	○		
SP115 SP115	1	古代末～中世				無生土層	○	○	○		
SP116 SP116	1	古代末～中世				無生土層、無生土層	○	○	○		
SP117 SP117	1	古代末～中世					○	○	○		
SP120 SP120	1	古代末～中世				無生土層	○	○	○		
SP121 SP121	1	古代末～中世				無生土層（小野十重～後者）	○	○	○	○	
SP122 SP122	1	古代末～中世					○	○	○		
SP123 SP123	1	古代末～中世				無生土層、上部無生土層？	○	○	○		
SP124 SP124	1	古代末～中世					○	○	○		
SP125 SP125	1	古代末～中世					○	○	○		
SP128 SP128	1	古代末～中世					○	○	○		
SP129 SP129	1	古代末～中世				上部無生土層（12c 残下～12c 頭半）	○	○	○	○	
SP130 SP130	1	古代末～中世					○	○	○		
SP132 SP132	1	古代末～中世				上部無生土層、無生土層	○	○	○		
SP133 SP133	1	古代末～中世後葉				無生土層	○	○	○	S805	
SP137 SP137	1	古代末～中世後葉				無生土層（中野後葉）	○	○	○	S805	
SP138 SP138	1	古代末～中世後葉				無生土層	○	○	○	S805	
SP139 SP139	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉、SP195 との切り分け部分出土）	○	○	○	S809	
SP140 SP140	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP141 SP141	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP142 SP142	1	古生中期後葉				無生土層	○	○	○		
SP143 SP143	1	古生中期後葉				無生土層	○	○	○		
SP144 SP144	1	古生中期後葉					○	○	○	S809	
SP145 SP145	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP146 SP146	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP147 SP147	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP148 SP148	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP149 SP149	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP150 SP150	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP151 SP151	1	古生中期後葉				無生土層（小野）	○	○	○	S805	
SP152 SP152	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP153 SP153	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP154 SP154	1	古生中期後葉				無生土層	○	○	○		
SP155 SP155	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP156 SP156	1	古生中期後葉				無生土層（小野）	○	○	○		
SP157 SP157	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）	○	○	○	S802	
SP158 SP158	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）	○	○	○	S802	
SP159 SP159	1	古生中期後葉				セカイコイド瓦片、瓦陶器	○	○	○	S802	
SP161 SP161	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP162 SP162	1	古生中期後葉					○	○	○	S803	
SP163 SP163	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP164 SP164	1	古生中期後葉					○	○	○	S803	
SP165 SP165	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP166 SP166	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）	○	○	○	S803	
SP167 SP167	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP168 SP168	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）	○	○	○	S803	
SP169 SP169	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP170 SP170	1	古生中期後葉				無生土層、無生土層	○	○	○	S802	
SP172 SP172	1	古生中期後葉				無生土層（小野）	○	○	○	S802	
SP173 SP173	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP174 SP174	1	古生中期後葉				無生土層（中野）、サメカキトチャブ	○	○	○	S802	
SP175 SP175	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP176 SP176	1	古生中期後葉				無生土層	○	○	○	S803	
SP177 SP177	1	古生中期後葉				無生土層、鐵、小野	○	○	○	S803	
SP178 SP178	1	古生中期後葉				無生土層 - 鐵 - 小野	○	○	○	S803	
SP179 SP179	1	古生中期後葉					○	○	○	S802	
SP180 SP180	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）、鐵	○	○	○	S802	
SP181 SP181	1	古生中期後葉				生土层（通稱）	○	○	○	S802	
SP182 SP182	1	古生中期後葉					○	○	○		
SP183 SP183	1	古生中期後葉				無生土層（通稱）	○	○	○	S803	
SP184 SP184	1	古生中期後葉				無生土層（中野後葉）、鐵、生土層（中野）	○	○	○	S802	
SP185 SP185	1	古生中期後葉				無生土層（中野）、氯化物	○	○	○	S802	
SP186 SP186	1	古生中期後葉				無生土層（中野）	○	○	○		

第15表 上東原遺跡 遺構一覧表(3)

遺跡名	調査用 遺跡名	調査区	時期	地盤			遺物	時期決定の形態		備考	辨認 番号
				高(m)	幅(m)	長軸方向		標高測 理土	切り合い		
SP197	SP197	1	海生中期後葉					○	○		
SP198	SP198	1	海生中期後葉					○	○		
SP199	SP199	1	海生中期後葉					○	○		
SP200	SP200	1	海生中期後葉					○	○		
SP201	SP201	1	海生中期後葉					○	○		
SP202	SP202	1	海生中期後葉					○	○		
SP203	SP203	1	海生中期後葉					○	○		
SP204	SP204	1	海生中期後葉					○	○		
SP205	SP205	1	海生中期後葉					○	○		
SP206	SP206	1	海生中期後葉					○	○		
SP207	SP207	1	海生中期後葉					○	○		
SP208	SP208	1	海生中期後葉					○	○		
SP209	SP209	1	海生中期後葉					○	○		
SP210	SP210	1	海生中期後葉	海生中期後葉(中期後葉)・土(中期後葉, SF129上の切りあい部分上)				○	○	○	S209
SP211	SP211	1	海生中期後葉	海生中期後葉				○	○	○	
SP212	SP212	2	古代末～中世	後期後葉(古墳時代), 土(上層土, 12 - 13c)				○	○	○	
SP213	SP213	2	古代末～中世	上層質土層(12 - 13c), 土質質土層				○	○	○	
SP214	SP214	2	古代末～中世	上層質土層?				○	○	○	
SP215	SP215	2	古代末～中世	上層質土層?				○	○	○	
SP216	SP216	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP217	SP217	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP218	SP218	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP219	SP219	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP220	SP220	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP221	SP221	2	古代末～中世	上層質土層(12 - 13c, 壁手)				○	○	○	
SP222	SP222	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP223	SP223	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP224	SP224	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP225	SP225	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP226	SP226	2	古代末～中世	上層質土層				○	○	○	
SP227	SP227	2	古墳後期初期	泥地影響				○	○	S208	
SP228	SP228	2	古代末～中世	上層質土層(12c), 千葉山窯 漆用器遺物, 地上(壁土?)				○	○		
SP229	SP229	2	海生中期後葉	海生中期後葉				○	○		
SP230	SP230	2	古代末～中世	泥色土層, 上層質土層				○	○		
SP231	SP231	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○		
SP232	SP232	2	古代末～中世	千葉山窯系須世陶				○	○		
SP233	SP233	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP234	SP234	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP235	SP235	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP236	SP236	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP237	SP237	2	古墳後期初期	上層質土, 花陶物				○	○	S208	
SP238	SP238	2	海生中期後葉	泥色土層(中期後葉?)				○	○		
SP239	SP239	2	古代末～中世	上層質土層(12 - 13c)				○	○		
SP240	SP240	2	古墳後期初期	上層質土層(中期後葉)				○	○	S208	
SP241	SP241	2	海生中期後葉	泥色土層(中期後葉)				○	○		
SP242	SP242	2	古墳後期初期	泥色土層				○	○	S208	
SP243	SP243	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP244	SP244	2	古墳後期初期	泥色土層				○	○	S208	
SP245	SP245	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP246	SP246	2	古代末～中世	泥色土層				○	○	S208	
SP247	SP247	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP248	SP248	2	海生中期後葉	泥色土層(中期後葉)				○	○	S208	
SP249	SP249	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP250	SP250	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP251	SP251	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP252	SP252	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP253	SP253	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP254	SP254	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○		
SP255	SP255	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP256	SP256	2	古代末～中世	泥色土層				○	○		
SP257	SP257	2	古墳後期初期	サヌカイト石頭				○	○	S208	
SP258	SP258	2	海生中期後葉	泥色土層(中期後葉)				○	○		
SP259	SP259	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP260	SP260	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP261	SP261	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP262	SP262	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP263	SP263	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP264	SP264	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP265	SP265	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP266	SP266	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP267	SP267	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP268	SP268	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP269	SP269	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP270	SP270	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	
SP271	SP271	2	海生中期後葉	泥色土層				○	○	S208	

第 16 表 上東原遺跡 遺構一覧表 (4)

遺物番号	調査場名	調査区段	時期	電極			遺物	時間決定の指標		参考	国際番号
				長(m)	幅(m)	距離方位		鉄器類	陶土器	骨牙貝・等	
SP24	SP24	2	海牛中期後期					○			
SP25	SP25	2	古代末～中世				上層質土器類？、海牛上部	○		□	
SP26	SP26	2	海牛中期後期					○			S2094
SP27	SP27	2	海牛中期後期				海牛上部？（中間後期？）	○	○	□	S2095
SP28	SP28	2	海牛中期後期					○			S2096
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			S2097
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			S2098
SP29	SP29	2	海牛中期後期				海牛上部？（中間後期？）	○	○	○	S2099
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP29	SP29	2	海牛中期後期					○			
SP30	SP30	3	古代末～中世					○		○	S2109
SP32	SP32	3	古代末～中世					○		○	S2109
SP33	SP33	3	古代末～中世					○		○	S2109
SP34	SP34	3	古代末～中世					○		○	S2109
SP35	SP35	3	古代末～					○		○	
SP36	SP36	3	古代末～				下層山原系須恵器	○		○	
SP37	SP37	3	古代末～中世					○			S2109
SP38	SP38	4	古代末～					○			
SP39	SP39	4	古代末～					○			
SP40	SP40	5	海牛中期後期？				海牛上部？（中～後期）	○		○	
SP42	SP42	5	海牛中期後期？					○			
SP43	SP43	5	海牛中期後期？					○			
SP44	SP44	5	海牛中期後期？					○			
SP45	SP45	5	海牛中期後期？					○			
SP46	SP46	5	海牛中期後期？					○			
SP47	SP47	6	海牛中期後期？					○			
SP48	SP48	6	海牛中期後期？					○			
SP49	SP49	6	海牛中期後期？					○			
SP50	SP50	6	海牛中期後期？					○			
SP51	SP51	6	海牛中期後期？					○			
SP52	SP52	6	海牛中期後期？					○			
SP53	SP53	6	海牛中期後期？					○			
SP54	SP54	8	古墳時代？				海世殿、海牛上部（林賀？）	○		○	
SP55	SP55	8	古墳時代？					○			
SP56	SP56	8	古墳時代？				海牛上部（麻績？）	○			
SP57	SP57	8	古墳時代？					○			
SP58	SP58	0	海牛中期後期？				海牛上部（中間後期）	○	○	○	S2106
SP59	SP59	0	海牛中期後期？				海牛上部（中間）	○	○	○	S2106
SP60	SP60	0	海牛中期後期？				海牛上部（中間）	○	○	○	S2106
SP61	SP61	4	海牛中期後期？					○	○		
SP62	SP62	5	海牛中期後期？					○	○		S2105
SP63	SP63	6	海牛中期後期？					○	○		
SP64	SP64	7	海牛中期後期？					○	○		
SP65	SP65	8	海牛中期後期？					○	○		
SP66	SP66	8	海牛中期後期？					○	○		
SP67	SP67	7	海牛中期後期？					○	○		
SP68	SP68	8	海牛中期後期？					○	○		
SP69	SP69	9	海牛中期後期？					○	○		
SP70	SP70	10	海牛中期後期？					○	○		
SP71	SP71	11	海牛中期後期？				海牛上部（中間）	○	○	○	
SP72	SP72	12	海牛中期後期？				海世殿、海牛上部（中間後期）、海牛上部（麻績）	○	○	○	
SP73	SP73	13	海牛中期後期？				海牛上部（中間後期）	○	○	○	S2105

第17表 上東原遺跡 遺構一覧表(5)

通称名	調査番号	調査区	検出部	時期	施設	出土遺物	時間判定の割合		参考	解説
							発出面	出土	取り合ひ	出土遺物
SH02	SH02	1	1	7c	遺物堆积、土塊(甕)、甕土 等(香川川下流域)、陶器、瓦片	○	○	○	○	SP230
SH03	SH03	1	1	出生堆积後手	上層、陶器、瓦片、石器、骨器、鐵 片、錫、古物(下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP209・067・ SP214・520・04
SH04	SH04	1	1	7c	遺物堆积、甕、窓、土塊、甕土 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP081・082・064・083
SH05	SH05	1	1	7c	遺物堆积、甕、窓、土塊、甕土 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP239・128・127・ 160、SK22
SH06	SH06	1	1	7c	遺物堆积、窓、甕、土塊、甕土 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP275・145・134・ 136・135・207
SH07	SH07・21	1	1	7c	遺物堆积、窓、土塊、甕、土塊、甕 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP264・273・266・263
SH09	SH09	2	1	7c	遺物堆积、甕、窓、甕、土塊、甕土 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP091・136
SH10	SH10・12	3	2	7c	上層、陶器堆积(1m)、土塊(土層小窓(32c))、 瓦片、陶器(窓)、陶片、土塊(甕)、土 塊(窓)、土塊(甕)、土塊(甕)、土塊 (香川川下流域)、陶片、瓦片(サカナイト付)	○	○	○	○	SP117・107・144・ 132・125・106
SH12	SH12	1	1	7c	遺物堆积	○	○	○	○	SP248・186・189・191
SH14	SH14	1	1	7c	遺物堆积	○	○	○	○	SP215・230・209・211
SH15	SH15	1	1	7c	遺物堆积高窓、その他の、土塊、甕 等(香川川下流域)、陶片、瓦片	○	○	○	○	SP227・228
SH16	SH16	1	1	7c	遺物堆积、窓、土塊、甕、土塊(瓦片)	○	○	○	○	SP93
SH18	SH18	1	1	7c	遺物堆积、土窓	○	○	○	○	SP220・223
SH19	SH19	1	1	出生堆积後手	a 窓、瓦片(窓)、甕、瓦片、甕等、その他の、土 塊(瓦片)、瓦片(窓)、瓦片(甕)、瓦片 等(瓦片)、瓦片(窓)、瓦片(甕)、瓦片	○	○	○	○	SP277
SH20	SH20	3	2	7c	遺物堆积(瓦片)、土窓(瓦片)、瓦片 (瓦片)、瓦片(瓦片)、瓦片(瓦片)、瓦片 (瓦片)、瓦片(瓦片)、瓦片(瓦片)、瓦片 (瓦片)、瓦片(瓦片)、瓦片(瓦片)	○	○	○	○	SP242・264・262
SH24	SH24	5	2	7c	遺物堆积、土窓(瓦片)	○	○	○	○	SP274・268・267
SH01	SH01	2	1	7c	SC2' W	○	○	○	○	SP003・002・007・011・ 012・013・018・005・203
SH03	SH03	3	1	7c	SC3' W	○	○	○	○	SP056・053・051・ 070・053・054・047・ 048・045・044
SH05	SH05	2	1	7c	SC5' E	○	○	○	○	SP120・021・025・ 009・006・153・197
SH06	SH06	2	1	7c?	SC6' W	○	○	○	○	SP095・080・019・087
SH08	SH08	3	2	7c	SC8'	○	○	○	○	SP118・108・122・ 147・148・126
SH09	SH09	2	2	7c	SC9' E	○	○	○	○	SP254・022・018
SH11	SH11	2	1	7c?	SC4' W	○	○	○	○	SP766・264・195
SH13	SH13	1	1	7c?	SC3' W、土解剖器、甕土?	○	○	○	○	SP059・054・057・077・ 076・073・062・063・ 075・029・071・052
SD01	SD01	2	1	7c	出生(土解剖)、サカナイト製石器、陶片	○	○	○	○	SD001の関連遺構?
SD02	SD02	2	1	7c	遺物堆积、土解剖器、出生(土 解剖)、サカナイト製石器、陶片	○	○	○	○	
SD03	SD03	2	1	7c	遺物堆积、土解剖器、出生(土 解剖)、サカナイト製石器	○	○	○	○	SD01の関連遺構?
SD05	SD05	1	1	7c	出生(土解剖)、土解剖器	○	○	○	○	
SD06	SD06	1	1	7c?	出生(土解剖)、土解剖器?	○	○	○	○	
SD07	SD07	2	1	7c?	出生(土解剖)、土解剖器?	○	○	○	○	
SD08	SD08	3	1	19c	土解剖陶片、土解剖、土解剖器	○	○	○	○	
SD10	SD10	2	1	7c?	サカナイト製石器(瓦片)、石器、瓦片	○	○	○	○	
SD11	SD11	2	2	7c	出生(土解剖)、土解剖器	○	○	○	○	
SD12	SD12	4	3	7c	遺物堆积(2m)、土解剖器、出生(土 解剖)、土解剖器、出生(土解剖)、土解剖器	○	○	○	○	SD24の関連遺構?
SD13	SD13	3	2	7c	出生(土解剖)、土解剖器、出生(土 解剖)、土解剖器、土解剖	○	○	○	○	
SD14	SD14	3	1	方式~中世	SD14の関連遺構?	○	○	○	○	
SD15	SD15	3	1	方式~中世	SD15の関連遺構?	○	○	○	○	
SD16	SD16	3	2	出生堆积後手	出生(土解剖)、出生(土解剖)、出生(土 解剖)、出生(土解剖)、出生(土解剖)	○	○	○	○	
SD17	SD17	1	1	7c?	○	○	○	○		
SD20	SD20	1	1	7c	遺物堆积、土解剖器、その他の、出生(土 解剖)、出生(土解剖)、土解剖器	○	○	○	○	
SD21	SD21	1	1	7c	○	○	○	○		
SD22	SD22	1	1	7c	○	○	○	○		
SD23	SD23	1	1	7c	○	○	○	○		
SD24	SD24	4	3	7c	○	○	○	○	SD12の関連遺構?	
SD25	SD25	4	3	7c?	○	○	○	○		
SK02	SK02	4	1	現代	遺物堆积、土解剖器	○	○	○	○	複数を切っている ので面白い?
SK03	SK03	3	1	出生堆积後手	出生(土解剖)、土解剖	○	○	○	○	SK00
SK04	SK04	1	1	出生堆积後手	出生(土解剖)、土解剖	○	○	○	○	
SK05	SK05	2	1	7c?	出生(土解剖)、土解剖?	○	○	○	○	
SK07	SK07	1	1	7c	遺物堆积、土解剖、出生(土解剖)	○	○	○	○	SK06
SK08	SK08	1	1	7c	遺物堆积、出生(土解剖)	○	○	○	○	
SK09	SK09	1	1	7c?	○	○	○	○		
SK10	SK10	2	1	7c?	○	○	○	○		
SK11	SK11	1	1	7c?	出生(土解剖)、香川川下流域(陶片)	○	○	○	○	
SK12	SK12	3	1	7c?	出生(土解剖)、土解剖?	○	○	○	○	
SK13	SK13	4	3	7c?	○	○	○	○		
SK15	SK15	5	1	7c	○	○	○	○		

第18表 大下遺跡 遺構一覧表(1)

遺跡名	調査地名	調査区	種別	時期	規範			出土遺物	付帯判定の相應			考案	辨認参考
					長 (cm)	幅 (cm)	長軸方位		種別	例上	短い目		
SKE16	SKE01	2	1	7e				上層・表面層、陶土器・陶瓶、杏葉円下流底、圓錐形、サメカイテ製陶片、オーブ丁字孔・口縁（底期）、陶土器・杏葉円下流底層（後期）・少量。		○			
SKE17	SKE01	4	3	7e				上層・表面層。		○			
SKE18	SKE04	2	1	7e ?				杏葉圓下（後期）、サメカイテ製陶片				SD01-①の同層差異？	
SKE19	SKE02	3	2	7e				杏葉圓下（杏葉圓下流底層）		○		堅式建物の可視性？	
SKE20	SKE01	2	1	7e				杏葉圓下（土解剖）		○		SD09	
SKE21	SKE02	2	1	7e				杏葉圓下（土解剖）		○		SD01	
SKE22	SKE02	2	1	7e				杏葉圓下（土解剖）		○		SD01	
SKE23	SKE04	2	1	7e				杏葉圓下（土解剖）		○		SD09	
SKE24	SKE05	2	1	7e				杏葉圓下（杏葉圓下流底層）・圓錐形、杏葉圓下・土解剖。		○		SD01	
SKE25	SKE06	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE26	SKE07	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE27	SKE08	2	1	7e ?				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）		○		SD05	
SKE28	SKE09	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）		○		SD05	
SKE29	SKE10	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）		○		SD05	
SKE30	SKE11	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE31	SKE12	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE32	SKE13	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE33	SKE14	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE34	SKE15	2	1	7e ?				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE35	SKE16	2	1	7e ?				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE36	SKE17	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（杏葉圓下流底層）・圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE37	SKE18	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD01	
SKE38	SKE19	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD06	
SKE39	SKE20	2	1	7e ?				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE40	SKE21	2	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE41	SKE22	1	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE42	SKE23	1	1	7e				圓錐形、杏葉圓下（土解剖）・土解剖。		○		SD05	
SKE43	SKE24	1	1	古代末~中世				土解剖。		○	○	SD03を少し振り下げる理由。	
SKE44	SKE24	1	1	古代末~中世				土解剖。		○	○	SD03を少し振り下げる理由。	
SKE45	SKE25	1	1	古代末~中世				土解剖。		○	○	SD03を少し振り下げる理由。	
SKE46	SKE27	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03を少し振り下げる理由。	
SKE47	SKE28	4	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03を少し振り下げる理由。	
SKE48	SKE29	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE49	SKE30	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE50	SKE32	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE51	SKE33	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE52	SKE34	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE53	SKE35	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE54	SKE36	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE55	SKE37	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE56	SKE38	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE57	SKE39	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE58	SKE40	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE59	SKE41	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE60	SKE42	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE61	SKE43	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE62	SKE44	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE63	SKE45	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE64	SKE46	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE65	SKE47	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE66	SKE48	4	2	7e ?				杏牛土器底板（杏葉圓下流底層 後期）		○		SD03	
SKE67	SKE49	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE68	SKE50	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE69	SKE51	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE70	SKE52	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE71	SKE53	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE72	SKE54	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE73	SKE55	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE74	SKE56	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE75	SKE57	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE76	SKE58	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE77	SKE59	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE78	SKE60	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE79	SKE61	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE80	SKE62	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE81	SKE63	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE82	SKE64	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE83	SKE65	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE84	SKE66	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE85	SKE67	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE86	SKE68	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE87	SKE69	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE88	SKE70	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE89	SKE70	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE90	SKE71	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE91	SKE72	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE92	SKE73	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE93	SKE74	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE94	SKE75	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE95	SKE76	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE96	SKE77	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE97	SKE78	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE98	SKE79	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE99	SKE80	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE100	SKE81	1	1	7e ?				杏牛土器。		○		SD03	
SKE101	SKE82	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE102	SKE83	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE103	SKE84	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE104	SKE85	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE105	SKE86	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE106	SKE87	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE107	SKE88	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE108	SKE89	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE109	SKE90	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE110	SKE91	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE111	SKE92	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE112	SKE93	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE113	SKE94	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE114	SKE95	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE115	SKE96	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE116	SKE97	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE117	SKE98	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE118	SKE99	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE119	SKE100	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE120	SKE101	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE121	SKE102	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE122	SKE103	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE123	SKE104	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE124	SKE105	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE125	SKE106	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE126	SKE107	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE127	SKE108	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE128	SKE109	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE129	SKE110	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE130	SKE111	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE131	SKE112	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE132	SKE113	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE133	SKE114	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE134	SKE115	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE135	SKE116	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE136	SKE117	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE137	SKE118	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE138	SKE119	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE139	SKE120	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE140	SKE121	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE141	SKE122	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE142	SKE123	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE143	SKE124	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE144	SKE125	1	1	7e				杏牛土器。		○		SD03	
SKE145	SKE126												

第19表 大下遺跡 遺構一覧表 (2)

遺跡名	調査者名	調査区	検出品	時期	範囲 長(m) 幅(m) 掘削方向	出土遺物	時期判定の指標			備考	RF 号
							層出物	土上	留り合せ	出土遺物	
SP072	SP072	1	1	2c							S813
SP074	SP074	4	2	2c							
SP075	SP075	1	1	2c							S813
SP077	SP077	1	1	2c							S813
SP078	SP078	1	1	2c	古代～中世			○			S813
SP081	SP081	2	1	2c	古代～中世	黑色土器陶片、鐵器鋸(中古)			○		
SP081	SP081	1	1	2c							
SP082	SP082	1	1	2c							
SP083	SP083	1	1	2c							
SP084	SP084	1	1	2c							
SP085	SP085	4	1	2c～?							
SP086	SP086	4	1	2c～?							
SP087	SP087	1	1	2c							
SP088	SP088	4	1	2c							
SP089	SP089	4	1	2c～?							
SP090	SP090	2	1	2c							
SP091	SP091	2	1	2c?							
SP092	SP092	2	1	2c?							
SP093	SP093	2	1	2c?							
SP094	SP094	2	1	2c?							
SP095	SP095	2	1	2c?							
SP096	SP096	2	1	2c?							
SP097	SP097	3	1	2c							
SP098	SP098	2	1	2c							
SP099	SP099	2	1	2c							
SP100	SP100	2	1	2c?							
SP101	SP101	2	1	2c?							
SP102	SP102	2	1	2c?							
SP103	SP103	1	1	2c?							
SP104	SP104	2	1	2c?							
SP105	SP105	4	2	2c?							
SP106	SP106	3	1	2c							
SP107	SP107	3	1	2c							
SP108	SP108	2	1	2c							
SP109	SP109	4	1	2c?							
SP110	SP110	4	1	2c～?							
SP111	SP111	4	1	2c～?							
SP112	SP112	4	1	2c～?							
SP113	SP113	2	1	2c?							
SP114	SP114	2	1	2c?							
SP115	SP115	2	1	2c?							
SP116	SP116	3	2	2c							
SP117	SP117	3	2	2c							
SP118	SP118	3	2	2c?							
SP119	SP119	2	1	2c							
SP120	SP120	2	1	2c							
SP121	SP121	4	3	2c?							
SP122	SP122	3	2	2c							
SP123	SP123	2	1	2c?							
SP124	SP124	2	1	2c?							
SP125	SP125	3	2	2c							
SP126	SP126	2	1	2c?							
SP127	SP127	3	1	2c							
SP128	SP128	1	1	2c							
SP129	SP129	1	1	2c							
SP130	SP130	2	1	2c							
SP131	SP131	3	2	2c							
SP132	SP132	3	2	2c							
SP133	SP133	1	1	2c							
SP134	SP134	1	1	2c							
SP135	SP135	1	1	2c							
SP136	SP136	1	1	2c							
SP137	SP137	1	1	2c							
SP138	SP138	3	2	2c?							
SP139	SP139	3	2	2c?							
SP140	SP140	3	2	2c?							
SP141	SP141	3	2	2c							
SP142	SP142	1	1	2c							
SP143	SP143	1	1	2c							
SP144	SP144	3	2	2c							
SP145	SP145	1	1	2c							
SP146	SP146	3	2	2c	古代～中世						
SP147	SP147	3	2	2c							
SP148	SP148	3	2	2c							
SP149	SP149	3	2	2c?							
SP150	SP150	3	2	2c?							
SP151	SP151	3	2	2c?							
SP152	SP152	2	1	2c							
SP153	SP153	2	1	2c							
SP154	SP154	1	1	2c							
SP155	SP155	2	1	2c?							
SP156	SP156	2	1	2c?							
SP157	SP157	2	1	2c?							
SP158	SP158	1	1	2c?							

第20表 大下遺跡 遺構一覧表(3)

遺跡名	調査時 遺跡名	調査区	発掘面	地層	範囲		出土遺物	時期判定の根据			備考	測定 番号
					面 (m)	幅 (m)		検出面	測定面	測定面		
SP159	SP159	1	3	7c †								
SP160	SP160	1	3	7c								
SP161	SP161	1	3	7c †								S105
SP162	SP162	1	3	7c †								
SP163	SP163	1	3	7c †								
SP164	SP164	1	3	7c †								
SP165	SP165	1	3	7c †								
SP166	SP166	1	3	7c †								
SP167	SP167	1	3	7c								
SP168	SP168	2	3	7c								
SP169	SP169	4	3	7c †								S101
SP170	SP170	1	3	7c †								
SP171	SP171	1	3	7c								
SP172	SP172	1	3	7c †								
SP173	SP173	1	3	7c †								
SP174	SP174	1	3	7c †								
SP175	SP175	1	3	7c								S106
SP176	SP176	2	3	7c								S109
SP177	SP177	1	3	7c †								
SP178	SP178	1	3	7c								
SP179	SP179	1	3	7c †								
SP180	SP180	1	3	7c †								
SP181	SP181	1	3	7c								
SP182	SP182	1	3	7c †								
SP183	SP183	1	3	7c †								
SP184	SP184	1	3	7c †								
SP185	SP185	1	3	古代末～ 小世?								
SP186	SP186	1	3	7c †								
SP187	SP187	1	3	7c †								
SP188	SP188	1	3	7c								
SP189	SP189	1	3	7c †								S103
SP190	SP190	1	3	7c								
SP191	SP191	1	3	7c								
SP192	SP192	1	3	7c †								
SP193	SP193	1	3	7c								
SP194	SP194	1	3	出生地層無手								S102
SP195	SP195	2	3	7c								S101
SP196	SP196	2	3	7c								S109
SP197	SP197	2	3	7c								S106
SP198	SP198	2	3	7c †								
SP199	SP199	1	3	7c								
SP200	SP200	2	3	7c †								
SP201	SP201	2	3	7c †								
SP202	SP202	2	3	7c †								
SP203	SP203	2	3	7c †								
SP204	SP204	2	3	7c								
SP205	SP205	2	3	7c †								
SP206	SP206	2	3	7c †								
SP207	SP207	1	3	7c								
SP208	SP208	2	3	7c								
SP209	SP209	1	3	7c								
SP210	SP210	1	3	7c								S104
SP211	SP211	1	3	7c								S104
SP212	SP212	2	3	7c †								S104
SP213	SP213	2	3	7c †								
SP214	SP214	2	3	7c †								
SP215	SP215	1	3	7c								
SP216	SP216	2	3	7c †								S104
SP217	SP217	2	3	7c †								
SP218	SP218	2	3	7c †								
SP219	SP219	1	3	出生地層 無手?								
SP220	SP220	1	3	7c								
SP221	SP221	1	3	7c								S108
SP222	SP222	2	3	7c †								S108
SP223	SP223	2	3	7c †								
SP224	SP224	1	3	7c †								
SP225	SP225	2	3	7c †								
SP226	SP226	1	3	7c								
SP227	SP227	1	3	7c								S105
SP228	SP228	1	3	7c								S105
SP229	SP229	1	3	7c †								
SP230	SP230	1	3	7c								
SP231	SP231	1	3	7c								S105
SP232	SP232	1	3	7c								
SP233	SP233	5	3	7c †								
SP234	SP234	5	3	7c †								
SP235	SP235	1	3	7c								
SP236	SP236	5	3	7c †								
SP237	SP237	3	3	7c †								
SP238	SP238	4	3	7c								
SP239	SP239	4	3	7c †								
SP240	SP240	4	3	7c								

第 21 表 大下遺跡 遺構一覧表 (4)

遺跡名	調査年 遺跡名	調査区	検出部	時期	範囲 長(m) 幅(m) 基準方位	出土遺物	時期判定の指標			備考	特徴 等号
							検出部	出土	限り合い		
SP241	SP241	3	3	Te		陶生土器（香取川下流域遺、灰 褐色）、陶半土器？、土細器？			○		
SP242	SP242	5	3	Te		陶生土器？、土細器？		○		SH20	
SP243	SP243	5	1	Te?							
SP244	SP244	5	2	Te?							
SP245	SP245	3	2	Te?		陶生土器（香取川下流域遺）、陶 生土器？、土細器？		○			
SP246	SP246	4	3	Te?							
SP247	SP247	4	3	Te?							
SP248	SP248	4	3	Te?							
SP249	SP249	4	3	Te?							
SP250	SP250	4	3	Te?							
SP251	SP251	4	3	Te?							
SP252	SP252	4	3	Te?							
SP253	SP253	3	2	Te?							
SP254	SP254	3	2	Te?		陶生土器？、土細器？		○			
SP255	SP255	3	2	Te?							
SP256	SP256	4	3	Te		灰世器		○			
SP257	SP257	4	3	Te?							
SP258	SP258	4	3	Te?		陶生土器？、土細器？		○			
SP259	SP259	4	3	Te?							
SP260	SP260	4	3	Te?							
SP261	SP261	3	2	Te				○		SH20	
SP262	SP262	3	2	Te		陶生土器（香取川下流域遺）		○		SH20	
SP263	SP263	3	1	Te?							
SP264	SP264	3	1	Te							
SP265	SP265	3	1	Te?		灰世器？、灰、土細器		○			
SP266	SP266	3	1	Te		灰世器、灰世器（香取川下流域遺、灰期）		○			
SP267	SP267	5	2	Te							
SP268	SP268	5	2	Te				○		SH24	
SP269	SP269	3	1	Te?				○		SH24	
SP270	SP270	3	1	Te?		灰世器？、その他の、土細器		○			
SP271	SP271	4	3	Te?		陶生土器？、土細器？					
SP272	SP272	4	3	Te?							
SP273	SP273	4	3	Te?							
SP274	SP274	5	2	Te							
SP275	SP275	5	2	Te?				○		SH24	
SP276	SP276	5	2	Te?							
SP277		1	1	Te				○		SH19	

第 22 表 大下遺跡 遺構一覧表 (5)

第23表 上東原遺跡出土玉器觀察表(1)

第24表 王東原遺跡出土主器觀察表(2)

第25表 上東原道跡出王器觀察表 (3)

第 26 表 上 東原遺跡出土土器観察表 (4)

第27表 上東原遺跡出土土器観察表（5）

番号	遺構	部位	種類	形態	測定(分)	測定(分)	色調(外)・輪	色調(内)・輪	表面	底面	口径 (mm)	深さ (mm)	底径 (mm)	側面 (mm)	参考
210	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5.75VS5.6明褐色	5.75VS5.6明褐色	中・少	中・少	17.0	1.8	1.8		
211	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5.75VS5.6明褐色	5.75VS5.6明褐色	中・少	中・少	14.8	1.8	1.8		
212	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR4.3L6.5黄褐色	10YR5.2灰褐色	中・少	中・少	16.2	1.8	1.8		
213	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5YR6.6暗褐色	5YR6.6暗褐色	中・少	中・少	15.1	1.8	1.8		
214	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	14.4	1.8	1.8		
215	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.6黄褐色	10YR6.4L6.5黄褐色	中・少	中・少	18.4	1.8	1.8		
216	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.4L6.5黄褐色	10YR6.4L6.5黄褐色	中・少	中・少	19.7	1.8	1.8		
217	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR5.2L6.5黄褐色	10YR5.2L6.5黄褐色	中・少	中・少	19.2	1.8	1.8		
218	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	18.4	1.8	1.8		
219	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR5.2灰褐色	10YR5.2灰褐色	中・少	中・少	12.8	1.8	1.8		
220	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	13.4	1.8	1.8		
221	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	16.2	1.8	1.8		
222	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	13.8	3.8	3.8		
223	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	2.5VS7.6黄褐色	2.5VS7.6黄褐色	中・少	中・少	17.6	2.2	2.8		
224	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5VS5.1L6.5灰褐色	5VS5.1L6.5灰褐色	中・少	中・少	17.6	2.2	2.8		
225	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	2.5VS7.6黄褐色	2.5VS7.6黄褐色	中・少	中・少	17.8	2.2	2.8		
226	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR3.3暗褐色	10YR3.3暗褐色	中・少	中・少	12.5	2.2	2.8		
227	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR4.2灰褐色	10YR4.2灰褐色	中・少	中・少	13.4	2.2	2.8		
228	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.6明褐色	7.5VS5.6明褐色	中・少	中・少	13.7	2.2	2.8		
229	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR4.3L6.5黄褐色	10YR4.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	17.6	2.2	2.8		
230	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS4.4暗褐色	7.5VS4.4暗褐色	中・少	中・少	17.6	2.2	2.8		
231	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	17.8	2.2	2.8		
232	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR3.3暗褐色	10YR3.3暗褐色	中・少	中・少	12.8	2.2	2.8		
233	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR5.3L6.5黄褐色	10YR5.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	17.8	2.2	2.8		
234	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5VS5.6暗褐色	5VS5.6暗褐色	中・少	中・少	19.2	2.2	2.8		
235	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS6.6暗褐色	7.5VS6.6暗褐色	中・少	中・少	16.8	2.2	2.8		
236	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	22.0	3.8	3.8		
237	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR4.6暗褐色	10YR4.6暗褐色	中・少	中・少	20.6	3.8	3.8		
238	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS6.6暗褐色	7.5VS6.6暗褐色	中・少	中・少	23.0	3.8	3.8		
239	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR5.6暗褐色	10YR5.6暗褐色	中・少	中・少	21.8	3.8	3.8		
240	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR4.3L6.5黄褐色	10YR4.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	21.8	3.8	3.8		
241	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5VS5.6明褐色	5VS5.6明褐色	中・少	中・少	22.0	3.8	3.8		
242	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.6黄褐色	7.5VS5.6黄褐色	中・少	中・少	20.6	3.8	3.8		
243	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.3L6.5黄褐色	10YR6.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	23.0	3.8	3.8		
244	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS7.6暗褐色	7.5VS7.6暗褐色	中・少	中・少	20.2	3.8	3.8		
245	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.3L6.5黄褐色	10YR6.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	20.0	3.8	3.8		
246	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	7.5VS5.4L6.5暗褐色	7.5VS5.4L6.5暗褐色	中・少	中・少	21.0	3.8	3.8		
247	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.3L6.5黄褐色	10YR6.3L6.5黄褐色	中・少	中・少	21.0	3.8	3.8		
248	3合焼	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	10YR6.4L6.5黄褐色	10YR6.4L6.5黄褐色	中・少	中・少	23.5	3.5	3.5		
277	SII8	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	N5灰	N5灰	中・少	中・少	20.2	3.8	3.8		
278	SII9	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	5YR6.6暗褐色	7.5VS6.6黄褐色	中・少	中・少	22.0	3.8	3.8		
279	SII10	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	N8灰白色	N8灰白色	中・少	中・少	17.1	3.3	3.3		
280	SII2	発生上部	裏	ヨコナラ	ヨコナラ	ヨコナラ	N6灰	N6灰	中・少	中・少	14.0	3.8	3.8		

第28表 上東原遺跡出土土器觀察表 (6)

第30表 上東原遺跡出土石器觀察表（1）

第30表

第29表 上東原遺跡出土土器觀察表（7）

遺物番号	遺傳	層位	断面	測量 (外)	測量 (内)	色調 (外)・輪	色調 (内)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	形状	特徴	備考
2	SII01-SK03		石盤	3.3	2.0	灰白・素面	灰白	2.0	0.5	0.5	2.87	半球形	半球形	
3	SII01-SK04		石盤	3.5	1.6	0.5	0.5				2.28	半球形	半球形	
4	SII01-SK05		石盤	3.1	4.3	0.5	0.5				5.15	半球形	半球形	
5	SII01		剥片	5.6	3.5	0.4	0.4				4.71	半球形	半球形	
31	SII01		石盤	1.8	1.0	0.25	0.25				0.45	半球形	半球形	
32	SII01		石盤	2.4	2.3	0.7	0.7				0.73	半球形	半球形	
33	SII01		剥片	3.2	3.5	0.5	0.5				6.40	半球形	半球形	
48	SII02		石盤	1.9	1.0	0.2	0.2				0.58	半球形	半球形	
49	SII02		剥片	5.8	4.2	0.7	0.7				14.51	半球形	半球形	
50	SII02		剥片	2.9	4.3	1.0	1.0				14.53	半球形	半球形	
51	SII02		剥片	4.2	2.9	0.5	0.5				5.33	半球形	半球形	
52	SII02		剥片	2.7	4.5	0.7	0.7				13.50	半球形	半球形	
53	SII02		剥片	2.9	2.1	0.9	0.9				4.00	半球形	半球形	
79	SII045	c層	點打石器の欠損品?	6.0	3.5	0.6	0.6				12.76	半球形	半球形	
80	SII045	e層	石盤	17.0	16.0	3.0	3.0				0.72	半球形	半球形	
87	SII045	a層	石盤	1.7	1.6	0.3	0.3				0.79	半球形	半球形	
95	SII045		石盤	2.6	2.6	0.4	0.4				1.25	半球形	半球形	
96	SII045		石盤	2.9	1.7	0.4	0.4				1.72	半球形	半球形	
97	SII045		石盤	2.3	1.9	0.2	0.2				0.74	半球形	半球形	
98	SII045		石盤	2.2	2.0	0.3	0.3				1.13	半球形	半球形	
99	SII045		石盤	2.3	1.3	0.32	0.32				0.92	半球形	半球形	
100	SII045		剥片	3.3	1.9	0.5	0.5				4.25	半球形	半球形	
101	SII045		石盤	5.9	6.0	0.9	0.9				33.30	半球形	半球形	
102	SII045		砥石	9.6	8.5	1.9	1.9				266.55	鉛錐	鉛錐	
107	SII041		石盤	2.0	1.3	0.2	0.2				0.49	半球形	半球形	
108	SII041		剥片	3.2	1.7	0.5	0.5				1.86	半球形	半球形	
150	SII058		石盤	2.0	1.5	0.35	0.35				0.57	半球形	半球形	
151	SII058		石盤	2.8	1.8	0.15	0.15				1.50	半球形	半球形	
152	SII058		打製石器の欠損品	3.2	2.5	1.0	1.0				45.84	半球形	半球形	
157	SII04		剥片	1.9	4.2	0.75	0.75				6.10	半球形	半球形	
166	SII09		剥片	2.7	4.3	0.6	0.6				8.09	半球形	半球形	
167	SII09		剥片	5.4	3.9	1.3	1.3				15.59	半球形	半球形	
185	SII291		圓形石器	3.5	3.4	1.1	1.1				14.60	半球形	半球形	
186	SII291		スクレーパー	3.4	4.7	0.6	0.6				9.77	半球形	半球形	

遺物番号	遺傳	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
187	SH291		楕形石器 スクレーパー	5.3	3.8	1.0	19.49	サスカ	
188	SH291		石頭	3.5	4.3	0.65	9.29	サスカ	
249	包含層		石頭	2.0	0.9	0.3	0.45	サスカ	
250	包含層		石頭	1.5	1.5	0.5	0.61	サスカ	
251	包含層		石頭	3.7	1.5	0.4	1.23	サスカ	
252	包含層		石頭	3.4	2.2	0.4	2.33	サスカ	
253	包含層		石頭	2.4	1.6	0.4	1.45	サスカ	
254	包含層		石頭	2.8	1.3	0.3	1.07	サスカ	
255	包含層		石頭	2.65	1.65	0.3	0.81	サスカ	
256	包含層		石頭	1.9	1.7	0.4	0.81	サスカ	
257	包含層		石頭	3.5	2.2	0.5	3.47	サスカ	
258	包含層		石頭	2.15	1.7	0.3	0.74	サスカ	
259	包含層		石頭	2.9	1.9	0.3	1.28	サスカ	
260	包含層		石頭	3.0	1.4	0.4	2.02	サスカ	
261	包含層		石頭	3.0	1.4	0.5	1.31	サスカ	
262	包含層		石頭	3.2	2.5	0.5	4.66	サスカ	
263	包含層		スクレーパー	3.9	4.3	0.9	13.64	サスカ	
264	包含層		石頭	2.7	4.6	0.3	4.18	サスカ	
265	包含層		石頭	4.2	2.8	0.3	4.35	サスカ	
266	包含層		楕形石器 スクレーパー	4.8	3.35	1.1	23.16	サスカ	
267	包含層		楕形石器	5.6	3.4	0.9	25.69	サスカ	
268	包含層		スクレーパー	6.5	5.9	0.9	56.02	サスカ	
269	包含層		石頭	4.9	6.0	0.5	30.72	サスカ	
270	包含層		鐵石	9.8	6.7	6.1	531.85	鉄鋼	
271	包含層		鐵石	6.2	4.8	4.0	144.74	鉄鋼	
272	包含層		鐵石	5.6	7.0	5.3	354.42	鉄鋼	
273	包含層		鐵石	8.5	7.8	6.18	638.69	鉄鋼	全体に手削れによる斷滅
274	包含層		鐵石	5.3	4.0	2.6	97.22	鉄鋼	
275	包含層		鐵石	10.9	8.8	1.4	213.94	鉄鋼	
276	包含層		鐵石	20.5	17.5	10.2	3996.00	鉄鋼	
325	包含層		石頭	2.3	1.7	0.4	1.35	サスカ	
326	包含層		楕形石器 スクレーパー	6.0	4.5	0.7	25.77	サスカ	
327	包含層		スクレーパー	6.3	3.1	0.8	15.77	サスカ	
328	包含層		火石	1.2	1.4	1.2	1.61	チタニウム	

第31表 上東原遺跡出土石器観察表 (2)

第32表 大下遺跡出土土器観察表（1）

番号	遺物 種類	部位	種類	調整 (外)	調整 (内)	色調 (外) / 色調 (内)	陶質	石英・赤色粒 長石	角閃石 長石	粉粒 (cm)	厚さ (cm)	底径 (cm)	口径 (cm)	底径 × 口径 (cm)	参考
1	SBR3	底面直上	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.6明陶	75Y85.6明陶	中・少	細・多	1.8	香東山下遺跡	1.8		
2	SBR3	底面直上	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.4.5灰陶	75Y85.4.5灰陶	中・多	細・多	1.8	香東山下遺跡	1.8		
3	SBR3	下端	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.4.5灰陶	75Y85.4.5灰陶	細・多	細・多	8.6	香東山下遺跡	7.8		
4	SBR3	底面直上	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.6灰陶	75Y85.6灰陶	細・多	細・少	7.5	香東山下遺跡	8.8	例	
5	SBR3	余生土器	高杯	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.4.5灰・黄褐	75Y85.4.5灰・黄褐	中・少	細・多	1.38		8.8	香東山下遺跡		
6	SBR3	余生土器	杯	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y86.6白	75Y86.6白	細・少	細・多	9.7	4.0	8.8			
7	SBR3	底面直上	黑漆器	杯身	内側ナラ・底板へ向か 引出しナラ・底板へ向か 引出しナラ・底板へ向か	ヨコナド	N7/灰白	N7/灰白	細・少	細・多	3.2		4.8		
8	SBR3	上層	黑漆器	杯身	内側ナラ・底板へ向か 引出しナラ・底板へ向か	ヨコナド	N7/灰白	N7/灰白	細・少	細・少	0.59		2.8		
10	SH19	b層	余生土器	盤	ヨコナド・ハナ日良	ヨコナド	75Y86.6白	75Y86.6白	中・少	中・少	0.60		1.8	香東山下遺跡	
11	SH19	a層	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y86.4.5灰	75Y86.4.5灰	粗・差		1.20	4.0	7.8		
12	SH19	b層	余生土器	盤	タキヨ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y85.4.5灰	75Y85.4.5灰	細・少	細・多	0.25		1.8	香東山下遺跡	
13	SH19	a層	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y87.4.5灰	75Y87.4.5灰	細・少	細・少	0.20	4.4	7.11	2.8	
14	SH19	a層	余生土器	盤	ハナ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y87.4.5灰	75Y87.4.5灰	中・少	中・少	0.10	4.0	7.29	4.8	
15	SH19	b層	余生土器	盤	タキヨ日良ヨコナド	ヨコナド	75Y86.4.5灰	75Y86.4.5灰	中・少	中・少	0.29		1.8		
17	SH19	a層	余生土器	盤	ナラ	ナラ	10Y86.4.5灰・黄褐	10Y86.4.5灰・黄褐	中・多	粗・少	0.86		1.8		
19	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y6.灰	35Y6.灰	粗・少	粗・少	0.08		1.8		
20	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.15		1.8		
21	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.15		1.8		
22	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ・底板へ向か 引出しナラ・底板へ向か	ヨコナド	35Y7.3灰	25Y7.3灰	中・少	中・少	0.22		3.8		
23	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.09		1.8		
24	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	25Y7.1灰	中・多	粗・少	0.16		1.8未満		
25	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	中・多	粗・少	0.16		2.8		
26	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	中・少	中・少	0.16		1.8		
27	SH19	a層	氣泡器	杯身	ハナケイズ	ヨコナド	25Y7.2灰	25Y7.2灰	粗・多	粗・多	0.34		1.8		
28	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.2灰	25Y7.2灰	中・少	中・少	0.35		1.8		
29	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.1灰	25Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.24		1.8		
30	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	35Y7.1灰	35Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.22	4.2	7.0	2.8	
31	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.1灰	25Y7.1灰	中・多	粗・少	0.24		2.8		
32	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.2灰	25Y7.2灰	粗・少	粗・少	0.17		1.8		
33	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y8.2灰	25Y8.2灰	粗・少	粗・少	0.35		3.8		
34	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y6.1灰	25Y6.1灰	粗・少	粗・少	0.22		1.8		
35	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.1灰	25Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.24		1.8		
36	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.6灰	25Y7.6灰	中・多	粗・少	0.23		2.8		
37	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y8.4.5灰	25Y8.4.5灰	粗・少	粗・少	0.24		1.8		
38	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	25Y7.1灰	25Y7.1灰	粗・少	粗・少	0.23		1.8		
39	SH19	a層	氣泡器	杯身	内側ナラ	ヨコナド	10Y87.4.5灰・黄褐	10Y87.4.5灰・黄褐	粗・少	粗・少	0.13		1.8未満		
40	SH19	a層	土器	土器	土器	ナラ	35Y6.6白	35Y6.6白	中・少		0.8		8.8		

番号	通鑑	層位	種類	面相	調整 (外)	調整 (内)	色調 (外)	色調 (内)	粒度	目数 (c.m.)	粒度 (c.m.)	充填物	参考
41	SH19	a層	土面層	無	ナデ	ナデ	10YR88/6 黄褐	10YR72/1-5 黄褐	中・並	-	-	無・少	8.8
45	SH22	風切層	好み	直輪	直輪ナデ・輪輪へタケ	直輪ナデ	10YR72/1-5 黄褐	10YR72/1-5 黄褐	中・並	-	-	無・少	4.8
47	SH04	風切層	好み	直輪	直輪ナデ・輪輪	直輪ナデ	25Y8/2 黄白	25Y8/2 黄白	中・並	-	-	無・少	1.8
48	SH04	風切層	好み	直輪	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (11.1)	1.8
49	SH04	風切層	好み	直輪	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・多 (11.2)	1.8
50	SH04	風切層	好み	直輪	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (6.9)	1.8
51	SH04	上層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (6.9)	1.8
52	SH04	上層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	10Y87/2/1-5 黄白	10Y87/2/1-5 黄白	中・並	-	-	無・少 (6.9)	1.8
53	SH04	下層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・少	0.15	-	無・少	1.8
54	SH04	水面直上	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	75Y6/1 黄	75Y6/1 黄	中・並	-	-	無・少 (11.0)	1.8
55	SH04	底泥	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (11.4)	1.8
56	SH04	下層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	10Y88/3 黄褐	10Y88/3 黄褐	中・並	-	-	無・少 (6.0)	1.8
57	SH04	下層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N7/灰	N7/灰	中・少	-	-	無・少	3.8
58	SH04	上層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少	1.8
59	SH04	中層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	5Y6/1 黄	5Y7/1 黄白	中・並	-	-	無・少	1.8
60	SH04	中層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (6.2)	2.8
61	SH04	水面直上	土面層	無	ナデ	ナデ	10Y87/4/1-5 黄白	10Y88/3 黄褐	中・並	-	-	無・少	2.8
62	SH04	上層	争生土層	無	ナデ	ナデ	5Y83/4/1-5 黄褐	25Y6/1 黄白	中・並	-	-	無・少 (10.9)	1.8
67	SH06	上層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y6/1 黄白	25Y6/1 黄白	中・並	-	-	無・少 (10.2)	1.8
68	SH06	中層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y6/1 黄白	25Y6/1 黄白	中・並	-	-	無・少 (11.0)	1.8
69	SH06	中層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y7/1 黄白	25Y7/1 黄白	中・並	-	-	無・少 (10.4)	1.8
70	SH06	中層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	10Y87/4/1-5 黄白	10Y87/4/1-5 黄白	中・並	-	-	無・少 (12.7)	1.8
71	SH06	底泥	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	5Y6/1 黄	5Y6/1 黄	中・並	-	-	無・少 (8.9)	1.8
72	SH06	下層	風切層	好み	直輪ナデ・直輪	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	無・少 (4.1)	4.8
73	SH06	下層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	5Y6/1 黄	5Y6/1 黄	中・並	-	-	無・少 (2.5)	1.8
74	SH06	下層	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y6/1 黄白	25Y6/6 明黄	中・並	-	-	無・少 (6.2)	1.8
75	SH06	下層	土面層	無	ヨコナデ	ヨコナデ	75Y85/6 明黄	75Y85/6 明黄	中・並	-	-	無・少 (6.2)	1.8
76	SH06	上層	土面層	無	ナデ	ナデ	10Y84/1 黄白	10Y84/1 黄白	中・並	-	-	無・少	4.8
77	SH05	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	10Y5/1 黄	10Y5/1 黄	中・並	-	-	中・少 (2.2)	1.8	
78	SH05	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y7/1 黄白	25Y7/1 黄白	中・並	-	-	中・少 (1.8)	2.8	
79	SH05	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y5/1 黄	25Y5/1 黄	中・並	-	-	中・多 (10.8)	2.8	
80	SH05	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y7/1 黄白	25Y7/1 黄白	中・並	-	-	中・多 (8.5)	2.8	
81	SH05	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	中・少 (9.3)	2.8	
82	SH05	土面層	無	ヨコナデ	ヨコナデ	25Y1/1 黄白	25Y1/1 黄白	中・並	-	-	中・少 (14.2)	1.8	
83	SH05	土面層	無	ヨコナデ	ヨコナデ	10Y86/4/1-5 黄白	10Y86/6 明黄	中・並	-	-	中・少 (8.8)	2.8	
84	SH05	土面層	無	ヨコナデ	ヨコナデ	75Y85/6 明黄	75Y85/6 明黄	中・並	-	-	中・少 (6.6)	1.8	
86	SH13	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	中・少 (9.3)	1.8	
87	SH14	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	N6/灰	N6/灰	中・並	-	-	中・少 (6.0)	1.8	
88	SH15	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y5/1 黄白	25Y5/1 黄白	中・並	-	-	中・少 (6.0)	1.8	
89	SH07	風切層	好み	直輪ナデ	直輪ナデ	25Y8/1 黄白	25Y8/1 黄白	中・並	-	-	中・少 (12.2)	1.8	

第33表 大下遺跡出土土器観察表 (2)

第34表 大下遺跡出土土器觀察表 (3)

番号	遺物	部位	種類	器種	測量 (外)	測量 (内)	色調 (外) / 色	色調 (内) / 色	底質	内底	内側	内側石	蓋	鉢形	高さ	幅 (cm)	深さ (cm)	備考
90 SH07	瓦	瓦芯	瓦	瓦	257.72	瓦質	257.72	瓦質	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・多	(11.0)	1.8		
91 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	7.57	1.0cm	7.57	1.0cm	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・少	(11.8)	4.0	5.2	
92 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.51	瓦質	257.51	瓦質	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・少	(10.4)	1.8	4.8	
93 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.72	瓦質	257.82	瓦質	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・少	(10.8)	1.8	1.8	
94 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.6)	1.8	
95 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.7	2.0cm	257.7	2.0cm	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・少	(10.0)	1.8	1.8	
96 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(13.5)	(6.4)	1.8
97 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.7	2.0cm	257.7	1.0cm	灰灰	灰灰	灰灰	灰灰	無	中・少	(11.6)	1.8	1.8	
98 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.4)	1.8	1.8
99 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(12.9)	1.8	
100 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	75.87	6.0cm	257.83	3.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・多	(10.2)	1.8	1.8	
101 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.51	4.0cm	257.51	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・多	(13.2)	8.8	8.8	
102 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	57.6	1.0cm	257.71	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(10.5)	1.8	5.8	
103 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(10.0)	1.8	8.8
104 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(11.3)	1.8	3.8	
105 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.3)	1.8	1.8
106 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(11.3)	1.8	1.8	
107 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(10.7)	1.8	1.8
108 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(11.0)	1.8	1.8	
109 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.2)	1.8	1.8
110 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.7	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(11.2)	1.8	1.8	
111 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.4)	1.8	1.8
112 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
113 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
114 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
115 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
116 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
117 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.86	6.0cm	107.86	6.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
118 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.86	6.0cm	107.86	6.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
119 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.85	4.0cm	107.86	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
120 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	257.6	1.0cm	257.7	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
121 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	57.6	1.0cm	57.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(13.4)	1.8	1.8	
122 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	57.6	1.0cm	57.6	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(13.4)	1.8	1.8	
123 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	N/A	灰灰	N/A	灰灰	無	無	無	無	無	無	少	(11.4)	4.2	2.8
124 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
125 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
126 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
127 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
128 SH07	瓦	瓦	瓦	瓦	107.87	4.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
129 SH09	瓦	瓦	瓦	瓦	107.85	4.0cm	107.85	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
130 SH09	瓦	瓦	瓦	瓦	107.85	4.0cm	107.85	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
131 SH10	瓦	瓦	瓦	瓦	107.86	6.0cm	107.87	4.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	
132 SH10	瓦	瓦	瓦	瓦	57.7	1.0cm	57.7	1.0cm	中・少	中・少	中・少	中・少	無	中・少	(12.0)	1.8	1.8	

番号	通鑑	部位	種類	面相	調整(外)	調整(内)	色調(外) / 色	色調(内) / 色	表面	目録 (c.m.)	高さ (c.m.)	直径 (c.m.)	参考	
135	SII20	氣泡器	杯身	輪郭ナード	輪郭ナード	25Y61 4灰	N5灰	石英・ 角閃石 長石	織・少	2.9	6.2	4.8		
136	SII20	氣泡器	底座	輪郭ナード	輪郭ナード	N5灰	N7灰白	石英・ 角閃石	織・多	(1.36)		1.8		
137	SII20	上部磨	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	10Y66.1灰	25Y7.1灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.36)		1.8		
138	SII20	底座	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	25Y5.1灰	25Y7.1灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.36)		1.8		
139	SII20	底座	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	7.5Y65.6灰	7.5Y65.6灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.24)		1.8	香東山下流域	
140	SII20	底座	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	7.5Y65.6灰	7.5Y65.6灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.36)		1.8	香東山下流域	
141	SII20	底座	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	7.5Y65.6灰	7.5Y65.6灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.36)		1.8	香東山下流域	
148	SII24	底座	氣泡器	杯身	輪郭ナード	輪郭ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.14)		1.8	
149	SII24	底座	上部磨	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	10Y67.4灰	10Y67.4灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.36)		1.8	
150	SII24	底座	上部磨	蓋	輪郭ナード	輪郭ナード	10Y67.4灰	10Y67.4灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.36)		1.8	香東山下流域
151	SII24	上部磨	杯	輪郭ナード	輪郭ナード	10Y67.4灰	10Y67.4灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.72)		1.8		
152	SII94	底座	蓋	ナード	ナード	7.5Y65.6	7.5Y65.6	石英・ 角閃石	織・多	(1.70)		1.8		
153	SII94	底座	蓋	ナード	ナード	7.5Y65.6	7.5Y65.6	石英・ 角閃石	織・多	(1.69)		1.8		
154	SII94	底座	蓋	ナード	ナード	10Y66.4灰	10Y66.4灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.54)		1.8		
155	SII03	底座	蓋	ナード	ナード	10Y66.4灰	10Y66.4灰	石英・ 角閃石	織・多	(1.54)		1.8		
156	SII03	底座	蓋	ナード	ナード	5Y66.6	5Y66.6	石英・ 角閃石	織・多	(22.4)		1.8		
157	SII03	底座	蓋	ナード	ナード	5Y66.6	5Y66.6	石英・ 角閃石	織・多	(1.54)		1.8		
158	SII04	底座	蓋	ナード	ナード	10Y67.6	10Y67.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.43)		1.8	香東山下流域	
161	SII02	上部磨	蓋	ナード	ナード	10Y66.6	10Y66.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.43)		1.8		
162	SII02	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.43)		1.8		
164	SII02	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.43)		1.8		
165	SII05	底座	蓋	ナード	ナード	5Y66.6	5Y66.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.82)		1.8	香東山下流域	
166	SII05	底座	蓋	ナード	ナード	5Y66.6	5Y66.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.82)		1.8	香東山下流域	
167	SII17	上部磨	蓋	ナード	ナード	5Y66.6	5Y66.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.82)		1.8	香東山下流域	
168	SII22	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
169	SII50	底座	蓋	ナード	ナード	10Y61.6	10Y61.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
170	SII87	上部磨	蓋	ナード	ナード	10Y67.4灰	10Y67.4灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
172	SII33	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
173	SII43	上部磨	蓋	ナード	ナード	10Y67.6	10Y67.6	石英・ 角閃石	織・多	(0.92)	26.4	4.8		
174	SII88	底座	蓋	ナード	ナード	N7灰	N7灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.18)		1.8		
175	SII71	上部磨	蓋	ナード	ナード	10Y67.4灰	10Y67.4灰	石英・ 角閃石	織・少	(22.0)		1.8		
176	SII78	上部磨	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
177	SII78	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.44)		1.8		
178	SII29	底座	蓋	ナード	ナード	25Y6.2灰	25Y6.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.54)		1.8		
179	SII23	底座	蓋	ナード	ナード	25Y7.6	25Y7.6	石英・ 角閃石	織・少	(1.54)		1.8		
180	SII20	底座	蓋	ナード	ナード	35Y1灰	35Y1灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.64)		1.8		
181	SII24	底座	蓋	ナード	ナード	35Y1灰	35Y1灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.34)		1.8		
182	SII4	底座	蓋	ナード	ナード	10Y65.2灰	10Y65.2灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.11)		1.8		
183	SII46	底座	蓋	ナード	ナード	34灰	34灰	石英・ 角閃石	織・少	(1.11)		1.8	十箇山流域	

第37表 大下遺跡出土石器觀察表

第36表 大下遺跡出土土器觀察表（5）

遺物 番号	器種	部位	器種	測量 (外)	測量 (内)	色調 (外) / 色調 (内)	瓦片	灰瓦	角閃石	雲母	鉄粉	炭化	土質	層高 (c.m.)	層厚 (c.m.)	備考
165 SH79	盞	裏面	瓦盤	直輪ナマ	直輪ナマ	2574.2灰/灰	7.576.1灰	7.576.1灰	7.576.1灰	7.576.1灰	7.576.1灰	7.576.1灰	1.8未調	1.8未調	1.8未調	
166 SH80	瓦盤上器	瓦盤	瓦盤	瓦盤ナマ	瓦盤ナマ	107.985.6中輪	7.576.6中	7.576.6中	7.576.6中	7.576.6中	7.576.6中	7.576.6中	1.8未調	1.8未調	1.8未調	
167 遺物外	器皿上器	要	ハケ目洗コナマ	指ササ工長ヨコナマ	指ササ工長ヨコナマ	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	1.8未調	1.8未調	1.8未調	
168 遺物外	器皿上器	要	ハケ目洗コナマ	指ササ工長ヨコナマ	指ササ工長ヨコナマ	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	7.576.4灰	1.8未調	1.8未調	1.8未調	
169 遺物外	器皿上器	要	ハケ目洗コナマ	指ササ工長ヨコナマ	指ササ工長ヨコナマ	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	1.8未調	1.8未調	1.8未調	
170 遺物外	器皿上器	要	ヨコナマ	ヨコナマ	ヨコナマ	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	7.576.6灰	1.8未調	1.8未調	1.8未調	

遺物番号	造形	部位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	材質	備考
42	不明	a 鋼	71.0	70	4.0		銅	
43	SH19	a 鋼	不明	61.0	50	3.5	銅	
46	SH20	6.6直	29.0	26.0	9.0		銅	
65	SH04	施末	50.0	50.0	2.5		銅	
85	SH05	施末	41.0	79.0	17.0		銅	
145	SH20	不規	27.0	19.0	2.3		銅	
210	SH19	a 鋼						
211	SH19	a 鋼						
212	SH19	a 鋼						
213	SH19	a 鋼						
214	SH19	a 鋼						
215	SH19	a 鋼						
216	SH20	施末						
217	施外							

第38表 大下遺跡出土金属器觀察表

遺物番号	造形	部位	長さ (mm)	色調	直径 (mm)	孔の通し 径 (mm)	重量 (g)	材質	備考
66	SH04	白玉	256(1.1mm) - 7mm		6.0	2.5	0.16	前玉	
146	SH20	管玉	526(1.1mm)		1.1	5.5	0.47	管玉	内側から穿孔
147	SH20	施末	504(1.1mm)		2.0	3.5	0.13	施末	
233	SH07	施末							
294	SH07	施末							

第39表 大下遺跡出土玉類觀察表

遺物番号	造形	部位	材質	色調	直径 (mm)	長さ (mm)	重量 (g)	備考
235	SH19	a 鋼						
295	SH19	a 鋼						
297	SH19	a 鋼						
298	SH19	a 鋼						
299	SH19	a 鋼						

第40表 大下遺跡出土種子觀察表

写真 1
上東原遺跡
調査前風景（西から）



写真 2
上東原遺跡 1 区
中世遺構検出面（南東から）



写真 3
上東原遺跡 1 区
中世遺構検出面調査風景
(北から)



写真 4
上東原遺跡 1 区
SP02 断面 (東から)



写真 5
上東原遺跡 1 区
SP24 遺物出土状況 (東から)



写真 6
上東原遺跡 3 区
SB01(南から)



写真 7
上東原遺跡 3 区
下層確認 トレンチ (北東から)



写真 8
上東原遺跡 1 区
SH01-SK03 断面 (東から)



写真 9
上東原遺跡 1 区
SH01-SK03 遺物出土状況
(南から)



写真 10

上東原遺跡 1 区

弥生時代掘立柱建物柱穴検出状況



写真 11

上東原遺跡 1 区

SB01-SP161 検出状況 (東から)



写真 12

上東原遺跡 1 区

弥生時代遺構検出面調査風景

(東から)



写真 13
上東原遺跡 1 区
SB01-SP161 断面(北から)



写真 14
上東原遺跡 1 区
SB05-SP151 断面(南東から)



写真 15
上東原遺跡 1 区
SB05-SP151 断面(北から)



写真 16
上東原遺跡 1 区
SB02-SP170(南から)



写真 17
上東原遺跡 1 区
弥生時代掘立柱建物群 (西から)



写真 18
上東原遺跡 1 区
SB01(北東から)



写真 19
上東原遺跡 0 区
SB05・06・07(北東から)



写真 20
上東原遺跡
現地説明会風景(北東から)



写真 21
上東原遺跡 1 区
東壁 SD02 断面(北西から)



写真 22
上東原遺跡 2 区
SB08-SP236 遺物出土状況
(北から)



写真 23
上東原遺跡 2 区
SB08(北から)



写真 24
上東原遺跡 2 区
SK09 断面 (北東から)



写真 25
上東原遺跡 2 区
SB04(北から)



写真 26
上東原遺跡 2 区
西壁断面 (北東から)



写真 27
上東原遺跡 5 区
SD42 断面 (南西から)



写真 28
上東原遺跡 6 区
SD42・45 検出状況(南東から)



写真 29
上東原遺跡 6 区
SD42(南から)



写真 30
上東原遺跡 6 区
SD42・45 交点部分断面
(南東から)



写真 31
上東原遺跡 6 区
西壁 SD45 断面(北東から)



写真 32
上東原遺跡 6 区
SD42・45(北東から)



写真 33
上東原遺跡 7 区
SD45(西から)



写真 34
上東原遺跡 7 区
SD45 断面 (西から)



写真 35
上東原遺跡 8 区
SD45(南東から)



写真 36
上東原遺跡 8 区
SD45 断面 (東から)



写真 37
上東原遺跡 8 区
SD45 断面 (東から)



写真 38
上東原遺跡 8 区
SD45 断面 (東から)



写真 39
上東原遺跡 8 区
SK02 検出状況



写真 40
上東原遺跡 8 区
SK02 断面



写真 41
上東原遺跡 8 区
SD47 断面(東から)



写真 42
上東原遺跡 8 区
SD47(西から)



写真 43
上東原遺跡 9 区
SD45 断面 (北東から)



写真 44
上東原遺跡 9 区
SD47 断面 (北東から)



写真 45
上東原遺跡 9 区
SD45C 層ウマ検出状況
(南東から)



写真 46
上東原遺跡 9 区
SD45 ウマ検出状況(東から)



写真 47
上東原遺跡 9 区
SD45 ウマ検出状況(東から)



写真 49
上東原遺跡 9 区
SD45 花粉分析試料採取位置
(東から)



写真 50
上東原遺跡 9 区
SD45 断面 (東から)



写真 51
上東原遺跡 9 区
西壁 SD45 断面 (東から)



写真 52
上東原遺跡 9 区
SD 群(東から)



写真 53
上東原遺跡 9 区
SD45(南東から)



写真 54
上東原遺跡 9 区
SD45・48 交点部分(北から)



写真 55
上東原遺跡 9 区
西壁断面 (北東から)



写真 56
上東原遺跡 9 区
南壁 SD49 断面 (北から)



写真 57
上東原遺跡 9 区
SD49 断面 (北東から)



写真 58
上東原遺跡 9 区
西壁 SD49 断面(東から)



写真 59
上東原遺跡 10 区
SK51(西から)



写真 60
上東原遺跡 10 区
SD51(南東から)



写真 61
上東原遺跡 10 区
SD51 断面 (北から)



写真 62
上東原遺跡 10 区
SD58(南から)



写真 63
上東原遺跡 10 区
SD58 断面 (南から)



写真 64

上東原遺跡 11 区

SD58(北から)



写真 65

上東原遺跡 11 区

SD52 断面 (南西から)



写真 66

上東原遺跡 11 区

SD58 断面 (南西から)



写真 67
上東原遺跡 11 区
南壁 SD58 断面 (北から)



写真 68
上東原遺跡 11 区
東壁断面 (北西から)



写真 69
上東原遺跡
体験授業風景 (南から)





写真 70 上東原遺跡出土遺物 1



写真 71 上東原遺跡出土遺物 2



104



106



109



113



115



116



118

写真 72 上東原遺跡出土遺物 3



写真 73 上 東原遺跡出土遺物 4



写真 74 上東原遺跡出土遺物 5



写真 75 上 東原遺跡出土遺物 6



222



240



242



242



280



283



288

写真 76 上東原遺跡出土遺物 7



写真 77 上 東原遺跡出土遺物 8

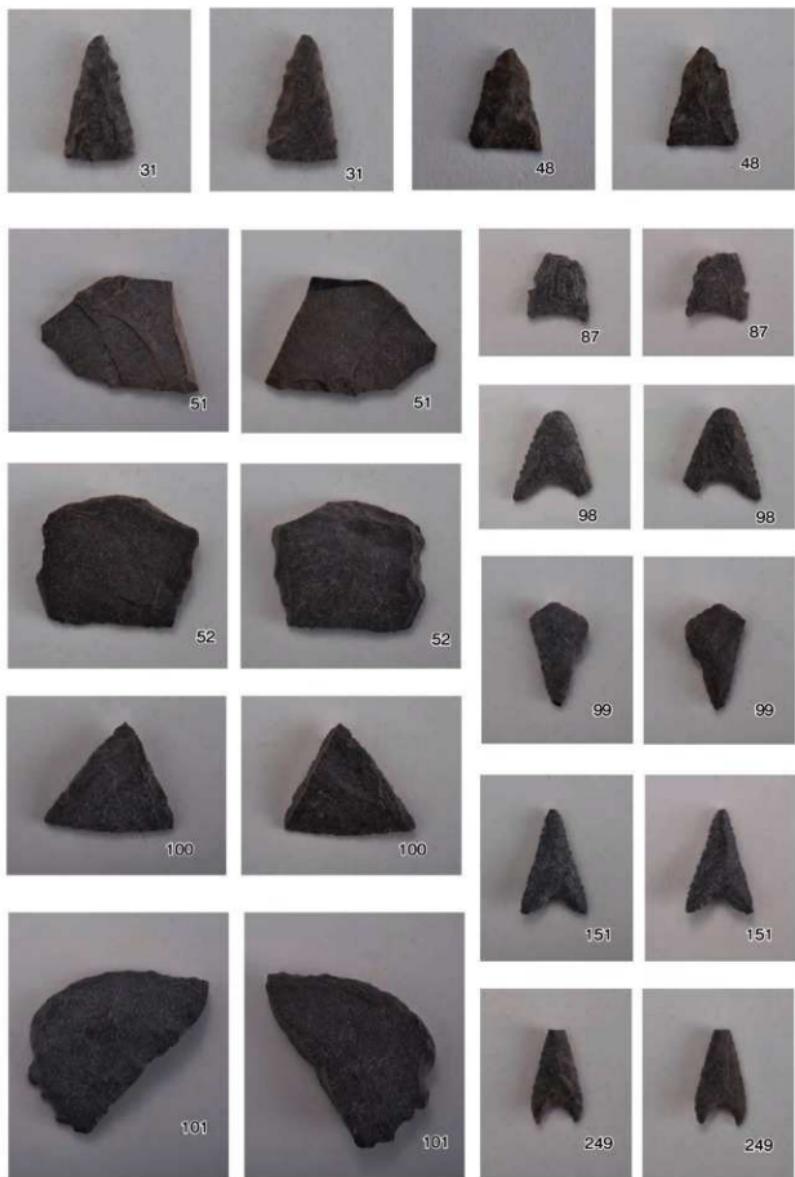


写真 78 上東原遺跡出土遺物 9

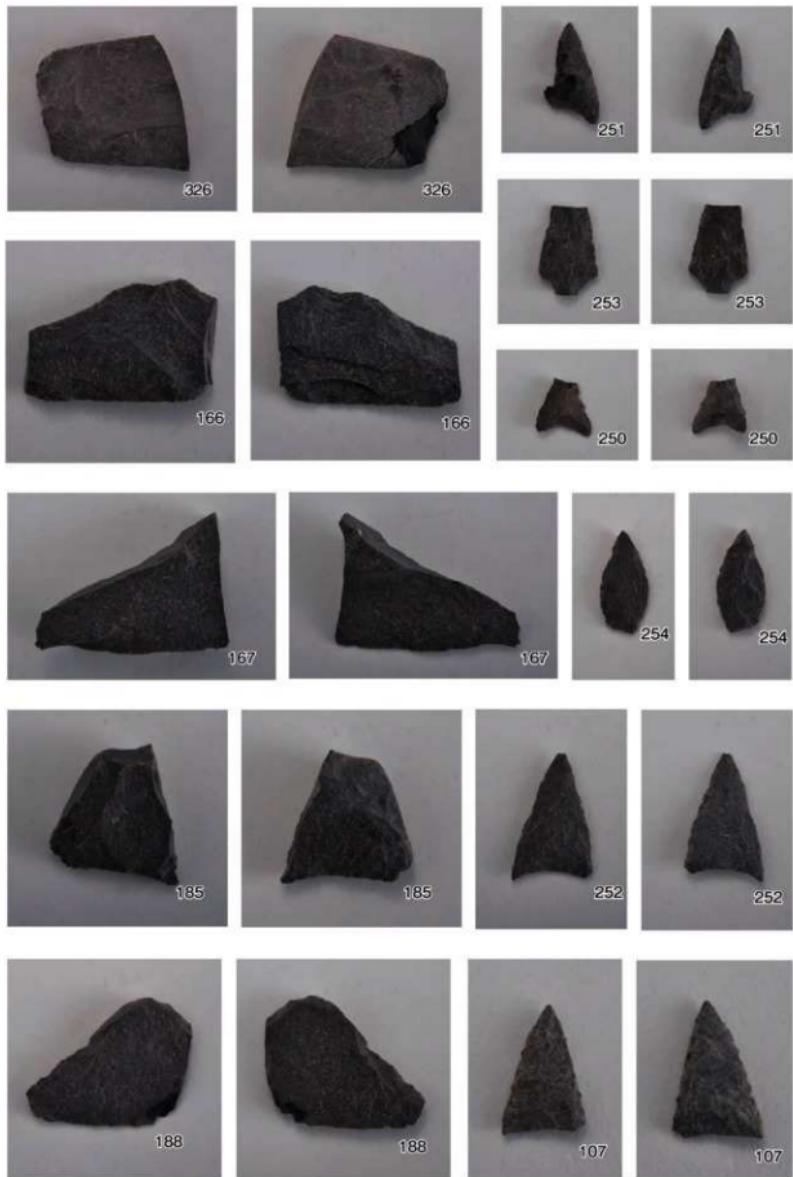


写真 79 上東原遺跡出土遺物 10



写真 80 上 東原遺跡出土遺物 11

写真 81
大下遺跡
調査前風景（東から）



写真 82
大下遺跡
I 区全景（西から）



写真 83
大下遺跡
全景（東から）



写真 84
大下遺跡
全景(西から)



写真 85
大下遺跡
I区北壁断面(南から)



写真 86
大下遺跡
I区南壁断面(北から)



写真 87
大下遺跡
SH03 弥生土器 (3) 出土状況
(南から)



写真 88
大下遺跡
SH03 炭化物出土状況
(南から)



写真 89
大下遺跡
SH03-SK03 断面 (東から)



写真 90
大下遺跡
SH03 断面（南東から）



写真 91
大下遺跡
SH03 弥生土器 (4) 出土状況



写真 92
大下遺跡
SH19 梱出状況（北から）



写真 93
大下遺跡
SH19 断面（東から）



写真 94
大下遺跡
SH19 ベッド状遺構検出状況
(南西から)



写真 95
大下遺跡
SH02 完掘状況（南から）



写真 96
大下遺跡
SH04 窯検出状況（南から）



写真 97
大下遺跡
SH04 断面（東から）



写真 98
大下遺跡
SH04 窯断面（東から）



写真 99
大下遺跡
SH04 竪断面（南から）



写真 100
大下遺跡
SH04 完掘状況（西から）



写真 101
大下遺跡
SH05 断面（東から）



写真 102
大下遺跡
SH05 炭化物出土状況
(南から)



写真 103
大下遺跡
SH05 鉄斧(85)出土状況
(南東から)



写真 104
大下遺跡
SH05 瓦?検出状況
(南から)



写真 105
大下遺跡
SH05 完掘状況（南から）



写真 106
大下遺跡
SH06 断面（北から）



写真 107
大下遺跡
SH06 廊断面（南から）



写真 108
大下遺跡
SH14 完掘状況（南から）



写真 109
大下遺跡
SH15 完掘状況（南から）



写真 110
大下遺跡
SH18 完掘状況（南から）



写真 111
大下遺跡
SH07 窯 1 検出状況
(南から)



写真 112
大下遺跡
SH07 断面 (北東から)



写真 113
大下遺跡
SH07 窯 2 断面 (東から)



写真 114
大下遺跡
SH07 窯 1(南から)



写真 115
大下遺跡
SH07 窯 1 煙道断面
(北東から)



写真 116
大下遺跡
SH07 窯 1(南西から)



写真 117
大下遺跡
SH07 窯 1 燃焼部断面
(東から)



写真 118
大下遺跡
SH07 窯 1 燃焼部断面
(南から)



写真 119
大下遺跡
SH07 窯 1 燃焼部断面
(南から)



写真 120
大下遺跡
SH07 窯 1 煙道断面
(東から)



写真 121
大下遺跡
SH07 窯 1 梱出状況
(南から)



写真 122
大下遺跡
SH07 窯 1 掛口検出状況
(南から)



写真 123
大下遺跡
SH07 窯 1 検出状況
(南東から)



写真 124
大下遺跡
SH07 窯 1 燃焼部断面
(東から)



写真 125
大下遺跡
SH07 窯 1 燃焼部断面
(南から)



写真 126
大下遺跡
SH07 窑 1 完掘状況
(北東から)



写真 127
大下遺跡
SH07 完掘状況 (北西から)



写真 128
大下遺跡
II区北壁断面 (南から)



写真 129
大下遺跡
SH09 断面（北から）



写真 130
大下遺跡
SB01 検出状況（南から）



写真 131
大下遺跡
SB01-SP11 断面（南から）



写真 132
大下遺跡
SD02 断面（南から）



写真 133
大下遺跡
SD02 焼土断面（西から）



写真 134
大下遺跡
SD01 断面（西から）



写真 135
大下遺跡
SD03 断面（南から）



写真 136
大下遺跡
SD01・03 完掘状況
(南から)



写真 137
大下遺跡
Ⅲ区完掘状況



写真 138
大下遺跡
III区南壁断面(北西から)



写真 139
大下遺跡
SH10 検出状況(東から)



写真 140
大下遺跡
SH20 管玉(146)出土状況



写真 141
大下遺跡
SH20 断面 (北西から)



写真 142
大下遺跡
SH20 完掘状況 (北西から)



写真 143
大下遺跡
SD15 断面 (南から)



写真 144
大下遺跡
IV・V 区全景(西から)



写真 145
大下遺跡
SP230 瓶(173)出土状況



写真 146
大下遺跡
SH24 検出状況(南西から)



写真 147
大下遺跡
SH24 竪断面（南から）



写真 148
大下遺跡
SH24 竪断面（西から）



写真 149
大下遺跡
現地説明会風景





写真 150 大下遺跡出土遺物 1



写真 151 大下遺跡出土遺物 2



写真 152 大下遺跡出土遺物 3

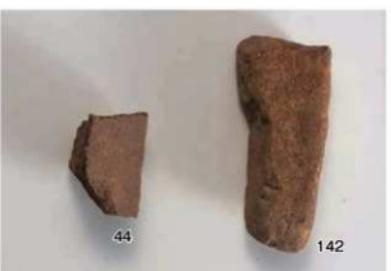


写真 153 大下遺跡出土遺物 4

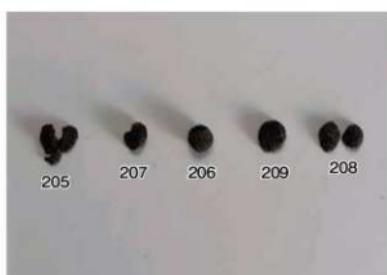
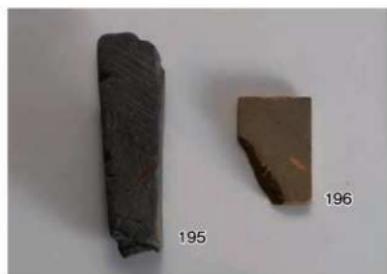


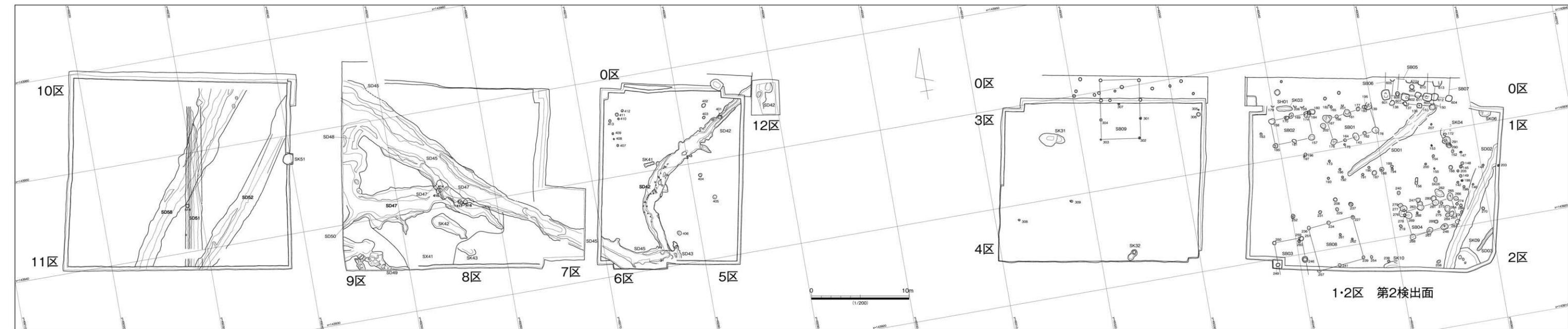
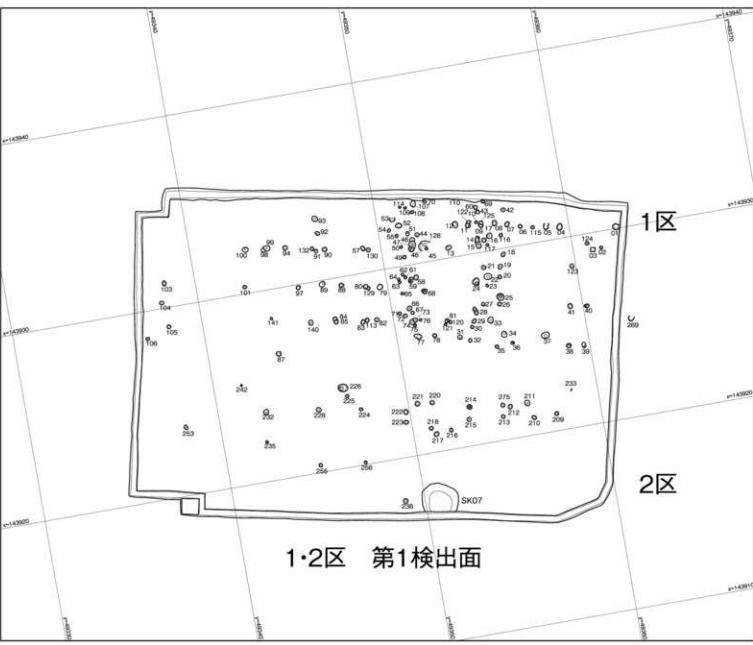
写真 154 大下遺跡出土遺物 5

県道太田上町志度線道路改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

上東原遺跡
大下遺跡

2014年3月19日

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中字南谷5001-4
Tel 0877-48-2191 Fax 0877-48-3249
発行 香川県教育委員会
印刷 株式会社 成光社



付図 上東原遺跡 遺構配置図 (1:200)

付図 大下遺跡 遺構配置図 (1:150)

